
向日葵の冒険者達

ファン・ヒューリック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

向日葵の冒険者達

【Nコード】

N2955M

【作者名】

ファン・ヒューリック

【あらすじ】

高杉 社は近所の丸太橋高校に通う高校2年生の女の子。すごく美人でスタイルも抜群、成績優秀でスポーツ万能という完璧人間だが、1人が好きな性格なのであんまり友達はいない。彼女の趣味はオンラインゲーム『アースフレンド』。毎日のようにログインして、ゲーム仲間の『D』『フィロソフィ』『八方出』『巫女』達と楽しんでいる。そんなある日、4人でオフ会をしようという話になった。オフ会の途中で、ふと社はポケットの中に何故か宝石のようなものが入っているのに気付く。なんとなくそれを目の

前にかざしてみると突然世界がぐにやりと曲がって、社達はアースフレンドの世界に召喚されてしまった！ 4人の女子高生達や個性豊かな冒険者達が織りなす、まったりのんびりした青春異世界ファンタジーが今始まる。（本作品は4人の女の子が異世界で勇者になったり、食堂で喋ったり一緒に下校したりする話です。そしてちょっとどころではない百合描写があります）>使用した挿絵はpixivに載せてます <http://www.pixiv.net/member.php?id=489223><>アイミイ様、無機質な生活様にイラストを描いていただきました！<

0話 その人は最初に思い付いたのだった (前書き)

本格的にストーリーが始まるのは2話からです。

0話 その人は最初に思い付いたのだった

ヒト観察にも飽きたアタシはなんとなく動画投稿サイトを眺めてたんだよね〜

んでさ、面白い動画見つけたのよ

まあ再生数は1000ちよつとの冴えない奴だったんだけどさ

アクションRPGっていうの？ すつごく面白かったんだー

で、それ見てアタシもゲーム作ってみようと思ったわけよ

思い立ったが吉日ってヤツ？

テキストに魔物ウジャウジャいる交錯宇宙コネクトしてそれっぽく仕上げて

これ1日でTVゲームにしてーって召使いに丸投げしてやったの

んでゲームにしてもらったんだけど……

なーんかツマンナイんだよね？ 刺激足りないってゆーか？ 期待外れってユーか？

どうしたもんなあ……

<第一章> 1話 I's World (前書き)

あなたの生きがいつて何ですか？

もしくは、あなたの生きている意味って何ですか？

……は、私ですか？

いえ、今適当に思いついたことを言っただけです。気にしないで下さい。

……失礼しました。それでは小説へどうぞ。

<第一章> 1話 I's World

限りなく続く大森林。巨大で獰猛な猛獣が跋扈する森の奥深くに神話の時代に勇者が使用した聖剣を安置している祠があるらしい。

世界の北の果てに聳え立つ、天をも貫くといわれる伝説の塔。最上階にたどり着いたものは神の世界にたどり着けるという伝説がある。

遙か地底に広がる大空洞は冥界と繋がっており、そこには三途の川が流れていて死者は必ずその川を渡るといふ。彼岸の向こう岸には創生の記録があるとのこと。

地球ではない何処か別の世界。剣と魔法が支配するこの世界で、冒険者達は未知への探求心を育む。この世界はどうなっているのだろうか。見たい知りたい行きたい欲求を刺激され今日も冒険者達は世界を旅する。ここは、そんなファンタジーの世界の1つ。

草原で、4人の冒険者がモンスターに囲まれている。

モンスターの数はざっと40匹。大型の蛇や巨大なウサギ、スライムに中型のドラゴンなどバリエーション豊かだ。普通ならば圧倒的な数の差に物怖じするところだが、長柄戦斧を構えた銀髪の青年は無表情で仲間達に話しかける。

社麻^{やしろま}：殺人ウサギってスタン効く？

巫女^{みこ}：効かない

長柄戦斧の男・社麻^{やしろま}はそれだけ効くと躊躇せずに敵陣に飛び込んだ。すかさずモンスター達が社麻に跳びかかる。蛇の噛み付き攻撃を籠手で受け流し、社麻は長柄戦斧を思い切り薙ぎ払った。

一部の敵はダメージを受けてのけぞるが、斧の攻撃を掻い潜ったモンスターは、薙ぎ払いの反動で体勢が崩れている社麻に突撃する。更に奴らの後方からドラゴンがブレスの構えを見せる。絶体絶命のピンチ到来、と思いきやモンスターたちの周りを緑色の粉が包み込む。その瞬間、モンスターの活動は完全に静止する。

はちほうで

八方出：こいつら全員麻痺効くんだよ

やしろま

社麻：先に言えよ

DⅡフィロソフィ：小野は外せ

はちほうで

八方出：小野「呼んだ？」

DⅡフィロソフィ：呼んでねーよw

みこ

巫女：槍とかの方が良いと思う

軽く談笑しながら麻痺毒にやられたモンスター達を処理していく4人。その中でもひととき目立つファイターの男、社麻は斧で陸亀の頭を切り落としている。

彼はかなり大柄だ。背丈は190cmくらい。ミスリルの鎧兜を身に纏った姿はかなり威圧的で、大概の人間は彼と対峙することを嫌がるだろう。パーティの前線を一手に引き受けている。

DⅡフィロソフィ：いや斧止めたほうが良いって 命中悪いし

やしろま

社麻：斧で良いだろ

DⅡフィロソフィは杖をスライムの体に振り落とす。彼は杖に口ブ姿という典型的な魔導士の男で、かなり強力な魔法を使いこなす。

先の戦いでは魔法は使用していないが、彼の实力はパーティの全員が認めるものだ。彼に掛かれば、この辺りの殆どのモンスターは消し炭と化すだろう。ちなみに髪の色はオレンジ。

社麻：だって今日は斧の日だし

巫女：斧の曰って何ぞwww

八方出：

八方出：

八方出：

八方出：

八方出：

し、
じ、
く、
こ、
だ、
ぐ
／　　〇　　／

／　　〇　　／
／　　〇　　／
／　　〇　　／
／　　〇　　／
／　　〇　　／
／　　〇　　／

ガッ！！！！

八方出は黒光りする軍用ナイフを両手に持ち巨大蟻の体を切り刻んでいる。

彼は黒髪に黒いバンダナを巻き、黒い洋服の要所要所を黒い金属板で覆っている。ちなみに、先程のモンスターの麻痺は彼によるもの。彼は状態異常のスペシャリストで、更にモンスターの弱点にとっても詳しい。

社麻：おもいつきりでやってた

巫女：おもいつきりパネエ
W
W
W
W
W

巫女は弓で殺人ウサギの体を射抜いている。彼女は金髪の髪に編み笠を被り、僧衣を着込んでいる。

ひよろひよろとした体つきで頼りなさがだが、彼女は回復魔法のスペシャリストであり、これまで何度もパーティのピンチを救ってきた。実際、彼女がいけない日はダンジョンの探索を取り止めるほどだ。

社麻：あ

D=ファイロソフィ:どしたの

社麻：お袋が呼んでる

社麻：ちよつと落ちる

巫女：りょーかい

八方出：おk

二話 現実からの目覚まし時計（前書き）

小説の前にまた質問させて下さい。

「あなたが生きてきた中で一番の思い出は？」

回答は後でお願いしますね。

二話 現実からの目覚まし時計

「社！」

——階下から母親の声が聞こえてきた。呼ばれた少女——高杉たかすぎ
社やしろは「はい」と答えると座布団から立ち上がる。彼女の眼下にあ

るのは座敷机とノートパソコン。パソコンの画面には緑鮮やかな草原と戦利品を回収している冒険者達が映っている。

その中で、社麻だけがその場に突っ立っているまま動こうともしない。それもその筈、社麻は高杉 社の操作キャラクターだからだ。彼女がプレイしているのは「アースフレンズ」というオンラインゲームである。彼女はこのオンラインゲームに毎日のようにログインして、先程の3人と行動を共にしている。

——オンラインゲーム等より大切なことがあるという人が居るかもしれない。だが彼女にとって、アースフレンズは今無くてはならないほど大きな存在だ。社はパソコンのディスプレイになんとなしに目を向ける。どうやら新手のモンスターが社麻のパーティに襲い掛かってきたようだ。

他のメンバーは臨戦態勢に入っている。モンスターの数は先程と比べて少なめだが状態異常の効かない敵が何体か混ざっている。暗黒兵やメタルウルフには純粋な物理攻撃が有効だ。ちょっとこいつらを片付けてから1Fにいかうかな……

「社——！」

先程よりも大きな声で私を呼ぶ声が聞こえる。急いでログアウトボタンを押す。今日は機嫌が悪いのだろうか。私は「今行きます」と言って1Fのリビングに下りていった。個人的には、呼び出すと

きに用件も一緒に伝えて欲しいのだが。

1Fに降りると母親が神妙な顔つきで椅子に座っていた。まあ、このシチュエーションは最近わりと何度かあることだから別に緊張することではない。

「ここに座りなさい」

そういつて母親は自分の前の椅子に私を座らせた。

「社^{やしろ}、学校に友達とかは出来た？」

・・・ああ、またその話か。

「この前の三者面談で先生が言ってたけど、社は学校ではいつも一人なんですよ。学校で友達とちゃんと喋らないとだめよ」

・・・同じフレーズを前に聞いたなあ。

「社会に出てからは人と話すことはすごく大事なんだから、ちゃんと人とコミュニケーションを取らないと駄目なのよ。だから人と喋る練習をしないと駄目なのよ。学校の友達って一生大事なんだから」

・・・うん、大体解る。

「社^{やしろ}は休み時間になるといつも図書館で本を読んでるそうじゃない。別に本を読むのがいけないって訳じゃないの。ただ、本ばかり読んでると人とコミュニケーションをとるのが苦手になってくるんじゃないの。やっぱり、人と話をすることが大事なの。だから学校の友達と話をしなくちゃ。コミュニケーション能力がないと社会に出てから苦勞するのよ」

・・・同じ話が続くなあ。

「ちゃんと聞いている？ …… ねえ社。あなた学校でいじめに会つてるとかないの？ 学校に嫌な子とか居たりしない？ そういった子がい居たら、ちゃんと担任の先生や友達に相談しなくちゃ駄目よ。そうしないと相手はどんどん付け上がってくるんだから。あのね、そういった子は一人で居る子を狙ってくるの。だからちゃんと周りの子達とコミュニケーションをとってみんなと仲良くしなくちゃいけないのよ。ちゃんと友達は沢山作らなくちゃ。そういう友達を作る能力はすごく大事なの。会社に入っても仕事仲間と上手くやっていくにはコミュニケーションはすごく大事なんだから。そうしないと会社で働いていけないのよ」

・・・解ってるよ。

適当なところで相槌を打っておけば母親もある程度満足するだろう。「私もそう思う」「今後努力する」等と私は言い続け、母親の説教が終了するのを待つ。拘束されること約1時間。母親が風呂に入るということであろうやく開放されたが、オンラインゲームのみんなはどうしているだろうか。

現在時刻PM10:30。いつもなら全員ログアウトしている時間だ。省電力モードに切り替わっているパソコンを立ち上げてアイスフレンドのアイコンをダブルクリック。キャラクター『社麻^{やしろま}』を選んでログイン。 …… やっぱみんなログアウトしている。もしかしたら私が抜けたせいでダンジョン探索をやめてしまったのかもかもしれない。少し心が痛む。

社もログアウトしようとしたが、mail欄が点滅しているのを発見した。mailboxを確認する。 …… みんなからメールが届いていた。

件名：落ちるお 送信者：D「フィロソフィ
本文

俺も落ちるから また明日ナ

件名：ノシ 送信者：巫女
本文

お前のカーチャン厳しいのなwwww
また明日

件名：（無題） 送信者：八方出
本文

明日もINシロヨォー――――

――――

――――

みんな優しいな。社は思^{やしろ}った。3人と知り合ってもう1年近くになる。学校のクラスメイトともあまり会話せず、担任にも心を開いていない社にとって、3人は他のどんな人達よりも大切な存在だ。3人は社の親友だ。3人してみれば私はただのネット仲間という位置づけなのだろうけれども。

いつまでこの楽しみが続くのだろうか。ふと思う。今は楽しくても1年後、2年後もみんな楽しく会話しながらダンジョン探索が出来るのだろうか？ その頃にはみんな別の趣味に分かれていて私は1人になるかもしれない。未来が怖い。未来を考えたくない。出来れば今の状態が永らく続いて欲しい。あの3人とずっと今の関係を続けたい。

……妙なことを考えてしまった。母親に「コミュニケーション」だ「友達」だと何度も言われたのが心に残っているのだろう。社は3人にメールを返信した。

件名：戻れなくてスマソ 送信者：社麻
本文

カーチャン説教長杉でマジ死ねるwww
また明日な

今日はもう寝るとしよう。社はベッドの中に潜り込んだ。明日っていい言葉だ。早く明日の放課後にならないかな。明日はみんなとどんな会話をするんだろう。今から楽しみでしょうがない。

二話 現実からの目覚まし時計（後書き）

面白い小説とはどんなだろう？
感想とか待ってます

三話 社の日（前書き）

さて、次の質問です。

あなたは朝は御飯派ですか、それともトースト派ですか？

私ですか？ 私はその日の気分によって変えますよ。

三話 社の一日

「……こんな感じでパスカルの三角形は結構色んな場面で使えるんだ。あ、ちなみにパスカルってどんな奴か知ってるか？」

今は授業中。静かにしないといけない、のだが周りの男子がひそひそ話をしているようだ。まあ、私には関係は無い。

「おい、私語はやめろよ。休み時間に話せ」

ほら怒られた。私には関係の無いことだが。ノートにパスカルの人物像を書き写す。数学のテストに出ることは無いが、アースフレンドで話の種にはなる。数学の授業は結構好きだ。先生が色々な雑学を教えてくれる。

「んじゃドリルの37ページの発展問題2を前に出て解いてくれ。」

たかすぎ
……高杉」

ここは既に予習しているから簡単だ。問題を解くと教師が褒めてくれた。流石だなとかそう言うお世辞は鬱陶しいので早く席に戻りたい。というか私がまだ前に立っているのに別のうんちくを始めるのはどうかと思うのだが。さっさと自分の席に戻ってしまおう。

やっぱり高杉たかすぎさんってすごいな。今の問題物凄く難しそうだったのにあっさり解いちゃった。入試テストは全教科満点だったらしいし、先生達も大注目してるんだから。すごい美人だし、私なんか足元にも及ばないよ。

そうだ、英語でぜんぜん解らないところがあるからちょっと聞いてみようかな。もしかしたら仲良くなれるかもしれない。でも高杉さんちよつと怖いんだよなあ。いつも回りに冷たい感じだし。

——高杉^{たかすぎ やしろ}

社自身はさほど自覚していないが、彼女は学校内ではかなり目立った存在だ。学年トップの秀才で、しかもスポーツ万能でどんな競技も高レベルにこなしてしまう。入学式終了後、様々な運動部から熱心な勧誘を受けたが、それらをことごとく断って帰宅部の毎日を送っている。

残念がった先輩は多かったが、理由は日課のオンラインゲームの為だという事を知る者は居ない。また勉強やスポーツだけではなく、身長は170cm近くありスタイルも抜群。顔も学校で一番の美人で芸能界のアイドルにも負けにくいくらい可愛いのだ。

——その気になれば彼氏など簡単に作れそうなものだが、本人にその気は全く無い。彼女が学校で笑った姿を見たものは誰も居ない。休み時間になると教科書を広げ、勉強を始め昼休みになると図書室に籠ってまた勉強する。

こんな学校生活を繰り返しているの、人に話しかけることも話しかけられることも無くなっていく。結果、クラスメートの評価も「地味で真面目で勉強が出来る娘」を超えることは無い。

別に今の学校生活に問題は無い筈、そう私は思っている。友達が居ないのは母親や先生にとって良いことではないだろうが、現時点で何か支障が出ている訳ではない。陰口くらいは叩かれているかもしれないが、まあそれは許容範囲内なのだろう。実際、私は学校生

活に特に不満を感じてはいない。

早く今日の授業が全部終われば良いなあ。私にとって学校はアフrendoを始めるまでの時間潰しでしかない。もうすぐ6時間目の政治経済の授業が終わる。これでようやく家に帰って3人に会える。ようやく私の1日がスタートするんだ。

HRが終わってさあ帰ろうとしたら誰かに呼び止められた。振り返るとクラスメートの女の子が私に向かってモジモジしている。女の子の背は大体140cm。赤みがかった黒髪の三つ編みで、縁無し眼鏡をしている。名前は覚えていない、というかクラスメートの名前は1人も把握していないのだが。

どうしたのと尋ねると、勉強で解らないところがあるから教えて欲しいと言ってきた。一昨日に習った英語の文法についての説明をする大層喜んでくれた。先生より教え方が上手いと褒めてくれる。そんなに丁寧に説明したつもりは無かったが、相手が喜んでくれたのならそれでいい。彼女はもっと会話がしたそうだったが、私としては早く3人に会いたかったので適当に話を切り上げて家路へと急いだ。

高杉さん^{たかすぎ}って怖いイメージだったけど、話してみると結構優しい感じだったな。もしかしたら友達になれるかもしれない。普段家ではどんなことしてるんだろ。やつぱりずっと勉強してるんだろうか。私なんか教科書見てるだけで頭がクラクラするのにな。

……それにしても高杉さんって美人だなあ。私女なのに見てドキドキしてきちゃった。背も高いし、顔も美人だし、長い黒髪も綺麗だし。あんな感じの大人になりたいなあ。

っと、そろそろグラウンドに行かなくちゃ。先輩時間には厳しいから。あーあ、文化部だったらもっと楽だったのかな。

私は急ぎ足で家に帰ってきた。「ただいま」・・・返事がない、どうやらただの屍のようだ。ではなく両親は共働きなので家に帰ってくる、私はいつも1人なのである。

高杉家は3人家族。父は写真家で世界を飛び回っておりあまり家に帰ってこない。母は産業機器レンタル会社の営業をしている。どうやら会社のトップセールスを誇っているらしいが、あのまどろっこしい喋り方でどうやって仕事を取るのか一度拝見してみたい。ついでに歳の離れた兄が居るのだが、数年前に誰かと結婚して以来殆ど会っていない。テーブルの上の置手紙から察するに今日は2人も家には帰ってこないようだ。

私はバスケットの中の林檎を1個取り出すと、そのまま皮も剥かずに嚙り付いた。林檎を手にながら2Fに向かう。自室に入って制服を脱ぎ、藍色の長ズボンと黒の長袖シャツを着る。

社の普段着は基本的に兄のお下がりだ。お金が無いのでは無く、単にファッションに興味が無いのである。更には自分や他人にさっぱり興味がなく、幼少の頃から自己主張を殆どしなかった。誰にどんな眼で見られようと大事なことを考えなかったのである。

着替えて直ぐにパソコンを起動、ではなくまず学生鞆を開けて教科書を取り出す。私はその日の宿題や予習復習をこなしてからでないとオンラインゲームを始めない。成績が下がって両親からパソコン禁止令など出されては堪らないからだ。それに早くログインしなくても誰も着ていない。

1時間ほどで勉強を終えいよいよパソコンを起動、芯だけになった林檎を口に咥えながらアースフレンドのアイコンをダブルクリック。

八方出：おす

社麻：みんな来てたのか

巫々女：Dがまだ

社麻：今日はカーチャン居ねーから安心してくれwww

巫々女：だったら今日は夜までゆっくり遊べるよな

八方出：

八方出：

八方出：

八方出：

八方出：

ゆっくりしてたってね！

八方出：

一一

八方出：

i

八方出：

一

八方出：

八方出：

社麻：ちょwww自重

巫々女：頑張り過ぎだろwww

そんなこんなでいつものようにバカ騒ぎしているとD=フィロソ

フィがログインした。

D=フィロソフィ：みんな来てる？

社麻：俺さっき来たところ

八方出：

八方出：

八方出：— ……ノ、\ ……\、
 . . . ア
 八方出：— ……ノ、\、r-r、”、（、
 八方出：|、.、i、|、.、へーア、二八二、へ、7
 ゆっくり遊ぼうね！
 八方出：. r . . . 7コ . . . ”、
 、\、7
 八方出：i、|、— / |、.、i、/ V、！ | ハ、
 ’、
 八方出：.、！ /レi、r r”、.、r”、ア、レ、i
 ノ
 八方出：.、ノ、！、.、
 八方出：（、ハ、.、i”、人！、”、i、レ、
 八方出：.、へ、）>、|、.、i、ハ
 社麻：だから何なんだよお前w w w w w w w
 巫女：ひでえw w w
 D”フィロソフィ：なんだこれw w w
 八方出：いや面白いから

八方出はA A職人で冒険中によく巨大なA Aをコメントする。また敵の特徴や弱点などについて長々と解説するのも好きだ。物凄くタイピング速度が速く、どうやってそんなに速くキーボードを叩けるのか不思議で仕方ない。

D”フィロソフィ：巫女その格好はどうした
 巫女：これ高かったんだぜ
 社麻：何故ウサギ？
 巫女：格好いいし
 八方出：ふざけとるとしか思えん

巫女：お前が言うなwww

巫女はファッションにこだわる性格で服飾や髪の色、それだけでなく性別や体格までころころ変える。本人曰く「変化の無い生活はつまらない」とのこと。しかし服や髪染めはWebマネーで購入しないといけないので、相当お金が掛かっているのではないかと思う。

ちなみに、私こと社麻とDフィロソフィはあまり個性といえるものが無い。たまに緩いボケやツツコミを入れる程度だ。

Dフィロソフィ：今日いいことあったんだ

八方出：なにが？

Dフィロソフィ：学校の勉強で解んないところがあったんだけど

Dフィロソフィ：そいつに勉強教えてもらったんだよ

Dフィロソフィ：そいつ苦手だったんだけど

Dフィロソフィ：もしかしたら友達になれたかもしれないー

巫女：へえー

社麻：よかったじゃん

どうやら今日の私と似たような話があったわけだ。いやはや偶然とは面白いものである。今日は冒険を行わず、町外れの教会で聖母マリア像の前に陣取っていつものように雑談していた。

ここではゲームの序盤で重要なイベントが起こるのだが、その後にストーリーに絡んでくることは一切無い為、ここにくる人は殆どいない。けれども社麻たちはグラフィックが綺麗で、BGMも落ち着いた雰囲気この教会によく訪れるのだ。

楽しい時間はあっという間に過ぎ去り、そろそろ晩御飯かなと考える時間になってきた。今日は何を食べようかと考えていたら、巫女がオフ会をしないかという話を切り出した。

D「フィロソフィ：オフ会？」

巫々女：俺ら知り合って結構経つしさ

社麻：いいかも

八方出：賛成

私としても3人と会ってみたいという気持ちがあった。彼らはどんな人達なのだろうか。おそらく男性なのだろうが、女の私を見てどうという反応をするかは解らない。

社麻：じゃ日時と場所を決めないと

八方出：皆どこ住んでる？

そうしてお互いに住んでいる地域を公表した。驚いたことに、全員が極めて近いところに家があることが判明した。みんな、半径5キロ以内の場所に住んでいる。

八方出：これってスゲー偶然じゃね？

社麻：まさかこんな近くに住んでたとは

D「フィロソフィ：もしかしたら今までに顔合わせたことあったりしてな

巫々女：この距離ならありえる

社麻：どこでオフ会するよ

巫々女：ネットでいい店探そうぜ

数十分後。

巫々女：じゃ来週の土曜日12時、場所は。。。市のMMFネットカフェに決定。

八方出：おk

社麻：楽しみだな

D「フィロソフィ：今からワクワクなのか」

八方出：俺は社麻がすげーイケメンじゃねーかと思う

D「フィロソフィ：俺もwww」

残念、私は女なのだ。

巫：女：晩飯の時間だし落ちるか

八方出：食ったらまた集合

社麻：ノシ

D「フィロソフィ：ノシ

ログアウトしようとしたときmail欄が点滅しているのを発見。
アースフレンドの運営人からのようだが、内容が妙だ。

件名：重要なお知らせ 送信者：海神（GM）
本文

貴方は選ばれました。今後の貴女方の活躍に期待します。
ワープ石を送りますので世界を救ってみましょう

意味不明なのでとりあえず放っておこう。それよりもオフ会には
どんな格好で行こうか。流石にいつもの兄のお下がりでは駄目か。
まあ腹が減ったし、とりあえずチャーハンと中華スープでも作るか。

—— 来週の土曜日が、社にとって人生を変える1日になるとは
当の本人も全く想像していなかった。無理もないことだが。

三話 社の一日（後書き）

ゆっく리가ケータイだと無残なことになっとなるなあ

四話　そしてその日はやってきた（前書き）

それでは4つ目の質問です。いや、5つ目だったかな？

あなたの休日の過ごし方は何ですか？

四話　そしてその日はやってきた

そして約束の来週の土曜日が訪れた。電車に揺られること約11分、ようやくMMFネットカフェの最寄り駅にたどり着いた。現在時刻はAM11:00、yahoo地図で調べた限り、ここから10分ほど歩けば辿り着く場所にある筈。道に迷わない限り遅刻することは有り得ないだろうと思う。

今日の私はいつもの野暮ったい格好ではなく、Tシャツの上にタングリーシャツを羽織ってカーゴパンツとスニーカーを履いている。実はこの日のために近所のデパートで奮発して購入してきたものだ。

兄のお下がり以外の服を着たのは何年ぶりだろうか。今まで、衣服の買い物をこれほど楽しみにしたことは無かった。何せアースフレンドで知り合って1年以上の付き合いのあの3人と出会うのだ。皆どんな人達なのだろうか。イケメンの男性だったら最高だが、そういう高望みは止めておこう。優しい人達だったらいいと思う。

会うときの事を考えて、昨日は興奮して中々寝付けなかったものだ。社は地図を持って駅前の通りを歩き始めた。先程から妙に周りの視線が気になるが、それらを無視して歩き出す。

——社は自覚していないが、彼女はアイドルのスカウトが真っ先に飛びつくほど飛び切りの美人でスタイル抜群である。更に今日はいつもと違って格好いい服をビシッと着こなしている。もうそこに居るだけで通行人の視線を釘付けにしてしまうのだ。

先程すれ違ったカップルの男性が社に振り返り、女性が文句を言い始める。しかし女性が社を見ると自身も社に見とれてしまう。やがてそのカップルは肩をすくめてその場を離れていった。

そんな自身の罪作り振りを自覚することなく、社は目的地のMMFネットカフェに到着した。中に入ろうとしてふと悩む。もしかし

たら外で待つてるほうが良いかもしれない。

MMFネットカフェのどこでどう待ち合わせるか、そういう話を全然していなかった。更によく考えてみれば、お互いの顔を知らないで相手を確認し合うことが出来ないではないか。おまけに連絡先も知らないときた。

これは不味いのではないかと社は思う。どうしてこんなミスに気が付かなかったのだろうか。私はもっとしっかりしているつもりだったのだが。最も、今更悔やんだところで意味は無いのだが……

「……あの、高杉さんですか？」

後ろから聞き覚えのある声が出た。振り返ると、この間英語の文法を教えたあげたクラスメートが立っていた。名前はこの時覚えた。

「だいたい大道寺さん？」

「はい！ わあ、奇遇ですねえ」

彼女の名前は大道寺だいたい史。ふみあの1件以来なんとなく話をするようになったのだ。彼女は青縞のボーダーワンピースの上に白い薄手のジャケットを着ていた。可愛い格好だねと言うと大道寺さんは頬を赤らめながら喜んでくれた。

「高杉さん。実は私、この店で知り合いと待ち合わせしてるんです。ただ待ち合わせのときちゃんと決めてなかったたので困ってるんです」
「わあ、実は私も待ち合わせしてるんだ。大道寺さんはデートとか？」

「って、違うつてえ」

大道寺さんとは、最近では昼御飯と一緒に食べるようになった。

それが良い影響を与えたようで、最近はクラスメートから少しずつ話し掛けられるようになってきたのだ。私自身は周りと積極的に関わろうとしなかっただけで、実は会話自体はそんなに苦手って訳じゃない。

少し前まで私は勉強ばかりで近寄り難いイメージを持っていたみたいだが、私はそんなにガリ勉タイプでもない。最近のTVの話題にも結構明るいので周りからは意外な印象を持たれた。もっともTVをよく見ていたのは、アースフレンドでの話題づくりの為だったのだ。

大道寺さんは楽しそうに話しかけてくれる。話しながら社は思う。もしかして、いやそんな偶然などそうそう有り得ない、でも万が一、ひよっとしたら……

「ところで、大道寺さん」

「なあに？」

「アースフレンドって知ってる？」

もしかしたら大道寺さんかと思って、それとなく探りを入れてみた。大道寺さんは驚いた顔で私を見返していた。まさかの大当たりだ。改めて2人で自己紹介する。彼女はD「フィロソフィ」で、陸上部の練習が終わった後にログインしていたとのこと。

いつも自分のことを俺といていたD「フィロソフィ」が、まさか大道寺さんだったとは夢にも思わなかった。というか大道寺さんと親しく話をするようになるずっと前から、私達は毎日のように話をしていたとは。偶然とは本当に良い仕事をするものであるとつくづく実感した。

大道寺さんに自分が社麻であることを伝えた。どうも彼女は興奮して私の話をあまり聴いていないようで、何故か話している途中で彼女が私に抱きついてきた。知り合いがオンラインゲーム仲間だっ

たのが嬉しかったのだろうが、私としては少し恥ずかしい。

はてさてどうしたものか。腕の中の温もりを感じながら考え込んでいたら、店の入り口から2人連れの女の子が「ねえ」と声を掛けてきた。2人とも私と同じ歳っぽい。

「もしかしてあんたらが社麻とDⅡフィロソフィ？」

「はい。……2人は八方出と巫^{はちほうで}み^みこ女？」

私は女の子達に聞き返してみた。1人はボーイッシュな雰囲気で、もう1人はふんわりとした優しそうな感じ。

「あの、それよりあなた達すごく目立ってるわよ」

「すつ、すみません」

あわてて大道寺さんが私から離れる。

「とにかく、これで4人揃ったね。んじゃ中に入ろうか。」

なんだかんだでみんなともすんなり出会えた。私の心配はどうやら杞憂だったようだ。私達は店の中へ入っていった。

四話　そしてその日はやってきた（後書き）

一応この四人がメインということだ

五話 ワイワイガヤガヤ（前書き）

新たに質問。

「あなたのインターネットでの趣味は何ですか？」

あつ、これ別に意味のある前置きでは無いんですよ（笑）

五話 ワイワイガヤガヤ

皆で席に着き、4人で改めて自己紹介をすることにした。

「私は社麻^{やしろま}で、本名は高杉^{たかすぎ} 社^{やしろ}です。ここから2駅ほど行った先にある丸太橋高校に通っています。ちなみにDⅡフィロソフィは同じ学校でクラスメートです。趣味は読書で、好きな食べ物は林檎です。現在部活には入っていません。よろしく」

言い終わると八方出と巫^{まじ}女は驚いた顔で私を見返した。む、この反応は本日二回目だ。

「高杉のことはあたし知ってたよ。てか高杉がオンラインゲームやってるとはねえ。んー、まいつか。んじゃ次はあたしね。ハンドルネームは八方出^{はちほうで}で、本名は八丈^{はちじょう} 琴目^{いんめ}。丸太橋高校の2年で、部活は調理部に入ってるよ。えーと、その巫^{まじ}女^{まじめ}こと桜田^{さくらだ} 由美子^{ゆみこ}は昔からの友達で、よく一緒に遊んでたかな。趣味はニコニコ動画好きな食べ物は肉じゃがで、えー以上。自己紹介って意外と難しいね」

八丈さんはそういうとどさつと席に着いた。初めに見たとき思ったが、この人はなんとなく男の子っぽい人だなと思う。彼女は有名な外人歌手の姿がプリントされた緑のTシャツの上に黒のベストを羽織っており、ボーイズのGパンには大きくて派手なバックルが付いている。ショートカットの青みがかった黒髪で、なんとなく同姓にモテそうなイメージを抱いた。

「それじゃ次は私ね。さつき琴目に紹介してもらったけど私は巫^み女^めで、本名は桜田^{さくらだ} 由美子^{ゆみこ}です。堅苦しいのはいやだから敬語はも

う止めるわね。部活は琴目と同じで調理部で、よく学校で琴目とは一緒にいるわよ。趣味はお菓子作りで、休日はよく琴目とケーキとかを作ってるわ。2人でよく買い物とかにもいつてるかしら。そうそう、この前琴目と一緒に面白い物してたんだけど琴目ったらひどいのよ。私がアクセサリを選んでたら……」

「わーその話は無し無し！ てか自己紹介じゃないそれ！ もう、次の人どーぞ！」

桜田さんの話を遮って大道寺さんに話をパスする。桜田さんはゆったりとした白のワンピースにオレンジ柄チェックのロングスカートを履いている。髪の毛は少しウェーブが掛かった緑色っぽい黒髪で、髪をヘアバンドで止めている。

八丈さんがなんとなく男の子っぽいのと比べて、この人は包容力のある母親のような感じた。二人の会話は息が合っていて、長い付き合いであるのが見て取れる。

というか2人ともうちの高校の生徒なんだ。丸太橋高校の制服はちょっと特殊だから、校舎の中だと違う印象を持つかもしれない。八丈さんと桜田さんはとても魅力的なのに、丸太橋に通ってるのはもったいないなと思う。

最後は大道寺さんの番。前にも思ったけど大道寺さんって私よりずっと背が低いなあ。

「私は大道寺 史ふみです。好きな食べ物はホットケーキで、趣味は本を読むことです。部活は陸上部で100m走を練習しています。現在の目標は夏のインターハイに出て成績を残すことです。よろしくお願いします」

大道寺さんは言い終わるとゆっくりと席に着いた。店の前で大道寺さんと出会ったときにも思ったが、皆の自己紹介を聞き続けてい

ると相当なギャップに驚かされる。私は皆オンラインゲームでは『俺』と名乗っていたから全員男性だとばかり思っていた。

ところが実際はみんな同年代の女の子で、しかも性格が特にがさつという訳ではない様子。まあ自分自身も俺という一人称を使用していたので納得出来なくも無い。もしやインターネットでは、私が考えてる以上に女性人口は多いのではないだろうか。国勢調査などで詳しく調べたら、面白い結果が出るんじゃないかと思う。

全員の自己紹介も終わり、昼食を頼んだ後はいつものような雑談になった。学校や先生の話、食べ物や漫画など。インターネットに関しては全員共通の趣味なので、みんなで大いに盛り上がった。4人で動画投稿サイトに接続して子猫の成長日記を見たり、アンサイクロペディアでどんな記事があるかを調べたりして楽しんだ。

2時間ほど経った頃、八丈さんが話題を変えてこんなことを聞いできた。

「ね、史つてさ、好きな男子とかはいないの？」

私も気になったので大道寺さんの方を見ると少し顔を赤らめてモジモジしていた。彼女曰く、好きな男子はいないとのこと。私もそうだった人はいないことを話すと桜田さんはあらあらと微笑んでいる。八丈さんと桜田さんにも聞いてみると、2人とも好きな男子はいないらしい。

うーむ、女子高生4人が集まって浮いた話が1つも無いというのは珍しいのではないかと思う。……いやまあ私もその一人ではあるのだが。

今度は好きなタイプの話になった。大道寺さんは背が高く、勉強が出来てスポーツ万能で優しい人が好きとのこと。何とも高望みしすぎではないかと思う。私の好みは雰囲気落ち着いた人で、周りを楽しくしてくれる人。そういうと大道寺さんはなにやら下を向

いて考え事をし始めた。何かへんな事を言ってしまったのだろうか。

八丈さんは包容力が合って料理が上手な人、桜田さんは男らしくてはつきりものをいうタイプが好きらしい。なんとなく2人が昔からの友達である理由が解った気がしないでもない。

その後はアースフレンドの話をし合った。前から気になっていた、八丈さんはどうやってあんなに大きなA Aを作り出せるのかを質問してみた。彼女曰く、オンラインゲームを起動させると同時にA Aを詰め込んだファイルを画面に展開して適宜表示させているそうだ。殆どが2chのものをコピーペーストしたものだ、最近では自作でオリジナルのA Aを研究しているらしい。私はよく林檎を齧りながらアースフレンドをしていると言ったら、桜田さんにかにも社らしいと言われた。何だかよく解らないけれど褒められていると解釈しておこう。

楽しい時間は過ぎるのが早い。気が付いたら店に来て4時間以上が経過してしまっていた。今日は皆に会えて良かった。来るまでは不安だったけど、皆同じ学校の生徒で、皆同姓ということもあってリラックスして過ごすことが出来た。

普段のみんなとも仲良くなれたし、今後はオンラインゲームだけでなく学校でも一緒に話したりするかもしれない。今まで学校はつまらないとばかり思っていたが、これからは楽しい毎日になるんじゃないかと思う。

ふと管理人からのメールを思い出す。あれは何だったのだろうか。アイテム欄には何の変化も無いし、公式HPでもそれらしき告知は無かった。運営の悪戯だったのだろうか？どうもそういったものは違う気がする。

何の気なしにポケットを探ると何か固いものの感触があった。取り出して見てみるが、一体これは何なのだろうか。見た目は小さな

黒い立方体。こんなもの私は所持していないし、第一見たことも無い。何故見たことも無いものを私は所持している？　というかこんなもの、店に来る時にはポケットに入ってた筈だが。

隣を見ると何故か大道寺さんも同じものを持っていた。ただし色は濃い赤。更に何故か八丈さんは青い、桜田さんは緑の立方体をそれぞれ手に持っていた。

皆手に持つそれを不思議そうに眺めている。みんな髪の毛と同じ色だなと、無意識に思った。

「由美子、これなんだろう」

「うーん、何でこれがバッグの中に入ってたのかしら？」

「高杉さん、これって何だろう？」

「うーん、心当たりが無いなあ」

現在時刻 P M 4 : 3 1。

五話 ワイワイガヤガヤ（後書き）

そろそろ物語が動き始めます
次話くらいから戦闘シーンあり

6話 Outsider In Paradise (前書き)

ほいほいゝ

では、「あなたはどうかやってアースフレンドを知りましたか？

次の選択肢からお答えください」

・他サイトのリンク ・友人、知人の進め ・気付いたら遊んでい
た ・その他

6話 Outsider In Paradise

暑い。どくどくと流れ出てくる体中の汗が止まらない。顔にかか
る蒸し暑い風がとても不快な気分にさせる。空を見上げれば何十メ
ートルもあるう巨大な木が太陽を覆い隠している。さっきから木の
上で大きな鳥がけたたましく鳴いていて、足元では蟻の行列が鼠の
死骸を運んでいる。

私達は蒸し暑い樹海の中で立ち尽くしていた。……今のこの状
況をどう表現すべきか非常に困っている。とりあえず出来事を順序
立ててみることにする。私達4人はMMFネットカフェで楽しく話
していて、そのとき何故か皆小さな立方体を鞆なりポケットなりか
ら取り出していた。

全員それに心当たりが無く、誰かに悪戯で入れられたのかという
結論に至ろうとしていて、気がついたら全員樹海の中で立ち尽くし
ていた。……今までの流れを要約するところという風になる。

「ねえ……ここ、何？」

八丈さんが震えた声で問いかけてきた。そういつて彼女は袖で額
を拭く仕草をして平静を保とうとしている。八丈さんの袖は真っ黒
だった。さっきまではTシャツにベストとGパンだったのに、今は
黒いセーターのような服で、下は迷彩柄の長ズボンと丈夫そうなブ
ーツを履いている。腰には左右それぞれ苦無くはないを差しており、それが
さっきからカチャカチャと音を立てている。

さながら現代風の忍者を想起させる姿。だがそれより目立つのは
髪色の变化だ。さっきまでの髪は殆ど黒に近い青だったのに対し、
目の前にいる八丈さんの髪はまるでサファイアのように青く輝いて
いる。肌も白く透き通っており、幻想的な雰囲気漂わせている。

「どういふことなのかしら。てか、この服装……？」

桜田さんも、若葉色の僧衣のような服の裾を摘みながらオロオロしている。彼女は頭に編み笠を被り、足元は草履で右手には鈴の付いた錫杖を掲げている。今の桜田さんの格好はさながら修験者といったところか。

左手には数珠のようなものを持っている。八丈さんと同じく髪色も変化しており、美しいエメラルドグリーンのような輝きをしている。最も私はそんな高価な宝石を生で見たことは無いのだが。

かくいう私自身も相当妙な格好に変身している。薄手の布の服の上に頑丈な鎧兜を纏っており、左腰には立派な剣が鞘に差し込まれている。左手に持つひし形の盾にはドラクエの口トのような紋章が施されている。ちなみに髪の色は黒のままだ。

見た目の特徴はさておき、鎧自体はさほど重たくないので動きやすい。ひとまず大道寺さんに話し掛けようと手を伸ばす。大道寺さんの髪はルビーのような鮮やかな赤である。

「大道寺さん大丈夫？ 震えてるけど・・・」

「平気、かな。高杉さんは落ち着いてるよね」

「結構びつくりしてるよ。とりあえず状況を確認しないと」

「高杉さんは頼りになりますね」

背中をさすって、大道寺さんの気持ちを落ち着かせようと試みえた。大道寺さんは全身を橙色のローブで覆って、頭には先がとんがった黒い帽子を被っていて、手には大きな木の杖を持っている。典型的な魔導士コスチュームの大道寺さんは、私の手に掴まって立ち上がるうとするが、腰が抜けているのか尻餅を付いたまま動けないでいる。

ひとまず全員で車座になって状況確認を始めることにした。解り難いのでしばらく各々の台詞に名前を振ることにする。

由美子「私達の格好はどうなってるのかしら？」

琴目「格好良くはあるけどさ。なんかRPGみたいで格好いいし」

由美子「琴目、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

社「それより、ここは何処だろ？」

琴目「さあ？ 多分南米辺りじゃないかと思うけど」

由美子「問題は何故南米に突然やってきたのかということなんだけど」

琴目「それは全く解らないな」

社「私達に何故か何らかの超常現象が発生してどこか南国のジャングルにワープさせられて、更に服装や髪色まで変化させられてしまった訳だ」

由美子「随分サービス精神旺盛な超常現象ね・・・」

琴目「どうせならもっとマシな所にワープすりゃよかったのに。あー暑苦しい。つか社の格好マジキツインじゃない？」

社「いやそうでもないよ、これ割と通気性いいし。それよりも何でこんな所に私達がいるかだよ」

由美子「おそらく私達、何者かにファンタジー世界へ呼び寄せられたんじゃないかって思うの。目的とかはさっぱり解らないけどね」

琴目「この世界で魔王を倒せってこと？　だったらこの格好も説明がつくかな。でもそうなると余計ここが何処だか気になるね」

由美子「とりあえず、どうして私達がファンタジー世界に召還されたかの理由ね」

史「ねえ、気になることがあるんだけど」

社「大道寺さん、もう大丈夫なの」

史「うん、大分楽になったかな。それよりもこの世界のことなんだけど」

琴目「ふんふん」

史「もしかしたらここはアースフレンドの世界じゃないかかって思うの」

琴目「にやんだって？」

史「今の私達の服装、昨日アースフレンドにINしたときと同じだと思うの」

琴目「言われてみれば、装備させてたのってこんな服だったね」

社「なるほど、だから私の格好は戦士なんだ」

由美子「そういえば一昨日、新しく修験者セットを購入したばかりだったわ」

琴目「でも何で私達が召還されたんだろ？」

社「多分たまたまじゃないかな。私達はアースフレンドの黎明期からプレイしているから白羽の矢が立ったんだと思うよ」

琴目「だとすると凄い迷惑な話だな。で、どうする史？」

史「えっと・・・」

社「もしここが本当にアースフレンドの世界ならNPCみたいなのがいる筈だから探し回るのがいいと思う。とにかく人を探してみよう」

由美子「そうね、そろそろ移動しましょうか」

琴目「まって」

由美子「琴目、どうしたの？」

琴目「なんだか嫌な予感がする」

八丈さんが突然立ち上がって周りの様子を警戒し始めた。私にはさっぱり解らないが、何か得体の知れない輩でも迫って来ているのだろうか。不安に思っけてキョロキョロしていると突然木の陰から棍棒を持った大きな怪物が躍り出てきた。

でかい。身長2mはありそうな巨漢で、中年男性のように腹がでっぷりと膨れている。肌はピンク色で顔は豚そのもの、手に持つ棍棒は私達の頭くらいの太さがある。もしここがアースフレンドの世界なら、こいつの名前はピンクオークだ。今まで何度も倒してきた雑魚モンスターである。そいつが何か叫びながら棍棒を振り上げて私達に襲い掛かってきた。

6話 Outsider In Paradise (後書き)

前書きのアンケートにはちゃんと意味があるので

次話でグロ描写注意

7話 S w o r d ! S h i e l d ! H e i m ! A r m o r ! (前書き)

では「貴方方4人の馴れ初めを教えてください」

馴れ初めという表現はおかしいですかそうですかわかりました

ではさっさと答えてください

7話 S w o r d ! S h i e l d ! H e l m ! A r m o r !

ガン！

ピンクオークの一撃を盾で受け流してまた間合いを取る。巨大なだけあり敵の力が半端なく、攻撃を受け止めるたびに左腕に鋭い痛みが走る。

戦闘が開始して大体2分位経っただろうか。がたがたと震えている大道寺さんを八丈さんと桜田さんにまかせ、いきおい飛び出していったもののずっと押されっぱなしだ。まだ致命的な怪我は受けていないがこのままでは時間の問題である・・・どうしたものか。

いつそのこと捨て身で突撃してみるか？ おそらく敵の急所は人間と同じ心臓や喉元とか辺りだろう。そこを狙えば、奴とてただでは済まない筈だ。

だが上手くいくか？ 奴ははつきり言っただけでかなり強い。純粹に力が強いだけでなくかなり戦闘慣れしている様だ。対して私は格闘技や喧嘩の経験などが全然無い。ちらりとみんなの方を向いてみる。大道寺さんはまだ震えていて動けそうに無い。

「社、前！」

一瞬目を逸らした隙にピンクオークが物凄い勢いで迫ってきていた。何とか間合いを離そうとするが奴の動きは速く、あっという間に目前までやってきてしまった。奴が棍棒を大きく振り下ろす。私はかろうじてそれを盾で受け止めた。

重たい一撃、左腕の骨が折れるんじゃないかってくらい痛む。が、今なら敵の脇腹はから空きの筈。ここから反撃できないか？ そう思っただけで八か剣を突き出した、しかし攻撃が決まったかどうか解

る前に脇腹に鋭い痛みが走る。

しまった、私の脇もがら空きだったんだ。思わず前のめりになって後退すると奴の拳が私のあごを思い切り突き上げた。口の中が血の味で満たされ、ふらふらになっている私を今度は棍棒で頭を殴り飛ばし、そのまま流れるような動作で蹴り飛ばされてしまった。

全身を大木に打ち付け、口から大量の血を吐き出した。更に体中の骨が折れていくような嫌な音が響いてきて、激痛のあまり段々意識がぼんやりとしてくる。ピンクオークがこちらに振り向いて、私に追撃を与えようと迫ってくる。ああ目の前にピンクオークが迫ってくる。避けなければいけないのに体が思うように動かない。

やっぱ強すぎるこいつ。いや、私も油断していた。さっき奴は私の視線を棍棒に集中させて隙を作り、そこから一気に畳み込まれて一瞬のうちに私は致命的なダメージを受けてしまった。奴にとって、所詮私など単なる雑魚でしかないだろう。いや、獲物が。

回避しようとしたが間に合わず、右腕に痛烈な一撃を食らってしまった。鎧ごと右腕の骨が碎かれる痛みにたまらず叫び声を上げる。また吹き飛ばされ今度は岩に頭から激突した。また口から大量の血を吐き出して鎧を真っ赤に染める。奇跡的にもまだ手には剣を持っていたまだ。

何とか意地で立ち上がるが、目の前が真っ赤でよく周りが解らない。後頭部からどくどくと血が流れ出ているのが解る。おそらく今の私はかなりグロテスクな姿なのだろう、まるで客観のように自分を見つめている自分が不思議でならない。

ファンタジー世界の勇者達はこんなモンスターなど軽く倒してしまふのだろうか。何せ巨大なドラゴンとも渡り合う力を持っているのだから、勇者に選ばれるような奴は化け物染みた人間なのだろう。

対して私はどうだ？ 力自慢でも何でも無いただの女子高生。全力でモンスターと戦って結果この様だ。

もし私達が神に選ばれたというのなら、そいつの采配には致命的な欠陥があると思えない。使い物にならない右手の代わりに、左手で盾と剣の両方を構えてピンクオークを睨み付ける。この状態から形勢逆転出来るだろうか？ 一応策はあるが、それがこのモンスターに通用する自信は無い。

ふと思う、何故自分はここまで勝つことに執着しているのだろうか。別に自分が生き残ることが大事だとは思っていない。突然の理不尽な死も、別に受け入れても構わないと思っている。

昔から私は自分自身にさっぱり興味が無かった。わざわざ自己主張などする必要など無いし、他人にどう思われても別にどうだっていい。今までもこれから、当たり障り無く生きていければいいと思っている。それで他人にどうこう言われる筋合いは無い。でも今、私は……？

右手からうつすらと人影が見えた。八丈さんが、両手に苦無を持ちながらピンクオークに突撃している。

「社お！」

八丈さんの攻撃は届くことなくピンクオークの左手で体を吹き飛ばされた。桜田さんや大道寺さんも何か叫んでいたがそれはどうでもいい。今、ピンクオークの体勢は攻撃の反動で若干崩れている。おそらく今が最後のチャンスだろう。

私はピンクオークに猛然と突撃していった。距離にして約6m。いける、私は走り出したと同時に持っていた盾を敵に投げつけた。まさか防具を飛び道具に使うとは思っていなかっただろう。さしもの歴戦の化け物も虚を突かれて動きが固まった。加えて元々体勢が崩れていたこともあり体がぐらりと傾いた。

いける！ そのまま一気に近づき剣を奴の左胸へと押し出す。ぶすっという音と共に奴の体から赤黒い血がドロドロと流れ出した。ピンクオークが暴れだすがかまわずぐいぐいと剣で押し込んでいき、そのまま近くの大木へと打ちつけた。ドスンという衝撃と共に、ピンクオークの絶叫が樹海に木霊した。

剣を引き抜いて、ピンクオークの状態を確かめる。まだ息があるもののとくに戦意喪失しているようだ。

「命が惜しかつたら、消えろ」そういうとピンクオークは私から露骨に目を逸らし、体を引き摺りながら森の奥へ逃げていく。奴の後姿を睨み付け、いつ反撃されてもいいように剣は構えたままだ。奴の姿が完全に見えなくなつたのを確認すると、どつと膝を突いた。どうやら何とか勝ち残ることが出来たようだ。

みんなが駆け寄ってくる。しきりに何かを叫んでいる様だが上手く聞き取れない。誰かが私の体を支えてくれた。この細い体は大道寺さんだろうか、目の前が真っ赤で周りがよく見えない。

「嫌っ・・・高杉さん、死んじや嫌だ！」

「大道寺さん・・・」

何も見えないのに、大道寺さんが泣いているのは何故かはつきりと解った。彼女の涙を拭いてやるうとして左手が血塗れなことに気が付く。反対の手には全く感覚が無い。さっきの一撃で完全にやられてしまったようだ。段々意識が薄くなってきた。どうやら私の体力も限界のようだ。こんな体たらくでよく生き残ることが出来たな、私。

薄れ行く意識の中、戦闘時の疑問の答えを見つけた気がした。どうして私は勝って生き残ろうと思ったのか？ 支えてくれる体の暖かさを感じながら、深く深く沈んでいった。

箸休め（キャラ紹介とか）

社、琴目のイラストを更新！

史も更新！

全キャラクターのイラスト描きました

そしてついに前キャラ更新完了！

箸休め（キャラ紹介とか）

社、琴目のイラストを更新！

史も更新！

キャラクター紹介

高杉 社 たかすぎ やしろ 15歳 帰宅部

> i 2 5 6 6 6 — 1 4 0 9 <

丸太橋高校1年生。成績優秀、スポーツ万能、眉目秀麗の完璧少女なのだが、1人が好きな性格なのであんまり友達はいない。最近は史と一緒に居ることが多く、徐々にクラスに馴染んできたかもしれない。アースフレンドではファイターのジョブに就いていて前線でバリバリ敵を薙ぎ倒している。

大道寺 史 だいどうじ ふみ 15歳 陸上部

> i 3 0 7 5 5 — 1 4 0 9 <

丸太橋高校1年生。大人しくて根暗な性格の彼女は昔から1人で居ることが多かったけど、今は憧れの社と友達になれて本当に喜んでいる。人と会話することは少し苦手。アースフレンドではソーサラーのジョブに就いていて強力な攻撃魔法で社を援護している。

八丈 琴目 はちじょう ことめ 16歳 調理部

> i 2 6 3 7 8 — 1 4 0 9 <

丸太橋高校2年生。こざっぱりした女の子で周りからは男の子みたいだといわれていたりする。由美子とは幼馴染で、休日は2人で料理をしたりショッピングに行ったりしている。アースフレンドではゲリラのジョブに就いていてダンジョンの罅回避や、状態異常攻撃などで後列から支援している。

桜田 由美子 さくらだ ゆみこ 16歳 調理部

> i 3 2 4 1 4 — 1 4 0 9 <

丸太橋高校2年生。包容力のある女の子で^{ことめ}琴目とは幼馴染。いつも^{ことめ}琴目と一緒にいるので周りからカップル扱いされてしまっている。将来は医者を目指しているらしく、家には医学の本が沢山置いてある。アースフレンドではプリーストのジョブに就いていてパーティのライフラインを一手に任されている。

用語解説

・アースフレンド

1年ほど前に日本のとある企業が発表した未知への冒険をテーマにしたオンラインRPG。斬新なシステムは無いものの綺麗なグラフィックと落ち着いたBGMが特徴で人気は高い。社達4人はオンラインゲームの発足時からプレイしていた。

・丸太橋高校

社達4人が通う男女共学の公立高校。全体の学力はそこそこで、のんびりとした生徒が集まるのが特徴。最近は体育系の部活に入りたがる生徒が少ないのが悩みの種。

箸休め（キャラ紹介とか）

社、琴目のイラストを更新！

史も更新！

ちなみに元のイラストはpixivにあります。「向日葵の冒険者達」で検索してみてください。

8話 Fumi Life

「この子は心の病を患っています。デリケートな問題ですので長い時間を掛けてじっくり解決していきましょう」

彼女の異変に最初に気付いたのは保育士だった。彼女は他の園児と全く喋ろうとせず、いつも部屋の隅で絵本を読んでいた。最初は緊張しているのだらうと思い、担任の若い保育士はその子に色々と話しかけてやったがその園児は一切の反応を示さなかった。

後に自信を無くし、半年後に退職していく若い保育士は少女について同僚や園長に何度も相談していた。曰く、あの子の眼は空っぽの瞳だ。何をしても何を話しても欠片も興味を示すことが無い。あの子と会話していると私自身の心が沈んでしまいそうだ。頼む何とかしてくれ、あんな子私の手に負えない……

小学校に入ってからその性質が変わることは無く、クラスメイトや担任と全く会話せず完全に孤立していった。流石にこの頃になると両親も心配し始めて子ども専門のカウンセリングに通わせるようになったが、彼女はどのカウンセラーにも心を開くことは無く、大抵は冒頭のような言葉で片付けられる。

そのうちクラスメイト達は彼女を明確に避けるようになっていった。苛めてやるうという風潮自体は無かったが、皆彼女を自分達と同列に扱おうとしなかった。その結果、更に彼女は孤立していく。

中学校に入ってから家は家に帰ってきてからすぐにPCに向かいオンラインゲーム等で遊び、夕飯も自室で済ませ家族とも全く会話しない生活を繰り返すようになっていた。

彼女は学校が嫌いだった。出来ればずっと家で過ごしていたかったが、両親を心配させたくないという感情が彼女を引き籠もりにさ

せない唯一の理由だった。赤いボサボサ髪の彼女、だいどうじ大道寺 史は生きながら死んでいるような生活をしていると自覚しながら日々を過ごしていった。

だが、彼女の人生を180°転換する出来事が起こる。

それは彼女が進学した丸太橋高校の入学式の後のことだった。校庭の掲示板に張り出されていたクラス分け発表を確認していると、すらりとした長い黒髪の女の子が現れた。彼女を見た途端、史は今までに感じたことの無いドキドキを感じた。どんな慣用句を用いればこの感動が伝えられるだろうか。体中が熱くなつて、朝から寝不足でボーっとしていたのに一気に眼が覚めた。

今思えばあれは天啓だったのかもしれない。「……D組か」彼女は自分のクラスを確認するとさっさとこの場から離れていつてしまった。自分の名前もD組にあるのを見つけた時は物凄い運命を感じた。大袈裟かもしれないが彼女と出会ったために、今日まで生きてきたのではないかとさえ思う。それほどまでに史の生活は荒んでいたのだ。

高校で初めてのLHRのときは出席番号順のお陰でだいどうじ大道寺 史はたかすぎ高杉 社の前に座ることが出来た。史は勇気を振り絞って社に話しかけてみようと思った。そういえば人と会話したのはいつ以来だったか？ それを考えて初めて気付く。史は人生で生きてきた中で、人に話しかけたことが一度も無かった。初めての経験に意識せず心臓の鼓動が早くなる。

「ねえ、名前何ていうの？」

「高杉社だよ。あなたは？」
たかすぎやしろ

「大道寺史。高杉さん、1年間よろしくね」
だいどうじ ふみ たかすぎ
「よろしくね」

そう言つて史は前に向き直つた。短い会話のやり取りだったけれども、史は体の震えを抑えるのでやつとだった。今の会話でおかしな点は無かったか、声が変わで無かったかなどを後になってとても心配してしまう。社の低いハスキーヴォイスは心の奥底に響いてくるようだった。初めて間近で彼女の顔を見て、彼女の圧倒的な美貌に愕然としてしまった。

こんな美人を史は今まで見たこと無かつたし、社と比べたらTVで活躍しているアイドルなど足元にも及ばない、そう史は思った。社のことを調べていつて驚いた。入試は全教科満点で、中学校時代は陸上部に所属していて全国大会に行くほどスポーツ万能だったらしい。彼女の雰囲気はその圧倒的な能力の凄さに裏打ちされたものなのだろう。

史は社と真剣に友達になりたいと思つた。こんな風に考えること事態、史にとっては初体験だった。

そして先週の放課後、史は思い切つて社との会話作戦を決行した。理由付けは英語で解らない所の質問。帰宅の準備をしている社に思い切つて話しかけてみる。こうやって間近で見ると彼女は改めて魅力的だと感じる。社は史が解らないと言っていた丁寧な英語の文法を教えてくれた。

話しているうちに社に対するイメージが少しずつ変化していった。もつとクールで怖いイメージがあつたのだが、意外と気さくで明るい人のような。社が立ち去った後も史は暫く教室でボーッとしていた。史は社との会話の感慨に耽り天にも昇れる気持ちになつていたが、陸上部のことを思い出して慌ててグラウンドに駆けていった。

その後、社とは何度か一緒に昼食を共にしたり話をする仲になっていった。それと同時に進行で、史自身も何故か周りから話しかけられるようになっていった。この経験自体、史にとってほぼ初めてでどう対処してよいやら非常に混乱してしまう。

そのうち社と史達を中心としてクラス内で大きなグループが出来ていった。クラスメートと会話することにそれなりに楽しみを見出し、それによって両親を安心させることに史はそこそこ満足していた。だが、社が他のクラスメートと会話しているのを見て僅かに苛立ちを感じている自分も認識していた。

史は社に盲目的なまでの憧れの気持ちがあった。社は史に無いものを数多く持っていた。素晴らしい美貌に抜群のスタイル、人を圧倒するオーラ、成績優秀でスポーツ万能。どれも史が持ち合わせていないものばかりであった。史自身は気付いていなかったが、彼女は意識の奥深くで社を独占したいという強い欲求があった。

社と中々話せないストレスを史は陸上部で解消していった。入学式の翌日、史の運動神経の良さを嗅ぎ付けた先輩に半ば強制的に陸上部に入らされたのだ。社のような圧倒的な運動能力は無いが史もそこそこの体力はある。部活仲間との会話も全くせずに（先輩が一方的に喋るのみ）毎日15km走りこんでは満足して帰っていくのであった。

家に帰れば深夜までオンラインゲームやニコニコ動画で遊び続ける毎日。この生活もいい加減改めるべきだと史は自覚しないでもないが、なかなか習慣というのは変わるものではない。

ところで、史はオンラインゲーム「アースフレンド」で1年以上前から出会っていたのだが、MMFネットカフェでのオフ会でそれを初めて知るところとなる。

史にとってオフ会は至福のひと時であった。なにせ大好きな社と長い間話をするのが出来たのだから。その日知り合った琴目と由美子という人達も中々良い人達っぱい感じだし申し分ない。

今日は最高の1日だ、史はそう思っていた。……アースフレンドの世界に召還されるまでは。

9話 Help 社 Everything!! (前書き)

大道寺 史の視点です

9話 Help 社 Everything!!

「高杉さんっ・・・高杉さんっ!!」

必死に呼びかけるけれども、高杉さんはピクリとも動かない。鎧兜は無残に粉碎してしまっていて、砕けた鎧の隙間から血と痣が見え隠れしている。綺麗だった顔は岩や木にぶつけられた衝撃からか血塗れで、顔面全体が腫れ上がって赤黒く変色してしまっている。呼吸は殆どしていない、後頭部からは今もどくどくと血を流し続けている。頭蓋骨の一部が露出している。

特に酷いのは右腕の損傷だ。鎧ごと腕を棍棒で粉碎されたのは見ていたが、近くで確認すると怪我は凄惨そのものだった。右腕全体が青黒く変色していて、肘がありえない方向に曲がってしまっている。もう高杉さんの右腕は一生使い物にならないだろう。

取り返しのつかない傷を負ってしまった高杉さん。今の高杉さんは集団リンチにあつた少女そのもので、誰もが思わず眼を背けなくなるものだった。いま彼女は虫の息。不意に高杉さんの体がビクツと動くと、口から大量の血を吐き出した。

「高杉さんっ ……うああああっ!!」

高杉さんを抱きかかえながら、私は何が何だか解らないくらい絶叫した。私は姿形こそ魔導士だった。けれども回復や攻撃の魔法は全く使うことができなかった。

大切な人が戦っているときに私は何をしていた？ 高杉さんを手助けすることもせず、嬲られていく様をじつと指を咥えて見ただけだった。何も出来ずに、足がすくんだまま動くことも出来なかった。自分の情けなさ、無能さに絶望する。

八丈さんも辛いはずなのに、私と桜田さんを必死で励ましてくれる。その八丈さんも肩がすごく震えていた。

「ここで泣いても何も解決なんかしない。いま社を助けることが出来るのは私達3人だけしかないんだから、私達が何とかしなくちゃいけないんだ！」

「……でも、どうすればいいの？」

私の隣で、桜田さんが弱弱しく聞き返している。さっきから桜田さんも、高杉さんを回復出来ないか、必死に魔法の物真似みたいなことを繰り返していた。

魔法の使えないウィザードやプリーストに何の価値も無いのに、こんな体たらくでは高杉さんを救えないというのに、どうして無意味に、こんな姿で召還させられたのだろうか。

「高杉さん、うう……」

「落ち着いて史。社を助ける方法が1つだけある。いい？　ここがアースフレンドの世界であるという可能性に全てを賭けるんだ」

「琴目、どういうこと……？」

聞き返す桜田さん。八丈さんは震えながら続きを話していく。

「樹木の葉が緑色で、所々に岩があつて、ピンクオークが出現する。アースフレンドのエリアで全ての条件を満たしているのは、新緑の森とヒルダ山麓の森とメント・森だけ。そして3つの森に共通しているのは、森の西出口付近にNPCの小屋があることなんだ」

「え、じゃあ！」

「その西の小屋に運び込めば社は助かるかもしれない。みんなで社を支えて小屋に行くよ」

私達3人で高杉さんを支えて、森の西外れのほうへと向かっていった。正直頼りなさすぎる情報だと思ったけど、高杉さんを助けるには藁にだってなんだってすぎるしかない。

この状況でモンスターに出くわしたら、間違いなく全員喰い殺されるだろうと思う。そのときはそのときだ、私は社のためにモンスターと刺し違えたって構わない。それが、無能な私に今できる精一杯。

歩き続けること数分。見事に小屋に出くわした。八丈さんのアースフレンドの知識の深さに感謝してもしきれないくらいだ。八丈さんは小屋に近づくと、躊躇無く玄関のドアを開けて中に入っていた。

私と桜田さんも、八丈さんに続いて小屋の中に入っていく。中には1人の生きた骸骨が安楽椅子に座っていた。八丈さんはそいつに近寄って、大声で叫んだ。

「詩人の服を着てる骸骨NPCってことは、ここは新緑の森だな。まあいい、あんたに頼みがある。今すぐ回復薬を出してくれ！」

「いかにもここは新緑の森だが、もしかして嬢ちゃん達がオールドプレイヤーかい？」

顎の骨を鳴らしながら話しかけてくる骸骨。この人は、高杉さんが気にならないの！？

「あんたと世間話してる暇はないんだ、さっさと回復薬を寄越せ！嫌なら無理矢理にでも奪い取るよ！」

「まずは落ち着きなされ。ふむ、連れの者が怪我をしてるようじやな。どれそこの薬草で回復してやろう。……そう睨むな、捕って喰ったりなどせんからな。心配せんでいい、私は嬢ちゃん達の味方だ」

10話 待て、old playerって何だ(前書き)

八丈 琴目の視点です

10話 待て、old playerって何だ

一般的にジャングルと呼ばれるものは日本には存在しない。沖縄のマングローブなどに関しては微妙だと思うが基本的に分布は東南アジア、赤道アフリカ、中南米のみとされている。正確には熱帯多雨林と呼ばれるこれの主な特徴は、年間を通して温暖で雨量が多いことである。というのは地理の教科書などを見て学んでいたが、まさか実際に体験することになるとはな。

あー蒸し暑い。ついでにジャングルでは蔓や羊歯がびっしりと生えていて、社を運んでいるとき何度も足を取られて転びそうになった。もうやだこのジャングル。

今、社は史の隣のソファに横たわって眠っている。骸骨の薬草が効いたようで、呼吸も穏やかになっており体中の傷も少し和らいだようだ。全くもって油断できないけど、命の危機は回避できてるだろうと信じる。

口元の血を拭いて、それから鎧姿は病人には辛かろうと兜と鎧を脱がしてやったら何故か下には白のスポーツブラしか着けていなかった。このコスチューム考えた奴は絶対エロいこと考えてやがる。

アタシ達の向かいの椅子に座っているのはドレッドノートという骸骨NPCで、新緑の森の番人である。墓場とかに登場するモンスター『ロードスケルトン』のグラフィックをそのまま流用した彼は、コンピュータ画面で見るより相当リアルでグロテスクな姿をしている。

なのだが刺繍が施された綺麗な服を着てゆったりと安楽椅子に腰掛けている様は、何故か不思議と安心感を与える。といっても子供が見たら間違いなく卒倒する程度の外見だがな。優雅に足を組んでるその骨に私は質問を切り出していった。

「あんたはドレッドノートでいいんだよな」

「私の名前を覚えてくれているのか。中々嬉しいの。君は八方出だつたかな」

「出来れば普通の名前で呼んでくれ。んじゃ単刀直入に聞くけど、ここはアースフレンドの世界なのか」

「その通りだとも。勘の鋭い嬢ちゃんだ」

思い切りニフラムを唱えたい衝動を抑えつつ質問を続ける。隣で由美子が不安そうに私を見つめている。そういや由美子はお化け屋敷とか苦手だったな。安心させようと思って私は由美子の手を握ってみる。いつの間にか由美子が冷え性になってるよ。

「続けるよ。こうやって現実になつてるってことは、アースフレンドは只のオンラインゲームじゃないってことだよな」

「勿論。アースフレンドは嬢ちゃん達が住んでいる星とは別宇宙に存在している剣と魔法の世界だ。それから現在この世界は危機に瀕していてな、我々はずっと勇者を求めていたんじゃ。そして、ついに嬢ちゃん達が勇者に選ばれたって訳だ。解ったかえ？」

解るかい、なんだよその突っ込み所満載な話。てか勝手に話を進めるな。

「私らが勇者に選ばれた？ 詳しく説明して頂戴」

「嬢ちゃんたちは他の奴らと比べて抜きん出た能力を持っている。それに嬢ちゃん達はアースフレンドの世界で長く活動しておるからここで上手く勇者としてやっていけるんじゃないかと上が判断されてな。あちなみに私がさっき言ったオールドプレイヤーというのはゲームの古参という意味じゃぞ。神に誓って年増とか失礼な意味はないからの」

「骸骨が神に誓うな」

何だか相手のペースに持っていかれてる。くそ、私は詰問とか苦手なんだ。にしても今、上の判断って言ったな。こいつには上司が存在しているってことか？ アースフレンドには会社のような組織が存在していてこの骸骨はその構成員って訳なのか？

……思ったより状況がややこしそうだ。これはひどい。普通にオンラインゲームで遊んでただけなのに何でこんなややこしい事態に巻き込まれなきゃならんのだ。

「アースフレンドが実在するってのは眉唾だな」

「どういうことかね」

「どうにも嘘臭いんだ。私の記憶が正しければ、この新緑の森から南に数km進んだところには大きな砂漠が広がって、北に15km進んだ先には雪原が広がっている筈だよ。地理学的に見て、こんな極端な気候の世界は存在し得ないのでは？」

「ここはファンタジー世界だからな。そうとしか説明しようが無い」

……話題の選択ミスったか。

「質問を変えるよ。私らが勇者に選ばれたって言うけど、それって不適材じゃないか。本気で世界を救いたいだったら一介の女子高生より自衛隊の特殊部隊にでも交渉持ち掛けた方がいいんじゃないの？」

「それではいかなのだ。確かにそいつらは戦闘や生存の能力は一通り揃っておるかも知れんが結局は人間。モンスター共と戦うには自ずと限界がある。その点、嬢ちゃん達には奥底に秘めたるポテンシャルに期待しておるのだよ」

「発言が矛盾の塊だな。可能性のみで勇者に選ばれたんじゃ堪ったもんじゃない」

「可能性だけではない。実際に持つとるだろ、ポテンシャル」

「何を言って、……待て」

「我々は何も無作為抽出的に勇者を選んだ訳ではないぞ。ちゃんと適性検査を行って嬢ちゃん達がパスしたのだ。君も特殊な能力を持つてるだろう」

「……何で知ってたんだ」

「適性検査を行ったからな」

「質問の答えになっていない」

「嬢ちゃん達は皆、何かしらの能力を持つておる。怪我して眠つとる戦士の娘も、魔法使いも、僧侶もな。繰り返すが、我々は嬢ちゃん達がそういった秘めた力を駆使して世界を救ってくれることを期待しておるのだよ。自衛隊の奴らが持ち合わせていないそれを」

「待て」

「その魔法使いさんと僧侶さんも、不安になる気持ちは解るが大丈夫だ。実は教会に行けばいつでも嬢ちゃん達の世界に帰ることができるのじゃ。家族と離れ離れになるなんてことは決してないぞ」

「おい、待てよ」

「気楽に考えてくれればいい。放課後とかに皆でこの世界に来てモンスターと戦ったりしてくれればいいのだ。そうだ、報酬のことを忘れていた。まあこの話はその戦士の娘が起きてからでもよいかな。後は、

「待てって言ってるだろ！」

11話 まあ血の契約なんて大抵不条理なものだし。（前書き）

桜田 由美子の視点です

11話 まあ血の契約なんて大抵不条理なものだし！。

「待てって言うてるだろ！」

「後は—— 何だ、言うてみい」

「このことは由美子以外誰も知らない筈だ。あんたらは何者だ！
何で私の秘密を知ってるんだ！ 誰に聞いたんだ、言え！さもないと」

「落ち着いて、琴目」

琴目はすぐカツとなる性格だから、今も気が動転して自分で何を言ってるかよく解っていないと思うわ。後は私に任せて頂戴。でもビックリだわ。何で彼は琴目の秘密を知っているんだろ。私と琴目以外は誰も知らない筈なのにどうして？

彼が言っていた適性検査とかいうので悟られちゃったのかしら？
まあこの際それはどうでもいいわ。

「由美子、だけどあいっ」

「大丈夫琴目。……ドレッドノートさん、私からもいいかしら」

「OK OK。君は確か巫女だったかね」

「出来れば本名で呼んで欲しいわ」

面と向かって話をすると彼の不気味さが本当によく解るわね。まさか生きた骸骨と対談する日が来るなんて、夢にも思ってもみなかったわ。

やだなあ、私お化け屋敷とか苦手なのに。うわあ頭蓋骨の中に脳味噌みたいなのが詰まってるー。こういうの子どもが見たら気絶しちゃうんじゃないかしら。

「嬢ちゃん、私の顔に何か付いとるかね？」

「骨が張り付いてるわ」

「いやまあ、生まれつきでな」

喋ってる内容や声は普通なのよね。発言と外見のギャップが激しすぎなのよこの人。とにかくここで怖気付いちや駄目、このままだと取り返しの付かないことになっちゃう。負けないように骸骨を睨みつけて、……うう、厳しい顔をするのは苦手だわ。

「御免なさいね、じゃあ本題に入るわよ。貴方、私達を勇者にしたいのね」

「うむ。正確には私が所属している組織の意思じゃな」

「貴方は、私達を脅して勇者に仕立て上げるつもりかしら？」

琴目も私も脛に傷持つ生き方をしてる。彼は私達の秘密をどれだけ知っているのかしら。もし全てを把握していて、警察に突き出されたくなければ言う事を聞けと脅されてしまえば、私達は従わざるを得ないわね。彼らの組織は相当大きい感じのようだし、逃げ切れるとは思えない。

……彼と、彼の組織の正体は一体何なのかしら？ 相手の様子が全く解らないんじゃないやりに難くてしょうがないわ。せめて、取引と叫べる状態にまで持つてこないとどうしようもないわね。

「答えてくれないと貴方で出汁を取るわよ」

「……その点に関して我々は非常に苦悩した」

「そう、なの？」

骸骨は神妙な面持ちで私達に向き直った。今までの彼と少し雰囲気気が違っている気がする。

「2人の経歴は調べさせてもらった。決して得た情報を笠に立てようなどとは思っていない。我々は嬢ちゃん達と良い関係であろうと思っている。それだけは信じて欲しい」

「……………」

「無論ただ働きなどません。円で報酬を支払う。それ以外での形で報酬が欲しいというのであれば勿論応じる。その他の欲求にも可能な限り答えていくつもりだ。……………どうか、我々の世界を救ってくれ」

私は考えて、返事をした。

「……………ふむ。貴方の声って中田譲治さんに似てるわね」

「嬢ちゃんは私の話をそっち目線で聞いていたのか!？」

「冗談よ」

全く冗談であると言うと嘘になるのだけど。会った瞬間からずっと頭の中で、似ている声優を調べてたんだけどちょっと失礼だったかしら。今大事な話をしてるけどそれはそれ、オタクの性ってやつよ。

「さて、どうする？ 琴目、史さん」

「えっと、私はよく解らないかな……………」

史さんは委縮しちゃってるみたい。私は琴目に目配せした。

「今すぐ決断しないと駄目なのかな。私らには情報が少なすぎるし、

……………由美子はどうするの？」

「私としても一晩か猶予が欲しいところだわ。日も暮れちゃったし、ここで休んでいてもいいかしら？」

窓の向こうは既に真つ暗闇になっている。思ったよりも結構長話をしていたようだわ。モンスターがうろついている夜の森に、怪我人を連れて出歩くのは自殺行為そのものだからなんとか避けたいけど、果たして目の前の骸骨は首を縦に振るかどうか。勇者が弱音を吐くな！　なんて言ったら即（＾o＾）／ね。

「構わんよ。自分のうちだと思ってゆっくりしていきなさい」

どうやら今、この瞬間の身の危険は回避出来た様。ややこしいことはひとまず明日に回すことにしようか。

「晩御飯のメニューを聞いてもいいかしら？　ドレッドノートさん」
「ゾンビの唐揚げに鬼火の踊り食い、……冗談だぞ、拳を下ろせ」

もうやだこの骸骨。

12話 light bed side (前書き)

注意：軽いガールズラブ要素あり
抵抗ある人は注意してください

12話 light bed side

女3人寄れば姦しいと言うが、先程の晚餐の空気は最悪そのものだった。涙ぐんで食事をする者もいれば、明確な敵意をドレッドノートに向けている者もいる。もう1人は話しかけるとちゃんと返事をしてくれるが、眼は全然笑っていない。腕によりをかけて作った、自慢の和食料理で全然満足してもらえなかったドレッドノートの頭蓋骨はいつもより小さく見える気がする。

風呂から上がった彼女達は怪我をした戦士の娘を連れて、ドレッドノートに案内された寝室へと向かっていった。3人ともまだ表情が硬いままだ。寝室にはベッドが2つしかなく、戦士の娘と魔導士の娘、ゲリラの娘と僧侶の娘がそれぞれ1つのベッドを共有して眠ることにしたようである。

数刻後。

「なあ、……起きてるか？」

「うん、なんだか寝付けなくて」

「私もだよ。今日は色々ありすぎたからな……」

ベッドの内の1つ。ゲリラの女と僧侶の女改め、八丈 琴目と桜田 由美子は互いに体を向け合って話を始めた。寝付けられないのも無理はない、何せファンタジー世界に召還されて勇者を任されるなど通常の人生においてまず経験することの無い事態だ。最も彼女らは他の2人と比べて随分と肝が据わっている様に見える。これは経験の差か。

「あり得ないよなあ、私らが勇者なんてさ。ある意味すっぱー皮肉じゃん」

「まあしょうがないんじゃない。それより琴目、今日の晩御飯美味しくなかった？」

「あー、覚えてないなあ。私ずーっとあの骸骨睨み付けてたから」

「あの肉じゃが何かちよつとした隠し味が入ってると思うんだけど、明日彼に聞いてみようかしら？」

「随分暢気だなー。社が怪我してるつてのに」

どうやらドレッドノートの料理はわりと好評だったようだ。楽しげな会話をしているのだが、どうもこの2人は掴み所が無い。

社達4人で話し合っていたときは雰囲気が随分と変わって、今はどこか憂いを帯びたような表情をしている。口元にはうつすらと笑みを浮かべて、それでいて目は全く笑っていないのが何とも不気味だ。そこの女子高生には出来ない表情が、彼女達の裏の顔を垣間見せている。

「で、どうするの？ 琴目」

「けんちん汁の隠し味は人骨だったりしてな」

「そっちじゃなくて！ 例の勇者になれて話よ。琴目はその話に乗るのかしら」

もう、と言いながら琴目の体をポカポカと叩く由美子。

「乗るしかないでしょ」

「やつぱり？」

「アレ晒される訳にやいかんし。あの骸骨は良好関係を築きたいとか言ってたけど、他の奴らはそうじゃないかもしれない。腹立たしいけど今は奴らに従うしかないって」

琴目は鼻で笑う。勇者になって世界を救ってくれ。その程度の話など今までの境遇と比べれば、物の数ではないといわんばかりに。

「……ねえ由美子。あんたは私と一緒に、勇者になってくれるかな？」

「勿論。琴目と一緒に何処にでも」

「それ聞いて安心したよ」

言い終わると、琴目は仰向けになり天井に左手を伸ばした。そんな彼女の手を由美子はじっと見つめている。しばらく沈黙が続いた後、由美子はポソリと呟いた。

「……琴目。私達、後どれ位生きていけると思う？」

「んっ、どうだっていいけど、可能なら長生きしたいね」

「もし、私が社さんと同じくらい傷を受けてたら、私は間違いなく死んでるわ」

「正直いつ殺されてもいいと思ってたけど、ファンタジー世界で死ぬのだけは御免だ」

「同感」

さらりと衝撃発言を連発する2人。先程より声が小さめなのは史に聞かれないようにする為か。

「今の状態って、私達がやってきたことに対する罰なのかしら」

「罰はともかく、適性検査とか言ってたし間接的に影響してんのは確かじゃない？」

「罰かあ……社さんや史さんも何か大変なことをしたのかしら」
「さあね。……ところでさー」

喋りながら琴目は由美子を抱き寄せ、そのまま彼女の胸へと手を伸ばした。

「相変わらずの揉み心地だ」

「ちよつと、隣に居るのよ……」

「この世界は虚構じゃないね。だって由美子がこんなに可愛いんだもん」

「何を言つて、んあつ！」

琴目は由美子の胸を揉み始める。

「フフ、昨日より成長してるかな」

「さ、先っぽは駄目え、んっ、あんっ」

「声出しちゃバレちゃうつて。仕方ないな」

そういうと、琴目は紅潮する由美子の顔を引き寄せ唇を奪い舌を絡めていった。2人のくぐもった声がベッドの中を淫靡な雰囲気に変えていく。由美子の胸を揉みしだきながら反対の手を彼女の下腹部へと伸ばしていく。

「今夜も、やらしくいくよ」

琴目の瞳は妖しく光っている様に見えた。

12話 light bed side (後書き)

次話もガールズラブ要素含みます

13話 light moon up(前書き)

注意：ガールズラブ要素ありです。

13話 light moon up

彼女は殆ど食事に手をつけていなかった。夕食後すぐごと皿を台所に片付けるドレッドノートの後姿は、骸骨であることを考慮しても死人のように生気が無かったように見えた。琴目と由美子は2人で風呂に入っていたが、彼女は社のことを心配してずっとソファの傍から離れようとしなかった。社はドレッドノートの薬草が効いたようで容態はかなり良くなってきたおり、この分だと明日には戦場に復帰できるかと思われる。

風呂から上がった2人と合流して彼女Ⅱ史は社を背負って寝室へと向かっていった。到着した寝室にはベッドが2つしかなかったのが琴目と由美子、史と社でそれぞれ1つのベッドで寝ることになった。

数時間後。

彼女もやはり寝付けないのだろう。何度も寝返りを打ったり着ているパジャマをいじったりして睡魔を誘っているようだ。ネットカフェで話をしていたら突然異世界に召喚されて、更に親友が目の前で滅多打ちにされてしまったら誰でも気持ちが悪く沈む。体調を崩して嘔吐などが無いだけマシなほうだろう。

史はデータによると極度の根暗で非社交的な性格らしく、また背が低く体つきも貧相な彼女は他の3人と比べ相当打たれ弱そうに見える。現にこの世界に召喚されてから一番口数が少なかったのが彼女だ。

彼女達が今着ているのはドレッドノートに支給された白装束なのだが(社には縁起が悪いから着させてない)どうも丈が合っていないようで皆裾を引きずって歩いていた。これらは元々男性用として用意した物であるゆえ致し方ない。

やがて寝ることに諦めたのか、史は社の寝顔をじっと見詰めだした。穏やかな寝息を立てて眠っている社の顔には、外見からわかる傷は殆ど見つからない。史は社の右腕をそつとさすった。赤黒く変色していたその部位には僅かなシミも残っていない。続いて社の腹部を撫でる。引き締まったウエストにも特に異常は見つけられない。同姓すらも虜にする美貌に、均整のとれた魅惑の肢体。とても少し前までモンスターと死闘を繰り広げていたとは思えない。時間さえかければ骨折や癌も治療してしまう強力な薬草を使用したのだからそうでなくては困る。明日の朝には戦闘の痕跡すら残っていないだろう。

額に張り付いた髪の毛を払ってやり、そつと社の顔色を伺う史。傍目には史の顔色のほうが悪く見える。

史の経歴を見る限り、彼女は社と出会ったことが彼女の行動性を大きく変化させているのがわかる。史はそれまで他者との関わり的一切を拒んできたが、社に対しては寧ろ過剰なまでのこだわりを感じられる。いつから彼女に執着していたかは不明だが、ここ2週間は彼女のモチベーションがかなり高かったのは事実だ。

それほど史にとって、社と言う人物には魅力があったということなのだろうか。彼女は容姿端麗でスタイル抜群、スポーツ万能で成績優秀と客観的に見て非の打ち所が無い完璧超人であることが認められる。だがそれら肩書きが史の心を揺さぶった訳ではあるまい。同じような完璧人間は小中学校にもいたらしいが同様の結果には至らなかった。

彼女が他の人間と決定的に違うものとは一体何なのだろうか？社とは史にとってどういう存在なのだろうか？可能性を挙げるなら運命の赤い糸。史は社に強い恋愛感情を抱いているのではないか。或いは社は史にとって完全に理想の存在だったのかもしれない。社を強く独占したいという強い欲望も持ち合わせているのかも。もっ

とも単なる推測には何の意味もない。

史は穏やかな様子の社に顔を近付けていった。どんどん近づいていってもうお互いの寝息が届く位の距離だ。気のせいか史の息が激しくなっている様にも感じられる。

今宵の彼女は大胆であつた。仰向けの社の体に覆い被さり、社の顔全体を撫で回し始める。そのままの体勢で頭を下ろし、史は社の唇に自身のそれを重ね合わせた。

まるでタガが外れたかのように何度も何度も社にキスを続ける史。彼女の口を開け歯の汚れを丹念に舐め取り、口内で舌を絡めとり自らの唾液を染み込ませたりした。それは、今までの彼女からは想像も付かない程の乱れぶりだった。

社の胸に手を出そうとしてぴたりとその動きが止まる。ようやく自分のしていることに気が付いたのだらう、社の唇から遠ざけた史の顔は湯気が出そうなほど真っ赤だ。省みて自分の寝巻きが相当乱れていることに気付き、慌てて襟を正す。白装束は彼女の汗で少し透けて見えた。

そのまま布団を被って眠ろうとしていた彼女だったが、左隣から微かに聞こえる妖しい声に気付いてしまった。隣のベッドで眠っているのは一緒にこの世界にやってきた琴目と由美子だったが2人の様子がどうもおかしい。

シーツに覆われていて判別出来ないが、その中から「んっ……」や「アンツ……」等という嬌声が響いている。更に彼女らのベッドの近くには脱ぎ捨てられた2人の白装束が散乱していた。この状況の答えは1つしかない、琴目と由美子はやっている。

瞬間、史は吹っ切れた。再び社に覆い被さり、着ている白装束を脱ぎ捨てると史のスポーツブラを強引に脱がし彼女の豊かな乳房に思い切りむしゃぶりついた。社の胸を弄ぶ史の目はトロンとして、

完全に理性が吹き飛んでいるのが判る。

押し殺した声が寢室から響いている。一方からは琴目に攻められ悦ぶ由美子。もう一方は社を睡姦する史の喘ぎ声。社の呼吸にも熱い吐息が混じるようになってきた。今宵はまだ始まったばかり、まだ夜明けは遠い。

史はいよいよ社のズボンを脱がし、そのまま彼女の下腹部へと「はいもう終わり！ これ以上はドクターストップ」

その時点で私は映像をシャットダウンした。こんなもんずつと見てたら頭が変になる。

「ちょっとお！ 今からいい所なんじゃない。早く続きを見せなさいよ！」

隣で海神^{かいじん}が喚き散らしている。こいつには倫理感というものが無いのだろうか。

「あれは彼女らのプライベートだ。大体あれ以上は私たちの仕事じゃないし」

「いいじゃん見せてよー あそこまで見せて終了とか生殺しだし！」
「駄目だ」

「もう、当て馬のケチ！」
「当て馬じゃない！ 私は冬馬^{ふゆま}だ！」

「まったく海神の奴、公私混同ってレベルじゃねーぞ！ つーか当て

馬って何だよ。それ種馬が種付けをするまで代わりに雌馬にあてがわれる牡馬のことだよな。最悪の侮蔑じゃねーかソレ。

「上に提出するデータは1通り揃ったから、今からレポートに纏めるぞ。今夜は徹夜だかな」

「ちえー 分かったよ。でもこれだけはお願ひ」

「何だ？」

「風呂場の盗撮映像は無いの？」

「ねーよ！」

不真面目な奴とチームを組まされるとホントに苦勞する。アースフレンドの命運を賭けた、一大プロジェクトを任されたという自覺が無いのかこいつには。

「デスクに戻るぞ。……体くねらせて何やってんだ？」

「仕事の前にお願いがあるんだけど、いいかな？」

「またか、今度は何だ」

「あの映像見てて私も興奮してきちゃった……ねえ冬馬^{とつ美}。私と、しない？」

「ガチでブツ飛ばすぞてめえ」

あー勞災に訴えたい。

14話 ぬ

眼が覚めた。

……すごく体がだるい。何だろ、今日はあの日じゃなかった筈なんだが、、、

確か今日は土曜日の筈。とりあえず母親が起こしにくるまで2度寝しておこう。そういえば今日は何か予定があったような、確かMFネットカフェにてアースフレンドで出会った皆と会う約束をしていて、そこで大道寺さん達と出会って話をして、異世界へ飛ばされて？ピンクオークと戦って？？致命傷を負って気絶して？？？夢だな。そんな非現実的なことが起こりうる訳が無い。とつと2度寝モードに突入しよう。

「んんん、社お……」

何故か隣から大道寺さんの声が聞こえる。落ち着け社、これは幻聴だ。ごろりと寝返りを打つついでに状況確認。結論から言うところはこの私の部屋ではない。部屋の天井はこんなに高くないし、壁も丸太造りではなかった筈だ。

そして何故か隣で大道寺さんが眠っている。しかも全裸。……嗚呼成程、夢だな、うん夢。こういう夢を見てるってことは私も結構溜まってるんだろな。やはりインターネット漬けの生活は心にも良くないんだよきっと。

さてそろそろ夢から醒めない。よくある話だときどき頬を抓れば痛みで眼が醒めるものだ。ゆめにつきの窓付きもそうだしえいっ！ おお痛い痛い。もっと強く抓らないと駄目なのか？ えいっ、えいっ！ オイ醒めろよ何故醒めない。まさか夢じゃないのか、これ現実なのか。

「あの、服はちゃんと着た方がいいと思うわよ？」

「えっ、ああああ！」

言われて改めて自分が素っ裸なのを思い出す。慌てて手で体を隠し、大道寺さんも裸な事に気付कि、駆け寄ろうとして掛け布団に足を取られすっ転んでしまった。

「いやー、社がこんなドジッ娘キャラ発揮するとは思わなんだ」

「もう琴目！……もう怪我は大丈夫そうね、はい服」

桜田さんに渡された服をあたふたと着る。ちなみにその服は2人が着ているような白い浴衣だ。帯を締め、ようやく冷静さが戻ってきたように感じる。そうこうしている内に大道寺さんが眼を醒ました。

大道寺さんは私に挨拶するとそのまま床に落ちていた浴衣を着始めた。裸を見られても気にしないとか、この人は意外と肝が据わっているのか？ 昨日はもっとオドオドしてたイメージだったんだけど。

「さてと、みんな起きたことだし朝御飯を食べましょう。詳しい話はリビングにいつてからね」

イマイチ調子が出ないがとりあえず腹が減っているので付いていくことにしよう。向かう途中で前を歩いている八丈さんと桜田さんのヒソヒソ話が聞こえてきた。

「（それにしても社さんと史さん、昨夜は激しかったわよね）」

「（あの2人、初めて見たときから何か妖しい雰囲気だったけどさ）」

「

とても引つかかる会話が聞こえてきたような。隣を見ると大道寺さんと目が合つてにつこりと微笑みかけてきた。微笑み返しながら2人の発言を頭で噛み砕いていく。え、激しかったって、それってその、エロゲ的なアレなのか？ まあいいけど。

リビングには生きた白装束の骸骨がいた。普通ならもつと仰天すべきなのだが何故こうも冷静で居られるのだろうか。きつと朝から色々あり過ぎたせいなのだろうな。

朝食を食べながら皆や骸骨から大体の話の流れを聞いていった。ここはアースフレンドの世界で私達はそこに召喚させられたこと。私が戦闘で怪我をしてこの建物に担ぎ込まれたこと。私達は勇者候補であること等々。そういや昨日、みんなでそんな話をしたようなまさか本当にそんな事態になるうとはな。

「勇者か。……まあいいけどな。それよりこの漬物美味しいね」
「そうじゃろそうじゃろ。何せ私は漬物石から拘っていてな、こいつは遥か北にある双壁山脈の」
「待て待て社」

話をしていると隣に座っていた琴目が割って入ってきた。

「本当にいいの？ 死ぬかもしれないよ」
「お金貰えるんだしいいんじゃないかな。死ななきゃいいんだし」
「アンタ死にそうになってたじゃん、。まあいいけどさ」

そして私達は骸骨と向き合った。

社「そういう訳だから、私は構わないよ。勿論お金は確実に支払ってね」

史「社さんがやるんだったら私もやる」

琴目「全くあんたらは。まあ、私も勇者やるけどね」

由美子「私も異論無しの方で」

皆の意見を聞くと、骸骨は満面の笑みでこう言い放った。（ちなみに、かなり不気味である）

「おお神よ！ここに新たな勇者達が誕生した。行け、そして世界を破滅に導く悪しき魔王を倒すのだ！」

「え、魔王って誰？」

「それは私も知らぬ」

「……本当、突っ込み所満載だな。あんたも、この世界も」
私もそう思います、八丈さん。

朝食を食べ終わり、私達は朝風呂に入ることになった。湯船に使ってのんびりしていると、左隣から八丈さんと桜田さんのヒソヒソ話が聞こえてきた。

「（昨日ベッドの上で汗掻いたから丁度良かったよ）」

「（そういえば、向こうのベッドも凄かったわね）」

右隣を見ると大道寺さんと目が合ってにつこりと微笑みかけてきた。微笑み返ししながら、あれさつきもこんなやり取りあったような。しかしこうやって改めて見るとみんな本当にゲームのキャラクタ

「みたいになってるな。色白だし、髪の毛はカラフルだし。湯船の中で自分の体を見ているが、昨日のピンクオークとの戦闘の傷跡は1つも残っていない。これもゲームの成せる業か。」

風呂から上がり、昨日の鎧兜に着替えて私達は小屋を後にした。骸骨に別れを告げ街へ向かう。目指すは森を抜けて西にすぐのアゲラダム城下町だ。

14話　ぬ（後書き）

後書きなんでどうでもいい話を1つ。

由美子「琴目ー、何か食べたいものある?」

琴目「うーん、コロッケとか」

由美子「えっ?」

琴目「いやだからコロッケ」

由美子「えっ?」

琴目「だからコロッケ!」

由美子「ああ炒飯ね。解ったわすぐ作る」

琴目「最初から決まってるのかよ!」

15話 母を訪ねて1240分（前書き）

あ、大事な話を言い忘れてた。

皆さんのパーティ名を今ここで作って下さい。

15話 母を訪ねて1240分

……綺麗だ。ただっ広い草原がこんなに感動出来るものだとは初めて知った。今までゲームでしか見たことのない風景だったが、この魅力は病み付きになるかも知れない。こう、何と云うか全てが美しいのだ。草も木も、沼の水を飲んでいる草食系モンスターも、彼らを虎視眈々と狙っている肉食系モンスターも、全てが懸命に生きているのだ。

この世界の創造主は子供の頃からの夢を具現化したかったのだろうか。見たい知りたい行きたいを刺激され今日も冒険者達は世界を旅する、そんな物語を創造主は望んでいるのかもしれない。その、冒険者達の役割を私達4人が演じるのではないか。

きつと、私達がこの世界に存在する意義はさほど重要ではないだろうと思う。創造主の目的は別に魔王を倒して欲しい訳でも世界を滅亡から救って欲しい訳でもなく、大事なのは私達が大いにこの冒険を楽しむことではないのだろうか。

……とまあ、そんなことを考えながらのんびり街に向かっているのだが。今私達が歩いているのは森と街を結ぶ石畳の街道だ。あの骸骨曰くモンスター達にもルールがあつて、基本的に街道の中にいる人間には襲い掛かつてはいけならしい。そういうわけで、私は思考に没頭しながら3人と歩くことが出来るのである。

「あ！ 忘れてた」

「由美子、どうしたの？」

「ドレッドノートさんに料理のレシピ訊くの忘れてた」

「……どのみち食材はこの世界のじゃねーか」

「お、街が見えてきた」

「ああ本当だ」

「距離は大体4250mといったところかな？」

「八丈さん。それ、適当だよね」

「うん」

「あの骸骨の人に、ちゃんとお礼が言えなかったな・・・」

「いいんだよ。どうせNPCなんだし」

「そのうちでいいんじゃないかしら」

「社さんは人が良すぎです」

「そ、そうかな？（3人とも表情が硬いんですけど、、？）」

皆と話をしながら街道を歩いていく。それにしてもいい風景。これがピクニックなら最高だったのだが。

「これがピクニックだったら最高なのになあ」

「ピクニック気分だと痛い目を見るんじゃない？」

「ちえー怒られた」

八丈さんのボヤきに鋭くツツコミを入れる桜田さん。これが親友同士の阿吽の呼吸というやつか。私がピクニックって言わなくてよかったよ。

ところで、私がさっきから気になっていることを口にしてみる。

「みんなどうして街に向かっているの？」

なんとなく付いていつているが私には良く分かっていないのだ。

「あれ、社さんは知らないのかしら？」

「そう言えば社は倒れてたんだっけ。今更だけど身体とか大丈夫な

の」

「平気だよ。心配が今更すぎる気がするけど」

「ゴメンゴメン。どうやら教会から元の世界に戻れるらしいんだよ」

みんなの話によると、教会で所定の手続きを取ればいつでも元の世界に帰ることが出来るそうだ。そしてこの世界に来るときには私達が持っているワープ石に祈りを捧げればいいらしい。

「いつでも戻れるってのは有難いわ。向こうにも生活があるんだし」「異世界召喚モノRPGお約束の懸念材料だからな。ちゃんと利用者の立場を考えてる点は評価できる」

「ところで、その所定の手続きって一体？」

「解らないけど、とりあえず行ってみよう」

みんなは私の把握していない情報を更に深く教えてくれた。武器防具、アイテム代などは全て自分で調達しなければならない。その為に必要なお金はクエストの攻略などをして整える必要がある。

基本的な通貨単位や物価などはゲーム設定に順守しているが、未アップデートのエリアに関してはその限りではない。魔法屋や訓練所でスキルを買うことは出来るが、私達にとってスキルの習得は極めて難しいので当分は関係無し。その他、解らないことは後で貰えるガイドブックを読み込んでくれとのことらしい。

「うわ、結構メンドくさそう」

「ちよっと待て。社は2つ返事でOKしてたよな」

「これ、クーリングオフとか無いのかな？」

「ある訳ねえよ」

「基本的な世界観は、オンラインで遊んだときと同じらしいわよ」

「『基本的』っていうフレーズが気になるんだよね。なんか裏があ

りそうでやな感じする」

「裏はあつて当然だろ。そこは甘んじるしかない」

「そんなもんかなあ。桜田さんはどう思う？」

「そういえば私、裏々の裏つて漫画を実況してる動画あるでしょ、この間ニコニコ動画で100万再生になった。凄く好きなのよね」

「あ、桜田さんも知ってるんだ。アレのシンクロ率は神だよね」

そんな話をしているうちにアゲラダム城下街に到着した。結構遠いと思っていたが話しながら歩いていたらいつの間にか到着してしまった。正直、自分がこんな人と会話するのが好きな人間だと思っていなかった。ずっと自分のことを孤立癖のある人間なのだと思っていたが本音ではずっと友達が欲しかったのかもしれない。大道寺さんと学校で話をするようになってから性格が変わってきたのかも。

そしてそんな大道寺さん達とこの世界を歩いているのだ。そう考えると、勇者の件も小粋な申し出のように感じなくもない。

門番に挨拶を交わし、南門から中に入っていく。あの骸骨の人と会話していたときも感じたが、この世界の人達は本当にリアルそのものだ。先程公園でベンチに座っている老夫婦に挨拶された時はドキッとしたものだ。

噴水広場を右に曲がり橋を越えて武器屋の向こう、そこに教会があった。見た目はPC画面上そのままだがやはり荘厳な雰囲気があるように感じる。2次元と3次元の差は中々感慨深い代物ではあるが、今はとにかく元の世界に戻ることが先決だ。扉を開け教会内部へと侵入する。広さは教室1つ半くらい。PC画面上で見るより若干広く感じる。

「あ、皆さんこっちですよー」

祭壇の方から若い男性の声が聞こえてきた。この声どつかで聞いたことあるぞ。

「あっ!!」

「手続きを行いますので壇上のほうにお上がり下さ、ゝゝ!!」
「社さん、どうしたの?」

いやあの、どうしたもこうしたも。

「兄さん!」

「社!」

私達兄妹は、数年ぶりに再会を果たしたのだった。にしても、仕事は選ぼうよ兄さん。

16話 over・blood・lovers(怒)

兄「どうも、社の兄貴の高杉 彰久あきひさです」

琴目「はあ、こちらこそ宜しくお願いします」

由美子「私は桜田です。こんにちはお兄さん」

社「でも兄さん、どうしてここに？」

昨日から驚きのしっぱなしだよ。突然異世界に召喚されてモンスターと戦って、朝起きたら全裸で骸骨が喋ってて、勇者を引き受けることになって教会には兄さんが働いていた。早苗さんもびつくりの奇跡コンボじゃないか。

背の高い兄は必然的に私達を見下ろすような形になる。結婚する前と比べて少し痩せたんじゃないだろうか。髪もボサボサで少し疲れた雰囲気を漂わせており、暫く会っていない間、奥さんと結構苦労していたのだろうと思わせる。

彰久「社こそどうしてここに居るんだ？ お前もこの仕事してるのか？」

社「うん、勇者」

彰久「え？」

とりあえず兄さんに私達がこの世界に召喚させられて、勇者にならないかと誘われ、それで対価をもらえることを条件にそれを引き受けたこと等を話した。兄さんは私の話を聞き終わった後、呆れた

顔で私にこう言った。

彰久「社は昔からそうだったよな。何でも適当に決めて、全部こなしちまうんだから。お前の才能がうらやましいよ」

社「それはいいとして。……どうしてここで働いてるの？」

どうしてもそこが気になる。兄さんもこの勇者騒動の一件に巻き込まれてしまったのだろうか。それはもしかして、私のせいで兄さんを巻き込んでしまったということなのだろうか。

彰久「ここ数年間不況だっただろ？」

社「うん、TVとかでよく言ってたけど」

彰久「で、3ヶ月くらい前に俺が働いてた会社が倒産しちゃったんだよ」

社「え、、、」

彰久「んで再就職しようと思んな会社受けまくってさ、最終的にこの世界で働かせてもらえた訳だよ」

由美子「この世界について、どうやって知ったんです？」

彰久「ああ、リクルートに載ってたんだ」

琴目「リクルート！？ それ質の悪い冗談とかだよな」

彰久「いやー本当なんだなこれが」

琴目「何故載せる、何故載せた、てゆうか何故応募しようとした！？」

彰久「お、落ち着いて、ね。俺も最初はビックリしたけどさ、実際に働いてみると凄く良い所なんだよ。労務管理とかしつかりしてるし社宅も付いてるし。そこらの中小企業よりよっぽど待遇いいんだって。なにより職場環境も緑いっぱい最高だしさ」

史「そういう問題では無い気がするんですが……」

由美子「まあ経済って、案外柔軟性が高いものだしね……」

琴目「経済で片付けるなよ。……社？ ほらしつかり」

すみません八丈さん、話を聞いてて頭がクラクラしてしまいました。いやもう、能天気な兄で本当に御免なさい。

久々の再会で積もる話もあったが、私達としては早く元の世界へと帰りたい。この世界で勇者を任された以上、兄さんと話をする機会は幾らでもあることだし、とっとと手続きとやらを済ませることにした。

まず人数分のパンフレットを渡された。ライトノベル位の厚さの本で、これだったら数日で内容を暗記出来そうな気がする。次に、私達の勇者になる意志を改めて問いかけられた。別に今止めてもいいと言われたが、考えを変えうる要因は現時点で存在しない。他の3人も同じようだ。

彰久「さてと、次にアンケートに答えて欲しいんだけど」

由美子「アンケート？」

彰久「まあ性格診断みたいなものかな」

アンケートの内容は多岐に渡った。私の生きがいとはと聞かれても正直良く解らない。人生の1番の思い出、強いて言うならこの世界に來たことかな。朝はご飯のときもあればトーストのときもある。そんな質問されても微妙だな。

休日は大体オンラインゲームをしていて、インターネット以外の趣味は漫画や深夜アニメを見ることが。そこまで答えていって、段々兄さんが呆れた顔の様に見えてきた。まあ私だけならともかく、みんな同じようなこと言ってるのは流石にね。なんてったって全員オタクなんだもん。

4人の馴れ初めと、何処でアースフレンドのことを知ったかについて。えーと、そういえばどうやってアースフレンドのことを知ったんだっけ？ まあ1年以上前のことは詳しく覚えてないし適当でいいだろう。

出会いは、確かゲームをやり始めてすぐにD「フィロソフィとフレンド登録して、その1週間後くらいに八方出と巫女と4人で一緒にクエスト攻略したんだっけ。その日からみんなと一気に仲良くなっただんだよな。

琴目「全部書き終わったよ、後なんかある？」

彰久「んじゃ最後に、チーム名とリーダーを決めてくれるかな？」

4人「え？」

なるほど、確かにそういうのがあったほうが管理しやすいよな。あーでもリーダーか。

由美子「琴目やってみたら？」

琴目「いやいや柄じゃないし！ 史とか適任じゃないかな」

史「私は社さん以外は認めません」

社「あ、え、えつと桜田さんどう？」

由美子「えーつと、琴目結構リーダーシップあるし」

琴目「無理無理無理！ そうだ、史落ち着いてていいと思うんだけど」

史「社さんは頭良くて強いし格好いいし！」

社「う、うーんと、琴目さんは何だか頼りになるし」

琴目「由美子は料理上手いし適任だって」

由美子「それ関係ないでしょ、琴目！」

史「社さんが最高に決まってます！」

社「あの、えつと、その」

彰久「ちよつと、あの、落ち着いて、ね」

兄さん、困らせて本当に御免なさい。だってリーダーとかマジ勘弁wwwだもん。……今朝からパロディ多すぎじゃないか私？

彰久「ま、まあリーダーは保留ということで、チーム名を考えてくれるかな？」

社「あ、チーム名は考えたんだけど、『向日葵の冒険者』ってどうだろ」

史「素敵だと思います！」

ありがとう大道寺さん。……実は上地雄輔さんから連想して適当に決めたなんて口が裂けても言えないな。

16話 over・blood・lovers(怒)(後書き)

次の話で第1章が終了予定です

十七話 綺麗な世界で

現在時刻PM12:14、後1分で4時限目の授業が終わって昼食タイムだ。目指すは期間限定のDX冷やし中華、2週間前からメニューに並べられたのだが、焼き豚とかが異様に美味しくてすぐに食堂NO.1の座にのし上がった。毎日早足で食堂に向かっているのだが到着する頃にはいつも完売してしまっている。既に席に着いて、美味そうに麺を啜る男子を何度睨みつけたことだろう。

今日こそは雪辱を成してやる。その思いで食堂に到着したがDXは今日も売り切れ。もしかして先に食べてる奴ら授業サボってるんじゃないだろうな？ 仕方が無いので焼き魚定食を注文。何となく麺類を頼んだら負けな気がしてならない。

大道寺さんは煮魚定食を、他の友達も似たようなメニューを頼んでいた。この学校は何故か魚系のメニューが多いので、魚が嫌いな生徒は3年間辛い思いをしなければならないだろう。そうか魚が嫌いだから冷やし中華を食べるのか、って我ながら下らない事を考えるものだ。

食事を受け取り、誰も座っていないエリアを探す。8人も居るから場所の確保が大変だ。友達が多いのは結構だけど、昼御飯をゆつくりと食べられないのは残念だ。最近は別クラスや上級生から話し掛けられることも多くなってきたが、果たして私にそこまでさせる要素が有るのかどうか疑問である。

一昨日、アースフレンドの教会で兄さんに言われたとおり手続き

を終えワイプ装置の中に足を踏み入れた。一瞬意識が飛び、気が付いたらMMFネットカフェで何事も無かったかのように4人で席に着いていた。腕時計に目をやる。現在時刻PM4:34、兄さんの言っていた通り出発してから時間は殆ど経過していないようだ。

もしかしたら、さっきまで異世界に居たのは夢だったのかもしれないと思った。だがポケットの中の黒い立方体の感触が、あれが現実なのだと強く認識させる。兄さんの説明曰く、目の前にかざして強く念じるとあっちの世界に引つ張り込まれてしまうらしいので下手に弄らないほうがいいだろう。

「戻った、のか？」

琴目さんが低い声で呟いた。今の彼女は昨日着ていた男の子っぽい服装で、決して現代忍者風の奇抜なデザインではない。他のみんなも普通の服装に戻っている。勿論髪の色もだ。大道寺さんの真っ赤な髪は似合っていると思うていたから少し残念ではある。

みんな疲れきっていて、とてもオフ会（そういえばそういう集まりだった）を続けられる様子ではない。全員で駅へ向かって方面の違う八丈さんと桜田さんと別れ、大道寺さんとは丸太橋高校の近くの彼女の自宅まで一緒に歩いていった。かくして私の初めての、そして一生忘れられない凄まじいオフ会は終了したのだった。

放課後、私は校門近くのベンチに座って小説を読んでいた。ここで大道寺さん達と待ち合わせしているのだが、さっきから回りからの視線が妙に気になる。本好きの根暗学生なら他に幾らでも居るだろうに何故そこまで私を注目するのだろうか？

さつきは馴れ馴れしい男子にケーキでも食べないかとしつこく誘われた。睨みつけて退散させてやったが同じようなのが何度も来られたら堪ったものじゃない。

とか考えてる内に3人同時に到着。この間は私服だったが制服姿の八丈さんと桜田さんもまた新鮮である。

「ゴメン社、委員会の仕事があつてさ」

「私も今来たところだよ」

「社さん、さつき男の子に告白されてたんじゃないの？」

「あれはそんなのじゃないよ……大道寺さん？」

「……………」

「えーと、とりあえず帰ろうか」

件のオフ会から1週間、私達は4人で帰宅することが多くなった。今まで1人で帰宅することが多かった私にとつてこの状況は快挙といえるだろう。それもこれもアースフレンドのお陰なのかな。思い返せば友達が増えたのもみんなと知り合えたのもきっかけは全部あのオンラインゲームだ。

ふと空を見上げる。夏の太陽は下校時刻になつてもまだ頭上でさんさんと輝き続けている。アースフレンドの世界で見た青空と一緒にだなあと思う。綺麗なものは何処にでもあるのだろう。それは今まで私が気付かなかっただけで、手を伸ばせば何時でも手に入れるものなのだろうか。大事なのは手を伸ばすこと。高校生にもなつてそんな単純なことにも気が付かなかつたとは、私もまだ未熟なものだ。

「綺麗な青空だな」

「アタシ達の心はこんなに穢れてるのにねえ」

「それを言ったらお仕舞いでしょくに」

みんなと別れ、暫くしてから家に到着。「ただいま」……返事が無い。辺りは不気味なほどに静まり返っている、ではなく置手紙から察するに明日の朝まで1人で過ごさなければならぬようだ。バスケットの中の林檎を取り出し一齧りして、私服に着替えて深呼吸。

よっしゃ行くか！ と気合を入れて机の引き出しから黒い立方体を取り出した。大道寺さんはもう向こうの世界に行ってるかな、八丈さんと桜田さんは電車を乗り継いで帰宅しているので少し遅くなるかも。

とりあえず先に行って待っていることにしようか。黒いそれを目の前にかざし、異世界の風景を思い浮かべる。

……私にとって非日常とは何かだって？ 解んないけど、楽しければそれでいいじゃないのかな。

十七話 綺麗な世界で（後書き）

後書き

はいどうも、作者のファン・ヒューリックです。確かこの名前はタイタニアから取ったんだっけ？ 掲示板ではキキって名乗ることが殆どです。こっちは魔導物語のキキーモラから拝借しました。個人的にはブラックキキーモラのほうが好きだったりします。あーコンパイル復活しなーかな。

まあせっかくなんで後書きつぱいこと適当に書いてみますか！

主人公の社は、こういう高校生って居るんじゃないの？ ってな感じの性格設定させてます。とにかく地味な女子高生をイメージして作り出しました。他の三人もそんな派手なキャラクターじゃないです。約1名病んでますけど。

んで、4人とも結構ブラックな要素持ち合わせています。今までは普通な感じですけど2章以降からどろどろした雰囲気になっていく予定です。ま、そんな暗い話にするつもりは無いですが。

最後に、ここまで読んでくれた読者の皆様に多大なる感謝を。宜しければ2章以降も付き合ってやって下さい。

箸休め（職業紹介？） <2枚イラスト有り！>（前書き）

アースフレンドで社達が就いているジョブの説明など。 無機質な
生活様に社&史のイラストを描いていただきました！ さらに琴
目&由美子のイラストも描いていただきました！

著休め（職業紹介？） <2枚イラスト有り！>

<追記>

無機質な生活様に高杉 社（左）&大道寺 史（右）のイラストを描いて頂きました。この場を借りてお礼を申し上げます！

> i 3 1 9 4 7 — 1 4 0 9 <

<さらに追記>

無機質な生活様に桜田 由美子（左）&八丈 琴目（右）のイラストまで描いて頂きました。本当にありがとうございます、感謝感激です！

> i 3 2 2 9 8 — 1 4 0 9 <

・ファイター

多様な武器防具を装備可能な戦闘のプロフェッショナル。数多くの近接技を習得し、僅かだが攻撃魔法と回復魔法も使うことが可能。但し上級スキルは全く使用出来ず優遇スキルも無い。入門職としての意味合いが強く、高レベルプレイヤーは殆ど別の職業に転職してしまう。現在、レベル100以上のファイターは社以外に存在しない。

職業特典：なし

パラメータ補正

HP	： + 2 %
MP	： - 2 %
攻撃	： + 3 %
守備	： + 3 %

器用	：	+ 3 %
精神	：	- 5 %
敏捷	：	- 5 %
スタミナ	：	+ 8 %

装備可能

武器	：	短剣、片手剣、槍、斧棍
楯	：	腕輪、盾
鎧	：	軽鎧、重鎧

・ソーサラー

強力な攻撃魔法を使いこなすゲーム内で随一のアタッカー。全ての攻撃魔法を使用可能で、また一部の回復魔法と状態異常魔法も使いこなす。MPが切れると途端に無力になることに注意。また打たれ弱いので1人旅には全く向いていない。クエスト攻略にはファイターやナイトとパーティを組む必要があるだろう。

職業特典：攻撃魔法使用時のMP消費量が2/3になる

パラメータ補正

HP	：	- 6 0 %
MP	：	+ 5 0 %
攻撃	：	- 7 0 %
守備	：	- 8 0 %
器用	：	- 4 0 %
精神	：	+ 5 0 %
敏捷	：	+ 5 %

スタミナ： - 10 %

装備可能

武器：短剣、杖

盾：腕輪、マジックアイテム

鎧：服

・ゲリラ

搦め手のスペシャリストで数多くの状態異常攻撃を習得することが出来、モンスターの集団を一気に無力化することも可能。がこのジョブの致命的欠陥は直接ダメージを与える技が毒斬り（ダメージ小）しか無く、またパラメータ補正も非常に厳しいこと。更に状態異常攻撃も敵のステータス等の情報を網羅していないと全く活用できない。公式で地雷扱いされているジョブだが、琴目はその限りでない。

職業特典：地形ダメージを2 / 3 に抑える

パラメータ補正

HP	：	-	25 %
MP	：	-	40 %
攻撃	：	-	30 %
守備	：	-	30 %
器用	：	+	50 %
精神	：	-	20 %
敏捷	：	+	30 %
スタミナ	：	+	40 %

装備可能

武器：短剣、暗器

盾：全て不可（二刀流）

鎧：服、軽鎧

・プリースト

多くの回復魔法を使用可能で一部の攻撃魔法も使える。また物理攻撃の技も幅広く習得可能。能力値も悪くなくどんな場面でも安定した強さを発揮することが出来る。最も一人旅に向けたキャラクターであり、またその性能の高さから様々なパーティから引つ張りだこで引き抜かれている。唯一の弱点はスタミナが極端に低いこと。

職業特典：回復魔法使用時のMP消費量が2/3になる

パラメータ補正

HP	： - 20 %
MP	： + 30 %
攻撃	： - 10 %
守備	： ± 0 %
器用	： - 10 %
精神	： + 25 %
敏捷	： - 20 %
スタミナ	： - 40 %

装備可能

武器：短剣、杖、弓、槍

楯 : 腕輪、マジックアイテム
鎧 : 服

・商人

生産系ジョブが作り出したアイテムを纏めて買い取り、露天商にて売り払うことを目的としたジョブ。能力値は低めだが、商人特有のユニークな攻撃技を持っていることが特徴。職業の性質上、様々なプレイヤーからの情報が集まり、一部の商人ユーザーは非公開のゲーム情報も数多く入手しているという噂もある。

職業特典：ゲーム内の為替相場を確認できる

パラメータ補正

HP	: - 5 %
MP	: - 2 0 %
攻撃	: - 1 0 %
守備	: + 5 %
器用	: ± 0 %
精神	: - 1 0 %
敏捷	: - 2 0 %
スタミナ	: ± 0 %

装備可能

武器：短剣、片手剣、弓、ブーメラン

楯 : 腕輪

鎧 : 服、軽鎧（一部）

その他含め、合計で17のジョブがゲーム内に存在している。

箸休め（職業紹介？） <2枚イラスト有り！>（後書き）

補足説明

・パラメータについて

器用は武器攻撃のダメージ、クリティカルヒット率、命中率などに一部影響。

スタミナは切れると行動が一時停止してしまう。じっとしていると徐々に回復し、戦闘中に0になると行動不能になり一方的にダメージを受けてしまう。

・職業について

ゲームを始めてからすぐに就職が可能。転職も可能だがペナルティがある。

<第二章> 十八話 物語の三叉路（前書き）

まったりのんびり第二章スタートです。

注意・・・今後は男性キャラクターを増やし、さらに男女の恋愛要素も含ませていく予定です。ガールズラブ要素を強く求める人は注意して読んで下さい。

<第二章> 十八話 物語の三叉路

やあやあ諸君おはこんばんちは、早速だけど僕の紹介をしようか。僕の名前は大江戸^{おおえど} 亜矢^{あや}、丸太橋高校2年E組で新聞部に所属してるんだ。ちなみに僕は学年で1番運動神経がよくて去年のマラソン大会は並み居る運動部の連中を抑えてブツ切りの優勝だったんだよ。残念なことに学校NO.1じゃないんだけどね。だって1年生にチートな女子が何人か居るんだもん。

ああ、ちなみにイケメンで成績優秀で運動神経抜群の僕と付き合いいたい女子は下駄箱にラブレターを入れること。僕はこの告白方法がジャスティスだと思ってるから他の方法は不可ね。携帯メールとかマジ有り得ないと思ってるから。

んでそんな僕は今、我ら丸太橋高校生が誇る丸太橋体育館の裏のベンチに座ってハトさんにパンの残りを恵んでやっているのである。こーいう時間は暇で暇でしょうがないね本当。

新聞記者は読者に真実を伝えるために常に最新の情報を追いかけて駆けずり回り続ける必要がある、なのに何で己の存在意義を真つ向から否定するような行為をとっているのか諸君は気になるだろうか。教えよう。僕の隣でラブレターを握り締めて震えているのはクラスメイトの坂上^{さかがみ} 大介^{だいすけ}くん。彼はある1年生の女子に好意を寄せていて、ここにその娘を呼び出して告白する気らしいんだよ。僕は彼を勇気付ける為に傍に居てあげてるのさ。勿論このことは学内新聞のネタにするつもりなんだけどね。

そんな訳で彼と一緒に待っててあげてるんだけどさ、もう、もう、もう！

「暇だーーーーっ！！！！！！」

「うるさい」

僕の声に驚いたハトさん達は驚いて飛んでいつちゃった。あいつら恩返しに来ないかなー。まあそんなのどうだっていいけどさ、それよりも！

「だって暇なんだもん。僕はじっとしてるのが嫌いなんだい！」

「お前が取材で付いてくるって言ったんじゃねえか」

「そうだよ取材だよ！ ウキーツ、早くきやがれ高杉！」

「オイ落ち着けて」

坂上の奴が30分も前に待ち合わせ場所にやってきたお陰で僕もじっとしてなくちゃならない。前述の通り僕は同じ場所にずっと居続けるのは生理的にアウトなんだ。どうせだったら高杉も30分前にやってきてくれたらいいのにそうはいかない。もうハトに餌をやるのも蟻の行列を眺めるのにも飽きちゃった。彼女は時間にはキツチリしているというデータがあるのにどういう了見だこれは。この30分間で見つけられる筈だったネタを返せってんだコンチクショ！。

……まあ暇だし、こいつに取材を試みますか。適当に。

「ところでさー、坂上は高杉のどこが好きなの？」

「えっ？」

「好きになつた理由とかあるじゃん」

「そのまあ、高杉って美人だし、スタイルいいし、なんか可愛いしさ」

「へー」

つまんねえ人間だな。こいつも高杉に惚れたのはあの一件以降だよ。とりあえず記事には、坂上は高杉に悩殺されたという方向で書いてこう。

とか何とか話してる間に件の高杉 社が御到着。 現在時刻は待ち
合わせタイムの約 10 分前。 あらあら見事な横綱出勤でありんすな
あ。 モテモテ女の貫禄って奴？

隣では坂上がガツガツに固まつてゐる。おーおー結果が明らかだつてのに御苦労なこつた。

「あつ、あの高杉さん！」

「はい」

そのの彼氏候補、お前見下されてるけどいいのか。まあ高杉は長身だから仕方ないか。はてさて、坂上は一体どんな告白に持つていくのでしょうか？

まずは世間話で場を和ませる。

？場所を移動する。

いきなりガチ告白。

？その他。大体は？を選ぶんだろうけど個人的には是非？を見てみたい！ さあどうする坂上 大介16歳！

「俺と付き合ってください！」

「キターーーーー！！！！！！」　まさかの大穴にボルテージ急上昇！　これだから対岸の火事は楽しいんだよね。

「ごめんなさい」

wwwwww | | | | | ! ! ! ! ! !
 フラれた | | | | | ! ! ! ! ! !

わが親友の初恋は見事に玉砕だ

ま、結果は統計的に見て明らかだったんだけどね。この2週間で13人の男子をつってる女に告白とかどうかしてると思ったよホント。

用件を伝えた後はさつさと帰っちゃう高杉 社。跡に残されたのはむさくるしい男2人。こういうときは男の友情で慰めてやるのが一番いいんだよな。よし！

「ねえどんな気持ちねえどんな気持ち！！」

「五月蠅え」

「ねえこれから行くバスケット部の練習をどんな気持ちで臨むの？ ねえどんな気持ち、NDK！ NDK！」

「言っとくけどまだ諦めた訳じゃないからな。もう一回告白するぜ」

あら往生際の悪い男。ていうか普通は友達になって下さいからスタートじゃないの？ イキナリ付き合ってくれて言われても女の子困るでしょーに。まっ、教えてあげるつもりは無いけどね

「んじゃ俺、部活に行くけどお前どうすんの？」

「僕はここでのんびりしてくかな」

「じっとしてるの嫌いじゃねーのかよ、、、じゃまたな」

そう言つて坂上は体育館に入つていった。残された僕はポケットから取り出した写真の女の子達をしばらく眺めていた。1人はさつきここにいた高杉 社。戸惑いながらも、どこか楽しげな表情がそこにあった。

「楽しい取材になるといいねえ」

そろそろ移動するでしょうか。何てったって新聞記者は1秒を争

う職業なんだからボーっとしてる暇なんか無いんだよ。

<第二章> 十八話 物語の三叉路（後書き）

冒頭でも書きましたが男性キャラとの絡みを見たくない人には本当に申し訳ない気持ちです。二章以降も温かい目で付き合っていていただけると幸いです。

十九話 唄わないという選択もありだと思っけど

「おいコラ。後10分なんだから集中しやがれ」

数学教師の注意が教室に鳴り響く。現在、6時限目の数学Aの授業はタイムリミットを迎えつつある。私自身はそういう傾向は無いのだが高校生は昼食休憩後の授業で眠りこけてしまうものらしい、特に男子。みんな、私を成績優秀と祀りあげているが、学ぶことを放棄している連中が多いという事態が問題ではないかと最近考えている。

とか思ってる内に終業のチャイムが鳴り響く。その途端皆ぞろぞろと顔を上げた。やれやれと首をかしげる数学教師。さぞ大変でしょう、心中お察し致します。なし崩し的にHRへと移行していく。ちなみに例の数学教師は我々のクラスの担任でもある。緑のポロシャツを着た若い男性教諭は必要事項を伝えると早々に職員室に戻っていった。

さて。部活がある人達はこれから精を出してもらって結構だが、帰宅部の人間の使命は文字通り家に帰ることにある。更に言えばその過程も、友達と仲良く喋りながらであるとなお良い。そういう訳で、隣の席に座っている一番の友達に私は声を掛けた。

「大道寺さん、一緒に帰ろう」

「あっう、うん」

アースフレンドの一件以降、大道寺さんとは更に仲良くなった。ただ彼女はいつも怯えている様子であり、会話をするときもすごく辛そうに見える。以前彼女は自分が極度の人見知りであることを私達に告白してくれた。けれども4人で何かする時はとてもものびのび

としているように見え、そんな彼女を微笑ましくも思っている。

教室を出て、一緒に校門の近くのベンチで八丈さんと桜田さんを待つことにした。何度も好奇の目で見られるがいつもの事と割り切ることにする。もしナンパする奴が来たら激しく睨みつけてやろう。大道寺さんまで巻き込むようだったら実力行使で対応してやる。

ふと文庫本から目を上げると私達にずんずん近づいてくる人を発見した。どうやら女子生徒のようだが。ジャージの色から3年生であると推測出来る。ショートカットの彼女は私達の前で立ち止まった。

「せ、先輩」

「史つてば、最近部活に来てくれなかったから寂しかったんだぞ」

そう言いながら大道寺さんにすり寄っていく。大道寺さんはいつもと変わらない無表情だが、それなりの仲である私には彼女がとても不機嫌な状態であることが把握出来る。先輩を引き剥がしさつと間合いを取る大道寺さん。

「この人は部活の先輩」

「私は大蔵 おおくら 真澄 ますみよ」

大蔵さんはそういつて握手を求めてきた。それに応じようとしたら彼女はするりと体をひねり、懷に飛び込むと私を思い切り抱きしめた。

「社ちゃんだよね。宜しく」

「！？、宜しくです」

「ところでさ、社は陸上興味ある？」

いきなり抱きすくめられて混乱した頭に先輩の言葉が響いてくる。興味が無いと何度も伝えたが先輩はどんどん私達をグラウンドへと連れ込んでいく。そういえば大道寺さんも半強制的に入部させられたと言っていたがこういう事情だったのか、実に鬱陶しいかぎりである。

「んじゃ、とりあえず100m走ってみてねー」

……今の状況をどう表現すべきか非常に困っている。ひとまず出来事を順序立てることにしようか。

グラウンドに強制召喚させられ、仕方なく体操服に着替えることになった私は軽い準備運動とランニングの後にこうしてスタート台に立たされてしまった。……流れを要約するところなる。文章にすると簡潔だが実際は結構めまぐるしいものであった。

入学したその日から何度も部活勧誘を受け、アースフレンドに凝っていた私はその度に誘いを断ってきた。自身の運動能力は同年代女子と比べて高いことは自覚していたが、それを部活で発揮しようという発想は当時も今も存在しない。

入学してから1ヶ月で勧誘は0となった。皆自身の活動で精一杯で、やる気の無い下級生などに構ってなどいられないのである。何度か入部を断ってきた私を先輩達は恨んでいたと思っていたが、陸上部に限っては未だに私を諦めることは無かった様である。

さて適当に走ってみますか。正直やる気は無いのでささと切り上げたい。現在時刻はPM4:31。午後5時までに学校を出られたいと思うのだが。

「位置について、よいドン！」

走り込みながら考える、八丈さんと桜田さんはどうしているだろうか。おそらく既に2人とも帰宅しているだろうが、果たして約束を破った私達を怒っているだろうか。この件に関しては不可抗力であるゆえ許して欲しい。

とか考えているうちに100mを走破。さて、一応記録を確認しておこうか。

「うう嘘、9秒58!？」

「えっマジで!？」

「今弾丸みたいだったわよあの娘」

9秒58とな。何だか皆、妙に騒いでいる様子だけどそんなに凄い記録なのだろうか？ 隣を見ると大道寺さんも口をあぐりさせているではないか。ちよつと待てよ、確か現在の100m走の世界記録は2009年のウサイン・ボルトさんの9秒58だったよな。あ、もしかしてタイ記録出ちゃった？

これは確かに凄い事態だなー、とか考えてたら陸上部員達が私に向かつて一斉に駆け寄ってきた。満面の笑みで目には好奇の眼差し、大体どういう発言をするかは想像出来る。

「今すぐ陸上部に入ろう！ 高杉さんなら丸太橋のエースになれるって！」

「いやいやオリンピックに行けるって、無茶苦茶凄かったし！」

「その才能活かさなきゃ！ 帰宅部なんて勿体無い！」

「いやもう担任の先生に話そう、高杉を私らに下さいって！」

「この壺を買えばあなたは幸せになれるですよ」

うわ何か物凄いことになってる。約1名悪徳商法に手を染めた方がいらつしやるのはご愛嬌か。どんな状況でも軽口が叩ける人間というのは個人的に嫌いではない。まあそれはともかく、ここは私の意志をきっぱりと宣言しておく必要があるだろう。

「すみませんが陸上部に入部するつもりはありません。急いでいるのでこれで失礼します」

さて私の意志は伝えたぞ、大変なのはここからだ。

「いや入ろうよ、勿体無いつて考え直して」

「高校3年間、何もしないで過ごすのはよくないって」

「先ずは入ってから考えようよ」

「とにかく入部しよう」

「掛け軸を買いましょう」

予想通りの大ブーイングだ。さっきから色々売りつけようとする人は誰だと思い、確認したところジャージの色からして2年生、坊主頭で眼鏡を掛けている男子である。どうしてくれる、貴方のせいでちよつと心が揺れ動いてしまったではないか。

それは置いといて、今は三十六計逃げるに如かず。「すみません失礼します」と言いながら先輩達の間を潜り抜けてその場を離れる。9秒58のスピードで走り出せば追いつくことは不可能だろう。軽く先輩達を撒いた後で陸上部の部室に置いてきた制服や鞆を回収。面倒なので体操服の上から制服を着て部室を後に。

時計を見ると現在時刻PM4:49、予定の午後5時までには何とか帰る事が出来そうだ。大道寺さんには悪いが先に帰ることにしよう。この後の大道寺さんが少し心配である。私と深い友達であるという理由で責められたりしていなければ良いのだが。

歩いていてふと顔を上げると校門近くのベンチに男子生徒が座っていた。どこかで見たことがあるような気がするが思い出せない。その男子は私に気が付くと立ち上がった。こう言った。

「取材させてもらってもいいかな、高杉さん」

二十話 黒狐の翼

「日本のマスメディアは死んでいる!」

「はあ、そうですか」

その男子の声は大きく、そして澄んだものだった。

「今やマスメディアは権力に金で懐柔された犬畜生共だ。国民に真実を話すことを放棄した、記者の風上にも置けない屑共だ。まさしく、ジャーナリズムの崩壊だと思わないかい？」

「まあ、そういう話はよく聞きますが」

「貴女もそう思うか。考えても見てくれ、日本国民の中で年次改革要望書という言葉とその内容を知る人間がどれだけ居る？ 腐った金持ち連中がどんな豪華な生活を送っているか、金の無い人間がどんな悲惨な末路を迎えるか、それらをマスメディアは全力で伝える義務がある! 今の日本にはその心意気が圧倒的に足りない!」

「はあ」

「僕は無冠の帝王となり、この腐った日本を変えるんだ。国民があととあらゆる情報を持つことが、世界を救う全てへと繋がるんだ。その為に僕は努力を惜しまない」

「……」

「まあそれはいいとして、取材させてもらってもいいかな？ いいよね？」

その男子は随分と背が高かった。立ち上がった彼の顔を見る為に顔を上に向けなければならぬ。身長は大体180cm以上くらいとはいえ兄さんのようにひよる長いわけではなく、全体的に肉付きがよい体育会系タイプである。

顔はいわゆるイケメンの部類に入るものと思われる。ずっとニヤ

ニヤとしまらない表情を浮かべているのだが、不思議とそれが嫌味に感じない。すらりと長い足といい外見だけなら彼がモテる要素は十分に有る。但し中身の評価はシビアにならざるを得ない。素晴らしい職業哲学は尊敬に値するが、初対面の人間に会うなりそれを喋りまくるのはいかなものかと思う。

「取材はともかく、名前を聞かせて頂いてもいいですか？」

「まだ言ってなかったっけ？」

「ええ」

普通はまず最初に名乗るものだろう。彼の判断基準が掴めない。

「僕の名前は僕の名前は大江戸^{おおえど} 亜矢^{あや}、2年E組で新聞部に所属してるんだ。」

「新聞部ですが。確か入部部員が少なくて大変だと聞きましたけど」「それはもう大変ですとも。あつ、よかったら入部してくれない？」

「お断りします」

「残念。ああ、ちなみに僕と付き合いたい場合は下駄箱にラブレターを入れること。この告白方法がジャスティスだと思ってるから他の方法は不可ね。携帯メールとか全然詰まんないし」

「トリビアとして記憶しておきます」

すごく変わった人だな。立て板に水という諺があるけど、こんなに舌を回せる人を今まで見たことがない。度が過ぎるとうざくなるんだけど、気分を悪くされても嫌なので黙っておこう。

「取材は別に構いませんが、出来るだけ簡潔にお願いします」

「話には聞いてたけど、やっぱりクールな感じだね。んじゃ早速、ズバリ高杉さんはモテてるよね」

「客観的に見ればそうかもしれませんが、個人的には迷惑してま

す」

何故かここ2週間、男子から学年問わず告白され続けている。自分の顔やスタイルが良いのはある程度自覚しているが、実際他にも魅力的な女子は幾らでもいる筈なのに。お陰で貴重な休憩時間や放課後を浪費しなければならない。更に告白してくる男子達は直情的で、いきなり恋愛関係を迫ってきて何度断っても食い下がる危険人物ばかりだ。そんなことが続いたせいで最近は男子全体に軽い不快感がある。

その不快である心情を彼に伝えた。出来るだけ客観的で軽い話になるように。

「噂には聞いてるけど、結構酷い状況なんだね」

「解ってくれて嬉しいです」

「うちのクラスの男子も君の事で盛り上がってたりするよ」

「もっと他のことに目を向けるべきだと伝えて下さい」

私の注目もブームが過ぎれば無くなっていく筈。早く別の人気者が現れて欲しいものだ。

「んじゃインタビュー変えるけど、好みのタイプっている？」

「恋愛自体に興味が無いので殆ど考えないです」

「用意したほうがいいと思うよ。振る理由付けになるし」

「強いて言うなら、落ち着いてて周りを楽しくしてくれる人かな。それで付き合うかどうかは別問題ですが」

「好きな人とかはいる？」

「そういう男子はいないですね」

高校生の楽しみはそれこそ無限大だ。部活や勉強に勤しんだり、2chやニコニコ動画にのめり込んだり、美少女ゲームやBLが好

きだったり、異世界で仲間と勇者をしたりなど。とはいえ年頃の女子高生なら恋愛の1つや2つ懂れるものなのだろうが、現在の私にその傾向は無い。

「じゃあ次は、最近の趣味について教えてくれないかな」

さてどうしようか。ゲームと言いたいところだがアースフレンドのことを第3者に知られたくない。ここは適当にはぐらかすことにしよう。

「小説とか読んでますね。好きなジャンルはSFかな」

「高杉さんは運動神経がいいけど、何かスポーツとかやってたりするかな」

「特には無いかな」

プライベートに突っ込んだ話になってきた。ここいらが潮時か、そう思っていたら大道寺さんがこっちにやって来た。

「友達が来たのでそろそろ失礼します」

「その娘にも取材させて欲しいなあ、ちょこっただけ」
「駄目です」

彼が腕を掴んだ。わたしはそれを軽く払うと大道寺さんのほうに走っていった。

「先輩、失礼します」

「付き合わせちゃってゴメンね」

「社さん、さっきの人は誰？」

「新聞部の取材だってさ」

「フーン」

こういう会話はすごく落ち着く。やっぱり友達と喋りながらの帰宅は楽しいものだ。

「それより、陸上部はどうだった？ 大道寺さんに任せちゃってゴメンね」

「部員みんな諦めてないから、覚悟したほうがいいかも」

「明日から大変そうかな。……ねえ、史ちゃん」

「えっ？」

「史ちゃんって呼んでいいかな」

「いいよ、社ちゃん！」

下の名前でちゃん付け……って結構恥ずかしいなあ。ちょっと照れちゃう。

大江戸 亜矢は自分の震える手を見つめていた。

社を引き止めるため亜矢は彼女の腕をかなり強く掴んだ。が、まるで摩擦がゼロであるかのようにするりと手をすり抜けてしまった。それは常人離れた動作だった。

震える右手を押さえ亜矢はベンチに座り込む。何故だがどっと汗

が吹き出てくる。

「わー、楽しくなりそう」

その表情は硬く、何か決心しているように感じられた。

二十一話 息抜きしたっていいじゃない

「お昼食べよ、史ちゃん」

「社ちゃんはお弁当？」

「うん、昨日の野菜炒め詰めてきたの」

今は丁度4時限目の授業が終了したところ。これから2人で、食堂で昼食を食べに行くのだ。ところで私は最近、自炊に凝っていて毎朝早起きして弁当を作っている。学校のメニューを頼むより安く済むのでどんどんお金が溜まって嬉しい。別に守銭奴というわけではないが、財布の中身が潤っていく光景にいい頼が緩んでしまう。

それから4日前に、ようやくありつけたDX冷やし中華の味が、実はイマイチだったのも理由の1つだ。みんなが行列を作っていたのが不思議でならない。所詮は学生食堂クオリティか、あれだったら私が作った冷やし中華のほうが断然美味しい。

まあそれはともかく、食堂に着いた私達は空いている席を探し始めた。ちなみに史ちゃんも弁当を持ってきている。周りを見渡すと見知った顔を発見した。

「桜田さんと八丈さん！」

「んっ、社と史ここ座る？」

「うん」

2人は窓際の席で持参した弁当を食べている。私達は向かいの席に座って食べることにした。今日は学校で会うことが出来たし、昨日の非礼を詫びるいいチャンスだと思う。

「昨日は何ですぐ帰っちゃったのさ」

「ゴメン、昨日は忙しくてさ」

あれはもはや運命の嫌がらせとしか言いようが無い。陸上部やら新聞記者の取材やらを振り切ったりしたせいで帰宅が大幅に遅れてしまい、ようやく家に着いたら両親が家族揃ってディナーを食べに行こうと言いだしたのだ。しかも今すぐ。そんな訳で慌てて制服からフォーマルウェアに着替えて、その合間にINして用件だけ伝えて帰ってしまったのだ。

私の両親は家族全員で何かをする際、子供に相談するという発想が全く思い浮かばないという難儀な性質がある。今後は何処に行く時はまず私に伝えてくれと頼み、自宅に戻ったのは夜の9時頃。こんな体たらくで本当に勇者が務まるのか疑問である。

昨日の出来事を伝えると、みんなから社らしいと言われた。不可抗力に私らしさを見出せるものかについては甚だ疑問である。で、そんなこんなで4人で昼御飯を食べ始めた。

「社ちゃん、ポテトサラダ貰ってもいい？」

「いいよ。変わりにサトイモの煮付け頂戴」

「美味しい！」

「マジ？ 私もポテサラ頂戴。……美味っ！」

「社さんって料理美味しいのね」

手前味噌で悪いが私が作った弁当は食堂のメニューより断然美味しい。1品1品丁寧に作ってあるのだから大量生産の学生食堂などに劣るはずが無い。それだけでなく調理部の八丈さんと桜田さんからも折り紙つきを貰った。これは快挙といってもいいのではないか。

「桜田さんのハンバーグも貰っていい？」

「いいわよ。はいアーン」

「アーン。あっ美味しい」

「やった！」

「アタシらも調理部の意地見せとかなないとね。そうだ、2人とも調理部入んない？ 歓迎するよ」

「どうしよかなー」

調理部が、悪くないかも。部活で思い出したけど今日はまだ陸上部からの誘いが来ていない。今後も平穩無事で済めばいいのだが果たして。

ところで史ちゃん？ その、何かさつき貰ったサトイモの煮付けが、何だかすっごくユニークな味付けだったけど、いやまあ本人目の前にして言うべきではないかな？

「ところでさ、アースフレンドで話あるんだけどいいかな？」

「え、何？」

もぐもぐしながら聞き返す。ハンバーグの肉汁にサトイモの煮付けの砂っぽいザラザラした感触が合わさり口の中で実にユニークな状況を醸し出している。……これ以上の描写は勘弁して頂きたい。何で煮付けが砂の感触なんだ？

「どしたの社」

「ウウン何デモ無イヨ？」

「突っ込みたいのを我慢して、まあここ暫くずっとアゲラダムの中歩き回ってたじゃん」

「ゴクン。……そういえば。建物とかゲームしてたときとそっくりそのままだったよね」

「正確には違うよ」

「え？」

八丈さんの言葉に私は思わず聞き返した。

「一部の建物は敷地面積や間取りが異なってた。おそらく実際に建築する際、ゲーム内の設定を完全に再現することが出来なかったんじゃないかと思うよ」

「そうなんだ？」

「ここ10日ほどずっとそういう調査やってたんだから。アタシそういうスパイみたいな自信あるの。んで、ついでにアゲラダムの面積なんだけど、アタシの見立てでは大体15km?くらい。丸太町の1.5倍くらいの広さはあると思うよ。城の面積は2km?くらい。建物は139棟」

「伊能忠敬？」

「その突っ込みは想定外だな」

今、何だか物凄い神発言を聞いてしまったような。というか私、放課後ピクニツクのつもりで毎日INしてたんだけど。

「もしかして八丈さんってTAS？」

「その発想は無かったわ。……えっと何だっけ？」

「クエストを受けるって話でしょ、琴目ってば脱線しすぎ！」

桜田さんが横からフォローを入れる。

「色々見て回ったし、そろそろクエストを受けようかって琴目と話してたの」

「え、どんなクエスト？」

「『魔法屋さんの悩み』ってクエストあったでしょ？ 初心者向けだから私達でも大丈夫かなって」

確か魔法屋の主人が、倉庫に住み着いた魔物に手を焼いててそいつを退治してくれて内容で、最終的にその魔物と主人は仲良くなつて終わりだったっけ。

「オツケー、んじゃ今日早速いつてみよ」

「……………」

「え、どうしたの？」

「社、本当にいいの？」

桜田さんが聞き返してきた。八丈さんと史ちゃんも私を心配そうに見つめている。え、どういう意味？　って、ああそういうこと。

「あそこのモンスターはピンクオークより弱いから大丈夫だって。魔物のボスだって、戦い回避すればいい訳だし」

「だけど……………」

「要は怪我する前に倒せばいいんだから。まっ、私は戦士だから平気だよ」

「なんか社にだけ負担かけてすまないなって気になるの」

「もうみんな暗いつて。気楽にいこうよ」

まるで出征前夜じゃないか。大体私、怪我する予定ないし。

とか何とか言ってるうちに昼休みも残り僅か。弁当箱を片付けて、私達はそれぞれのクラスへと戻っていく。八丈さんと桜田さんは食堂を出てからも私のことを心配してくれた。だから出征前夜じゃないってば。

クラスに戻ってきた。史ちゃんもずっと心配そうな顔だ。よし、ここは1つ元気付けてあげよう。

「ふゝみちゃん」

「ひゃあっ!？」

いやそんな驚かなくても。大蔵先輩おおくひを見習ってハグをしてみたんだけど失敗だったかな。まあいいや、もうすぐ5時間目が始まるし、

席に着かなきゃ。

楽しみだなー今日のクエスト。
てないで早く席に着きなよ。

……って史ちゃん、ボーっとし

軽く柔軟体操で体をほぐし初めてのクエストに備えている。今、私がいるのは高杉家の自分の部屋。これから例のワープ石を使って、アースフレンドの世界に向かう所存である。

さて繰り返すが、私は今回のクエストで怪我をするつもりは毛頭ない。先日のピンクオーク戦で醜態を演じてしまった原因は、私に戦闘行為の心得が全く備わっていなかったことに尽きる。私は今回のようなクエストの為に、図書館やインターネット等で喧嘩や白兵戦に必要な要素を頭に叩き込んできた。元々私は運動能力全般に自信があるし、まあ大丈夫だろう。

……樂觀的に過ぎるんじゃないかと我ながら思う。だからどうという訳ではないが、史ちゃん達が心配するのも道理かな。

ワープ石に意識を集中させる。ふっと意識が逸れた感覚の後に、自室の白い壁紙がぐにやりと歪みアゲラダムの教会へと移動する。辺りを見回す、私の身近な人影を発見。

「兄さん！」

「社、そろそろ来る頃だと思ってたよ」

ここにくると大抵は兄さんが出迎えてくれるのだ。私は兄さんに駆け寄って胸元へと飛び込んでいった。昔はそれほど親しいわけではなかったが、最近ばかりと兄さんに依存している部分もあるかもしれない。流石にこの姿は恥ずかしくてみんなには見せられないな。

「兄さん、今日はクッキー焼いてきたんだ」

「あっ、いつもありがとう」

「後で食べてね。ほらみんな着ちやうからしまっしてしまっして」

「はは、ゴメンゴメン」

とかやってる内に教会の中に青い光が進る。慌ててクツキー袋を兄さんの鞆へと押し込んだのと、光が消えて八丈さんが現れたのはほぼ同時だった。今日の彼女は全身黒タイツの要所要所を金属で強化したものを纏っていて、スレンダーな彼女の体格をより洗練に際立たせている。

「あきひさ彰久さんこんにちは」

「やあ。他の皆はもうすぐ来るのかな？」

「多分もうすぐだと思つよ。んでクエスト関連で相談あるんだけど」
「なにになに？」

兄さんとなにやら話を始める八丈さん。内容は想像が付くが、別にそんなに近づいて話さなければいけないことはないのでは？ 兄さんももう少し嫌な表情をすればいいのに。

ところで私は八丈さんの蒼い髪を非常に羨ましく思っている。史ちゃんと桜田さんもそうだが、みんな髪の毛がゲームのキャラクターのようにカラフルでとても綺麗なのだ。それに引き換え、私はこっちに来て黒髪のまま。別にそれによって何かしらの弊害が発生する訳ではないが、何となく残念である。

「他のみんなはいつ来るかな？」

「まあソロソロなんじゃない？」

アースフレンドの世界では時間の進み方が特殊であり、こっちで1日過ごしても現実では4分くらいしか経過しない。それだと逆に現実からこっちに来る際、数秒のログイン時間のズレが大きく影響しそつなのだが別にそういうことも無い。

そつという超科学理論はどうでもいいとして、実は前々から気にな

っていることがある。普段の八丈さんってどんな感じなんだろう。桜田さんと一緒にイメージしか思い浮かばないや。

「その格好あのキャラクターに似てない？ ほら、あの、何だっけ」

「一応『執事と伯爵』の坦懷たんかいを少しイメージしてるんだけどさ」

「あのアニメ一期で切っちゃったからよく解んないんだよね」

「えー！ 執事と伯爵は面白いから見るべきだっけ」

「そっかな。八丈さんはアニメのDVDとか買うの？」

「気に入った奴はね。みんなソロソロ来るかな？」

八丈さんプライベート関連になるとお茶を濁すんだよね。深い所まで踏み入るつもりは無いけど勇者仲間だし、少しはお互いのことを知りたいと思ってるんだけど、中々乗ってきてくれないんだよねあ。

「あ、みんな来た」

赤い光と緑の光が迸る、何とも幻想的な光景ではないか。私達が4人同時にこっちに来る時はさぞ様になっていることだろう。今度兄さんにビデオで撮ってもらおうかな。

「クッキー焼いてきたから一緒に食べよ。……この教会って飲食禁止だったっけ？」

兄さんはNGサインを出した。仕方が無いので外の公園で、ベンチに座りながらみんなで食べることにする。

サクッと一口、食べると口の中で甘味が広がっていく。そういえば兄さんは昔から甘いものが好きなんだっけ。よくチョコレートを大人買いとかしてたし、今度チョコレートケーキでも作ってあげようかな。

「紅茶とかも持ってくれば良かったなあ」

「だったら、近くの薬草屋さんで買ってこない？」

「薬草って、何でお茶っ葉から作るんだよ。てか大事な軍資金をそんなんで使っちゃ駄目だろ」

「そのお金を、これから稼いでくるんだよね」

この世界の勇者をスタートするにあたり、私達は500ゴールドを手渡された。これは相場を考えると結構心許ない額であり、具体的には薬草が25ゴールド、安物の武器は200ゴールド、防具は300ゴールドである。

何が言いたいかというと、先日のVSピンクオークで私の装備の殆どが使い物にならなくなってしまうたので、それを買換えなければならなかったのだ。つまり現在の私達の所持金はゼロ。勿論いざというときの薬草など無い。

この状況は不味いという事で、最近の私達は苦慮していたのだ。ちなみに壊れた装備はまだ荷物袋の中に保管してある。これの処遇に関しては色々と案があるんだけど、そこは後述ということだ。

「あつ、八丈さんと桜田さんに聞きたいことがあるんだけど」

「何かしら？」

「2年生の大江戸 亜矢っていう先輩知ってるかな」

「その男子、私達と同じクラスよ」

同学年の2人なら知っているかもしれない。あの取材以降は会っていないのだが、何故か気になってしまふのだ。

「新聞部だっけ、やたら騒がしい奴だけど何かされたの？」

「うっん、1回だけ取材受けただけ」

「私達のほうから注意しとこっか？」

「あつ、大丈夫だから」

大江戸先輩の話はクエストが終わった後にじっくり聞くことにしよう。さて、そろそろ気合入れていきますか。空になったクッキーの袋を片付けて、徐々に戦闘モードへと移行していく。あくまで気分の問題なのだが。

「社ちゃん」

「どしたの史ちゃん」

「これが終わったら、伝えたいことがあるの」

何だろう、ちょっと気になるけどまあいいか。魔法屋のNPCに話しかけてクエスト開始、私達は魔法屋倉庫の中へと繰り出していた。

23話 memory update

私の傍で4匹の死骸が横たわる。明確に殺しに掛かる奴らを救うほどの博愛主義は、残念ながら私は持ち合わせていない。

何かいいものを持っていないかと死骸を漁るが、残念ながら何も持っていない。マジカルキューブの欠片でも持っていれば換金して生活の足しにもなったのだが。

「社、アンタやつぱり凄いだな」

「こんなもんじゃないかな」

モンスターは4匹、対してこちら側の戦力は私1人。要するに4対1な訳であって普通ならば勝ち目は無い、じゃあどうするかという話だ。大事なのは剣術の基本動作、そしてもっと大事なのはいかに自分が勝利できる要因を作り出すかということだ。

相手はボブゴブリン2匹とイタズラネズミ2匹。奴らの体格は私の半分程度、倉庫という狭いダンジョンの中において奴らは小さい分有利に動き回れる。ここに住んでいるのだから当然といえば当然か。

このままでは無理ゲーだが、どうにかしてこれを私の勝利まで持っていきたい。その為に色々と作戦を用意した。

まず奴らの数の優位性を排除するために、奴らの中央を横切って分散させた。これにより奴らは上手く連携が取れなくなり烏合の衆と化す。後ろに回りこんだ私は各個撃破の体勢に入る。この場合真っ先に倒すべきは動きの速いイタズラネズミだ。まず1匹、奴の顔と胴体を切り離す。

これで残りは後3匹、奴らは私に突進してきたがそれが狙いだ。

私の至上目的は史ちゃん達を傷付けない事である故、自分に意識を集中させることはとても都合がいい。私は狭い通路へ滑り込む。追いかけるモンスターの先陣を切るのは必然的に足の速いイタズラネズミとなる。反転し、追いかけてくるそいつに斬りかかる。虚を突かれたそいつは抵抗もままならないまま肉塊となつて倒れ込んだ。通路を抜け、残党を迎え撃つ。ボブゴブリンは想像以上に手応えが無かった。あつという間に倒した後、みんなの所に戻ってきたのがついさっきという訳だ。

「琴目の言う通りよ、本当に凄いわ」

「いやー照れちゃうな」

さっきの戦闘でもし敵の援軍が来ていたりしたら、別の行動をとらざるをえなかっただろう。今回の戦いではたまたまアクシデントも無く、思い通りにコマを進められたに過ぎない。

今後私には如何なる状況にも柔軟に対応する能力が求められる。それを手に入れられなければ、いつかピンクオーク戦を再現する羽目になるかもしれない。

襲い掛かる敵を撃退しながら倉庫の奥へと進んで行く私達。周囲を警戒しながら、史ちゃんにポソリと尋ねる。

「ところで史ちゃん」

「なつ、何？」

持ち前の人見知りに加えここはモンスターの住処である。緊張するのは当然だろう。私は落ち着いた声で史ちゃんに話しかけた。

「そういえば史ちゃん。外でさ、私に話したいことがあるって言うてたよね」

「あの、えっと、ゴメンなさい」

「え（笑）」

何故か謝られた。これは相当緊張してるみたいだな。

「今は大事なときだし、後のほうがいいと思うかな……」

「そう、だねっ！」

返事をしながら盾で攻撃を押し返す。物陰から突如現れて剣を振り下ろしたのは全身骸骨モンスターのロードスケルトンだ。森で命を救ってくれた骸骨と瓜二つだが、こいつからはどす黒い殺気しか感じない。

カタカタと歯を鳴らすそいつの一撃を弾き飛ばして睨みつける。さてどうやって倒そうか。辺りに袋小路は無いようだし、ここは正攻法で潰すのが最良だろう。こいつこそ、何か換金アイテムでも持っていたらいいのだが。

「人間か、オイラを退治しに来たのか？」

「そんなつもりは無いよ」

私達は無事、魔法屋倉庫の最深部に辿りついた。あの後も何度か魔物に襲われたが、勿論公約どおり怪我は一切していない。鎮座しているのは人間に追われてここに隠れ住んでいるボス、『親玉ゴ布林』。もう少しセンスのあるネーミングが出来ないのかと、オンラインゲームで倉庫を攻略していたときはいつも思ったものだ。

「どういうことだ、人間」

「私が上手く魔法屋の主人に話してみるから、一緒に行こう」

このクエストの攻略方法は2種類ある。1つは親玉ゴブリンを倒すこと、もう1つは親玉ゴブリンを店の主人のところに連れて行って話をさせることだ。後者の場合は倉庫を2往復しなければいけないので少し面倒だが、終わった後の達成感は段違いだ。

実は彼、元々は森に住んでいたが人間の都市開発によって住処を奪われ、配下のモンスターと共にこの倉庫に移り住んだのだ。このクエストの後、事情を知った魔法屋の主人は親玉ゴブリンと手を取り合い、人とモンスターの共存を目指すのである。実は私はこのシーンが一番好きで、何度もこのクエストに挑戦しているのだ。

だが、彼の様子は少しおかしかった。後から考えれば、そのときの私の考えが異常だったのだと思う。

「人間の言うことなんざ信用できるか、死ね！」

「ちよっ、まで、うわっ！」

敵の攻撃を盾で受け止める。敵？ そう敵だ。彼は紛れもなく私を殺そうとしている。

私は何かひどく勘違いをしていたのかもしれない。それを考える間もなく頭上から彼の剣が迫り来る。それを盾で打ち払う、間合いを取る、敵が迫ってくる、盾で受け止める、更に間合いを取るうとして後ろが壁な事に気付いた。咄嗟に右に跳ねて攻撃を避けた。

このままでは埒が明かれないと思った私は思い切って彼に突撃していった。振り下ろした私の剣撃を斧で受け止める親玉ゴブリン。そのまま押し切ろうとするが、押し切れない。後ろに下がり体勢を立て直すことにする。

この状況は少し不味いかもしれない。彼の力は私と同等かそれ以

上、下手をすると大怪我を負ってしまうかもしれない。彼は私が倒れたら、次はみんなを狙うだろう。正直この展開は全く予想していなかった。

親玉ゴブリンが斧を振りかざして迫ってくる、私はそれを迎え撃つ。

お互いの武器が触れ合う直前、親玉ゴブリンの体が大きく右に傾いた。その瞬間を逃さず、私は彼の体を一気に切り裂いた。

これで勝負は決した。念には念をと、喉元を剣を突き刺す。これで確実に彼は死んだだろう。

しかし一体何が起ったというのだろうか？ あの状態で彼に何が起ったのだろうか。親玉ゴブリンの死体を物色している内に、その原因となったものを発見した。

「倒せたの？」

「うん。だけどこのナイフは一体・・・？」

駆け寄ってきたみんなにこの奇妙なナイフを見せる。私の勝因であるそれは、親玉ゴブリンの左腕に深々と突き刺さっていた。不思議そうに見つめる史ちゃんと桜田さんをよそに、八丈さんは鋭い目でガラクタを睨みつけている。

「いるんでしょ、そこに」

八丈さんがガラクタに向かって言い放った。するとその物陰から何者かが姿を現した。

「どう、僕のナイフ投げ凄いでしょ」

「……ども」

そこに居たのは山伏の姿をしていた2人の男だった。1人は銀髪でイヌミミを生やし大剣を背負う青年。そしてもう1人は、

「4日ぶりだっけ？ 元気してたかな、高杉さん」

……忘れる筈が無い。私に取材を申し込んだ大江戸おおえど 亜矢あやに間違
いなかった。

24話 クエスト終了也

「倉庫の魔物を退治してくれたか。こいつはお礼だ、受け取ってくれ」

魔法屋の主人から報酬を受け取る。1人につき100G、合計400Gだ。これで暫くは金に困らないだろう。

その後、私達は6人で倉庫から脱出した。私と共に前線で戦ってくれたのは大江戸先輩と一緒に登場した犬夜叉みたいな青年である。彼はかなり戦闘慣れしていて、私の出番が無い位あっという間にモンスターを片付けていった。

ちなみに大江戸先輩は一番後ろから着いてきていた。彼曰く、不意打ちは得意だけど正々堂々の戦いはからつき駄目だから前線でのバトルは無理とのこと。でも案外、敵からのバックアタックを警戒していてくれたんじゃないかなと思う。

「ところで大江戸」

「な〜に八丈さん。桜田さんとは上手くいつてる？」

「何の話だよ。お前は何でこの世界に居るんだ？」

それは私も非常に気になっていた。アースフレンドに彼等が居るという事は、彼らも勇者の片割れということか？ 彼らも何らかの理由でこの世界に召喚されたのだろう。その経緯は？ この世界の構造は？ アースフレンドの造物主の目的は？ そもそも2人は勇者なのか？ 逐一全部聞くつもりなどもちろん無いが、少しでも情報をもく持つことが大事であろう。

とはいえ大江戸先輩の飄々ぶりは私も知っている。果たしてちゃんと答えてくれるかどうか。

「おい、どうなんだ」

「そりゃ女の子だけじゃ心配だしさ。やっぱ守ってあげないとさ」

「助けてくれたのは感謝してるよ。それはともかく」

「男たるもの惚れた女の1人や2人守れなくてどーすんだって話だよね。格好良かったでしょ、倉庫のボス仕留めた時の僕」

「あのなあ…… まあいいか」

ああ駄目だ、全然話してくれそうに無いや。今度機会があったらそれとなく鎌を掛けてみるとしよう。私達はひとまず落ち着く為に近くの喫茶店へと入った。2人掛けの席で好きな場所に座り、各々好きなメニューを注文する。

「僕の奢りだから遠慮せずに食べてね」

「そんな悪いですよ先輩。私も出します」

「いいっていいって。どうせ汚い金だし」

黒髪の前髪を払いながらドヤ顔をする大江戸先輩。汚いってオイオイ。私と史ちゃんが頼んだのは紅茶セットとショートケーキ。そういうばケーキなんて普段食べないな。いつもは果物を丸齧りしてるし。

「史ちゃん、砂糖は何杯？」

「えっと、3杯かな」

「あれ、甘党なんだ」

「へへ……」

そう言って史ちゃんの紅茶に砂糖を入れた。ちなみに私はノンシュガーだ。甘いのが苦手なんじゃなくてケーキの甘さでバランスをとるつもりだ。

大きなイチゴの乗ったショートケーキに「いただきます」。お、甘くて美味しいな。そうだ、今度家で作ってみよう。兄さんに持っていったら喜ぶかなあ。

食べるのに邪魔なので兜を脱いで脇に置いた。内側が少し汗ばんでいるようだ。ニオイがなければいいのだけど。

「社ちゃん、その怪我……」

「え？」

私の顔を見て青ざめる史ちゃん。何となく額を触ると鋭い激痛が走った。テーブルに置いてある手鏡で確認すると、額の右上辺りが赤黒く腫れ上がっていた。こんな所いつ怪我したんだろうか？

「ヤ、ヤダ、どうしよう社ちゃん」

「お、落ち着いて、湿布とか張つところかな？」

「怪我したの、それは大変だ！」

大江戸先輩がドラ焼きを片手に駆け寄ってきた。意外と和菓子に似合うなこの人は。

「せつかくの可愛い顔に傷なんか付いちゃ駄目だ。早く治療しなくちゃ」

「はあ、ありがとうございます」

「えつとこの辺に薬草が……アレ？」

「薬草って、これのことか？」

八丈さんがパフェを食べながら私達のほうを向いた。彼女の左手は瓶詰めされた赤い液体を握り締めている。話の流れから推測するに、恐らく大江戸先輩がすっかり落とした薬草を八丈さんが拾ったのだらう。意外とドジなんだな。

「ほい、社」

「よっと、八丈さんありがと。コレって飲めばいいの？」

「そうだよ。……なんか僕、妙にダサイな」

ゴクゴク。ハーブが少しキツイけど案外美味しかった。試しに額をまた触ってみる。痛いことには変わらないがさっきよりは幾分和らいだかも。

「こっちの世界の医療は凄いのね。現実には持ち帰ったら一攫千金が狙えるかも」

そう言いながら桜田さんもパフェへとスプーンを伸ばす。どうやら1カップで2人分らしく、八丈さんと分け合って食べている。あのパフェも美味しそうだなあ。

食べ終わった会計を大江戸先輩に任せて私達は先に喫茶店から出てきた。タダ飯にありつけて今日はラッキーだったかな。

支払いを終えた大江戸先輩が店から出てきた。イヌミミの青年も一緒だ。

「さてと、僕らは街の外に用があるからこれで失礼するね」

「そう？ アタシらもう少しこの世界に居るから」

「んじゃバイバーイ」

そう言って大江戸先輩とイヌミミさんは別の道へと歩いていった。

25話 報道欲（前書き）

< 報告 > 桜 ↓ ココアに変更

「これは先輩が無理矢理つけたんスよ。って何処触ってるんスカ！」
「やっぱ尻尾が無いとなあ。改造手術しない？」
「訳わかんないっスよ！」

この子は僕のペットもとい相棒のココアだよ。え、ココアは少女みたいじゃないかって？ 解ってないなあ、男の子だからいいんじゃないか。むしろソツチのほうがシチュ的に色々興奮するんだって、男なのに女の子みたいな名前とかさ。大体そんな感じ？ 結論はココア＝ジャステイス。

しっかし暇だな。もうすぐ来る筈なんだけど。

「ココアは4人の中で誰が好き？」

「俺は別に。ってか尻触んの止めて下さい」

「僕は社ちゃんかな。でも皆可愛いしなあ」

「まあ高杉さんは美人ですけど。ああ、来たっスよ」

丘の向こうからうつすらと人影が見える。安全地帯の街道を無視して歩き回る奴は大体は自殺志願者が能無しのどっちか、もしくは彼女みたいなイレギュラーとか。こっちに向かってくる眼鏡の似合う可愛い娘ちゃんに僕は思わず言い放った。

「久っしぶり〜当て馬あてうま」

「てめーブツ飛ばすぞ」

「あんまり怒ると将来ハゲるよ？」

「テメーのせいだろうが！」

このギャーギャー五月蠅いのはアースフレンドの管理人やってる冬馬ふゆまちゃん。何か神経質でいつもグチグチ言ってるんだけど、そんなに人生楽しいのかな？

「怒らない、怒らない」

「って顔が近けーよ！ おい馬鹿やめろ」

「んー聞こえないー」

「先輩」

後ろでココアが微妙に睨んでるじゃないか。そういえばココアは冬馬に片思いしてるんだっけ。ちょっとやり過ぎちゃったかな、よし！

「ねえキスしよ冬馬ーチュウチュウ」

「おいコラ本気で離れろって、止めっ！」

「いい加減にして下さい先輩！」

無理やり僕と冬馬を引き剥がすココア。まったくウブなんだから（笑）。そんなんじや悪徳商法に騙されちゃうよ！

「まったくココア、ちゃんとコイツの手綱握ってるよ」

「すみません。後、名前は・・・」

「ああ、えっと、悪い。本名なんだっけ？」

「別にいいっスよもう・・・」

あーららココアってば落ち込んだじゃった。まっ、この子のアフターケアは後回しにするとして。

「んで何だっけ」

「報告書だよ。早く今週分を出してくれ」

「折角だし骸骨の家で話し合わない？」

「何でドレッドノートの家に行くんだよ」

「ついでに晩飯食べさせてもらうに決まってるじゃん」

「まったく、さっさと帰って別の仕事したいんだけどな……」

「だから、仕事ばつかじゃハゲるよ？」
「あーもう本気でテメー殴りてえ」

冬馬って本当に沸点低いんだなー。まあそんなこんなで現在地点は例の骸骨の家也。ドレッドノートの料理は美味しいんだけどあの顔見ると食欲半減しちまうぜ。作ってくれるのは有難いけどあいつ美容整形とかすべきだと思っただけど？

「突然おじゃまして、こんなに美味しい料理作って頂いてありがとうございます」

「いやいや。私も一人で食べるのは寂しいんじや。遠慮せず食え」

「ドレッドノート、こんな奴カップラーメンで十分じゃないか？」

「まあ嬢ちゃんもそう言わんと」

ボヤキながら豚汁を啜る冬馬はひと時もPCから目を離そうとしない。オンラインゲームの世界でPC作業とか何この性質の悪いモダン哲学。仕事熱心なのはいいけどそれは料理人に失礼なんじゃない？

そういう訳で僕は、天に代わって冬馬にお仕置きしてあげることにした。彼女の背中に指を近付けて、

「（っっ）」

「ゴブフウア！？ ゲホツ、ゲホツ」

ちょｗｗｗｗ汚ねえｗｗｗｗｗｗPC豚汁まみれじゃねーかｗｗｗｗ 嘔

出すとかねーし、女の子は清楚でありなさい（笑）。

「冬馬チャンは首筋が敏感なんだねーw」

「てう、テメエ絶対ブツ飛ばす覚悟しろ！」

頭に血が上った様で、いきり立って背中に背負っていた斧を振りかざす冬馬ちゃん。ココアの視線も本格的に殺気立ってきたし、そろそろフザケるのはよそうかな。

「これ報告書ね、言われたとおり新人冒険者コンビの経歴は調べといたよ。全部で8Pだから宜しく」

「ん、ああそうか」

「伊藤 零花ちゃんれいかの虚言癖は幼少期、近所に住んでた祖母の影響が強いと思われるよ。詳しくは中身見てね」

「ああ、ありがとうな。……ったく」

秘技・ウルトラ話題逸らしの術！……これオリンピックの正式種目にならねーかな。

まあそれはいいとして

「んでさ、冬馬に聞きたいことがあるんだけど」

「何だ」

「この世界の目的って何？」

「前にも言つたら、私もよく聞かされてないって。別にいいだろうが、ちゃんと金払ってるんだし」

その台詞は聞き飽きたし、久しぶりに徹底攻撃仕掛けてみるか。

「全く知らないってこと無いでしょ？ 一応アンタ達も幹部なんだしさ。機密情報の1つや2つ教えてよ」

「機密情報なら漏らしちゃダメだろーが。……悪いがその辺で勘弁してくれ」

「ねえ、僕は新聞記者だって言っただよな」

「そっぴやそうだったな。どうした？」

僕は目を細めて言い放った。

「僕が1番嫌いなのは真実を隠蔽することなの。今の君達は僕にとつて最悪最低の連中だよ、解る？」

「……」

「そんな態度続けるようだったら、皆殺しにするよ？」

「お、おい……」

「まっ、半分は冗談だけどね」

さーつと、脅しはコレで終了！ やり過ぎると抹殺されちゃうかもしれないし。ところで不安がってる冬馬も結構可愛いかも（笑）。

「ごちそうさま。美味しい料理ありがとう。さっ、ココア行くよ！」

「解りました先輩」

「何処行くんだ？」

「森の奥。遺跡のクエスト受けに行くの」

あ、しまった。玄関のドアを開けようとして、伝え忘れてたことを思い出した。

「1つ忠告ね」

「何だ？」

「『向日葵の冒険者達』って居るじゃん、社ちゃん達の。あの娘達もうすぐ化けるよ」

「あのチームは社麻が強いのは聞いてるけど、更に強くなるのか？」
「多分4人全員が一気にね。もしかしたら最強になるんじゃないかな？」

「何か根拠があるのか」

「タダの勘。それじゃねー！」

26話 私達の歩幅で（前書き）

今回は再び社視点です

26話 私達の歩幅で

彼らを見送った後、私達4人はそのままのんびりと教会へと向かっていた。前述の通り、この世界での1日は現実での4分程度。急いだところで大きなメリットは無いだろう。

ところで、この世界でテスト勉強をすれば相当な成果が期待出来るのではないかと思うのだがどうだろう？ 別に違反では無い筈、元々この世界の理を想定していなかったのだから律する校則も法律も在り得ない。まあここに頼らずとも高得点を弾き出すのは余裕だが。

「あの・・・社ちゃん」

「んっ、そうだ。用事あるんだっけ」

勿論この約束はひとときも忘れていない。実は私も言い出そうと思っていたが中々タイミングが掴めなかったのだ。

「あれ、どっか行くの」

「ちよつと話しようかなって」

「あーそう？ アタシは教会で昼寝してから帰ろうかなって思ってるけど」

「ダメ。そんなことしてるから、夜眠れなくなつて授業中に寝ちゃうんじゃない」

「それさ、朝学校行く前にもコツチ来て2度寝すれば万事解決じゃない？」

「生活のリズムが狂っちゃうでしょ！」

そんな会話をしながら八丈さんと桜田さんは教会へ向かっていった。桜田さんは押しに弱いところがあるから、多分2人で横になっ

てるんじゃないかな。

ちなみに教会には2人ずつの部屋が用意されている。私もそこで休憩することはあるが八丈さんの使い方は…… 私的に勇者の道を外れているような気がするんだけど。

そんなこんなで私と史ちゃんはアゲラダムの街中を歩き始めた。日は結構傾いてきて、温度は少しずつ落ちてきている。この世界の気候は標準的な日本のそれと比べて昼夜の温度差がやや激しい。日中は暖かいのだが日が落ちると手がかじかむ程に冷え込むのだ。

「史ちゃん、手つなごう」

そう言うとき史ちゃんもじもと手を差し出してきた。冷え込みとは別の理由で顔が赤くなっているのが解る。私達は話をするために近くの公園のベンチに座り込んだ。辺りには誰も居ない。この世界の住民も夕食の準備やらで忙しいのかもしれない。

「ちょっと冷えるかな。史ちゃん、寒い平気？」

「うん。大丈夫……ちょっと寄っていいかな」

「うん。毛布とか持ってくればよかったかな」

「うん……」

少しだけ沈黙が続いた。何か話題を振ろうと考えていたら史ちゃんが顔を近付けてきた。潤んだ瞳で私の顔をじっと見つめている。真剣な表情に、少したじろいでしまう。

「私、社に怪我させたくない」

「え？」

「私強くなる！ 社ちゃんがもう辛い思いしなくてもいいように！ だから、だから！」

「史ちゃん……」

史ちゃんが私に精一杯の言葉をぶつけて、それは私に凄く響いて私は、こんなにも、こんなにも私のことを大切に思ってくれている人のことを気付いていなかった。

私が1人で戦っているとき、史ちゃんはどうだけ不安だったんだろうか。自分は死んでもいいからみんなを守りたい、だなんて私は馬鹿だ、なんて独りよがりなんだろう。私が死んだら史ちゃんは絶対に悲しむ。それだけじゃない。八丈さんや桜田さん、父さんや母さんや兄さん、大江戸先輩やクラスメート、近所に住んでいる1人暮らしの祖父に毎日挨拶してくれる交通指導員のおばさん。

数え上げて改めて、自分の周りに大切な人が沢山いる事に気付く。今、この世界このときに初めてそれに気付いた。

そして、目の前に私を見つめる史ちゃんがいる。私にとって掛け替えの無い、世界で一番大好きな親友がそこにいる。私は史ちゃんを抱きしめてそっと呟いた。

「……ゴメンね、史ちゃん」

「社ちゃん……」

「史ちゃんが辛い思いしてるって今気付いた。私もう無茶なことばしない。だから、安心して」

「ありがとう、社ちゃん……」

大好きだよ、史ちゃん。

「もう1つ聞きたいんだけどいいかな？」

「えっ、何かな」

「……社ちゃんって好きな男子とかいる？」

「……いないよ」

「良かった……。あっ、ううん何でもない」

これは嘘偽りなき真実。私は特定の異性を好きになっていないし、異性に興味も無い。

でも『良かった』か。……気付いてるよ。

「今度遊びに行ってもいいかな」

「うん。何時でもOKだよ」

帰って部屋を掃除しとかなくちや。毎日掃除してるんだけど念には念を入れておかないと。

星がちらちらと輝いている。空にはもう太陽は無く、既に建物の陰に隠れている。

「そうだ！ いい場所があるの」

「え、いい場所？」

「すごく景色が良さそうな所。前から気になってたの」

私は史ちゃんを手を取って街の中心にある小高い丘へと駆けていった。4人で散策していたときに、見晴らしがよさそうだなと目を付けていたところだ。

「よつと、着いた」

「わあキレイ……！」

アゲラダムで一番高い場所にあるここから、街の全てを眺望できる。この綺麗な景色を誰かと一緒に見せたかったのだ。遥か地平線の彼方に太陽が沈んでいく。それは1日の終わりを感じさせる、どこか寂しげで、何処か懐かしいものだった。

私達は地面にハンカチを敷いて、そこに座り込んだ。

「私、社ちゃんが大好き」

「史ちゃん……」

「私、社ちゃんとうとう一緒にいて、とっても幸せだよ」

「私も、史ちゃんと出会えて良かった……」

私達は肌を寄せ合って、1日の終わりを眺めている。沈みゆく太陽は、私達をやわらかく照らしていた。

26話 私達の歩幅で（後書き）

気付かない内に気負いすぎて無茶してしまう

そんな経験ありませんか？

たまには肩の力を抜いて

深呼吸して

大切な人にありがとうを伝えてみるのも悪くないかもしれません

なんて格好いいセリフ書いてみたりして

二十七話 ペン&剣はペンだけ、剣だけよりずっと強い（前書き）

<報告> 桜 ↓ ココアに変更

二十七話 ペン&剣はペンだけ、剣だけよりずっと強い

私達が通っている丸太橋高校には特筆すべき点が無い。創立されてからそれなりの年月が過ぎているが、部活で高い成績を残した、有名国立大学に合格した生徒の話は殆ど聞かない。全国模試の結果を見る限り日本の高校全体で見ると、丸太橋の学力自体は決して低くなく、それなりに上位に食い込んではいいる。

但しそれは1年生までで、この学校の生徒は進級する度に緩んでいく傾向にある。それは数字が残酷なまでに証明しており、学年ごとの全体偏差値は1、2、3と下り階段の如く落ち込んでいく。

努力をし続け、高校生活で誇りになる成果を出す生徒も一部いるのは確かだが、実際には学校サイドの問題も足を引っ張ることがしばしばある。表彰状やトロフィーを紛失したり、大学案内のパンフレットを間違えて全て破棄してしまうなどが数年に1度起こるらしい。とどのつまり「のんびり、うっかり」のDNAがこの高校の弱点といったところか。

欠点だけを論つても虚しくなるだけなので良い点もピックアップしていこう。丸太橋高校の敷地面積は近隣の高校と比べかなり広い地主との交渉が上手くいったからかどうかは不明だが近隣の私立高校6校の平均より約1.4倍の広さがあるのだ。その為グラウンドが広く、部活同士で場所を争うことなく練習に精を出せるのである。……何故それで結果が出せないという意見はこの際止めによつ。

後は……他の長所が思いつかない。まあでも他の高校も、もしかしたら丸太橋のことを羨ましがっているかもしれない。私達が知らないだけでここにも良いところは沢山あると思う。いわゆる『隣の芝生は青い』ということか。

……とまあ、そんなことを考えながら目の前の英語の長文の和訳を、2人でそれぞれ黒板に書いている。教科書には載っていない単語や文法、はつきりいつて異様に難しい問題である。私自身は何とかなりそう（別のことを考える余裕すらある）だが、隣の史ちゃんがかかなり苦戦している様子だ。そういえば史ちゃんは英語の文法で私に質問したことがあったっけ。

教員の目を盗み、時々史ちゃんにそつと答えを耳打ちする。元々史ちゃんはセンスがいいので、要点を理解すれば後はすらすらと解けるのだ。

ようやく書き終わり席へと戻る許可が出る。普段は生徒に優しい先生なのに今日はどう血迷われたのだろうか。もしかしたら今朝、旦那さんと喧嘩したのかも。

席に着いた時点で昼休みのチャイムが鳴った。先生は「テスト範囲なのでしっかりとノートに書き写していつてね」とだけ伝えて教室を後にしていかれた。これは何かの試練ですか？

私達は机の上を片付け昼御飯の準備を始める。食堂で4人一緒に食べるつもり、勿論弁当を持ってきている。最近レパートリーを増やすために色々な料理本を買っている。調理部の八丈さんと桜田さんに見劣りしないようにしなくては。

ちらりと史ちゃんの弁当箱を見る。花柄のクロスで包まれたそれはとっても可愛い。まあ、うん。・・・おかず交換の時は色んな意味でドキドキするのは彼女に内緒だ。

私達が教室を出ようとしたとき後ろのドアを開けて男子が入ってきた。他クラスの人だろうか、何処か見覚えがあるような気がする。なんだろう、告白してきたのとは少し違う気が。

「高杉、大道寺、ちょっと昼休みいいか」

「「？」」

私達2人を呼んでいるその男子は、見た目こそは違うが、声や雰囲気は何となく正体は掴める。

「もしかして、この間のイヌミさん？」

「よく分かったな。まあ本名は白狼道はくろうどう 翔也しょうやなんだけど」

「びっくりしたよ、同じ高校だったなんて」

「まあな。んでちょっと用事あるんだけど」

そう言っただけで彼は私達の席に近づいてきた。髪の色は大江戸先輩と同じ真っ黒だった。凝視すると白髪があるのかもしれない。身長は大体私と同じくらい、アスフレンドで見た時はもっと背が高い印象だったのだが、上げ底靴でも履いていたのだろうか。

私達のすぐそこで立ちながら話し始めた。どうやら先輩関連の用事らしい。

「……新聞部の部室へ？」

「ああ、詳しいことは俺も聞いてないけど」

「部活の勧誘は断るけど」

「そんなんじゃないと思うよ」

なんだか要領を得ないが、彼らにも恩があるし行ってみることにしよう。私は史ちゃんと一緒に教室を出た。部室棟は外にあるので靴に履き替え無ければならないのが少し面倒だ。

八丈さんと桜田さんには後で謝っておこう、という考えは杞憂で
どうやら2人も呼び出されていたようだ。他の部屋が何となく汗臭
いのに対して、新聞部は掃除が行き届いてとても清潔だ。

大江戸先輩はフニヤフニヤしてる様でその辺りはきっちりしてい
るんだな。パソコンやプリンターの他、フェルトの掲示板には新聞
やら雑誌の切抜きが沢山貼り付けられている。生徒会新聞の編集も
任されていると聞くし、やはり彼はかなりの辣腕なのだろう。

私達は用意されていた折り畳みの椅子に座り弁当を広げた。

「すごく熱心に活動されてるんですね」

「うんうん。新聞部に入る気になった？」

「用件それだったら、アタシら帰るけど」

「冗談だつて八丈さん」

目を見れば大体何を考えているか分かる。あれはウケを狙う若手
芸人の目だ。大江戸先輩は紅茶を淹れてくれた。

「砂糖とミルクはその籠の中に入ってるから」

「こんなにしてくれて悪いわ」

「女の子迎えるんだし当然だよ。それよりココアどうしたんだろ。
ちなみにココアって翔也のことだよ」

実は私達が教室を出た後、男子達にどうして私と親密な仲だった
のか激しく問いただされていたらしい。が、私には知る術は無い。

「全くしょうがない奴だなー。まいつか、とりあえずコレ見て」

先輩は私達にA4サイズの5枚綴りのプリントを配ってくれた。
表紙には『お勧め習得スキル』と書かれている。

「これって一体？」

「新人冒険者への、僕らからのちょっとしたプレゼントだよ」

クリームコロッケを頬張りながら中身を見る。私達の職業、それぞれファイター、ソーサラー、ゲリラ、プリーストの職業特性と効率的な訓練方法などが事細かに書いてある。それらの情報は的確で、少し見ただけで有用であることが分かる。

中でも凄いのが習得可能なスキルの特性についてだ。それぞれのスキルについてどうやって鍛えるか、戦闘時どのような場面で使用すべきか、有効範囲に至るまで細かく記されていた。これは凄い。そしてとても見やすく作られている。小見出しやグラフなどが効果的に使われていて、彼の新聞記者の能力が半端でないことが判る。

「凄いです。これ凄い資料ですよ」

「そうだろうさ」

「ここまで深く調べることが出来るなんて流石です。やっぱり大江戸先輩って凄い人なんですね」

「へっへー。もっと褒めてよ。僕褒められると天狗みたいに鼻が高くなるからさ」

「その勢いで政界進出とか考えてる？」

「って、新聞記者は辞めないよ！」

わいのわいのと大江戸先輩を中心に話は続いていった。この人はかなりの博識で、政治経済や環境問題から芸能人のゴシップ情報まで色んなことを教えてくれた。時には八丈さんのツツコミにオーバリアクションで反応したりと私達を和ませてくれる。イケメンで強くて面白くて賢くて、本当に凄い人だな。

もっと一緒に居たかったけど残念なことに5時間目が近づいてきてしまった。私達は食事を終えた後、礼を言って教室へと戻っていた。アースフレンドでもまた会えるかな。お礼に今度クッキーで

も焼いて持っていこう。

昼休みがそろそろ終了するんでそろそろ戻ろつかと思ったたろうやくココアがやってきた。

「遅くなってすみません」

「もう皆帰っちゃったよ。入れ違いだったね」

「資料は渡したんスか？」

「うん、この日の為に頑張ったんだから」

資料を作るために何回も転職して、それぞれのスキルの特性を研究し尽くしたんだから。向こうの世界時間で換算して2年間ぐらい滞在したんだっけ？ 可愛い女の子の為だもの、この位ちよろいちよろい。

「紅茶でも飲む？」

「いえ、放課後に頂くっス。……先輩に聞きたいことがあるんスけど」

「昼飯もう食べた？」

「まだです。話はぐらかさないで下さい。……どうしてあの4人に拘るんスか？」

「え？」

「新聞以外であんな興味津々な先輩、初めてですよ」

なんだろ、ココアってば嫉妬してるのかな？ 心配しなくてもココアは僕だけのものなのに。

まあでも、折角だし考えてること教えてあげようかな。

「日本国憲法で、職業選択の自由が保障されてるだろ」

「え？ 何条かは忘れましたが、それがどうしたんス？」

あれ、判んないモンかな。もうちょっと説明するか。

「日本では、出生や両親に関係なく全ての人が、どんな仕事にでも就ける」

「まあそうっスね」

「どんな人でも、訓練と努力次第でなんにだって成れる。それこそ会社社長や総理大臣にだってね」

「総理は無理じゃないスか？」

「そうでもないよ。田中角栄は高等小学校卒、今で言う中卒で総理大臣になったんだ」

「えっ、そうなんスか？」

ちよつと勉強不足なんじゃないの。そんなんで新聞部は務まらないよ？

「永田雅一や松下幸之助や小林一三も、のし上がって大成したんだ。だけど勇者はそうじゃない」

「？ 勇者ですか」

ここで僕は少し声のトーンを落とした。

「異世界で魔王を倒して平和をもたらす、ってね。その為には人並み外れた体力と知力、高潔な精神、人を魅了するカリスマ性。そういった要素を全て備えてなくちゃいけない。勇者はやろうと思ってやる職業じゃない、神様に選ばれた本物にしか成れないんだ」

「・・・そう、なんスか？」

「そうさ。まあ僕やココアは素養を満たしてると思うよ。実際僕は強くてカッコイイしさ」

「確かに鍛えてはいるっスけどね」

机の上の紅茶を喉に流し込む。冷めてて不味かったが捨てるよりマシだ。

「あの4人は、多分選ばれた本物だと思うよ。今は社ちゃんがズバ抜けてるけどね。ホントにあの娘は強くて格好良くて、賢くてカリスマで可愛くて、神様を恨みたいよ」

「そうっスか。ところで授業始まりますよ、急がないと」

そういえば忘れてた。時計を見ると後3分で5時間目が始まる位置に針が来ている。まあコレ位なら大丈夫かな。ココアをお姫様抱っこして、

「大丈夫だ、問題ない。窓から飛び降りればいいのさ!」

「えっ、ちょここ3階、待って、うおあああつつつ!」

「YESッ、I CAN FLYイイイイイイ!」

「!!!!!!」

風が気持ちいい! さてっ、面白くなるのはこれからだよ!

二十七話 ペン&剣はペンだけ、剣だけよりずっと強い（後書き）

次回は百合描写が入ります

2八話 初めての日（前書き）

軽い百合描写あります

28話 初めての日

目の前にかざした黒い立方体に念を込めると、そこはいつもの教会だ。

今日はみんなと冒険はしない約束をした。八丈さんと桜田さんはアースフレンドを適当にブラブラすると言っていたが、ここで鉢合わせする事態には陥らなかった。会わなくて良かっただろう。今の私は精神的にかなり不安定な状況にあるから変な事を口走ってしまうかもしれない。

荷物袋はポーション以外殆ど入っていない。壊れた鎧は大江戸先輩にあげた。彼の職業は商人だから壊れた装備を売ることができず。今頃はゴールドに化けて先輩の財布を潤していることだろう。ここへは兄さんと話をするためだけに来た。話の内容はよく覚えていない。ここに来て少しは心が落ち着いただろうか。

そして、今戻ってきた。

いつも私がインターネットしたり寝たりしている私室だ。何となく部屋の中を見渡した。ベッドや勉強机、パソコンや幾らかのマンガと小説以外に大した荷物は無い。掃除は行き届いているが、どうにも殺風景に過ぎる。友達を迎え入れるには少し場違いではないかとも思った。

ふと部屋の中の姿見に目がいった。映し出されているのは勿論私だ。鏡の中の私はいつも高校で着用している制服姿のままだった。そういえば着替えずに向こうの世界に行ったんだな。

(……ダサイ制服。)

姿見の自分が私を冷めた目で見つめている。当然だ、私も同じ顔をしているのだから。

丸太橋高校の女子の制服は、一般的な女子高生のようなセーラー服やブレザーではなく、男子生徒が着る様な紺色の学ランとスラックスだ。7年くらい前に、制服でスカートを強要されるのが嫌だった女子生徒が教師に直訴したらしく、紆余曲折の後に男女問わず制服がズボンルックになったそう。なんとフェミニズムな話ではないか。

受験のときはファッションなどどうでも良かったが、少し興味を持ち出した最近は何となくだけ不満を感じている。見れば見るほど色気も華もない制服だ。史ちゃんがわざわざ家に帰って、私服に着替えてからここに来るのも納得だろう。

カーテンを閉め、私は制服を脱ぎ捨て下着姿になるとクローゼットから今日の服を選び始めた。悩んだ末に半袖のブラウスと、ベージュのフリル付スカートを取り出す。こういう服は普段は殆ど着用しないのだが、今日は特別な日だ。

着替えようと思って少し考え、タンスから水色でお揃いのブラとショーツを取り出す。別に今日のために用意した訳ではない。いつか訪れるこういう日の為にデパートで購入したものだ。下着を替える為に1度全裸になった。もうすぐ夏休みだが、部屋の中の気温が妙に低く感じた。

服を着て、おかしいなところが無いかな姿見で確かめる。先程と比べかなりマシになっただろう。そのまま床に座り込んで髪の毛を撫でてみた。髪型をいつもと違う感じにしようと思っ少しじってみる、が良く解らない。

とりあえず机の引き出しからヘアゴムを取り出し試行錯誤、トップで纏めてヘアゴムとピンで留めるようにした。前にTVに出ていたアイドルの髪形を真似てみたが、我ながら結構似合っていると思

う。

何だか落ち着かず、ベッドのシーツの皺を伸ばしたりした。ここに居ても何だか落ち着かないので1階に移動する。リビングに行くとしたが、寄り道して洗面所で顔を洗った。洗顔クリームをパシヤパシヤ洗い流し、ついでに歯も磨いた。

リビングで麦茶を飲みながら来客を待つ。落ち着こう、落ち着こうと思いつつも心臓の高鳴りは大きくなっていく一方だ。

ピンポン

外からチャイムの音が響いた。インターホンを確認し、玄関へと向かい扉を開けた。

「ゴメンね、用意してたら遅くなっちゃった」

「いいって史ちゃん。さっ、上がって」

史ちゃんとは今日、勉強を教えてあげる約束をしていた。なので一旦家に帰り、着替えてから私の家にやってきたのだ。史ちゃんの今の服は薄手の白いワンピースだった。見慣れている彼女が普段よりとても可愛らしく変身している。

「今日は両親がいないから、のんびりしていつてね」

「ありがとう、社ちゃん」

今日も両親はいない。私は史ちゃんを自分の部屋まで送っていく。ドキドキはまだ続いている。声のトーンは変じゃなかったかな、緊張しているのがバレなければいいんだけど。

階段を1段ずつ登っていく。スリッパがパタパタと立ってる音がやけに響いてる気がする。客観的には、単に私の神経が上擦っている

だけなのだろうけれども。

「ここが、社ちゃんの部屋・・・」

「ジュースとお菓子持ってくるからちよっと待っててね」

史ちゃんに座ってもらいドアを閉めた。私は一旦リビングに行き、冷蔵庫の中から2L入りペットボトルの炭酸飲料を取り出した。お菓子は何にしようか少し考え、戸棚の中から昨日作ったチョコレートクッキーを皿に盛った。それぞれをお盆の上に載せ階段を登っていく。出来るだけ音を響かせながら。

「史ちゃん、開けるよ」

そう言つてペットボトルを床に置き、左手でドアを開けた。史ちゃんはやさっきまでと同じようにそこに座っている。だが、少し頬が赤くなっているような気がする。息も少し荒い。そしてシートに少し汚れが出来ていた。私はそれらに気付かない振りをして、史ちゃんの隣の椅子に座った。

「炭酸つてOKだった？」

「うん、平気」

「良かった。これ、前に作ったんだけど良かったら食べて」

史ちゃんはクッキーをかじって、美味しいといってくれた。ジュースを一口飲んだ後、教科書を広げて勉強を始める。まずはこの間テストに出ると先生が言っていた英語の長文だ。

「このIndiaっていうのは、インドのことじゃなくて天竺のことを表してるの」

「うん……」

「元々西遊記って言うのは、三蔵法師が中国からインドまで経典を取りに向かった話で……」

「……」

史ちゃんは黙ってノートに私が喋った要点を書き写している。顔はさつきより赤くなっている。

さつきより唾を飲む回数が増えたような気がする。ジュースを飲もうと思いコップを持って、既に空なことに気付いた。ペットボトルからジュースをコップに注ぐ。ついでに史ちゃんのコップも空なので注いであげた。

「……それで、猪八戒は豚で、沙悟浄は河童なの」

クッキーに手を伸ばすが、既に皿は空っぱだ。

「この頃インドでよく食べられていたのは、」

そこから先の説明は言えなかった。だって史ちゃんが私に思い切り抱きついてきたから。

2八話 初めての日（後書き）

次回も、百合注意です

二十九話 × × × (前書き)

注意！ 今回の話にはかなり濃厚な百合描写があります。それを踏まえた上で閲覧して下さい。

二十九話

× × ×

気付いていない訳ではなかった。ただ、出来れば目を逸らしていたかった。

初めて意識したのはドレッドノートの小屋の1件だった。朝、目が覚めたら史ちゃんと全裸で一緒にベッドの中にいた、だなんて。多分、私が知らない内にHな事をされてたんだろうなあと解った。だけど、私はその事実を認めたくなかった。八丈さんと桜田さんの会話は聞き間違いで、史ちゃんの意味深な微笑みは気のせいだと思ひ込みたかった。そうすることで、史ちゃんと普通の関係でいられると思っていた。

「……史ちゃん？」

「……」

史ちゃんは私の胸にしがみついて離れない。史ちゃんの方は小刻みに震えていた。だけど、私は史ちゃんを抱きしめるべきか、決断を先延ばしにしている。

史ちゃんの気持ちは解る。解るけど、解りたくなかった。

史ちゃんが、私を愛してるなんて。

「どうしたの、気分悪いの」

「……うつん、ゴメン」

史ちゃんが私を潤んだ目で見つめながらそういった。ああ、その目だ。史ちゃんが私を見る時はいつもその目だ。視線を感じる度に心臓の鼓動が跳ね上がる。最近は史ちゃんの事を考え、毎晩ベッド

の中で悶々とするようになった。そして、思いは日増しに強くなっていく。

もし願いが叶うなら、史ちゃんとは友達の間でいたかった。一緒に笑って、昼御飯を食べて、一緒に遊んで、アースフレンドで冒険して。ただ普通の友達としてありたかった。

ふと、小学生のころに書いた『将来の夢』という作文を思い出す。ませた子供だった私は弁護士になりたいと書き、どうやったら弁護士になれるのかとか、当時の司法試験の問題点とかをびっしり書き込んでいた。原稿用紙の枚数は圧倒的で、クラスメートの大半に奇異の目で見られていたのが懐かしい。

そんな私の、隣に座っていた女子の夢は『お兄ちゃんのお嫁さんになること』だった。横目でちらりと覗き見た私は、内心彼女を小馬鹿にしていた。私だって兄は好きだ。けどそれは、家族としての“好き”であって恋愛感情ではない。そんなことも解らないなんて、幼稚だな。

彼女が現在も兄を好いているのかは不明である。そして私は今、当時の私が考えもなかった境地にある。

「何でもないの。勉強続けよ」

そう言つて史ちゃんは私の肩を離す。

・
・
・

私は、

私は史ちゃんを抱き寄せて、そっと口付けした。

私の心の何かが消えていくのを感じた。

さようなら、子供の頃の私。

さようなら、恋愛に夢など持たなかった私

さようなら、いつか男と結婚するんだなと冷めていた私。

私は今から、違う自分に生まれ変わります。

唇を離し、史ちゃんの顔色を伺う。今までに見たこともないくらい顔が真っ赤で、目がトロロンとしていて、息も色っぽくて。そんな史ちゃんを見て、私の中から熱い感情がこみ上げてくる。

「ハア、ハア、やしろ、ちゃん・・・」

「ふみ、ちゃん、ンンッ！」

史ちゃんのほうからキスをしてきた。いままでの史ちゃんからは想像もつかないくらいに乱れぶりだった。口の中に舌を入れてきてわたしの舌と絡ませてきて。はじめてのディープキスに脳がとろけそうになる。もう史ちゃんのことしか考えられない。

史ちゃんをどうにかしないと壊れてしまいそうだ。わたしの中にこんないやらしい感情があるなんて知らなかった。

私は史ちゃんをだきしめ、耳元でささやいた。もう、とりかえしのつかないことになっていると知りながら。

「ふみちゃん、わたしが相手に、いいの？」

「やしろちゃんと、あいしあいたい・・・」

これから、何をするんだろう。エッチなんて今までしたことがない、ましてや女の子どうしだなんて、どんな風にしたらいいんだろう。心臓のドキドキがどんどんつよくなる。もう、おさえられない。

「ふみちゃん、ベッドに、いこうか・・・」
「やしろちゃん、だいすき・・・」

わたしと史ちゃんは、だきあいながらベッドにとびこんでいった。

・
・
・

窓の向こうは既に夜の帳とじを落としている。あれから、どれだけの時間が経過しただろうか？

隣では、史ちゃんが生まれたままの姿ですやすやと眠っている。その安らかな顔は、今までの行為が夢だったかのように無垢だった。床に目をやると、私達の服が脱ぎ捨てられている。すぐ傍には、史ちゃんが着ていたショーツが落ちている。私が史ちゃんの腰を浮かせて脱がせたものだ。

ベッドのシーツは、私達の汁で広く濡れそぼっている。そこから湧き上がる芳醇な匂いに、欲情が再び高まっていくのを感じた。

「んん…… やしろ、ちゃん？」
「あつ、おきたんだね」

史ちゃんが眼をさまし、起き上がって私を見ている。ベッドの上でちょこんと座りながら笑いかける、その姿がたまらなく愛おしい。今すぐ抱きしめたい気持ちを何とかがまんする。

「2人で、しちゃったね。エッチなこと」

「やしろちゃんと一緒になれて、私すごく幸せだよ」

「私もだよ、ふみちゃん」

史ちゃんは本当に幸せそうな顔で私にそう言ってくれた。やっぱ、私がしたことは間違っていなかった。今までより、もっと近くに史ちゃんの心が感じられる。

「でもびつくりした。ふみちゃんってすごくエッチなんだね」

「やん、それ言わないで……」

「だって、私のおっぱいをあんなに、ひゃん！」

「やしろちゃんのおっぱい、すごくキレイなんだもん……」

史ちゃんに胸の先端を指で弾かれ、たまらず喘ぎ声を出してしまった。何度も揉みしだかれ、吸われた乳房は今まで感じたことが無いくらい鋭敏になっている。

お返しに、私は史ちゃんの太ももの付け根あたりを優しく撫で上げた。そこが弱点であることを今の私は知っている。史ちゃんは切ない声を出して倒れこんだ。

私は史ちゃんの上に乗る、顔を近付けてささやいた。

「今夜は、ねむらせないよ」

「もっと満足させてね……」

私達は、体を寄せ合いながら再びキスを交わしていった。

二十九話

× × × (後書き)

× みっつ。

30話 ブルグネーション達の昼下がり（前書き）

新年1発目の投稿！

今年も気合入れて書くよ！

30話 ブルグネーション達の昼下がり

相対距離は約15m、剣を真一文字に構え相手を睨みつける。脈拍も呼吸もいたって正常、最初の頃は汗でびっしょりになってたっけ。私は重心を移動させ、前のめりになった反動で一気に相手との距離を詰めた。おそらくコンマ1秒を切った程度だろう。まだ練習を続けたいので余力は残しておかないといけない。

しゅっ

あまりに疾く、鋭すぎる一撃は空気の振動を殆ど起こさないことを私は経験上知っている。振り返ると丁度15m後ろに真つ二つにされた木材が地面に転がっていた。拾い上げて断面を確認してみる。まだ少しザラザラしているが、今日だけでかなり綺麗な断面図になってきた。

さてもう一回、と思ったが使える木材はもう残っていない。30本を切り落とすのは結構あつという間だったな。クエスト「年老いたきこりの悩み」と修行を並行作業で行っていたのだが、どうやら私の体力が勝っていたようだ。1度使っただけでフラフラになって倒れた2ヶ月前（こちらの世界の時間経過）と比べ、肉体のスペックはかなり向上したといえるだろう。

ひとまず練習を止め公園のベンチに戻ることにする。私を見て、みんなも休憩に入ることにしたようだ。

私の隣に史ちゃんがちょこんと座ってきた。一瞬、心臓の鼓動が跳ね上がったのを確認した。

昨日の出来事が頭を駆け巡る。昨日も家で史ちゃんとHなことをした。最近はキスするだけで体の芯から熱いモノがこみ上げてくる。

お互いの体を擦り付け合い、何度昇天したことだろう。あまりの快感にシーツの上で失禁してしまった時は、恥ずかしさで史ちゃんの顔を見ることが出来なかった。

夜になって、体を洗うために2人で風呂場に向かった。ソープの知識は無かったが、ここでの行為は私を快樂の虜にするには十分過ぎる代物だった。火照った体でまたベッドへ戻り、夜が更けるまで愛し合った。もう史ちゃんの感じる部位は全部知っているつもりだ。彼女の小さな体に手を伸ばし――

八丈さんと桜田さんも汗を拭きながらこっちにやってきた。今の高ぶる心情がバレないように、出来るだけ平静を保って声を掛ける。

「2人とも調子はいいの？」

「どんどん熟練してるよ。まるで自分の身体じゃないみたいだ」

「魔法ってすごいわねえ」

私達の進歩は、普通に地球で生きている限りまずお目に掛かれなものだ。ファンタジーの極みと断言して問題ないだろう。

更に、私達が醸し出す雰囲気にも変化が現れてきた。この世界に來た当初は戦士や魔法使いのコスチュームに違和感があったが、訓練を続けたおかげで今ではだいぶ馴染んできた。気持ち引き締まった感じがして「着せられている」感が薄くなってきた風だ。

「うりゃうりゃゝ（ふにふに）」

「ちよっと、琴目ってば！」

「あっはっは、ゴメンゴメン」

楽しそうにぴよんぴよん飛び跳ねる八丈さんは、少し大人気ないような気がするけど。というか初めの頃のイメージと随分違うな。

「ところで社ちゃん、あのバルサはもしかして全部？」

「うん。300本全部終わった」

「ホントに1人で終わらしちゃったんだ。やっぱ凄いわ社」

「意外と物足りない感じだけど」

私達はきこりの家に行つてバルサを手渡した。しかし過酷な労働の対価が15Gとは割に合わないような気がする。

アースフレンドでは資金関連にとてもシビアである。回復薬を定期的に買っているのは勿論、武器防具も使い続ければ当然ガタがくる。オンラインゲームでもその仕様だったが、戦闘中に鎧がバラバラに壊れた時は流石に焦った。上半身スリーブ一枚での活動は防御面でも精神面でも頼りないので、そのときは布を羽織り街へと戻ってしまった。

他にも気を回さなくてはならないことは沢山ある。PC操作と違い実際に活動するのだから、お腹も空くしトイレにも行きたくない。ここでは台所が無料で貸し出されているが、食材は自分で調達しなければならぬ。

また八百屋で野菜とか調味料とかが売られているのだが、これが意外と財布に響く。ハンター系のジョブになればフィールドの野菜を取れるスキルが覚えられるのだが、それだけの為に転職するのは甚だ疑問だ。

それから街のトイレは水洗式で、ウォシュレット機能が付いている近代的なものだ。その他細かいサービスを含め、こういった設備がきちんと確立されているから、女性の勇者も誘致できるのだろう。全くの余談だが、私は史ちゃんが厨房に立つときは彼女の一挙手一投足を出来るだけチェックしている。何とかしたいのだが、面と向かって味付けを注意する度胸が無い。せいぜい暴走しないようにフオローする程度だ。

「ランチ何食べよつか？」

「私はハンバーグが食べたいわー」

「今朝も肉料理食べてたし、体重増えても知らないよ」

「もう、琴目ひどいゝ・・・この声何かしら？」

私達は南東、ちょうどアゲラダム城下町の中央門へと耳を向けた。微かだが、何者かの叫び声が聞こえてくる。特撮には疎いが、ゴジラやキングギドラの鳴き声に近い気がする。要するに化け物だ。それが1匹だけじゃなく、複数以上の声が混ざり合っている。

「回れ右したほうがいいのかなあ・・・？」

「行くだけ行ってみてもいいんじゃないか。なんか面白いイベントかもしれないし」

「城門にモンスターが押し寄せるって、王国の末期だと思うんだけど・・・？」

「あれ珍しい。社が戦闘に乗り気じゃないなんてさ」

戦うこと自体は嫌いじゃないんだけどね。私達は叫び声が鳴り響く城門へと歩いて向かっていった。近づくにつれ、声の主の体躯が露になる。

どう考えても城壁より大きいモンスターが、街に入ろうと外で暴れまわっている。しかも何匹も。多分城の外には、もっと沢山のモンスターがひしめき合っているのだらう。想像するだけで頭が痛くなる。

城門越しに戦場を確認していると、八丈さんが「あー」と声を上げた。何か気になるものでも見付けたのだろうか？

「思い出した、そういやこんなイベントあったよ」

「え、イベント？」

「『モンスター襲来！ 絶体絶命のピンチ』っていう奴だよ」

正に、この刻を表す言葉として相応しいタイトルである。だが、そのイベントのことを上手く思い出せない。有ったような無かったような。そんな顔をしていると、やれやれといった感じで私に説明し始める。

「これは半年前の単発イベントで、アゲラダム城に押し寄せるモンスターを退治して食い止めるって話なんだ。ここ守りきれなかったら城が敵の手に落ちちゃうってんで、みんなで必死に守ったんだけど・・・」

「私は覚えてたわよ」

「うーん、忘れてる（笑）」

実は私、終わった話や興味の無いことはすぐに忘れてしまうという欠点がある。これのせいでクラスメートの名前や終了したイベントを思い出すのが非常に困難なのだ。何とかこの癖を治したいのだが、年々酷くなっている気がする。勉強とかは大丈夫なんだが。

城門の通用口から1歩進むと、そこは激烈な戦場だった。

「一矢！^{かずや} 回復魔法使って〜！」

「俺も動けないんだよ！ ねーさん悪いけどポーション使って！」

「この前ケーキ食べたかったから売っちゃった！」

「何でだよ！」

「やったーミノウロス倒したで！ そっちどーなん？」

「零花^{れいか}、ちよつと手伝ってくれ！」

「キミ男やのにしゃーないなあ」

「わー鎧が溶けちゃった！」

「スライムに突撃するからだろーが！ 一旦戻ってこい」

「ちよつと開拓してくるー！」

「^{あやの}まて綾乃、俺1人じゃうおああああ！...！」

何人が見知った顔ぶれが、既にモンスター相手に大乱闘を繰り広げている。敵は遙か地平線の彼方までびっしりと揃っている。敵同士の密度から推察するに10万匹を超えるのではと思う。それを数十人の勇者達が軽口を叩きながら食い止めているのだから驚きだ。というかみんな、こんなに強かったんだ。

「頑張つて練習したんだから私達も強くなってるわよね。ちよつと戦ってみない？」

「そだね。アタシらも参加しようか」

私達4人は手近なモンスターに突撃することとなった。まあ少しくらいなら別にいいかな。

31話 勇者達の拠り所（前書き）

＜報告＞ 柊↓ココアに変更

31話 勇者達の拠り所

確かにイベントと考えるのが自然だろう。理由は幾つか考えられる。

まず飛行系モンスターが1匹も見当たらないのが不自然だ。地面にうじゃうじゃ群がるのは全て陸上モンスターである。空を飛べれば城壁を越えて中に入るなんて簡単過ぎるからか。敵の目的である市街地進入を難しくしたい魂胆が見て取れる。

モンスターが中央門にしか居ないのもおかしい点だ。西門と東門を無視しているのは、イベントに興味が無い勇者が別の場所へ移動する為と考えるのが妥当だろう。

なにより実際に防げているのが1番の証拠だ。ひねくれた見解だが、10万匹のモンスターが、鍛えているとはいえ数十人の勇者ごときに後れを取るわけがない。対処できるように戦ってくれているのだろう。

一見して絶望的な風景だが、実際は管理側によって敵の種類や数、ゲームバランスに至るまできっちり計算された企画という訳か。

「どしたの社？」

「うっん、何でもない」

また深く考え込んでしまった、これも悪い癖だ。気を取り直して倒すことに決めたモンスターを観察する。

筋骨隆々とした体躯に闘牛のような巨大な角、金属製の三叉槍を構えているモンスター。デビルウォーリアと名付けられたその上級悪魔はネーミングに恥じぬ実力を持ち合わせる。遙か南に位置する『存在を忘れられた魔王城跡』に生息する奴らは、今まで私が戦ってきた有象無象の連中とは格が違う。

「……本当に戦うの？」

「大丈夫！ コイツは絶対倒せるからアタシを信じて」

八丈さんはそう言うが、ゲーム内じゃLV50でも苦戦する強敵なのに、何をどうやったら勝てるというのだろう。間合いを取って斬りかかるチャンスを探うが、上背もリーチも違いすぎて、どう動いても負けるイメージしか浮かばない。

「そんじゃ行くよ！」

「え？」

とか色々考えを巡らせていたら、何と八丈さんがデビルウォーリアに突っ込んでしまった。つられて私も飛び出してしまふ。

同時にデビルウォーリアも三叉槍を振りかざして襲い掛かる。あれだけの巨体なのに私より遥かに素早く動くのが信じられない。敵の攻撃が届く前に八丈さんは後ろに飛んで攻撃をかわした。咄嗟の判断ではなく予め敵の動きを読んでいたのだろう。人のことは言えないが、もう見ているこっちが冷や冷やする戦い方だ。

だが八丈さんが戻ってきて、何故か途端にデビルウォーリアが目を押さえて2、3歩たたらを踏んだ。その姿はまるで隙だらけで、威圧感を欠片も感じ取れない。

「よし、上手くいった！」

一体何が起こったのだろうか、八丈さんがデビルウォーリアに何かをしたのだろうけれど、私には何が何だかさっぱり解らない。

混乱する私のすぐ右隣から巨大な気配が突如現れた。この威圧感を知っている。あの魔法を見たとき、鎧の下に鳥肌が立った。

「……×××××、フリーズアタック！」

史ちゃんが指先から放った青白い光が命中し、赤いデビルウォーリアの身体を氷塊が包み込んだ。傍で見ている私まで震えてくる寒さだ。練習を始めた頃は拳サイズの氷を作るだけでヘロヘロになっていたのがドンドン上達していつて、ついに恐ろしく強い大魔導士へと成長してしまった。ただ私が知る限り、まともに使える魔法はフリーズアタックのみののだが。

今ヘロヘロになっているのはデビルウォーリアのほう。呆然と眺めている私に八丈さんが叫ぶ。

「社、トドメ刺して！」

「あつ、うん」

はつと気が付き、ダラリと垂れ下げていた剣を真一文字に構える。少し呼吸を整えてから一気に突撃して、逆袈裟にデビルウォーリアを斬りつけた。

「（疾風斬！）」

すぐに体勢を立て直して後ろを振り向く。少し浅かったかな、と思ったが大丈夫。しっかり絶命してくれていた。倒せてしまった、化け物みたいに強いモンスターなのに、私達の圧勝だなんて。

とりあえずみんなのところに走って戻る。八丈さんはガッツポーズをして喜んでいたが、頭から一筋の血が流れていて痛々しい。八丈さんは袖で拭っていたけど、すぐに桜田さんが駆け寄ってくる。

「琴目！ 少し待ってて。×××××……ヒーリング！」

私には理解できない魔法言語やらを宙に浮かべて回復魔法を唱え、みるみる内に傷口が塞がっていった。

「このくらい大したことないのに」

「ダメ。そうやっていつも無理するんだから」

「まっ、いいけどね。よっ」と

回復した八丈さんは私のほうを向いて、にっと笑いかける。

「どーよ、アタシら強くなったでしょ」

「びつくりしたよ。うーん、さっきのモンスターが目を押さえてたのは何で？」

「ああアレ、目潰し喰らわしたの。あいつ盲目が効くからさ」

デビルウォーリアが落としたアイテムを回収しながら八丈さんは教えてくれる。あのモンスターが盲目に弱いなんて初めて知った。咄嗟にそのこと思い出すなんてやっぱり凄いな、私には出来ない戦い方だ。

「史ちゃんもお疲れ。格好良かったよ」

「へへ・・・」

「私達、社さんのために頑張ったんだから」

「あっ！」

桜田さんのその言葉で私はようやく気付いた。

「どしたの？」

「いやまあ、チームプレイって大事だなってね」

今までは殆ど一人で戦ってきていたから、私だけの尺度でしか戦場の事を考えていなかった。

ある意味単純だった。自分より弱ければ勝てて、強かったらボコ

ボコにされるかその前に逃げる。小学生でも解る2元論だ。けど、史ちゃんも八丈さんも桜田さんも、本当に強くなった。もう私1人だけでみんなを守ることは無くなったんだな。

——私が一生懸命、頑張らなくてもよくなったんだな。

「もう1匹倒そうか。やれそうなモンスターは・・・」

「その前にお昼ごはん食べましょー。私もうぺこぺこよ」

「じゃあ、一旦戻ってまた来よう」

城門をくぐろうとして、同じように休憩に入ろうとしている知り合いに声を掛ける。

「園田くん達もお昼ごはんなの？」
そのだ

「ああ高杉さん。何かねーさんが急にプリン食べたいって言い出してさ」

「だってアタシ3時間甘いもの食べないと発狂しちゃうし」

「ねーさんのせいでコツチの世界で食ってばっかだしさ」

「やーん社、一矢がお姉ちゃんイジめる」
かずや

・・・良子いりよさんは黙ってたら美人なんだけど。なんだかTVに出てくる残念な酔っ払いみたい。

「自分で作つたら安く済むよ」

「琴目じゃん。だから私、料理苦手なんだって」

「なら今度教えてあげよつか？」

「料理とか、お湯沸かせればOKなんだって。ねー一矢」

「涙が出てくるよ姉さん。・・・っ何だ！」

突然フィールドから地面が割れるような音が聞こえた。見ると巨大なドラゴンが2人の山伏姿の青年と死闘を繰り広げている。さっ

きの音はドラゴンの一撃を剣で受け止めたときのモノのようだ。

「大江戸とココアか。また強くなったなアイツら」

「一矢^くプリン食^たべたい！プリン！プリン！プリン！プリン！プリン！」

「ああもう解った解った！」

そう言つて弟さんは、良子さんを宥めつつ喫茶店に歩いていく。たしか良子さんつて20才だったつけ。どうみても駄々っ子にしか見えないんだけど。

戻る前に大江戸先輩のほうを見たら、私達に向かってブンブン手を振っていた。後ろではココアさんがドラゴンの攻撃を受け止めている。え、大丈夫なの？　しかも結構囲まれてるし。

「先輩！遊んでないで手伝って下さいっす！」

「高杉さ——ん僕達格好良いでしょ——!!!!」

「どしたの？　　つてよく平気で言えますね！」

そうはいってもなあ、LV107のモンスターと戦ってるだけじゃん。別にこれは大変な事態じゃないし、あ。

「そっぴや来期のドラマ、まだチェックしてなかったな」

「先輩のアホ！」

誰がアホだ――！！！！
 ってツツコミはいいか。とりあえず今

はモンスター退治しないとね。剣を構えて舞の構えモドキみたいな？

「よっ」

思いつきりジャンプしてココアの頭を飛び越えマルスジュネラルドラゴンの右腕に着地して、その反動を利用して腕の先をバツサリ斬り落とした。そのままクルクル回転しながら右腕を輪切りにしていく。その後首を刎ねて、最後に胴体を蹴飛ばして終了つと。

「大したことないじゃん。あれ、ココアどこ行っただ？」

「遊ばないで下さい！ 今囲まれてるんすよ先輩！」

今度はバスカービル・ハウンドの噛み付き攻撃を盾で防いでる。そういや何かモンスターがゾロゾロこつちに来てるな。そんなに僕が魅力的なのかな？ ってあんな連中に惚れられても嬉しくない。可愛い女の子のモンスターだったら捕獲してペットにするのに。

「ああ多分、みんな昼休みだから僕達に集中してるんだよ。僕らもご飯食べに行く？」

「だからなんで先輩はこの状況で軽口叩けるんすか！？」

「あーでも剣は飽きたし斧に持ち替えようかな」

「何でもいいから早く来て下さい！」

せっかちなー。まあいいや、斧に持ち替えて僕はモンスターの群れに飛び込んでいく。あー八目鰻食べたいな。

31話 勇者達の拠り所（後書き）

ときどき考えませんか？ 自分の存在意義について
そんなの答えが有るわけないのに

次の話で第2章は終わりデス

三十二話 ある女戦士の戯言

「んで知ってる？ あのカリラン」

「大熊先生でしょ。うちのクラスじゃカリって呼ばれてるよ」

学年を通して音楽を担当しておられる大熊先生は、ゴツイ筋肉とむわっとした体毛で有名な方だ。とても明るく面白い人で、八丈さんと桜田さん曰く去年の文化祭でキングコングのコスプレをして生徒と漫才をしたそう。オチに「筋肉最高！！！」と叫んだのが印象的だと言う。

「昨日うちのクラスの女子がカリランに告白したんだよ」

「隣のクラスにも告白してた人がいたよ。やっぱり人気あるんだねえ」

イケメンとは程遠い彼だが、その豪快なキャラクターや分け隔てない性格からか人気は男女問わず高い。ちなみに彼は2児の父親であり、よく子供と休日どんな遊びをしているかの話をする。それも人気の秘訣だろう。

「あら、もう昼休み終わっちゃうわね」

「うん。じゃあ放課後また」

次の時間は現代社会だ。いつものように弁当箱を片付けて席を後にする。

廊下に出たところで八丈さんが少しよろめいた。どうしたのかと思ったら、そのまま桜田さんに寄り掛かって抱きしめられている。顔色がかなり悪い様子で、少し息が荒い。

「八丈さん大丈夫？」

「平気。ちょっと貧血かな」

たぶん女性の日なのだろう。私はそれほど重くないけど人によっては大変らしい。

「2人とも遅刻するよ。心配なくていいから」
「何かあったら言ってね」

八丈さん達が気になったが、私と史ちゃんとは5時間目の為に教室へ戻ることにした。

「うつ、ハアハア・・・」

「琴目、保健室はもうすぐよ」

琴目がどんどん辛そうになっていつてる。最近は少し落ち着いてるから安心してただけど……

「着いたわよ琴目。ベッドに下ろすわ」

「ありがと、由美子・・・」

琴目のカバンからお医者さんに貰った錠剤を取り出した。こういうやりとり、中学校の頃は多かったわね。カプセルを口に含んで、口の中で転がしながら溶かしていく。今の琴目は痙攣で上手く飲み込めないから、いつもこの方法を使ってるの。

琴目に顔を近付けて、口移しで薬を飲ませて、

「んっ」

「はぁ、ンッ」

舌が絡み合って、唾液で擦れて、体が熱くなって、

「あんっ、フウ……」

「おち、ついた？　ことめ……」

「なんとかね……」

こんな恥ずかしいところ、社さんや史さんには見せられないわね。
……あの娘達も似たようなことやってるんでしょうけど。

「からだは平気？」

「なんか、Hしたい気分かな……」

「もう、ここは学校よ」

全く、すぐそれなんだから。そんな軽口が叩けるくらいなら大丈夫よね。

教室に戻ろうと思って立ち上がったけど、琴目がズボンを掴んでくる……

「由美子、一緒にいて、不安なの」

「琴目……」

「もうアタシ、デッドライン超えてるんだよな……」

5時間目のチャイムが鳴った。いつもと変わらない日常、繰り返される日常。

私達を包み込んでくれないのは、ずっと前から知っていたもの。

三十二話 ある女戦士の戯言（後書き）

後書き

はいまあ、こんな感じで2章終了。どもつ、ファンヒューリックです。今後も章の終わりごとに後書き入れていく予定。

今の好みはRSのシック。なんだかんだ言って正統派ロリっついよねー攻略サイト見るかぎり後何人か女性キャラが出てくるみたいけどどういいう編制しよう？ 全員女性で百合帝国にしてグフフフ。一号？ そんな奴は雪とでもくつつかせておけい。でもピアー×白い鳥もいいよねーゲヘヘヘ。あれ何話してんだ俺。

えー閑話休題。

×××、28話に関しては驚いた人も多いかと思います。というか作者も予定外です。

実は『向日葵の冒険者達』は当初の構想からだいぶ離れたストーリーになっています。いやまあぶっちゃけ、こういう展開は全く考えてませんでした。

元々考えてたのは『2章以降、社は亜矢に惹かれていってだんだん恋仲になっていく。そしてそんな2人を淀んだ瞳で見つめる史。やがて2人が体を重ねる様になって、それを知った史は精神が病んでしまい亜矢を半殺しにして、狂気のままに暴走していく。その過程で琴目や由美子も悲惨な目にあって、最後には全員殺されて、史も社の亡骸を抱いて湖の底へ・・・』とかいう、言葉様もびっくりな鬱エンドでした。（実は私、鬱展開が大好きなんです）

そんな感じでカリカリ書いてた訳ですが、だんだん心境が変わってきたんです。上手く言い表せないんですが、社達に幸せになって

もらいたいというか、不幸な物語をブチ壊したくなつたというか。

5話のワイワイガヤガヤを書いている辺りからだっけ、そういう風に思ったのは。オンラインゲームは悲劇を生む場所じゃないんです。で、その結果が×××と。何だか全然答えになってないような気がします。

それから、件の亜矢について。さすがに女の子4人だけだと深みが出にくそうなんで投入。前述の通り本来は社と絡ませていく予定でしたが、設定変更の煽りを受けて亜矢も大幅にキャラチェンジしました。

まず予定よりウザさを大増量、んで相方に椀を採用してキャラクターを濃くしました。本編で色々はっちゃけたことをしてくれる奴ですが、はてさて今後どうなっていくことやら。

小説も半年以上書き続けてますけど、ホント全然慣れないです。こんだけ書いてると執筆の方程式の1つや2つ出来そうなのになさっぱり。毎回ヒイヒイしながら書いてます。いやまあどうなることやら。こんな情けない作者ですみません。

最後になりましたが、読んで頂いている皆さんに多大なる感謝の意を。どうか3章以降も付き合ってくださいさと嬉しいです。

箸休め キャラクター紹介？（前書き）

キャラクター紹介の第2段です。

（海神のイラストは申し訳ありませんが削除しました）

箸休め キャラクター紹介？

大江戸 亜矢 おおえど あや 17歳 新聞部（部長）

丸太橋高校2年生。取材のために学校や街中を駆け回っている為、実はかなりの有名人。また学童イベントや老人会の演芸にも積極的に参加しており地元の評判は高い。ウザイ奴だがイケメンなので女子からの人気は非常に高い。現在の職業は商人だが、少し前まで様々な職業を転々していた。

白狼道 翔也 しろろうだ しょうや 16歳 新聞部

丸太橋高校1年生。亜矢にココア呼ばわりされているせいで周囲にちつとも本名を覚えてもらえない哀れな青年。またいつも亜矢と一緒にいる為、腐った一部の人達から熱い視線を注がれている。本命は冬馬らしいが当人を目の前にすると緊張してしまう。職業はナイトで実力は勇者の中で屈指だが、亜矢の陰に隠れてイマイチ目立たない。イヌミミは亜矢の趣味。

冬馬 ふゆま ?歳 GM

アースフレンドの管理人をしている少女。三つ編み黒髪で眼鏡を掛けており、見た目は詩集の似合う文学少女である。しかし口が悪く、またかなり怒りっぽい性格。海神には常に何かしらの説教をしているが、傍目には漫才にしか見えていない。片手斧を携帯していて、戦闘の腕はかなりのもの。かつては異世界で魔王を倒し平和を導いたというが、真偽は定かでない。

海神 かいじん ?歳 GM

冬馬と共にアースフレンドの管理人をしている少女。白く長い髪をポニーテールで束ねていて、体格は小柄。趣味は冬馬にちよっかいを出すこと。かつて冬馬と共に世界を救ったと自負しているが、

2人の発言に矛盾がある。自他共に認める同性愛主義者で、冬馬と関係を持ちたいと思っているらしい。基本的には女性には優しいが、男性にはきわめて冷酷である。

・勇者達について

アースフレンドの管理人達によって選ばれた者達で、大体40名ほど。殆どが2人1組で、社達のように多人数でチームを組むケースは稀。選考は身体能力だけが決め手ではない。

アースフレンドに來ると身体が補正され、5体満足になる。例えば、綾乃は生まれつき重い病氣を患っていて寝たきりなのだが、こちらの世界では自由に動き回ることが出来る。

箸休め キャラクター紹介？（後書き）

次話から第3章がスタートします

今までとは少し毛色の違う感じかも？

＜第三章＞三十二話 今日から夏休み、とあるカウント（前書き）

さて第三章スタートです。

どうぞ読んでやって下さいです。

＜第三章＞三十三話 今日から夏休み、とあるカウント

随分と長い話だ。時間にして約9分。学期の区切りとはいえ、生徒に延々とありがたい言葉を述べるのは只の自己満足としかいえない。内容は夏休みの学生の在り方、学勉の継続の重要性、そして思い出作りの重要性についてだ。私が要約してやれば4分弱で演説は終了するだろう。

不毛な終業式が終了し、明日からいよいよ夏休みだ。他の生徒の中には長期休暇を利用して海外旅行を計画している人も居るかもしれないが、私達は毎日が異世界旅行だ。この点に関して我々勇者は恵まれているといえるだろう。

「行こ、社ちゃん」

「うん。八丈さんたちもう待つてるかな？」

私は勇者仲間の史ちゃんと一緒に手を繋いで階段を降りていった。校門のところに行くのと八丈さんと桜田さんがベンチに座って待っていてくれた。2年生はHRが早く終わったのかな。駆け寄ろうとして、2人があるジャージ姿の女子生徒と話しているのを発見してしまった。そして彼女は私を発見するとずんずんこっちにやってくる。今日は厄日だな。

「史く社く一緒に練習しようぜー」

「大蔵先輩……」

先日、ついに根負けした私は陸上部への入部を決めてしまった。毎度休み時間に突撃しては平頼みしてきて、両親を懐柔して、登下校までマークするその精神には感服するしかない。その後の陸上部関連でかなりのイベントが発生したのは言うまでもないだろう。

別に陸上が嫌では無いけど、私としてはアースフレンドの活動に力を注ぎたい所存な訳であって。

「あの、八丈さん達と帰る約束をしてるんで・・・」

「この2人にはしつかり話通したから」

「悪い、この先輩には敵わんのよ」

「よし行こうぜ皆の衆！」

もう知らん。結局私達2人は夕方過ぎまで走り込みやら高跳びを繰り返すこととなった。大体ケネニサ・ベケレやヘストリー・クルーテが日本にどんな経済効果をもたらしたんだか。そんな連中、はつきりいつて欠片も興味ない。

で、現在は4人で家に帰っているところだ。

「ごめんね、付き合わせちゃって」

「アタシずっと寝てたから。社達疲れたんじゃないの？」

「とりあえず、向こうの世界で寝ようかな・・・」

「んじゃアタシも寝よ・・・」

アースフレンドの1日はこっちの4分間だ、寝過ごしたところで全く問題は無いんだからホテル代わりにほとんどん利用させてもらう。かつての発言？ 日本には前言撤回という素晴らしい四字熟語があるではないか、活用しなくてどうする。

「それよか前に言ったじゃん、どっか行こうって」

「夏休みだけなあ、どこ行っても微妙な感じなんだけど」

「どこも新鮮味が無いのよねえー」

何しろアースフレンドで未知の体験をし過ぎているのだ。冒険し

たりモンスターと戦ったりは日常茶飯事だが、実は街の近くに海水浴場があつてそこで泳いだりすることも出来る。勇者達の要望を聞き入れていて開設されたらしく、最近は結構入り浸っている。

また街の裏には雪山がある。地理学とかは無視して、ここでスキーや雪だるまを作つて遊んだりもしている。

更に少し遠出すると火山の噴火や空一面のオーロラを眺めることも出来るのだ。こんなに恵まれた環境で過ごしていたら、元の世界が色褪せて見えるのも致し方ない。

よくTV番組で世界中の秘境を紹介したりしているが、かつてのように純粋な感動を抱くことはほぼ無くなった。前々から傾向があつたが、何故そのスポットを紹介するのか、スポンサーとの利権について、秘境のある国と日本との関係などを深く考えるようになってきた。こういう楽しみ方をしていること自体、枯れた高校生である証拠なのかもしれない、と勝手に自己評価してみる。相変わらず私は変な奴だな。

「それはともかく、新鮮味は無いよね」
「ともかくつてなんだよ」

結局夏休みもグダグダと過ごすのかな、と考えていたけど、桜田さんが妙案を出した。

「だったら、私達の家に来ない？」
「えっ、いいの」

思えば結構長い付き合いだが、八丈さんと桜田さんのことはあまりよく知らない。この前一緒に住んでるのは教えてくれたけど。

「でもうーん、明日何かイベントあつたかしら？」

「アタシが知るわけ無いって」
「まあとりあえず、メールとかで知らせるわ」

そんな感じで近々、桜田さん達の家遊びに行くことが決定した。帰り道の違う八丈さん桜田さんと駅前で別れ、2人で私の家まで歩いていった。

「今気付いたんだけどさ……」

「どうしたの？」

「私達、八丈さん達とメールアドレス交換してないよね」

「あつ、そうだね」

携帯電話機能を当然に感じ過ぎる弊害というか、単純に灯台下暗しと表すべきか。まあアースフレンドで簡単に会えるのだから別に悩む必要は無いだろう。今日も2人で私の家に向かう。そこで何をするかについてはご想像に任せよう。

「あんな約束してよかったの？」

「困ったわねえ。向こう3日間は報告会で宴会するでしょ、その後は特に無いわよね」

「何にしても親父さんに相談しないと解んないなあ」

つーか由美子があんなこと言い出すとは思わなかった。家に呼ぶとかばれたらどうしょ、あの2人がそんなんでも軽蔑する奴らじゃないのは知ってるけどね。むしろエルシャダイみたいに時間巻き戻して発言変えたいんだが。

「武雄さんはなんて言うかしら、あの人頭固いしねえ」

「まあ帰ってから考えよ、面倒事は後回し！……ファア」

今考えても仕方ないし。……にしても眠いな、電車の中でも眠ってたのに欠伸が止まらないや。

「由美子」

「家まで200mよ。もうちょっとだから」

「眠い……」

「全くもう、ほら」

由美子に肩を貸してもらって何とか歩けている。しかしちよつと前までこんなに眠くなることは無かつただけだな。後200mか、家がアタシらに近づいてくれたら楽なのに。

でも、そんなことを考える余裕があっただけマシだったかも。後になって回想すると。な、

三十四話 由美子さん達の家

……お。大きい。

私達4人が今いるのは八丈さんたちの家の前、いや屋敷というべきだろうか？ 事前知識が無ければ、たとえ旅館と言われても疑わなかっただろう。おそらく2人は良家のお嬢様なのだろうが、そんなそぶりは無かったから全然気が付かなかった。

「さっ、あがつて頂戴」

「あうっ、うん」

「あら、社さん緊張してるの？」

この状況で物怖じしない人はそうそう居ないと思うのだが。枯山水や灯籠が庭にあるのは2人にとって自然な光景なのだろう。

桜田さんが先頭に立って玄関へと連れて行ってもらう。門から家まで歩いて約1分、トイレの時とか間に合っただろうか？ 固定資産税とか高そうだ。

とか考えながら歩いていると、玄関を開けて優しそうなお婆さんが出てきた。

「由美子ちゃんに琴目ちゃん、その娘達がお友達かい？」

「ええそうよ」

「そうかね、2人ともゆっくりしていつてくれ。じゃあ婆ちゃん買い物に行ってくるから」

お婆さんは私達にニッコリ笑いながら挨拶して、門まで歩いていく。背筋が伸びていて後姿がとても若々しく、あんなお年寄りになりたいなと思った。

「あの人は湯原^{ゆはら} トネさんで、私達が生まれる前からこの家で使用人をしてたのよ」

「使用人さんかー」

ああいうのって本当にいるんだ。メイドさんとかじゃないだけ、まだ現実的だけど。

玄関扉から中に入り、こっそり心臓をひっくり返した。靴脱ぎ場だけで10坪くらいある。100足は入りそうな靴箱は、おそらく桐で出来たとても高級なもの。極めつけは壁に掛けてある巨大な富士山の水墨画ときた。間違いない、ここは旅館だ。修学旅行生が十二分に思い出を作って帰れるレベルだろう。

だが現実には、ここは一戸建ての住宅なのである。いや離れがあるから一戸建てとは違うのか、いずれにしても豪華な家であることには変わらない。

「すごい家だね」

「それ程でもないわよ。さあ、部屋に案内するわ」

それ程でもあるんだけど。長い廊下をどんどん進むが、想像以上に目的地が遠い。さっきからそれとなく襖の数を数えているのだが、ついさつき2ケタに達した。なるほど、格差社会が叫ばれるわけだ。歩いていると、十字路の所で大きなアンプを抱えた男の人と鉢合わせた。兄さんにそっくりだが、体つきはがっしりしている。

「っと、ゴメンゴメン。前見えなくってさ」

「気にしないでいいわ」

その人は、頬を掻こうとしてずり落ちそうになったアンプを慌てて「よっこいしょ」と抱えなおした。

「この人は夢前^{ゆめさき} 正人さん^{まさひと}。この人もお手伝いさんなのよ」

「ども、えーっと宜しくね」

「それ、どこに運ぶの？」

「北の大広間のほうにね。それじゃ！」

そういつて彼はアンプを担いで私達とは別のほうに歩いていった。けどなんだろう、彼の愛想笑いの中に何故か一瞬だけ違和感があったような気がしたんだけど・・・？

それはどうでもいいか。ところで北の大広間があるってことは、東西南の大広間も在るのかな。

やがて桜田さんの部屋に到着した。中に入ると、既に和菓子とお茶が用意されていた。みんなで座布団に座ったが、桜田さんがなんだか少しそわそわしている。

「みんなお菓子食べててね。私ちよつと用事があるから」

「うん。ありがとう」

そういつて桜田さんは部屋を出て行つた。八丈さんが取り皿を渡してくれたし、ちよつとその栗羊羹でも食べてみようかな。このお茶はもしかして玉露なんだろうか。いや流石にそれは無いか、でも味わつて飲んどこう。

さつきチラツと見えた2人の影。全くもつ、出てきちゃダメだつて言つてたのに！ たぶん中庭のほうに、あつ居た。

「武雄さん！ 顥子さん！」
「由美子か。友達はどうした？」

武雄さんは少しお酒が入ってるみたいで上機嫌な感じ。昼間から酔ってるだけで変なのに、人相は悪いし体は大きいし額に傷があるし。それで背中中の刺青を見られたらグランドスラムよ。

顥子さんも胸元を閉じて！　こんなの見られたら私達は終わりだわ……

「友達が来るから、この家のことバレないようにしようって言ったじゃないですか。何で目の前通り過ぎるんです！」
「ちよっとお酒取りに行つてただけなの。ヘーキだつてば」

顥子さんつてば、悪びれた様子が全く無いってどういうことなのかしら。この日の為に緊急会議までやったの覚えてないの？

「いいですか？　出迎えにトネさんと、廊下の途中で正人さんを会つてもらったんです。あの娘達、今とってもいい印象を持ってると思うわ。ここまで頑張ってきたのに、顥子さんたちに会ったら台無しになってしまいます」

「私つて、そんなに变なの？」

「……胸を丸出しにしてる人は普通じゃ有りません」
「由美子」

ふいに武雄さんに呼ばれたからびっくりしちゃった。この人の声って何となく大塚 明夫さんに似ててちよっと渋い感じ、って私つてば何考えてるのかしら。

「友達のところに行つてこい」

「え、でも・・・」

「心配かけちゃったな。気をつけるよ」

ああ、うん。……武雄さんに言われちゃった仕方ないわね。
とりあえず戻ろうかしら。

「もー、何で武雄のゆーことは聞くのー」

「年の功だよ。それよか、胸揉ませろ」

「やだーエツチ」

聞こえない振り聞こえない振り。どうか本当に、社さんと史さん
にはバレませんように。

しょうがないし、私は自分の部屋に戻ってきた。まあよっぽどの
ことが無い限り大丈夫よね。

「ただいま」。お菓子まだ残ってる？」

「いっぱいあるから大丈夫だって」

良かった。ちよつと心配してたのよね。でもこれじゃまるで私が
食いしん坊みたい。

残ってる座布団に座って、いくつか好きな和菓子をチョイスして。
やっぱり甘いものって最高よね。

「使用人さん、みんな優しそうな人達だったね」

「そうでしょ」。夢前さんって力持ちで頼りになるのよ。この間も・
・・」

今は、この時間を大切にしましょう。

三十五話 灰色の温泉

もう日も暮れて辺りは真っ暗だ。私と史ちゃんは夕飯もご馳走になつてしまった。夕食はカレイや松茸とかの高級食材がてんこ盛りでびっくりした。なんだかもう、申し訳ない気分というか、大変美味しゅうございました。

大広間の超巨大なテーブルを囲んで一緒に食べたのは、私達4人と桜田さんのお父さん、それと家に来たときに会ったお手伝いさん達とかで、全員で10人。もつと沢山居る筈なんだけど、他の人達は別の場所で食べてるのかな。

食べた後はお風呂に入った。こんなに広い浴場を、私と史ちゃんだけで独占するなんて贅沢すぎる。いつも1時間以上は長湯するのだが、妙に緊張してしまって30分で出てきてしまった。他にも入る人はいるだろうし、むしろ長すぎるほうが。

「あら、早かったわね。お風呂どうだった？」

「凄かったー。大きいし豪華だし」

「それ程でもないわ、普通よ普通」

本当に普通なのかも。何だか由美子さんの謙遜に馴れすぎちゃって思考が麻痺してる感じがする。きっと明日は家に帰って資本主義に絶望するんだろうな。

「そうだ、寝る場所言っておくわね。社さんは向かいの部屋で、史さんはその右隣ね。もうお布団は敷いてあるわ」

ほほう、寝る部屋はみんな別々に用意できるんだ。なるほど資本主義に、……もういいか。友達の家に誘ってもらったのに失礼なこ

とを考えすぎだ。

まだ時刻はPM10:30。もっとお話とかしたかったけど、八丈さんと桜田さんは用事があるとか言って別の所に行ってしまった。まあ明日もあるんだしいいかな。

史ちゃんと一緒の部屋で寝ようかなと一瞬考え、すぐに否定した。友達の家で盛^{さか}るなんていくらなんでも品性^{さか}が無さすぎる。

「っあ」

「社ちゃんどうしたの」

「ケータイが無い」

多分お風呂に入ったときに置き忘れていったんだろう。気付いてよかった。

「ちょっとお風呂場まで行ってくる」

「私も行こうかな？」

「それじゃ一緒に行こう。えーと右手だったかな」

「左だよ。その後突き当たりを右に行くの」

私達はこっそり襖を開けた。真っ暗な廊下を手探りで歩いていく。どこかに電気のスイッチがあるのだろうけど、私達にはよく解らない。

「前が見えないね」

「誰かに会ったらびっくりするかも」

「どんな人に会うだろ」

そんな話をしている内に目が暗闇に慣れてきて、結局私達は誰とも会うことなく風呂場に着いた。途中にうぐいす張りの廊下を歩い

てしまつて少しぎよつとしてしまつた。別にやましい事をしてゐる訳ではないので緊張する必要は無いんだけどな。

風呂場は男女の暖簾に別れていてまるで銭湯みたいだ。女湯をくぐり脱衣場に入つて、桜田さんに教えてもらった電気のスイッチを押す。久しぶりの光に少し目が眩んでしまつた。

「私の家つて、そんなに広いのかしら」

「そこそこなんじゃない？」

何だか要領を得ないわねえ。んんつ、と伸びをして持つてきたジュースのボトルのふたを開けた。それから露天風呂の縁に置いてるイチゴ大福に手を伸ばす。この瞬間のために生きてるって言つてもいいわね。

「寝る前に食べたら太るつてのに」

「いいじゃない、アースフレンドで筋トレしてるんだし」

「まっそうか。体洗おうつと」

琴目は私の腕を借りてゆっくり立ち上がる。ゆっくりゆっくり。段々と琴目の体が露になつてきた。肩、胸、胸の下の大きな傷跡。何度も見続けてきた傷跡、琴目の秘密、社さん達には絶対に隠し通したい秘密。正直、家のことなんかもいいから、これだけは絶対にばれてはいけけない。たとえあの娘達がどんなに優しくても。

琴目が立ち上がった瞬間、

脱衣所の電気が突然点いた。

うえ、眩しい！ 何で、何でなの、絶対に付けちゃだめってみんなに言ってるのに！ 暗闇に慣れてた私は思わず目を覆ってしまった。そのちよつとの間だけ、琴目のことを忘れてしまった。

琴目は光がとても苦手。普段は無虹彩用のコンタクトレンズを使ってるから平気だけど今は当然つけてない。

「い、痛アアアアアア！！！！！！」

「琴目！」

琴目は大きくのけ反って倒れ込んできた。必死に目を押さえて。私は抱き止めて必死に覆い被さった。

「痛い痛い痛いイイイイ！！！！！」

「しっかりして、私が影になってるから」

ガタツと音がして脱衣所の扉が開いた。中から出てきたのは、

「社さん、史さん！」

「どうしたの、琴目さん大丈夫！」

心配そうな顔をしてる2人。だけど今はこの娘達の事なんか考えられない。

「いいから早く電気消して！」

「で、でも琴目さ」

「消せって言ってるでしょ！」

なんなの、もう最低……

「ガハ、ゲホッ」

「琴目、っ琴目！」

……社さんが電気を消したのと、琴目が大量の鮮血を吐いたのはほぼ同時だった。

三十六話（回想）灰色の疾走

年端もいかない少女は受け取った電話の内容に頭が真っ白になった。

少女は父親と2人暮らしだった。母親は彼女を生んですぐに蒸発し、行方など知る由もない。欠落した家族は彼女にとって屈辱的なコンプレックスであり、やがて彼女の精神を潰していく要因の1つになった。気が触れている彼女が、理由もなく逆上して殴り掛かる事は決して珍しくない。

そんな彼女の支えが父親だった。近所に住んでいた野良猫を針金で絞め殺そうとしたときも、決して怒鳴り散らすことなく、抱き寄せて一晩中そばに居続けた。彼という立派な父親が居たからこそ、少女は壊れずにいたのかもしれない。

彼女に、父親が銃で撃ち殺されたと受話器の向こうの人間は伝えた。吐いた、吐いた、先程食べたクリームシチューを胃液ごとぶち撒けた。

嘔吐物の中でへたり込んだ彼女は、しかし決断は早かった。すぐに財布を持ち父親が搬送された病院へと車を走らせる。9才の少女とは思えない行動力は、2人暮らし故に責任感が強かったのと、父親の特殊な環境が身に付けさせたのだろう。

到着するや否や、タクシーの運転手に代金を押し付ける。1210円、無理矢理渡して3790円が戻ってきた。急いで車の扉を開け、病院の中に飛び込んで、待合室のナースに飛び掛って、叫ぶ、血が痛い。

「栄△薩権衡■際減才尾関係！」

「良書ノ利、靈佛菌レ階区他」

無我夢中でエレベーターに飛び込んでいった。壁に盛大に頭をぶつけた少女に、経験の浅い看護師はオロオロするのがピッタリだ。2つもそう思う。

313階の臨月を越えて、8回の父が居るフロアに辿りつく。どくどくと流れる額が鬱陶しい、血が痛い、ガンガンと扉を叩く少女を宥める扉を開けた狐は。

死ぬ

死ぬは私は知らない。だが0を表す心電図、白い顔は死ぬを表す、これは3段だったか？ 腕を打つ、返事はない前に戻る。叫ぶ、返事はない前に戻る。気が付いたら涙が流れていた。流涙流涙流る涙、転々轟。痛い、血液なのだ。

「貴様の父親が潰れた終わりは済んだか？」

熊が扉を蹴飛ばして低く唸った、父親の飼主だった、巨大な熊。笹の葉を啜えて巨大な熊は狐を噛み殺して退場させた。肉ナースは扉の外だ。

「八丈 メイイチの、八丈 琴目はお前だ」

「真」

「お前のお前が残した金はお前が出す出せ」

「嗚呼」

「だろうな。なら売れ、バイ菌。もしくは切り売りだ。どうだ素晴らしいだろう」

「放棄する、好好」

「最後の手段だ …… お前の父親と同じように、敵対勢力を始末す

るんだ」

「了解」

「よし、なら俺の家に来い。詳しい話はそれからだ」

熊は私の手を握り、家へと連れ込んだ。タクシーは、車ではなかった、自分の黒だった。

……昔の記憶だ、親父が死んだあの頃の。

夢でも見てんのか、はたまた走馬灯の類か。まあ何にせよ、気が狂つとるのは確かだな。『さよならを教えて』か？ おいおい洒落にならんぞ。

とりあえず自分をはつきりさせよう。アタシの名前は八丈琴目、性別は女で歳は16。んで今は由美子の家に居候してるつと。……

……よし、ある程度は正気だな。

えっと何だっけ。確かお風呂に入ってて、脱衣所がピカールって光って、それで倒れたんだっけ。てかアタシ血を吐いてたよね、肉体凄くヤバくないか。まあ由美子が傍にいるし大丈夫だよな。

そんなのはどうでもいいと。それよりこの夢だ。親父が殺されたあの日から、アタシの人生は大きく変わったんだ。ちょうど2ヵ月後だったっけ、誰かを撃ち殺したのは。

とつとと眼を醒ましたいんだけどな、もしくはノンレム睡眠に移行したい。……駄目だ、そういや最近夢なんざ見てなかったからな。見てても普通は無理なんだろうが。ゆめにつきの窓付きは脳科学の天才だったんだな。

お、何だか眠くなってきた。夢の中で眠るってのもおかしいけど、これはつまり起きるって事じゃないのか。

よし起きろ私の体！

• • • • •

[illegible]

•
•
|
•
•
•
•
•
|
•
•
•
•
•
|
•

|
 |
 •
 •
 •
 •
 |
 •
 •
 |

⋮

1

三十七話（回想）出会い

車に連れられて、底が熊の本拠地だ。父親が殺されたんだな、私
が父親だ。ばい菌と何が違うんだろうねええええ。

車を降りて、玄関に入って、廊下を歩いたら蠅螂がいた。

「お前に銃の使い方を教えるかしはら 檀原 武雄たけおだ」

この蠅螂の名前は武雄というのか。

「オイ」

そういつと蠅螂は私の胸倉を掴んで、思い切り壁へと叩きつけた。

「名前は？」

「・・・八丈琴目です」

私の返事が生意気だったのが気に入らなかったのだろう。蠅螂は
思い切り怒鳴り散らした。私の腹を蹴り飛ばすと、背中と右腕を勢
いで引つ張った。ぶちぶちぶち、筋肉が張り裂けて皮が破れる、間
接を踏み潰すとボキリともげた。くねくねと動く右肘から先はゴミ
箱へ捨ててしまう。それにマツチ棒を放り投げたら一瞬で灰になっ
てしまった。

髪を掴まれて、顔を何回も蹴られた。ぐしゃぐしゃと血が赤いな
あ。髪を耄り取られて、体が吹っ飛んでしまう。手の中に残った髪
をゴミ箱に捨てて、また髪を掴んで顔を蹴り始めた。赤くて照準が
合わないや。

鋸でギコギコどんどん切り刻まれてる。親指、人差し指、中指は
第二間接から一気に。足もギコギコ目もギコギコ首もギコギコ、ギ

コギコギコギコギコギコギコギコギコギコギコギコギ
コギコギコギコギコギコギコギコギコギコギコギコギ
コギコギコギコギコギコギコギコギコギコギコギコギ
てつくねにして吐いて海に沈められた。塊をハンドミキサーに入れ

「今日は終わりだ。寝ろ」

「……ありがとうございました」

訓練は終了。追放だ追放だ、今から牢屋だ衣食住。辻を二箇所曲がらされた所に居るはさる、もはや何だ。

「ごーん、鉄格子だ。トイレに行きたいなあ、桶も壺もそういつて
るではないか。パイプが郡谷理と扉を開けてあり。ばば、暗いなあ、
じんじんとする。痛いなあ、じんじんとげろ、げろげろげろア
ハハハハハハッハハハハハハハハハハハ

「どうしたの？」

「何、してるの？」

……突然声を掛けられた。アタシの事が気になったんだろうか？
見た目は私と同じくらいの女の子か、こんな長い髪の毛が大好きな男の子。

「トイレ」

「由美子もトイレ行きたかったの。怖いから一緒に行こ？」

……
ついていった。その子は緑色のパジャマを着ていた。髪の毛

は緑が混じった黒だった。

「・・・由美子さん？」

「そうなの。あなたは名前なに」

「・・・琴目」

「琴目さんって言うんだー」

……なんでだろ、初めて会ったのに緊張しないな。……トイレに着いた。意外と遠いところにあった。

「暗いわね」

「ゴメン、私の目のせいで」

「ううん、そうじゃないの。あのね」

……目の病気のことを話した。明るいものを見ると頭が焼けるから、いつもは特別なサングラスを掛けている。

「・・・アタシ、後で入るから」

「あつ、あの・・・」

「え？」

「いっしょに、おしっこして・・・」

「アタシと、2人で？」

「暗くて、こわい・・・」

……アタシ達と一緒にトイレに入った。暗いけど、夜目に慣れたからぼんやりと由美子の姿が解る。

「手、持ってていい？」

「・・・うん」

……由美子は私の手をぎゅっと掴む。その手は、細くて柔らかかった。

……反対の手でパジャマのズボンを下ろしていくのが見えた。暗闇の中で、しゅっしゅっと、布が擦れる音がする。

「んっ、っ、」

……ちよろちよると、おしっこが便器の壁に当たって弾ける。真っ暗の中で、その音はトイレの部屋中に響いた。

……音が収まって、由美子が腰を上げた。トイレットペーパーで拭いている。次はアタシの番。手を繋ぎながら片手でズボンとパンツを脱いだ。便座に腰掛けて、お腹の力を抜いていく。

「っん、っ、」

……じよろじよろ、さっきのより音が大きいような気がする。顔を上げると、由美子が私のおしっこをじっと見てた。少しだけ恥ずかしかった。……水を流して、2人で手を洗ってトイレから出た。

「琴目さんの部屋まで、一緒に行こう」

「うん」

手を繋いで、歩く。

そんな、そんな真夜中の初めまじだった。部屋に戻って、アタシは布団を被ってすぐに寝た。きっと明日は早いんだろう。

三十八話（回想）夜のパーティ

……由美子ちゃんの部屋に来た。こんこん、とノックする。襖が開いた。

「琴目ちゃん、入って入って」

今日はピンク色のパジャマを着ていた。

……あんまり音を立てないようにする。もし大人にバレたら、さつきみたいにまた殴られると思う。

可愛い部屋だった。TVでやってたアニメのおもちやが沢山置いてあった。あの髪の毛が青とピンクの双子の天使、名前はなんていうんだっけ。

「お菓子持ってきたの。たべよ」

「……ありがとう」

……由美子ちゃんは机の引き出しから、イチゴ大福とかチョコレイトなんかをいっぱい出した。……夜にこういうの、あんまり食べないな。欠片とかを落とさないように慎重に口に運んだ。

「……美味しい」

「良かったあ」

「由美子ちゃんは、甘いのが好きなの？」

「大好き。食べてると幸せになるでしょ」

昨日は暗くて解らなかったけど、この子は凄く体が細くて弱そう。肌も凄く白いし、あまり外には出掛けないのかもしれない。

ちよっと口の中が甘くなりすぎた感じ。ペットボトルからお茶を

コップに注ぎ込んだ。サイダーのラベルが張ってあったけど中身は茶色、たぶん作り置きのお茶なのかな。

飲んでみると少し変な感じがした。苦いわけじゃないけど何だろ
う。

「……由美子ちゃん、これ？」

「それ玄米茶なんだけど、苦手かな」

「うっん、美味しい」

……由美子ちゃんはカルピスソーダのペットボトルを袋から出した。たくさん持ってきたんだなあ。

何となく、改めて部屋の中を見回した。全体的にピンク色な感じで、テーブルとかカーテンも統一されてる。・・・なんか落ち着かないなあ。

「……由美子ちゃんって、こーゆー色とか好きなの？」

近くに置いてあった、ピンクの目覚まし時計を手にとってみた。

「うーん、パパが買ってきてくれるんだけど、あんまりかな」

「そうなんだ？」

「なんか気持ち悪いし。由美子は、みどり色みたいなのが好き」

アタシもケバケバしい感じがして少し嫌な感じ。みどり色もいいけど、アタシが一番好きなのは水色とかかな。

「……ここにあるの、全部パパが買ってくれたの？」

「うん。デパートで勝手に買ってくるのよ。由美子ピンクは嫌いなのに『女の子はピンク色がいい』って！ 頭が古いのよ」

……由美子ちゃんは一度もオモチャ屋さんに行ったことがないらしい。アタシは一回だけ親父と出掛けたんだっけ。その時に買ってもらったのは、

「手裏剣セツト？」

「忍者とかって、結構好きなの」

闇で生まれ闇に生きる、みたいで格好いい。ただし全部住んでた家に置いてきた。どうせこっちじゃ役に立ちそうにないし、必要なのだけ持つてくるように言われてたから。

……多分もう、家具とかと一緒に捨てられたのかな。それを考えると悲しい。

「琴目ちゃんのパパとママは、どんな人なの」

「親父は昨日殺された。母さんは、生んですぐどっか行つた」

「えっ、、、」

「親父はこの家に借金してて、返済の為に暗殺やつてた。だけど殺されたからアタシが払わなくちゃならない」

「……………」

「そこでこの家に来たんだけど、……由美子ちゃん？」

……顔を伏せてる。震えてる。……？

「由美子ちゃ、、、！」

……泣いてた。下を向いて、喉を鳴らしながら泣いてた。こんなとき、どうすればいい……？

「ひっく、えぐ、グス……」

「んっ、、、！」

……アタシは、由美子ちゃんを思い切り抱きしめた。
胸の中で震えてるのが解る。大丈夫、大丈夫だからと囁き続けた。
泣いてる子にすればいいことなんて解らない。

……視界がぼやけてきた。アタシも泣いてるのかな。どうしてだ
ろ、涙が止まらないや。

何でこんなに悲しくなったんだろう、今までこんなことがなかつた
のに。

「ひつく、エツ、、、」

「えっ、グスッ、、、」

……ああ、なんで、どうして、涙が止まらないんだろう？

「琴目ちゃん、平気？」

「うん」

……5分くらい泣いた。泣いて、ちよつとスッキリした。慰める
つもりだったのに逆に慰められちゃった。

「ゴメンなさい、聞いちゃいけないこと聞いちゃって、、、」

「そんなことない」

「だって、琴目ちゃんの家族は、、、！」

「由美子ちゃん」

……また涙目になった由美子ちゃんを、今度は優しく抱きしめた。

「親父が死んで悲しかった。でも、」

「えっ？」

「でも、由美子ちゃんに会えた」

アタシは言葉を続けた。

「昨日会ったばかりだけど、アタシは最高の友達が出来たんじゃないかなって思ってる」

「うん・・・」

「世の中辛いこといっぱいあるけど、悪く考えても仕方ないし。どうせだったらプラスに考えよ、そのほうが楽しいって」

世の中何が起こるか解らない。一寸先は闇っていう諺もある位だ。それでも胸の中にいる由美子ちゃんは大切にしたい。素直にそう、アタシは思った。

「……お菓子食べよっか」

「・・・うん、そだね」

再開した夜のお菓子パーティーは、だいたい40分くらいで終わった。途中、見回りの人がやってきた時は一緒に布団の中に隠れてやり過ごした。もうすぐ11時、自分の部屋に戻って寝ないといけない。

「由美子ちゃん」

「なに？」

顔を見ながらポリポリと頬を掻く。コレ、いざ言つとなると少し恥ずかしい。

「明日も来ていいよね」

「ええ、もちろんよ」

優しい気持ちになれた。……音を立てずに襖を開ける。見つからないように自分の部屋に戻らないといけない。

……部屋に着いた。アタシは布団を敷いて潜り込んだ。明日っていい言葉だ。早く明日の夜中にならないかな。明日は由美子とどんな会話をするんだろう。今から楽しみでしょうがない。

三十九話（回想）約束

……寒い、暗い、重い。

……アタシは、真夜中のビルの屋上でひたすら待ち続けていた。体内時計が正しければ今はちょうど0時くらい。このまま午前4時までターゲットが現れなければ退散だ。それはそれで殴られるだろうけど。

道路のほうに目を向ける。1時間以上前からここで監視してるけど全く誰も通らない。

銃を構え直した。左手で銃を持ち、両足で固定する。蟻螂に蹴り飛ばされてから右腕の感覚が無い。アンバランスな姿勢になってしまふのは仕方ないことだ。

……ダルい。死んだほうがマシ。

いつそ飛び降りてやろうか、そんなことを考えてしまった。地面はアスファルト、飛び込めば綺麗な薔薇が咲き乱れるだろうな。親父は人を殺しまくってたから絶対地獄に居るだろう。でもアタシはまだ1人も殺していないから閻魔がトチ狂って天国に送りやがるかもしれない。なら今の内に誰でもいいから撃つといたほうが保険になる？ ククク、それもまた面白いかも……

なんてな。

（死んだらあいつが悲しむんだよな・・・）

お菓子と緑色が大好きで、病弱であまり学校に行ってなくて、最近ちょっとお姉さんぶってて、でもからかすと頬を膨らませて、アタシの一番大切な、あいつ。

（由美子、あなたは・・・）

あなたは、今のアタシの全てなんだ。

「入るよ由美子」

「いらつしゃ、！ どうしたの顔！？」

あー、やっぱりソコ突っ込んでくるよな。口の周りは拭いてきたんだけど、さつき鏡で見たら割とエグかったし。

「今日も銃の練習してたんだけど、なんか要領が悪いつて殴られちゃった」

「あの人もう信じられない！ まあいいわ、とりあえずお菓子食べましょう」

由美子はパパに蠅螂の給料を下げさせるとか言いながらばくばく食べている。叶ったらまあ少しはスツとするけどさ。アタシはロールケーキを大きめに切ってお皿に盛った。中のクリームが抹茶味になってて美味しいんだよね。

「琴目は抹茶味が大好きねえ」

「世の中に抹茶ほど美味しい食べ物はないって。コレ誰が収めた奴なの？」

「確か大倉山さんだったかしら。あの人の家、和菓子屋さんやってるのよ」

「そいつまたお土産持つて来てくれないかな」

この辺りのヤクザの元締めである桜田 龍一^{りゅういち}、要するに由美子の親父はとても顔が広い。詳しくは知らないが国会議員の3割は桜田家の関係者らしい。家の事情とか興味ないけど、親父が生きていた頃に結構聞かされた。

桜田家の権力は絶対で、警察やマスコミなど思いのままだ。殺人事件の1つや2つ揉み消すなど造作もない。この家の連中を怒らせたら必ず殺される、だから絶対にバカな真似はするな。そう幼いころから言われ続けてきた。

とはいえ、死ぬ道程はバリエーション豊かなんだが。

「……由美子。アタシ明日死ぬかもしれない」

「……死なないで。必ず無事に帰ってきて」

ここに連れて来られてから2ヶ月間、アタシはずっと銃の使い方、練習をさせられた。朝早く起きて夜まで練習、もちろん学校など行っていない。アタシはどこか遠い親戚に引き取られた事になっている。

そして明日、ついに実際に人を撃ち殺す。見つかった時はビルから飛び降りて自殺するよう命令されている。捕まって自白などさせない為だ。

「アタシが死んだら、由美子は悲しんでくれるよね」

「琴目……」

この家の連中は、多分アタシが戻ってこなくても全く気にしないだろう。せいぜい鍛えた時間だけ損をした程度にしか思わない。

「アタシは、由美子の為だけに生きてる。由美子が、今のアタシの

「全てなんだ」

「まって琴目」

「アタシは、由美子の為だったら死ぬる、だから」

「琴目！」

由美子が大きな声を出した。一瞬外の人たちに聞かれたかと思つて冷や冷やした。

……あのときの顔をしていた。アタシの親父が殺されたつて言つたときの。

「死ぬだなんて、もう言わないで・・・」

「ゴメン、由美子」

「琴目は絶対に帰ってくるの。絶対に、絶対に、、！」

ちゃんと帰つてこよう。

またここで一緒にお菓子を食べて、話をしたい。だからアタシは、全力で生き残つてみせる。

「必ず帰ってくるから。、、あつ」

「琴目、どうしたの？」

ちよつと面白いことを考え付いた。

「んー、どうせだったらご褒美とかあつたら気合入るかも」

「ごほうび？」

何となく思いつきで言つてみたけど、これ結構面白そうだ。帰ってくるときの楽しみが1つ増えるし。

「ごほうびかぁ。どんなのがいい？」

「そうだな。……無事に帰ってきたらキスしてよ」

だいぶ前に見たデイズ二一映画で、戦場に行く恋人に言っていただけ。こっ恥ばずかしいセリフだな。

アタシは半分冗談で言っただけ、由美子は真剣な表情で答えた。

「解ったわ、キスしてあげる」

「えっ？」

「その代わり、絶対に帰ってきてね」

「あっ、うん」

受け入れられると思ってなかったので、妙な生返事になってしまった。その後はいつもと同じお菓子パーティーになったけど、何となく心がふわふわした感じになってしまった。ずっと頭の中で『キス』という言葉が暴れまわっている。

時間が過ぎ、そろそろ自分の部屋に戻る時間になった。明日は夜明け前に車でこの家を出発しなければならない。

……部屋を出ようとしたら、由美子にパジャマの袖を掴まれた。

「琴目、これだけは言いたい」

「由美子？」

「私は、貴女のこと——」

……風が動いた。

遙か眼下の地面で変化があつた。全身を黒服で包んだ男が2人、間違ひなく今回のターゲットだ。

ブレていた思考を正し、手前の男に銃口を向ける。肉眼で照準を定め、引き金を絞る。

ぷしゅっ

撃つた奴の額から血が流れ出ているのが見える。都合がいいことに死体がもう1人の男に倒れ込んでいった。狼狽するそいつに再び照準を合わせた。

「終わった、か……？」

作戦は終了した。後はここにアタシが居た痕跡を全て消して、蠅螂に迎えを用意してもらっただけだ。道具を片付けながら、でも頭の中では全然違うことを考えてた。頭の中でぐるぐるぐるぐる、結局今日は、ずっとこのことを考えてたな。

「（……由美子とキス？）」

四十話 (回想) k i s s (前書き)

注意！ 今回の話には濃厚な百合描写があります。それを踏まえた上で閲覧して下さい。

四十話（回想）kiss

銃とかを持つて蠅螂の用意した車に乗り込んだ。戻ってからの訓練などの予定を言った後はずっと無言だったが、これは機嫌の良い方だろう。アタシは家に着くまで約10時間、昼ごはんの弁当をはさんで眠り続けた。帰ってきてからの訓練では1度も殴られなかった。こんなのは初めてだ、アタシの腕が上達したのだろうか。

そんなこんなで、今は由美子の部屋の目の前にいる。襖を小さくノックした。いつものように、すぐに由美子が顔を覗かせる。

「ただいま。髪切った？」

「お帰り琴目。怪我とかしてないわよね」

「ちゃんと無傷で帰ってきたよ」

そう微笑みながら中に入れてくれる。いつものようにお菓子とかが用意されていた。

「そうそう、由美子は今日が誕生日なんだよね。現場で拾った石だけど」

「ありがとう！・・・緑色の、石？」

「一応洗ってあるから大丈夫だと思うけど」

「うん、嬉しいわ」

・・・あれ、何か微妙な空気になっちゃったな？ そりゃもうちょつと豪華なモノあげたほうがいいんだけど、アタシ一文無しだからなあ。

「いいや、お菓子食べよう」

「それより琴目」

由美子はアタシが目の中のワッフルに手を伸ばそうとするのを制してぐいっと顔を向けさせる。どうしたんだろ、いつもだったら「これ私の分」って仕分けを始めるのに。

だけど、次の由美子の言葉で理解した。

「約束、覚えてるでしょ」

「……キス？」

「そうよ、その為に美容院に行ってきたんだから」

はにかみながら由美子はそう言った。ふんわりと軽くウェーブが掛かった髪の毛がとても綺麗。いや、それだけじゃない。由美子の綺麗さはそんなもんじゃない。

すつと通った鼻立ち、大きくパッチリと開いたエメラルドグリーンの瞳、小さくて潤いのある唇。それらが互いに合わさって、まるで芸術作品のような容貌が生まれている。

雪のように白い肌や小さくて華奢な体は、ともすれば折れてしまいそうな、そんな儂げな雰囲気を漂わせている。それはひっそりと咲く一輪の百合のような、そんな由美子がアタシを誘うような瞳で見つめている。

……由美子は、こんなに可愛かったんだ。

「琴目、目を閉じて……」

「うん……」

言われるがままに目を閉じる。暗闇の中、由美子の顔が近づいてくるのが解る。甘い香りが漂ってきた。お菓子のような、シャボンのような不思議な香り。すぐそこに由美子がいる。もう少しまたアタシの唇が、

ちゅっ

……期待していたところとは別の箇所に感触があった。ほっぺに由美子の感触が残っている。

「はい。それじゃお菓子食べましょ」

……納得いかない。アタシが期待してたのはこれじゃない。

「どうしたの、琴目」

「これだけじゃ満足できない」

アタシはお菓子袋に手を突っ込んでいる由美子を抱き寄せて、むりやり唇を奪った。

暴れる由美子を押さえつけてキスし続ける。普段から訓練しているアタシは彼女の小さな体を封じるなんてたやすい。やがて諦めたのだろう、なんにも抵抗しなくなった。そのまま布団の中へと組み敷いた。

30秒くらいだろうか、ひとしきり満足してようやく唇を離れた。ねっとりとした汁が、糸を引いて繋がっている。

「キスなんだから、これくらいさせてよ」

「ハア、ハア……」

アタシの下で、由美子は荒く息が漏れている。その姿が色っぽくてもう一度キスをした。今度は舌を入れて唾液を沁み込ませる様に動く。由美子の目が涙で濡れていたが、かまわずに蹂躪し続けた。このときのアタシは獣だった。ただひたすらに、邪欲を由美子にぶ

つけていた。

嵐のような欲望が引いていったのは、1時間ほど経過した後だった。

「琴目え、もつとお……」

アタシの腕の中で、由美子は更なる刺激を求めるかのように体をくねらせる。いつの間にか、彼女はすっかり行為の虜になっていた。

「続きは今度ね」

「そんなぁ……」

立ち上がって部屋に戻ろうとするアタシを切なげに見上げる。由美子は殆ど全裸のような格好で、体中にアタシの舐め回した唾液がこびりついている。そのいやらしい姿に、再びむくむくと煩惱が湧き上がってくるを感じた。

それを必死に押さえつける。今は、我慢すべき時だ。由美子のパジャマのボタンを1つずつ付けていった。それだけで興奮する自分がいる。

「今日はもう遅いし、寝なくちゃダメだよ」

「うん、わかった……」

後ろ髪を引かれる気分で扉を閉めた。

自室に戻り、頭が冷えてくると自分の行動が異常だった事に気付

く。だがどうすることが出来よう？

この火照った体は正直すぎる反応をする。

今の自分には、再び訪れた欲望を抑えることで精一杯だった。

出会って2ヶ月、初めての由美子との行為だった。

そしてその日から、アタシと由美子の背徳的な夜が始まった。

四十話 (回想) k i s s (後書き)

次回も百合の予定

四十一話 (回想) 愛の交歓(前書き)

百合描写アリです。苦手な方は注意して下さい。

四十一話（回想）愛の交歓

こんこんと襖をノックする。この襖とどれくらいの付き合いになるだろうか。いつも叩いている箇所は垢で少し汚れている。もうすぐ年末の大掃除だし、もしかしたら張替えが行われるかもしれない。そのときは弔いの意を込めて御役御免をしてやるつもりだ。こいつには悪いが、アタシが求めるものは部屋の中にある。

由美子と初めて出会ってからもうすぐ1年が経とうとしている。この1年でアタシは15cmくらい背が伸びた。もし学校に行き続けていれば、体育で並ぶ時にかなり後ろのほうになっただろう。

一方由美子は会ったときと比べて殆ど変わっていない。本人曰く2mm背が伸びたらしいけど。でもちよつと元気のいい感じになってきたかもしれないな。笑顔も増えたしさ。

由美子が襖から、そつと顔を覗かせた。綺麗な深緑の長髪に大きくてつばらな瞳はそこの一般人とは比べ物にならない美しさを持ち合わせてる。白くて細い身体と合い重なって等身大の妖精のように見える。

アタシは素早く部屋に入り、彼女の顎を軽く上に向かってキスを奪った。たつぷり10秒ほど経った後で離し、じつと顔を見つめる。それだけで、由美子は耳まで真っ赤になって恥ずかしがった。このシチュエーションを、仕事の間ずっと妄想していた。……狂おしい。

「今日も可愛いよ、由美子」

「やあ、琴目え……」

始めてキスをしたあの日以来、アタシ達は淫らな行為に染まっていた。服の上から胸とかを触ったり、耳元で愛していると囁いたり、

それまででは考えられないことをしている。

小さい頃からアタシは精神的に病んだ部分があった。道を歩いている蟻の行列を1匹ずつ、何時間も掛けて延々と潰し続けたことがある。何かを痛めつけるときに強烈な快感を得ることが出来る。そういうったのを見込んで、連中はアタシを殺し屋にしたのかもしれない。

そんな倒錯的な性向は、由美子のカラダに向かうにつれ過剰な色狂いへと変化していった。

どれだけ卑猥なことをしてきたか、もはや数え切れない位だ。噛み砕いたお菓子を口移しで食べさせたこともあった。後ろから手を回し、全身を撫で回したこともあった。何十分も股間に電気あんまを続けておもらしさせたこともあった。

この間はキスしながら、体の敏感なところを指で休みなく責め続けた。あのときの由美子の嬌声を思い出すだけで体がじんじんと熱くなる。

とはいえ、実は毎日交わっている訳じゃない。それだと興奮が薄れてしまうし、何より病弱な由美子の体が持たない。仕事から無事に帰ってきた日のみ、行為するという約束だ。普段は清楚で可愛い彼女が、1ヶ月に何度かアタシの手でイカされる。はつきりいって洒落にならないくらい興奮する。

「じゃ、ズボン脱いで」

「う、うん……」

今からするのは『お互いの下着を交換』だ。1日中、直にアタシの股間に触れていたショーツを由美子が履くんだ。

パジャマのズボンを脱いだ状態でストップさせる。その格好で、足を大きく開くように言った。瞳に不安げな光が浮かぶ。少しでも躊躇する素振りを見せた後、おずおずと股を広げていった。薄緑の

ショーツが徐々に露になっていく。アタシは由美子の股間に顔を近づけた。

「クンクン」

「ちょ、ちよっと、嗅がないで、、」

おしっことか汗とかが混じり合った、筆舌に尽くしがたい芳しい香りが鼻腔をくすぐる。由美子にはお風呂から出ても下着を交換しないように言っていた。このパンツが1日中、由美子の恥ずかしい所を包んでいたんだな。

存分に堪能してから視線を上に向けて由美子の顔を窺う。羞恥で更に赤くなってる。元の白い肌が判らないくらいだ。

「ねえ、恥ずかしい？」

「恥ずかしいわよ・・・」

耳元で、腰を浮かせてと囁いた。布団とお尻の間にすきまが出来る。下着の腰に引っかかっている部分を摘み、ゆっくりゆっくり引き下ろしていく。……見えてきた。由美子の1番恥ずかしい敏感な部分だ。

「ほら、脱がせたよ」

「やんつ、、」

足首から下着を抜き取って、手にとって広げてみる。約束どおりずっと履いていたのだろう、内側のクロッチ部分がとても濃く汚れている。

「じゃ、アタシも脱ぐね」

同じように、アタシもパジャマのズボンをやつくりと脱いだ。昨日からずっと履いていた水色の下着が見えてくる。さっきの由美子と同じ、大きく足を開いたポーズをとる。さっきのアタシみたいに、由美子は股間に思いつきり顔を埋めて鼻を動かしている。

「……どう、アタシの匂い」
「すごく、えっち……」

由美子の手がアタシの下着を掴み、そのまま一気に引き下ろした。ちよつと乱暴な感じだ。

「せつかち過ぎない？」
「だって、焦らさないでよ……」
「ダメ、おしおき」

そう言つて、由美子の胸の先端をつまみ軽くこね回す。

「あひつ、あああつん！」
「ホラ、外に聞こえるよ」
「んっ、ムムムンッ!？」

体をのけ反らせて喘ぐ由美子の唇を奪い、声を封じた。その間も指は乳頭をしごき続ける。

……1分は経つただろうが、端正な由美子の顔はだらしなく舌を出して快感に悶えている。この乱れた姿はアタシしか知らない、アタシだけのもの。

不意に指を離して、別のものを掴む。

「……どうしたの？」
「イイこと思いついたの。あのさ……」

耳元であることを呟く。それを聞いた瞬間、由美子はびっくりした表情になった。フフ、アタシもよくこんな変態チックなこと思いつくよ。

さつき手に取ったアタシのショーツ。唾液で少し湿っているそれを由美子の頭に帽子のように被せる。
変態っ子の完成だ。

「私は、すぐお漏らししちゃう、えっち大好きっ子よ・・・」

由美子の可愛い口元から、品性の欠片もない言葉がつむぎ出される。

「なら、それに答えてあげないとなあ……………」

アタシも由美子のショーツを頭に被る。改めて自分達がえっちな格好してるんだと自覚する。だって下半身は裸で、頭にはお互いの下着を被っているのだから。

「由美子、大好きだよ、んっ……………」

「私もよ、琴目、あんっ……………」

キスをしながら、アタシ達は抱き合って布団へと倒れ込んでいった。

ほぼ同時刻。

夜も更け、真つ暗な廊下の中に1組の男女が座り込んでひそひそ会話していた。1人は屈強な大男、もう1人は着物の前をはだけた妙齡の美女。

「今日もやってるわね」

「いいのかオイ」

男の名は檀原^{かしはら} 武雄^{たけお}で、女の名は水谷^{みずたに} 顕子^{あきこ}。この家で2人を知らない輩は存在しない。仮にスパイやモグリだったとしても、桜田組のNO2とNO3を知らないで侵入する愚か者などいる訳がない。もうすぐ秋も終わり、木枯らしが吹こうかという時期にも拘らず2人の格好はいたって軽装だ。それでいて全然寒さをがまんしている様子はなく、傍から見ると自分の体調管理が異常ではないかと思ってしまうだろう。

「いいのよ蠅螂。若い娘のビアンは貴重なんだから」

「カマキリ言うな。確かに恋愛は自由だけだよ」

武雄はおどけた感じでひょいと肩をすくませた。ほぼ毎日彼から訓練を受けている琴目でも、こんなに気楽な彼を見ていない。元々彼はこんな性格だ。訓練のときだけ威厳の為に暴力的な性格を取っているに過ぎない。

顕子はさして気にするでもなく目線を向け続ける。その先にあるのは由美子の部屋。情事の真っ只中。

この家に琴目が来てから2日目、由美子は彼女を自室に招待した。武雄は捕まえて制裁しようとしたが、たまたま通りかかった顕子がそれを止めた。病気で籠りがちの由美子に友達が出来る良い機会だと。

やがて2人は性行為に目覚めていったが、顕子は止めさせようと

しなかった。寧ろ更に発展していくことを期待している節もある。武雄には理解できない感覚だろう。

「ったく、中で何やってんだか」

ときおり部屋の中からくぐもった嬌声が響いてくる。武雄は呆れ顔で、颯子は興味津々で耳を立てている。

「ねえ知ってる？ どうして同性愛が美しいのか」
「何だよ」

面倒臭そうに武雄は答える。颯子はうつすらと笑みを浮かべながら語っていった。

「男と女の恋愛だと、子孫を残そうとか、嫌でもそういう本能が関わってくるでしょう？」

「まあそうだよな」

「男女の愛なんて、所詮はDNAが作り出した偽物に過ぎないわ。でも、女同士だったら子どもなんて作れないじゃない。ピアンは純粹な愛の確認で、神聖な儀式なのよ」

「そんなもんなのか。……ファァー」

生あくびで答える武雄。彼にとっては永遠に興味の湧かない分野だろう。

「フフ。女同士って恐ろしいのよ。愛には際限が無いから、どこまでも一途になれるし、独占欲や嫉妬も凄いんだから。これ、友達の受け売りね」

「どうでもいい。それよか」

時計の長針はここに来てから一周を終えようとしている。もうそろそろ琴目が自室に戻る頃合だ。いつものように見つかる前に退散すべきだろう。

立ち上がるときも音を出さない。2人ともそれなりに隠密行動に長けているようだ。

「私達もしない？」

「生存本能に基づいてか？」

「ええ。遺伝子が作り出した、偽物の愛に包まれたSEXよ」

武雄と顕子は談笑しながらその場を離れていった。後から同じ廊下を通った琴目は、2人の痕跡に気付くことはなかった。

四十二話 (回想) ???<イラスト有り> (前書き)

イラストを追加しました。

四十二話 (回想) ??? <イラスト有り>

> i 2 6 8 0 1 — 1 4 0 9 <

…… 目覚めの朝は近い。

これで仕事は終了だな。組み立て式の狙撃中を解体しながらアタシは安息を吐いた。

今回はわりと楽な仕事だった。射殺を楽と言い切るのは罰当たりかもしれないが、それがなんだ？ 気に入らなければ地獄に突き落とすがいい。こいよ死神、撃ち落して心臓を抉り出してやるうじやないか。

このときのアタシは由美子の裸しか考えていなかった。明日は乳房の日、13歳になり、ブラジャーをつけるようになった由美子の胸を我が両手で蹂躪し尽くすのだ。ああ、どんな可愛い声で鳴いてくれるだろうか。つい口元に邪悪な笑みを浮かべてしまう。

それだけ緩んでいたのだ。人間誰しも、妄想に包まれていたら周囲に気が配れなくなるだろう？ ましてや今は仕事終わり、後は蟻螂の用意した車に乗り込むだけなんだし。

なに、今更アタシを笑い飛ばす事も無かるうて。そんな下らないこと1円の得にもならんのは自明の理なんだ。そうだと琴目。

結論から言おうか、別のビルからアタシを狙撃した奴が居やがったんだよ。んで撃たれたのよ、えーと5発だっけ6発だっけ？ 全部腹の辺りに命中させやがったんだ。そいつスゲー腕だよなw 傷口見てみる？ エグいぜー、p i x i vなら間違いなくR - 18 Gタグ付けられてるっつの。

ほれココだココ。胸の下辺りが捲れてるだろ、肋骨が数本イカレ
たんだぜ。知ってるか琴目、アタシの余命は３年なんだそうだ。お
前いくつ？　へえー１６歳。それ命日じゃねーかアハハハノ、ノ
ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ！！！！！！

夢の時間はもう終わり。

なあ破壊衝動。お前ずつと殺人したがつてただろ。知ってるぜー、人を撃ち殺すの大好きなんだろ！　パーンって頭とかが弾け飛ぶの見て興奮してたんだろ！！　人が死ぬ瞬間が大好きなんだろ！！！！　アタシもそうなんだからよ！！！！！！

オイ何とか言えよ。嫌いなのか、そんなお前はアタシが嫌いじゃないのか、今更世迷い事呟いたって誰もフォローしてくれないぜ。知ってるぜーアタシ、ピンクオークだったつけ。社が殺されそうになつたときテーマ興奮してただろ。吹き飛ばされて腕がボキッてなつて『もつと壊れる』って思つたんだろ。アタシや血が沸いたね。ああいう美人が陵辱されんのはたまらんわー何てつたつてお前はドSだな。

好きなんだろ殺すの。殴って蹴飛ばして張り倒して突き落として串刺しにして轢き潰して斬って叩いて粉碎して興奮して、刻んで膾にして喰い散らかして撃ち殺して弾け飛んで粉碎して強烈な味にブツ飛んで、撃ち殺して撃ち殺して撃ち殺して撃ち殺して撃ち殺して撃ち殺して！！！！！！！！

.....

無視すんじゃないよ。

おい teme 工巫山戯ふつけんのも大概にしろや。

おい、おい　おい！　おい！！　おい！！！！　ちょっと優しくしてやったら図に乗りやがって。アタシを無視するとどうなのか解ってるのか！！

.....

へえ、そういう態度取るのか。

いいぜ好きになよ。だけどこれだけは覚えとけ。

.....

「お前は精神崩壊なんだぜ。アタシがそうなんだからな！」

.....

			.	.
	.		.	.
	.	.		.
	.	.	.	.
		.	.	.
			.	.
		.	.	.
		.	.	.
			.	.
		.	.	.
		.	.	.
		.	.	.
		.	.	.
			.	.
			.	

四十二話 (回想) ??? <イラスト有り> (後書き)

今話で回想は終わりです

次話で現在に戻ります

四3話 ある日、あの私は海に沈みました<イラスト有り>

目蓋の奥が妙にむず痒かった。まるで誰かに掻き毟られたかの様に。

起き上がろうとするが、体が上手く動かせない。低血圧の自分にはよくある事だ。とりあえず目蓋を開けようとするがそれも上手くいかない。一体何だ、尋常じゃないくらいダルい。まつ毛の付け根がヒリヒリする。

「うつ……」

「琴目!？」

その声は由美子か？ 何だが頭がぐらぐらして、入ってきた音を上手く処理できない。

……何とか目を開けた。真っ暗な自室は目を閉じていた時と明度はさほど変わらない。16年もこの体と付き合つと目に頼らないで状況把握を出来るようになるもんだ。今、部屋の中にいるのは由美子と親父さんだ。

「気が付いたようだな」

低く唸るような、例えるなら熊のような声で呟いた。そういや初めて会ったときも熊みたいって思ってたんだっけ。親父さんはアタシが目覚めたのを確認すると部屋を出ていった。扉を開ける瞬間は目を閉じる。ただでさえ体が重いのに、光なんぞ見ちまったら気が狂うっての。

頭も冴えてきたし、そろそろ起き上がるか。今は何時だ、この部屋だとイマイチ体内時計が作動しないな。

「んっ、痛たたたっ！」

「琴目、大人しくしてて！」

ちよつと体を動かした瞬間、全身に痛みが走った。ちよつとまで、こんな激痛は暗殺やつたときに撃たれた以来だぞ。

落ち着いてから辺りを確認する。タオルとかの他に、うつすらと点滴や心電図みたいなのが浮かんでいる。そして今気付いたが、ここは自室ではなかった。

「……ベッドの上？」

「ここは病院よ」

そうか。そういえばアタシは風呂で倒れたんだっとな。

だんだん思い出してきた。突然脱衣所が明るくなって目がやられて、そうだ、血も吐いてた。

「……なあ由美子」

「なあに？」

「アタシってヤバイ？」

「……」

正直聞きたくないけど、現実は見据えんとな。全身を鈍く駆け回る痛みを感じながら由美子を見上げる。暗闇の中で、由美子の姿は全く確認できない。

「琴目、部屋の様子が見える？」

「真っ暗だから見えないな」

「この部屋は普通の明るさなの。……この意味、解るかしら」

だいたい解った。私は失明したんだな。

後から担当医に聞かされたのだが、アタシは光を見たショックで眼球が焦げてしまったらしい。こういうことが起こらないように今まで細心の注意を払ってきたんだがな。

「それから身体なんだけど……」

「ん？」

「転倒の衝撃で脊髄を損傷して、……首から下は動かせないそうよ」

「……………」

……。

たった1日。

それだけでここまで人生変わるんだな。昨日まで普通に生活できていたのにさ、あんまりじゃないか。

あれだけ人を殺してきたんだ。どうせまともな死に方はしないと思っていたさ。アースフレンドに召喚させられた時はこれが自分達への罰なんだって思った。あの世界で惨殺されること、それがアタシへの罪状なんだと思ってた。

だけども、いくらなんでも理不尽過ぎやしないか？

「アレ、持ってる？」

「持ってきてるわ。手のひらに乗せるわよ」

本当に乗ってるのだろうか。感覚は無い、ただひたすら体中に響く鈍痛が続くだけだ。アタシは多分あるであろうそれにいつものように祈りを捧げた。

ふと、さっきまで見ていた夢を思い出した。目覚めた瞬間に内容は忘れてしまったけど、何だかずっと誰かに語りかけられていたような気がする。

「おー、やっぱコッチだと身体動くな」

「綾乃さんが言ってたのって本当だったのね」

今いるのはアースフレンド世界。今の発言で理解できると思うが、こっちにくると怪我や身体障害もなんのそのなのだ。アタシ達は高い丘に登り原っぱで横になった。まだ日が昇ったばかりで、気温は少し低めだ。今のアタシ達は半袖なので少し肌寒い。

ちなみに綾乃とはコッチの世界で猟師のジョブに就いてる娘で、よく父親と喫茶店で話している姿を見掛ける。母は彼女が生まれてすぐに蒸発してしまったらしい。アタシン家と同じだな。

父親の名前は師野村^{しのむら} 芳樹^{よしき}。防具職人でありアタシ達もよくお世話になっている。彼は娘の医療費のために24時間全く休み無しで働いているらしい。ここでの休養が無ければとくに過労死していただろう。もしアースフレンドの管理人に目を掛けられなかったら、……いや止めよう、そんな話はどうだっていい。

「由美子、そっち行くね」

「こっちも暖かいわよ」

寝たままゴロゴロ転がって由美子に近寄った。これが向こうじゃもう出来ないんだな。

その日は誰に話しかけられることも無く、アタシ達はずっと丘で憂鬱な時を過ごしていた。気付いたことが1つ、人間は本当に絶望的になると何も喋れなくなるらしいよ。

> i 1 9 5 3 7 — 1 4 0 9 <

四十四話 貼り付けられた告白

セミは夏の風物詩として名高いが、私には彼らの行動原理が理解できない。わざわざ大声でわめき散らすより、もっと効率のいいナンプ方法を遺伝してこなかったのだろうか。あんなことやってるから外に出て2週間かそこらしか生きられないんだよ。

まあセミ達も良かれと思ってこの進化過程を選択したのだろうし、他種族である我ら人間がどうこう言う筋合いは無いんだろう。地中に7年か、どんな気分で過ごすのだろうな。

夏休みが始まって大体2週間くらいが経った。

宿題は貰ったその日に全て片付けた。正確にはこの世界の1日基準で、という但し書きが必要だ。読書感想文で指定された本は既に内容が頭に入っていたし、工作は材料やカナヅチが向こうで簡単にしかも格安で手に入るので楽だった。

自由研究は様々な食材が腐敗していく様子を観察してノートに記述していった、それを4人の共同研究ということにした。当初は教会で実験しようと思ったが、兄さんに見つかってこっぴどく怒られてしまったのでドレッドノートさんの家で決行した。骸骨はブツブツと文句を言っていたが、実験中は私達が食事の用意をするという条件で丸く収まった。

今日は久しぶりに史ちゃんが泊まりに来る。その為に昨日から色々と準備をしていたのだが、ジュースを揃えておくのを忘れてたので急ぎ足で近所のスーパーに向かっている。

彼女の両親は娘の外泊に積極的だ。昔から史ちゃんは友達が殆どいなかったようで、私達のような仲の良い女の子が出来たことをとても喜んでくれた。

少し前に史ちゃんの家遊びに行った時は家族総出で迎えてくれ

た。「ウチの史とずっと友達でいてやって下さい！」と母親に手を握られながらお願いされたときはちょっとびっくりした。まるで嫁に貰っていくみたいじゃないか。

というか現実には夫婦の営みのような行為をしているというのだから洒落にならない。泊まる度に、娘が私と同性愛行為をしていると知ったら何と思うか。

……そこまで考えて少し気分が沈んだ。だって同性愛だろう、こういう言い方は好まないが要するにレズだ。いつまでもこの関係が続くなどと幼い考えは持っていない。いずれ私達は引き離される運命にある。

4人で初めて会ったとき、質問コーナーで八丈さんに好きな男子がいるかと聞かれた。そう、普通好きになるのは異性なんだ。それが一般的な感覚だ。私達の関係が世間に知れたら、間違いなく奇異と嫌悪の視線に晒されるだろう。私は史ちゃんを愛していて、それは絶対に揺るがないと思う。だけど、誓いを貫いていった先にあるのは不幸だ。

史ちゃんの幸せをどうやって守ればいい？ 答えの無い問題が頭を駆け巡る。私は女の子として、女の子の史ちゃんと添い遂げたい。こんな奇妙な発言に誰が耳を傾けるだろうか。

ふと顔を上げると、そこは見覚えのあるバス停だった。ここからバスに乗って桜田さんの家に行ったんだ。

……八丈さん、大丈夫なのだろうか。大浴場で八丈さんが倒れ、数分と経たないうちに女性の看護師やら医者の人がやってきて車で病院へと運んでいった。私達も付き添いたかったが、桜田さんに止められてしまった。あの時の桜田さんはいつもと違ってとてもピリピリしていて怖かった。

次の日、アースフレンドに行ったら当たり前のように八丈さんと桜田さんが居た。4人で食事をしてクエストを受けて。普段と変わ

らず、どころか何も無かったかのようにけろつとした表情だった。あれからどうなったのか尋ねるがいつも適当にはぐらかされてしまう。確かにあまり言いたくない事なんだろう、家族のプライベートルな話題なんだ。それにしたって私達は仲間じゃないか。少しは頼ってくれてもいいはずだ。それとも、そう思っているのは私だけなのか？ 所詮は行きずりで一緒になっただけなのか。

止めよう。何だかどんどんネガティブな発想になってしまふ。落ち込んでウジウジ考え込むなど私らしくない。

「えいつ！」

前方に向かって勢いよくパンチを繰り出した。血を狙って近づいてきた蚊を発勁で弾き飛ばす。

なるようになるさ。八丈さん達だっていつかちゃんと事情を話してくれると思うし、私が気にしたってしょうがない。今はとりあえず、どんなジュースを買うかを考えなくちゃいけない。

また前方から蚊がやってきた。それも2匹だ、さっきより力を込めて攻撃しないと。と黙っていたら後ろから肩を叩かれた。

しまった見られた。道端でいきなりパンチを繰り出すなんて、向こうは変な女子高生だっと思ってるかも。

恐る恐る振り向いたが、相手を確認して安心した。こんなところで会うなんて、彼はこの近くに住んでるんだらうか。

「ハロー高杉さん。こんなところで会うなんて奇遇だね」

「お久しぶりです先輩。あの、見てました」

「高杉さんにもお茶目なところがあるんだね」

あれをお茶目と言い切るか。まあそういう風に捉えてくれてよかった。こういうあっけらかんとした性格だから人に嫌われにくいのかな。今日の彼の服装はジーパンに黒のタンクトップ。こうやって見ると筋肉質だな、私みたいに運動部とかから勧誘あったと思うんだけど。

「大江戸先輩はこの辺りに住んでるんですか？」

「ううん、こつからバスで5区間向こつの花右京^{はなみぎやう}つてとこ」

知ってる。あそこは由緒あるお金持ちの人が多いいんだっけ、たしか昔は豪族が支配してたとか何とか。流石に桜田さんのところと比べちゃ駄目だけどこの人も良い家持ってるんだらうな。

大江戸先輩は右ポケットに手をつ込んだまま話を続ける。

「実はさ、今日は高杉さんに会って話がしたいと思ってさ」

「私に用ですか？」

「高杉さん、僕と付き合わない？」

……えっ？

その、あの、……えっ！？

「わ、私と？」

「うん。僕と高杉さん」

「へっ、あ、あの……」

「前から高杉さんのことが好きだったんだ。だからさ、僕の彼女になつてよ」

うおう、かかか彼女！？　つまりは何だ、その、大江戸先輩は私のことが好きってことなの！？　ってことは今まで私と話をしたり、一緒にごはんを食べたりしてたときも、私のことを思ってたってことになるのか。大江戸先輩が！？

「ど、どうして私が」

「高杉さんって凄く美人じゃないか。例えるなら小野小町やクレヲパトラが裸足で逃げ出すくらいにさ」

喩えが抽象的だけど、言いたいことは何となく解る。

「濡れたように黒く長い髪、パツチリと大きく開いた瞳、くつきりした目鼻立ち、プツクリとした、まるでキスしたくなるような唇。どれ1つ取っても世の女性が欲して止まないものばかりさ。社さんはそれを全て持つてるんだよ」

「そんな、褒めすぎですって……」

「まだまだあるよ。背が高くてスタイル抜群で、僕が芸能事務所の人間だったら真っ先にモデルにスカウトしちゃうよ。それに頭も良くてスポーツ万能、料理も上手で器量良し。世の全ての男が社さんを恋人にしたいと思ってるさ」

どうしたものか聞いているこっちが恥ずかしくなるような賞賛の嵐だ。そんなに彼は私のことを思ってくれていたのか。

「君達はよく4人で一緒だろ。僕のクラスの奴が言ってたんだけど、可愛い女の子が集まって目の保養になるなあってさ。美人は美人を呼ぶってことわざ無かったっけ？　おっと、他の女の子を褒めるのは失礼だったかな」

そういつて先輩は苦笑いをする。

「なにより、僕は社さんの内面の美しさを知っている。アースフレンドで知り合って、君の芯の強さや柔らかさを肌で感じる事が出来た。君は僕にとって最高の女性なんだ」

「あ、ありがとうございます」

「学校の男連中はさ、君の魅力の半分も知らずに告白してるんだから、見てる僕のほうとしてはイライラが頂点になりそうだね。そんな奴らに、もし社さんが取られちゃうかもしれないなんて、考えたくもない」

「いえ、でも……」

「もしかして、もう好きな男が居るとか？」

言えない、私は史ちゃんが好きだなんて。普通女の子は男の子を好きになるものなのに。さっきまでうるさかったセミの鳴き声が遠く響いている。

どう返事をすればいいかを悩んでいて少し注意が散漫になっていた。私の態度の悪さに業を煮やしたのだろう、彼は私を肩に手を回した。

そして私を思い切り抱きしめてきて、バス停のベンチに押し倒した！

「ひゃあっ！」

突き放そうとするが、がっちりと押さえ込まれてしまい動けない。この人は見た目以上に力が強い。腕を押し上げられ、バンザイの格好をさせられた。顔が近づいてくる。私は何も出来ない。

頬にキスをされた。鳥肌が立った。

「僕と付き合うんだ。いいよね」

齒がガタガタと震える。怖い。何も言えない。

私を押さえつけたまま、彼はポケットに手を入れ何かを取り出した。メモの書かれた紙を、私の手に握らせた。

「それに電話番号とメルアド書いてるから、話したくなったら連絡してね。こっちから知らせることあるかもしれないからケータイに登録して」

そして、彼は私を解放して立ち上がった。口元に笑みを浮かべて。

「それじゃ僕もう行くね。今度はアースフレンドで会おう、社ちゃん」

そう言って彼はこの場を離れていった。私はベンチに寝かされた姿勢のまま、起き上がることが出来なかった。身体の震えを、ずっと取り除くことが出来なかった。

四十五話 響く潮騒（前書き）

<報告> 栞↓ココアに変更

四十五話 響く潮騒

私の名前は大道寺^{だいどうじ} 史^{ふみ}。

ここから歩いて18分くらいにある、丸太橋高校っていうところに通っている。誕生日は9月8日で、その日を過ぎると16歳になる。

高校に入って、私は白馬の皇女様に会った。王子じゃなくて皇女、なぜなら社ちゃんは女の子だから。

社ちゃんは私のクラスメイト。一緒に昼ごはんを食べたり、登下校をしている。私達がとっても仲良しなのはクラスのみんなが認めること。社ちゃんの本当の魅力を私が引き出したからだ。だけど社ちゃんと私には秘密がある。この秘密、私達のほかには八丈さんと桜田さんくらいしか知っていない。

社ちゃんとは恋人同士で、エッチしたことがある。はじめてはアイスフレンド、骸骨の家のベッドだった。社ちゃんは眠ったまま私が脱がせて。すごく恥ずかしいことをした。次の日には一緒にお風呂に入っただっけ、あの時はずっと社ちゃんのことを見ていた。目が会った瞬間はドキツとしちゃった。

天にも昇れる気分。だって高校に入ってからずっと好きだった社ちゃんと交わることが出来たんだもの、これ以上の幸せは無いと思っていた。

これ以上があつた。社ちゃんが私を抱いてくれた。しかも、社ちゃんから誘ってくれたんだ。その日社ちゃんと私はハダカになって一晩中愛し合った。エッチなところを擦りつけて、舐めて、もみもみして、キスして、吸って。

現実のことなのかなって思っちゃった。そんな都合のいい物語が

あるのかなーって。夢から覚めたらいつもの自分の部屋、なんて残念な結果が待ってるかもしれなかった。そうになったら私の負け。

目を開けると、社ちゃんが優しく微笑んでくれた。綺麗な綺麗な社ちゃん。大切な社ちゃんは私だけを愛してくれた。あの日から、社ちゃんとは本当の恋人同士になれた。なんて幸せで、希望に満ち溢れているんだろう。

今日は、社ちゃんの家で8日ぶりにエッチができる。邪魔をする鬱陶しい人はいない。

毎日会ってるけど、やっぱりエッチをしない日は身体がウズウズする。どうしても我慢できない日は自分でするしかないのは残念。頭の中で社ちゃんのことを考えながら、揉まれてる気分で小さな胸を刺激して、股間をまさぐって。だけどそれだけじゃやっぱり満足できない。やっぱり生身の社ちゃんじゃないと達することができない。

そんな訳で社ちゃんの家の前で待ってるんだけど、どうしてか社ちゃんが帰ってこない。もう30分も経ってるのにな。先に中に入っていようかな、と思ったけど鍵が掛かってた。

携帯電話は電源を落としてるみたいで返事は全然無い。社ちゃんはケータイに頼りすぎるのは文明社会の弊害だとか言ってたけど、とにかく今は社ちゃんの声が聞きたくて仕方ない。

なんだかお預けされてる犬みたいな気分。今すぐ迎えに行きたいけど、どこに買い物しに行ったか解らないし、すれ違いになったりしたらいやだ。大人しく待ってるしかないのかな。

しばらく悶々としてたんだけど、道の向こうからついに社ちゃんが戻ってきた。アースフレンドに行くようになって、とても視力が上がった私の目には、遥か遠くから私のほうに向かってくる社ちゃんの姿がはつきりと映ってる。社ちゃんのところへ駆けていった。

さつきからずっと待ってたんだ、すぐにでも抱きしめてもらってギョツしたい。

100mくらい走ってからだろうか、うつすらと見える社ちゃんの顔が暗く沈んでいるように見えた。どんどん走り寄っていった、それがただごとじゃないことに気付いた。

あのときの記憶が蘇る。ピンクオークに半殺しにされて、むごたらしい姿になった社ちゃん。

社ちゃんの所に近寄った。目の舌には大きなクマが出来ていて、顔は血の気が失せたように真っ青。社ちゃんをそっと抱き寄せた。その身体が、とても冷たくて震えているのにびくりした。いつも格好良くて凛々しい社ちゃんに、一体何が起こったというのだろうか。

社ちゃんを支えて家の中に入っていた。ついさつきまで考えていたことなど完全に消し飛んでしまっていた。

「社ちゃん、落ち着いた？」

「ああうん、まあ少しは」

今居るのは社ちゃんの部屋。社ちゃんはベッドで横になって、向かい合う形で私は椅子に座っている。帰ってくるなり社ちゃんは台所の蛇口をひねって、立て続けにコップ2杯の水を飲んだ。途中で喉に詰まって、ケホケホとむせ込んでいた。

「ねえ、社ちゃん」

「……ゴメン、今ちょっと疲れてて」

外で何があつたのか聞いた。けど、何も話してくれないままだった。

「スウ、スウ……」

「（社ちゃん、どうして？）」

張り詰めた緊張の糸がプツリと切れたんだろう、社ちゃんは深い眠りについてた。いったい出掛けているときに何が起こつたのか、すぐ知りたいと思った。どんなことでも人に話せば楽になる。悩みを共有すれば、つらいことも半分になるはずだ。

だけど、何も話してくれないままだ。

「（私じゃ、ダメなの？）」

私には相談できないことなんだろう。たしかにあんまり言いたくないことなのかもしれない。昔の私にも、誰とも話をしたくなくて部屋に閉じ籠もっていたときがあつた。1人で居ることが答えだと思っていた。

だけど、社ちゃんと私は違う。だって恋人同士だから。だって2人で何回も身体を交わったから。社ちゃんと私はずっと一緒に居なくちゃいけない位、とても愛し合ってるんだから！ その辺の上っ面だけの友達やカップルなどとは格が違う、社ちゃんと私は絶対なんだから！

——でも、本当はそうじゃない？

相談しないのは、もしかして、社ちゃんにとって私なんかどうでもいい存在だから？

社ちゃんを愛してるという、この気持ちは誰にも負けない。だけ

ど、果たして社ちゃんはどう思っているだろうか？ 頭の中で勝手に妄想が蠢いて、醜く太った怪物を作り出していく。

本当は、社ちゃんは私のことなんか大嫌い。こんな口下手で、社交性が無くて、根暗で貧相な体付きの私なんか見たくもない。ただアースフレンドで知り合ってしまったから、仕方なく一緒に行動してやってるだけ。社ちゃんは、本当は私のことを軽蔑してるんじゃないだろうか？

気付かない内に、顔は涙でいっぱいになってた。ハンカチを取り出して目を拭くけど、どんどん溢れ出してくる。悲しみが、全然止まらない。

悲しかった。情けなかった。その後、私は社ちゃんが寝ている傍ですっと涙を流し続けていた。社ちゃんはこんなに苦しんでいるのに、私はなんて自分勝手な人間なんだろう。

ほぼ同時刻。

社と史が家に帰ってきて、亜矢がバスに乗って家に帰ろうとしている頃、翔也しょうやはかつてない危機を感じていた。

「おいココア」

「あ、あの、なんスか？」

ココアと呼ばれた青年は、直立不動で目の前の少女を凝視していた。額からは冷や汗を大量に浮かべ、口元は緊張のあまり引き攣った笑みを浮かべてしまっている。

2人が向かい合っているのは、翔也が家族と住んでいるマンション

ンに隣接してある公園だ。30分ほど適当に散歩して、さあ家に帰ろうとしたときに彼は呼び止められた。振り返り、相手を確認すると彼の瞳は大きく見開かれた。その時の彼の脳内では、警報機がけたたましく鳴り響いていたことだろう。

「海神^{かいじん}さん、こつちの世界に来れるんスね。もしかして他の管理人さんとかも来れるんスカ？」

「雑談をする気は無い。本題に入るぞ」

白く輝く長髪をためかせる少女。背丈はそこら辺の女子中学生くらい。もつとも彼女がただの子供でないのは一目瞭然だろう。抜けるような白い肌に、これまた色素を喪失したかのような白い瞳。ふつくと可愛らしい唇も、限りなく白に近いピンク色だ。

そんな彼女が全身を真っ白なローブを羽織ると、もはや人間とはかけ離れた存在になってしまふ。多くの人間は彼女を見た瞬間、綺麗とかいう基準を超えて異形の化け物に遭遇したような謎の焦燥感に襲われるだろう。いや、それだけだったらまだマシだ。

翔也が海神と会ったのはこれが2回目。現実世界で表すところの3ヶ月前、アースフレンドで冬馬と一緒に彼らの前に現れた。不快感どころか、敵愾心を剥き出して睨みつけてくるその姿に、さしもの亜矢も緊張を隠すことが出来なかった。

そして今の彼女はの時すら超え、殺意と評しても差し支えない視線を翔也に放っている。しかも金属製の槌を肩に乗せながら、だ。

「その、話とは一体？」

「大江戸 亜矢のことだ」

ごくりと唾を飲み込む翔也。心当たりなど掃いて捨てるほどある。アースフレンドで会得した力をこつちの世界でも頻繁に利用するなど、最近の亜矢は常軌を逸していた。翔也はいけない事と知りつつ、

亜矢を咎める勇氣も無くずるずると彼の行為を手伝い続けていた。
当然管理人に目を付けられるだろうと翔也は思っていたが、やって来たのは最悪の相手だった。真つ白な全身は雪女を想起させるが、実際の彼女はそんな伝説よりも遥かに危険度が高い。

「奴のこの世界における行動に、我々は強い懸念を感じている。加担する貴様にもだ」

「いや、あの、それはっス」

「これは注意ではない、警告だ！」

次の瞬間、翔也は自分に何が起こったか理解できなかった。目の前には刀の先端、首筋には槌があてがわれている。全く動きが見えず、気が付いたらこうなっていた。彼女がその気なら、既に翔也は殺されていただろう。

彼はアースフレンド内でも相当強い部類に入る人物だが、海神にとっては大した意味は無かった。言わば蟻と恐竜との隔たり。実力差と表すのも愚かしい、絶望的な次元の違い。

「今後も改善が見られないようなら我々は貴様らを排除する。アースフレンド・グローブの規律を破る者は容赦しない。以上だ」

言い終わると彼女は公園の出口から去っていった。ここから歩いて帰るのだろうか、そんな疑問すら浮かばないくらい翔也は憔悴しやうすいしていた。ただ大変な事態に陥っている、それだけは理解していた。

四十五話 響く潮騒（後書き）

次の話で第3章は終了します

四十六話 片鱗を見せ始めた黒狐（前書き）

<報告>栲↓ココアに変更

四十六話 片鱗を見せ始めた黒狐

「絶対ヤバイっスよ先輩」

「んー？」

翔也はのんきにTVを見ている亜矢を必死で説得しようとしていた。公園で海神の恐怖から開放された後、すぐにケータイで亜矢に連絡をして呼び寄せた。面倒くさげに彼の前に現れたのがついさっき、亜矢はせつかくのいい気分を邪魔されて不機嫌になっているが翔也には伝わらない。

「俺の前に誰がやって来たと思います？」

「んー？」

「海神ですよ。あのヤバそうな奴」

「んー？」

「先輩話聞いてます？」

「んー聞いてるって。それより食うかい？」

「先輩！！」

ポツキー袋を差し出す亜矢の手を思い切りひっぱたいた翔也。事態が事態なだけに、普段はそこそこの温和な彼も気が荒れている。それを知ってか知らずか亜矢は床に落ちたポツキー袋の中を開け、折れているのを取り出して口に放り込んでいる。

「別に、そろそろ来ると思ってたけど。誰が来ようが僕の予定は変わらないさ」

そういつてTVに視線を戻す。番組は政治ニュース。ある官僚が酔っ払って暴力事件を起こしたらしいが、プライバシー保護だの何

だので名前が一切報道されていない。省庁からの文書も殆ど黒塗りだ。

「内容もそうだけど、コメンテーターも能が無いね。なんで若者の無気力化にこじつけたがるんだ？　つーか事件の内容ちゃんと理解してるのかな。あの程度で無冠の帝王を名乗れるなんてさ、世界からバッシングされてもしょうがないね」

「俺もそう思いますけど、ですが先輩のやり方は」

「間違ってるって？　僕の行動は間違いなく正義だ。ココアだってそう思うだろう？」

「確かに正義ではあるっすけど。……先輩？」

TVの電源を落とし、亜矢はバッグの中から封筒を取り出した。それを翔也のほうにポイと投げ渡す。

「つと、なんスか？」

「切符。ここから大阪までの」

「えっ！」

翔也が聞き返したのは当然だ。彼らが住んでいる地域の最寄り駅から大阪まで約2時間、何のためにそんなところまで行くというのか。

「明日の朝9時に駅前集合。んじゃもう帰るわ、ポッキーごちそうさま」

「ちよっ、先輩」

いつものようにベランダから飛び降りて帰ろうとする亜矢を慌てて引き止める翔也。何の理由で、など聞かない。どうせはぐらかされるだけだと経験で解っている。

「本当に、突き進むんスね」

「それが僕の全てさ」

解りました、と答え翔也は掴んだ腕を離れた。亜矢は躊躇無くベランダの手すりに足を乗せる。9Fからコンクリート敷きの地面に降り立ったが、とくに怪我の様子も無くすたすたと歩いて帰っていた。

「相変わらず化け物みたいな身体能力だな」

亜矢が立ち去ったベランダで翔也は1人そう呟いた。夕日は地平線の彼方に沈む直前だった。

四十六話 片鱗を見せ始めた黒狐（後書き）

後書き

はいいども、ファン・ヒューリックの後書きタイム！

まずは謝罪から。皆さん本当、心配かけてすみませんでした。何とか早期復帰が出来ました。まあ自分でも思った以上に傷が浅くて助かったというか、元々感情に乏しい性格なんで案外平気だったのかもしれない。

なんつーか、私がやりたいのはやっぱり小説を書くことなんですよね。とにかく今は小説に全力を注いで頑張りたいと思います（イラストも結構描いてますが）

さて本題。3章では主に琴目と由美子にスポットを当てています。今までは断片的にしか書かれていなかった2人の境遇とか心情描写をより深く掘り下げていきました。

……みたいなメインテーマが地平線の彼方に吹っ飛んでいく位、ひたすらエロエロエロ、そしてグロテスクてんこ盛りな章でした。というか、俺は暴走し過ぎじゃないだろうかと思ったり。

社と史は精神的な愛のつながりが強い娘達ですが、琴目と由美子はガチです。ええもう凄まじい位に。四十一話のエピソードは彼女らの行為の一端を記したに過ぎません。多分あれからインターネットとかで色々と知識をつけて、現在ではもっと凄いことしてると思います。ああなに書いてんだ俺。

あと三十六話と三十七話。俺は便宜的に『狂気回』と名付けてます。意味不明な文章ばかりですが込めたメッセージは多めです。意外な伏線を張ってたりしてるので興味があつたら読み返して下さい。四十二話は狂気回じゃありません。また別の描写です。

それから大江戸 亜矢について。まあなんというか、ガールズラブのタグ付き作品でやってはいけないことをやってしまった奴です。以前、亜矢に対して不快感を持つているという感想を頂いたのですが、その感想を書いた人にとって四十四話は発狂モノのエピソードだったのではないかと思います。

現時点では詳しく話せませんが、彼はこの小説において重要な立ち回りを演じてくれるキャラです。四十六話でさっそく不穏な発言をしています、今後も彼の活躍に期待していて下さい。

今言えることは1つだけ。皆さんにとって究極の愛とは何でしょう。私の見解ですが、SEXでは無いと考えています。それはあくまで通過点。本物の愛はその更に上のものだと思っています。

ラブコメのアニメ化には、最終回に性行為を匂わすシーンが入っている場合がとて多いと思います（同性愛は特に）。まあそれはそれでわりと興奮しますが（マテ 個人的には他の見せ方もあるんじゃないかなあとか考えてます。

さて次は第4章。宜しければこれからも読んで頂けると作者としては冥利に尽きます。できれば友達とかに勧めまくって下さい。「ガールズラブ濃すぎだろ！」とかって怒鳴られたら適当にとぼけてください。誰か東方性転換で霖之介（♀）総受けの小説を書いて下さい。

では再び4章でお会いできることを祈って。

箸休め（職業紹介？）

イラストの追加有り！（前書き）

アースフレンドで色んな人達が就いているジョブの説明など。アイ
ミイ様に史のイラストを描いていただきました！

著休め（職業紹介？）

イラストの追加有り！

< 追記 >

フォロワーのアイミイさんに大道寺 史のイラストを描いて頂きました。この場を借りてお礼を申し上げます！

> i 2 1 8 1 8 — 1 4 0 9 <

・ナイト

強力な武器防具を装備可能で、パーティの最前線で活躍できる職業として人気。近接技を数多く習得し、また『かばう』や『仁王立ち』など味方をカバーするスキルも覚える。やや鈍重になるという欠点を除けば、これ以上役に立つ職業は無いといっても過言ではなく、また有志が立ち上げた攻略サイトのwikiにも『職業選択に悩んだらナイトかプリーストを選べ』と書かれているほどである。

職業特典：なし

HP	： + 2 5 %
MP	： - 1 6 %
攻撃	： + 1 0 %
守備	： + 3 0 %
器用	： ± 0 %
精神	： - 2 0 %
敏捷	： - 4 5 %
スタミナ	： + 5 %

装備可能

武器：片手剣、両手剣、槍、斧棍

盾：腕輪、盾

鎧：軽鎧、重鎧

・ 獵師

生産ジョブの1つであり、MP回復アイテムや、武器や防具の材料を採取するスキルを習得する。調理師や薬師、及び装備職人にとつては必要不可欠なジョブである。パラメーターは敏捷や器用が大きく上昇し、また弓や斧の技を習得するなど戦闘でもそれなりに役に立つ。

職業特典：採取の一部スキル使用時のMP消費量が2/3になる

HP	：	-	20%
MP	：	-	10%
攻撃	：	-	10%
守備	：	-	20%
器用	：	+	30%
精神	：	±	0%
敏捷	：	+	25%
スタミナ	：	+	10%

装備可能

武器：短剣、弓、斧棍（一部）

盾：腕輪

鎧：服、軽鎧

・装備職人

生産系ジョブの1つであり、猟師などから買い取った一次生産アイテムを加工して武器や防具を作り出すことができる。このジョブによって作られた装備は通常の店売りの物と比べパラメーター補正が高く、また丈夫で長持ちするなどメリットが多い。装備職人とコネを作れるかどうかでアースフレンドの難易度は結構変わってくる。近接技、遠距離技のスキルも充実していて、戦闘の実力は生産系ジョブでも結構高いほう。

職業特典：装備政策スキル使用時のMP消費量が2/3になる

HP	： + 5 %
MP	： - 8 %
攻撃	： + 3 %
守備	： - 8 %
器用	： + 1 0 %
精神	： - 4 0 %
敏捷	： - 3 2 %
スタミナ	： - 1 5 %

装備可能

武器：短剣、片手剣、弓、斧棍（一部）、槍（一部）

盾：腕輪

鎧：服、軽鎧（一部）

・薬師

生産系ジョブの1つであり、きこりなどから買い取った薬草を加
工して『HP回復薬』を作り出すことが出来る。MPを回復できる
料理アイテムを作る調理師と比べ地味な印象は拭えないが、回復
スキルを持たないジョブにとってはありがたい存在である。しかし
全体的に需要は低く、プレイ人口もそう多くないのが実情。戦闘で
は弓、ブーメランと遠距離武器が得意。その他、支援系の特技が幾
つかある。パーティで組めば地味に強いが、やっぱり人気は微妙。

職業特典：HP回復薬生産スキル使用時のMP消費量が2/3に
なる

HP	：	-	20%
MP	：	+	10%
攻撃	：	-	20%
守備	：	-	12%
器用	：	+	15%
精神	：	-	5%
敏捷	：	-	15%
スタミナ	：	-	20%

装備可能

武器：短剣、弓、ブーメラン

盾：腕輪

鎧：服

・アーチャー

弓での攻撃に特化したジョブで、クリティカル率が高い『急所撃ち』や、複数回攻撃可能な『乱れ撃ち』など強力な弓の遠距離スキルの習得可能。1人旅もできない訳ではないが、2人以上でチームを組んで後方からの攻撃に徹すると本領を発揮できる。武器の性質上、攻撃力が伸び悩んでしまうのと、攻め方がワンパターンになってしまうのが弱点。

職業特典：なし

HP	：	-	30%
MP	：	-	5%
攻撃	：	±	0%
守備	：	-	18%
器用	：	+	40%
精神	：	-	10%
敏捷	：	+	37%
スタミナ	：	+	20%

装備可能

武器：短剣、弓

盾：腕輪

鎧：服、軽鎧（一部）

職業は全部で17種類で、今後アップデートにより増える可能性有り

箸休め（職業紹介？）

イラストの追加有り！（後書き）

補足説明

・戦闘系のジョブはカタカナ表記、生産系のジョブは漢字表記である（例：ファイター、獵師）

では次回から4章スタート！

<第四章> 四十七話 新妻ララバイ

「起きろ亮介ええええー！！！！！！！！」

けたたましい叫び声で目が覚めた。毎朝ながら最悪の目覚めだな
オイ。

「起きた起きた。だから後5分待ってくれ」

「どしたん。布団の中でおねしょの処理するん？」

「んな訳ねーだろ零花^{れいか}！」

なんで寝小便の発想に行き着く、つーかそのボケは想定外だった
わ。俺は起き上がって床に座っているであろう幼馴染みに声を掛け
た。

「全くもう少し穏やかに出来んか、ってなんだその格好！」

「いや折角やしサービスしとかなアカン思っつて」

「サービスって、お前ちよっ寄ってくるなー！」

「どしたん亮介？」

今の零花の服装は、下は高校指定の膝が隠れる位の紺色スカート。
それは別によくて問題は上半身だ。真っ白なタンクトップで、しか
もなんか桃色なブラジャーがおもいきり透けてるんだけど、つー
か今日も胸がデカっ！

「じーつと見とるけど、私の胸元になにか興味を引き立てるモンが
あるん？」

「胸元がだよ！」

ニヤニヤと笑いながら俺に近寄ってくる零花。目の筋肉を自在に動かせない自分の煩惱が恨めしい。

「んじゃ軽いコントはこの位にして、そろそろ朝御飯食べよか」

「軽くなかったぞ今の、むしろ重かったぞ」

「ところで亮介」

「なんだ？」

「お帰りなさい亮介。ご飯にする？ お風呂にする？ それとも、

ア・タ・シ」

「別に帰宅してねーし、つかその格好でやるとシヤレにならん」

「それともこの浮気相手の人肉ハンバーグ！？ 証拠写真もあるのよ！」

「怖っ！ いきなり修羅場のドロドロ展開になったぞ。なんだこの昼ドラ」

「ご丁寧なことに目にモザイクの入ったカップルの写真まで用意してきてる。しかも彼氏はコラージユで俺の顔に置き換えてやがった。何だこの努力の無駄遣い。」

「とにかく起きたぞ。朝メシ食いに1Fに降りようぜ」

「起きたって、体のどの部分？」

「全身だよ！ 足をしっかり床につけて背筋ピンしたんだよ！」

「ほんなら悪いけど先に降りといってくれへん？」

「何でだ？」

「上着羽織るんよ。えー亮介は恋人を透けブラで家中歩かす趣味あるん？」

「お前が勝手に脱いだんだろ！ つーか突っ込みすぎて朝から喉が枯れてきた！」

俺の名前は倉田^{くらた} 亮介^{りょうすけ}。近所の回礼^{かいいい}高校に通う1年生だ。小学生

の時に遠くの方へ引越してただけど、2年位前にこっちの方に戻ってきた。

こっちの騒がしいのは俺^ち家の近所に住んでる伊藤^{いとう} 零花^{れいか}。引越す前は近所の幼馴染みということもあり結構よく遊んでいた。

久しぶりに会ったコイツはえらく美人になっていた。顔はスツゲー可愛いし、スタイルも出っ張ったり引っ込んだりと非常によろしい。再会した時は思わず見とれてしまったんだが、数時間後にはさつきみたいなマシンガン関西トークのせいで一気に興醒めしてしまった。

こいつは良く喋る。喋りまくる。しょうもないことをどんどん思い付いてどんどんボケ倒す。んで俺の突っ込みが終わる前に新しいボケを投入しやきやがる。

しかも最近はずつきの透けブラみたいな、お色気ネタまで使うようになってきた。なまじナイスボディな分、思春期の男子にとつて目の保養、もといやり場に困る。唯一の救いは2人きりじゃないとしないことか。

階段から降りると既に朝食の準備が出来ていた。ご飯にみそ汁、あと漬け物。俺は椅子に座って箸に手を伸ばした。

「亮介、ちゃんと手を合わせてから食べなさい！」

「ふいふあはきまふ！（いただきます！）」

朝は体力つけるために腹一杯食べとかなきゃいけないんだ。起きた直後の突っ込みで結構時間使ったし、ぐずぐずしてる暇は無い。

「全くもう、ホントいつも零花ちゃんには苦労掛けっぱなしだよ。ごめんなさいね、出来の悪い息子で」

「いえ小母様^{おは}、私も亮介さんにすぐくお世話になってますから」

零花は俺のお袋の前だと猫を被る。つーか基本的に俺以外の人間全て。なんで俺と一緒にいるときだけ、ああいう変な性格になるのかさっぱりわからん。

「おみそ汁は零花ちゃんが作ってくれたのよ。ちょっと聞いてるの」「ほふぁあり！（おかわり！）」

「全国の新妻に土下座してきなさい！」

何かスゲー理不尽な怒られ方してるな。俺は零花によそって貰った2杯目のご飯を口の中にかっ込んでいった。零花が俺のお袋をなだめていた。よく解らんがそれで落ち着くんだったら別にいい。

よし食べ終わった、俺は部屋に戻って全速力で制服に着替えて戻ってきた。んで歯を磨いて顔を洗って、さあ出掛けようと思ったらカバンを持つてくるのを忘れてた。慌てて取りにいこうと思ったけど、零花が俺の分のカバンまで持つてきてくれていた。用意周到な奴だな、お前会社に入ったら出世するタイプだよ。

「全く亮介は、零花ちゃんがいないと何にも出来ないんだから」

トゲのあるお袋の言葉を聞き流しながら、俺達は玄関のドアを開けて学校に向かって行った。

「ほな、早よせんと遅刻すんで！」「解ってるって」

外に出た途端に元の口調に戻りやがった。多重人格がコイツは。今の零花は俺の部屋に居たときのエロい格好じゃなくて、長袖力ツターとブレザーという校則を守った制服を着こなしている。普段コイツは肌の露出が少ないタイプなんだが、俺をおちよくるときだけ脱ぐので始末に悪い。

「さあ全力ダッシュで走るよ。しっかり準備体操して身体ほぐさんと」

「いや寧ろその時間が無駄だろ！ 小走りで行ったら間に合つて」
「それやと」曲がり角でこつっんこ、異性との運命の出会い『のフラグが立たへんやん！」

「そんなフラグは無い！」

「あつそれやとパン啜えとう方がええよな。ちよつとそのスーパーで食パン1斤買ってくるわ」

「だからフラグは無い！ つーか1斤は買いすぎ！ 俺らちゃんと朝メシ食ったし！」

走りながらの突っ込みで結構大変だ。まあ鍛えてるから体力的には全く問題無いんだが。

通学路の河原沿いだ。俺は零花に付いていくのがやつと。速すぎるつーの、ちよつとは俺に合わせてくれりゃいいのに。河川敷のほうで中学生の奴らが草野球をやってた。夏休みなんだから休めばいいのに、とか思つて眺めてたらバッターは大きくファールボールを打ってしまったて。

そして、そのボールが俺達に一直線に向かつてきた！

そしてボールの行く先はちよつと零花の顔！

俺はそれを無視してそのまま走る！

そしてボールを素手で受け止める零花！

「悪いけど、ボール投げ返したつてくれへん？」

「お前が投げても届くだろ。実際俺より力あるし」
「夢でか細い女の子になんちゆうことゆーねん」
「弓矢の名人なのによく言う」

俺は零花に手渡しされたボールをキャッチャーの男子に大きく振りかぶって投げ渡した。寸分の違いも無く、ミットの中心に吸い込まれていった。

「よっ、さすが投げやりの名人！」
「槍投げだ！ いいかげんな人間みたいじゃねーか」

俺達2人には、実は半年くらい前からある秘密を共有している。

「アースフレンドでもそんだけの活躍でけたらええのにな」
「活躍してるだろ。自分で言うのもアレだが俺強いぞ」
「いやー今のレベルやったら勇者の付き人クラスやで。たぶん冒険途中で死ぬ間際」なあ、俺の無念を晴らしてくれよ……」とか仲間
に言ってるぞ」
「そんな役回りしたくねー！」

俺はナイト、そして零花はアーチャー。

「冗談やて、頼りにしとるよ」
「ったく、学校遅れるぞ」
「どうせやったら、ずっと私だけのナイトで居て欲しいけどな」
「何だよそれ。お前と一緒にやってきてるだろ」
「学校まで全力ダッシュ！ 遅れたほうは昼ごはん奢りやで！」
「待て、って本当に待てお前足速すぎる！」

一気にスピードを上げる零花。それを必死に追いかける俺。

俺達、実は異世界で勇者やってます。

四十八話 黒狐の降りた街（前書き）

＜報告＞栲↓ココアに変更

四十八話 黒狐の降りた街

老婆は部屋で布団に包まっていた。もうすぐ正月を迎えようかという時期に、古ぼけた電気ストーブには部屋を暖めるだけの力を出し切れない。どこからか風が吹き込んでいる。孫娘に隙間をガムテープで埋めてもらったのだが、どうやら完璧では無かったようだ。寝込み続けるようになって2年。以前は孫娘とよく遊んでやったものだったが、今では起き上がるのもひと苦労だ。毎日のようにラジオ体操をしていたあの頃が遠い過去のように感じられる。

元来から説教が好きだった老婆は親類にあまり好かれていなかったのだろう、見舞いに来る人は殆どいない。唯一、孫娘が毎日のように世話をしに来るぐらいだ。幼い少女は古臭い説教を、大事な教えとして従順に呑み込んでいくことが出来た。

今日もそんな昼下がり。老婆はいつもより調子が良くて椅子に座って編み物をしていた。その傍らにはいつものように孫娘が座っている。だがいつもと違い少女の顔色は暗く沈んだものだった。

少女は両親にこう言われたそうだ。もう祖母のところに行くんじゃない、そんなことより勉強を頑張れ、最近成績が落ちてきてるじゃないか。

まだ子供ゆえ、大人の複雑な人間関係など理解できる訳も無い。理不尽に押し付けられたルールを悲しみと共に受け止めることしか出来なかった。

「婆ちゃん・・・」

一言だけそうしゃべって、後はずっと無言だった。そんな孫娘を、老婆は愛おしく思っていた。老婆は編みかけのマフラーを手渡し、耳元で囁いた。

「なあ、婆ちゃんと1つ約束してくれるか？」
「えっ？」

老婆が孫娘に何を話したのか、それは当事者の2人しか知らない。全ては遠い、セピア色の物語の一端だ。1週間後に老衰で亡くなり葬式が行われたが、大人達は遺産相続の話に花を咲かせ、誰も死を悼むことは無かった。孫娘が祖母お手製のマフラーを着用していることすら興味無く、時には口元に笑みを浮かべる大人達。子供の目にどう写っていたか、想像するまでもないのでは？

「案外早く着いたなー」

「当たり前だ、ただだけ超スピードで走ったと思ってるんだ」

「本気モードはさっきの約3倍やで？」

「絶対出すなよ本気モード」

あっという間に学校に到着した俺達2人。物凄く速かったんだろ
うな、反対側から歩いてきた子連れの父親が怪物見たような顔でこ
っち向けてたし。一緒に歩いてた子供にトラウマが残らなかったら
いいんだが。

ここは学校のすぐ近くの商店街。さすがにこんなところで爆走す
るわけにもいかないんでトボトボ歩いている。しかしこうやって歩
いてると清楚そのものだな。回礼高校の地味な制服も零花が着ると、
お嬢様学校に通う会社社長の令嬢に見えてくる。つーか何で着崩れ
てないんだ？ 俺なんか全力疾走の余波で髪の毛が爆発しとるんだ
が。

ふと目を上げると見知った顔が。そいつがこっちに向かって走ってきた。

「おはよー零花！ あとおまけの亮介」

「誰がおまけだ！」

「おはよ、鞍くん」

伏見 鞍。さつき通学路を逆走してきたこいつの名前。同級生。

小学校のときからの友達。成績は下の中、要するにバカ。

こっちに転校してきたばかりの俺がすぐにクラスに馴染めたのも、たくさん話し掛けてきてくれたこいつのお陰だ。俺にとって大切な友達。但しバカ。

「零花ー。いつも思っんやけど、亮介のどこがいいの？」

「鞍、朝会っていきなりそれか」

「あれ、亮介居たんだ。気付かんかった」

「お前おまけ扱いとはいえ、さつき俺のこと認識してたよな」

「亮介そつくりのマネキンやと思ってた」

「そんなのが街中歩いてたら事件だろ！」

そんな話をしながら俺達3人で学校へと歩いていく。俺が右側で鞍が左側、その間に零花がちょこんという。3人で何かするときはだいたいこの並びになる。昼飯を食べるときも、遊びに行くときもだ。

ただ鞍には内緒にしていることがある。あいつは俺達が異世界に召喚されたの知らない。向こうで活動するには、一般人にアースフレンドのことを知られてはいけない。そういうルールがある。秘密を作るのは悪いと思うが、これは仕方ない。

「だいたいなー亮介、お前もつとシャキツとしろよ」

「おいおい何だ」

「まず髪の毛の寝癖、そうだろ零花」

「走ってきたから崩れたんだ」

「んで息が荒い、そうだろ零花」

「だから走ってたから」

「そして俺が貸した500円、そうだろ零花」

「走って……借りてねーよ！」

「つかさつきから俺じゃなく零花にばっか話し掛けてるな。前言撤回、こんなバカに悪気なんか全く感じない。」

「亮介くんは、誰にでも優しいよ。鞍君にもそうでしょ？」

「まあそうだけどなー。でも500円が」

「だから借りてねー！」

学校に到着。ちなみに今は夏休みだ。なんで夏休みなのに制服着て学校に来てるのかというと、俺達は補習を受けなければいけないからだ。一応補足しておく、頭が悪い生徒を集めて補習をするじゃなくて、学力強化のために自主的に参加するタイプのほうだ。まあ鞍はリアルに追試なんだが。

俺の学力は平均的だが、零花はとんでもなく頭がいい。なんでも大阪の高校生の中で1番頭が良いそう。この前アタック25の問題全てを、回答者の誰よりも速く答えたと自慢していた。しかも料理を作りながらだから驚きだ。その時はどっちに集中しろよって突っ込んだ。

そついや夏休みの宿題も全部終わらせたとか言ってたな。零花は一体何を目指してるんだ？俺なんかまだ殆ど手をつけてないぞ。つかそれが普通だろう。

最近知り合った女子4人組の勇者も宿題全部終わらせたとか言ってたな。どこに住んでる女子高生なのかは知らんが、世の中間違って

るとしか思えん。

校舎に入って俺達は2手に分かれた。俺と零花は補習のクラス、鞍は追試のクラス。

教室に入ると既に何人が来ていて教科書を広げてた。みんな勉強ばかりやってそうなインドア派ばっか。健康的で明るい零花はこの場に似つかわしくない気がする。本当に場違いなのはさして頭の良くない俺なんだが。誘われたから来たものの、なんとも居心地が悪いのは勘弁して欲しい。

3時間後。補習終わりで今から帰宅。ああダルかった。んんーと背伸びする俺に「お疲れさま」って声を掛けてくれる零花。もちろん清楚なほうだ。廊下を歩いていると、俺達は周りから結構注目を浴びる。みんな初めは零花を見て、そのあと俺の顔に冷めた視線をぶつけてくる。

まあ慣れたけどな。そりゃあ不釣り合いなカップルだぜ、俺も認めるよ。学校で1番可愛い女の子が既に彼氏持ちで、しかもよりによって相手が俺なんだからな。

確かに俺は特別イケメンでもなければ、運動も勉強も出来るほうじゃない。どっちかという土地味なほうだ。けどな、告白してきたのは零花からなんだぞ。こいつは2人つきりになると性格変わるんだぞ。しかも俺と一緒に異世界で戦って、俺は零花を守るナイトをやってるんだぞ。どうだ羨ましいだろう。すごい悲惨な目に何度も遭ってるけどな。

「鞍は午後も追試があるんだとよ」

「そっか。じゃあしょうがないね、2人で帰ろう」

ちなみに今の会話は校舎の中だったので、まだ零花は清楚モードだ。玄関で靴に履き替えて外に出る。クラスメイトの女子に声を掛

けられ、こいつは笑顔で返事する。

最近になって気付いたんだが、零花は俺のことを喋る時はちょっといい風に話してくれる。俺に悪たれ口を叩く奴をやりわり諭してくれるのだ。そういう点で俺はこいつに感謝してる。

あと2人の時に限らずそうなんだが、何故か歩く時は俺の左斜め後ろにいる。影を踏まないようにとか言ってたが、それは何かの遊びなんだろうか。

校門を出て通学路の商店街を歩いている。顔馴染みのおばさんに笑顔で挨拶している。もうすぐ川沿いの土手の道に入る。あーもうすぐ戻る、戻る。

「あーっ、人がおらんかったー。疲れるわーホンマ」
「だろうなあ」

いつもの零花に戻ったな。俺もこっちのほうで肩を張らなくていいから楽だ。そっぴや今日はお袋が友達と出掛けるって言ってたな。午後は2人か。

「昼ごはんは何食べたい？」
「焼きソバとか食いてーな」
「中華ソバ置いとったかな。ちよつとスーパー寄っていい？」
「おお一緒に行こうぜ」

俺達は土手を降りて大通りへと歩いていった。スーパーは近所なのでよく2人で買い物に行ってる。

前から男の2人連れが歩いてきた。ああまた清楚モードに戻るか、と思って零花のほうを見るが、何故かそんな様子は無い。

「大阪駅から更に地下鉄に乗換えとか、本当に疲れたっスよ。ああ

腹減った」

「確かこの辺りの筈なんだけど。おや、あの2人かな？」

よく聞くと聞き覚えのある声だ。とくにあの背が高いほう、髪の色は黒だけどヘタレな顔はそっくりだ。

「あつ、2人はもしかして亮平と零花？」

「亮介な。もしかして亜矢とココアなのか」

「あーそうそう。生で会うのは初めてだよな」

「まあなあ」

こいつらに俺らの住所話したっけ？ 俺達は4人で横に並んで歩いていった。……2人には悪いが、亜矢って何か苦手なんだよな。人当たりとかは良いんだが、なんつーか裏がありそうで妙に不気味だ。

「俺達に会いに来たのか？ 言ってくれば用意してたのに」

「まあまあ。実はいい話を持ってきたんだ」

「それ怪しい奴が言う台詞だぞ」

「えーそんな訳無いだろ」

いつもみたいなニヤニヤ笑いを返してくる亜矢。一体何なんだ、話だったらアースフレンドでしたらいいと思うんだけど。俺達は予定を変更して、4人で近くのファミレスに行って昼食を取ることにした。ふと零花が耳元に近づいて、俺にささやいてくる。

「（氣い抜くなや。亜矢は曲者^{くせもの}やで）」

「（だな）」

俺も同じ事を考えている真っ最中だった。ただその時の俺はまだ

事の深刻さに気付かずに、呑気なままだったと思う。これからファミレスで話す内容が、アースフレンド全体を、さらに現実世界を揺るがす大事件に発展するなんて考えていなかった。

49話 刃先が聞こえない（前書き）

今回は社視点です

49話 刃先が聞こえない

長い石畳の街道を歩き続け、私達はようやくアゲラダムに戻ってきた。一面を覆い隠す灰色の雲は、ここ数日の間ずっと陽光を遮り続けている。先程の豪雨の影響で少し風がじめついている。汗で下着が肌にくっつき張り付いていて気持ち悪い。

今の天気こそ私の体たらくに相応しい、なんて詩的に述べるのは恥知らずな思慮だろう。無能の呟く妄言などただの公害、他人に聞く耳を持たせるだけ失礼だ。

私達は少し遠出をして、砂浜にある海岸洞窟のクエストに挑戦した。ダンジョンに巢食う巨大ガンを退治しろというものだ。結果的にそのクエストは失敗、いや惨敗というべきか。雑魚モンスター相手に大苦戦して、地下1階にすら到達することが出来ずに逃げ帰ってきた。

原因は間違いなく私。パーティで唯一の前衛である私の立ち回りは、その全てがごとく的外れだった。剣を振っても空振りし、動き回ってみんなの視界を遮り、よろめいて八丈さんを巻き込んで倒れてしまった。

自分はもつと精神的に強いと思っていた。状況に左右されない冷静な人間だと思っていた。だが現実には、こんなにも心を不安に陥らせてくる。

大江戸先輩。彼の存在が、脳裏に浮かぶたび身体に震えが走る。あの押し倒された日を境に私は弱くなってしまった。情けないくらいに臆病で腰抜けに、暗闇に怯えるようになった。悪夢にうなされて夜中に飛び起きたのも1度や2度ではない。

携帯電話は着信音が怖くてずっと電源を落としている。もしかしたら連絡が入っているのかも。出会ったときにどうして無視するの

かと厳しく問い詰められるかも。

そんな心の乱れが戦闘に影響を及ぼさない訳が無い。今の私は多分、この世界で初めてピンクオークと戦ったときより弱い。

「社？ 社ってば！」

「えっ、ああうん」

声を掛けられて前を向いた。先頭を歩いていた八丈さんは私のほうをじっと見ている。さつきから何度も話し掛けられていたのだろうか、だとしたら異常なまでの注意散漫だ。

「どしたのさ、最近変だよ」

「あーうん。なんか調子が悪いかな」

「もしかして何かヤなことでもあった？」

一瞬ドキリとした。あの事件は誰にも相談していない。多分みんなは、私に何か異変があったことには気付いてると思う。

このことは知られたくない。特に史ちゃんには絶対に。私にこんなことがあったなんて知ったらすごく悲しむだろうと思う。いやもしかしたら、私に幻滅して離れていってしまうかもしれない。それだけは絶対に嫌だ。

そんな身勝手な言い訳で、結局私は誰にも相談せずに、1人で抱え込んで、そしてみんなの足を引っ張ってしまっている。……私は何がしたいのだろうか。

「とりあえずさ、社の装備を買い換えなくちゃ」

「そうね。芳樹さんを探さないと。掲示板を確かめる？」

「居るとしたらカフェだと思うけど。休憩がてらに見てこよ」

このクエストでの私の最大の失態は、剣と盾と兜を壊してしまっ

たこと。今まで芯が痛んでいたのをだましだまし使っていたのだが、このクエストで一氣に使い物にならなくなってしまった。

アースフレンドでは、何をするにしても財布と相談しなくてはならない。武器防具やアイテムの調達は勿論、料理でご飯を作ったりお菓子とかを買うのにも必要。それに観光地エリアのパラソル貸出しなどもだ。

クエストをたくさん攻略して報酬を貰い、お金をたっぷり持ち合わせればそれだけ余暇を充実させることが出来る。私の失態はみんなの努力を無駄にしてしまった。申し訳ない気分でいっぱいだ。

私達は街に入り中央広場へと向かった。やがて右手のほうにヨーロッパの三色旗のようなカーテンを掛けているカフェが見えてくる。そこは私達もよく利用していて、ほかに色んな勇者の人がくつろいでいたりする。

一瞬視界の隅に黒髪の男性が写ったような気がした。ドキリとして振り返ったが、それは首にリボンを巻いた黒猫だった。背中からまた一筋、冷や汗が垂れていくのを感じた。

店内を歩き回っていた桜田さんがこっちに合図をしている。どうやら芳樹さんを見つけたようだ。

「こんにちは芳樹さん」

「おお君達か。もしかしてまた壊しちまったかい？」

コーヒーを片手に、彼は振り向いて私達にそう言った。

師野村 芳樹さん、年齢は44才。薄茶色の髪で少し無精ひげを生やしている。肌が少し焼けているのは土木工事のアルバイトをしているかららしい。そのため体はがっしりしているが、食生活が悪いせいか少しお腹が出ている。背は私より少し低いくらいだけど、猫背なので実際以上に小さく見える。

この世界で勇者をやっているのは学生とかばかりで、彼みたいな

大人はほとんど居ない。園田^{そのだ} 良子^{りょうこ}さんは一応成人だけど、あの人を大人と言うには少し抵抗がある。

私達は新しく武器防具を売って欲しいと頼んだ。芳樹さんはうーんと唸って顔を難しくした。

「兜の在庫はあるけど、剣と盾は今無いんだよなあ」

「あら、無いんですか？」

「俺以外にも装備職人が居たらいいんだけどなあ。すまんが別の武器でがまんしてくれ」

装備職人は高性能な武器・防具を作ることが出来るので人気が高いのだが、成り手はそれほど多くない。理由は素材集めがとても大変だから。きこり、猟師、採掘士のジョブがそれぞれ採れるアイテムが製作に必要なのだ。

そういったデメリットを解消するため、少し前にテコ入れがあったと八丈さんが言っていた。装備や戦闘スキルを充実させたり、防具職人でも低ランクの武器を作ることが出来るようになったりその逆とか。ただ効果は芳しくなかったようだ。

「そっいえば、綾乃^{あやの}さんはどうしてるんです？」

「綾乃は外で狩りをしてるぞ」

綾乃さんは彼の娘で、歳は私と同じ15才。ずっと入院していたせいもあって体格はとても小柄だ。彼女は猟師として頑張っていて、防具の材料集めを手伝っている。

「それで武器なんだが、両手斧とかどうだ？ 少し重いが威力はあるぞ」

「ちよっと持ってみます。おおお重い」

斧を芳樹さんから受け取ったけど、前のほうにつんのめってしま
った。体勢を立て直し斧を持ち上げる。重心が先のほうにあるので、
剣と違ってバランスが取りにくい。

「ちょっと練習していいですか？」

「おおいぞ。椅子とかに当てないようにな」

「コツとかつてありますか？」

「叩き割るイメージでやるといいぞ」

軽く斧を素振りしてみる。いつもと違う筋肉を使ってる気がして
ちよつと新鮮な気分だ。振り上げて下ろすを何回か繰り返してみた。
これは剣とは動作が違ってくるな。もっと勢いで攻める戦い方にな
りそうだ。

私が練習してる間、八丈さん達は世間話をしていた。

「斧で思い出したんだが、最近は物騒な事件が多いらしいな」

「大物議員が殺傷される事件ですね」

「俺はあんまり新聞とか読まないんだが、やられてる奴多いんだっ
てな」

「これで12人目でしたっけ。首相経験者も襲われたんですね？
こう頭を鈍器でゴーンってされて」

最近のワイドショーはその事件で持ちきりだ。特に元首相がやら
れたときは3日間くらいバラエティー番組が自粛していたらしい。
私はあまりTVを見てなくて、ことの重大さは理解しているが他人
事のように思ってしまう。

その大物議員とやらも会って話したことなんか無いし、正直どう
でもいい。ああいう権力者が許せないって人もいるんだな程度に考
えていた。

「んで社くん、斧には慣れたか」

「こう、振り下ろしたり薙ぎ倒したりする感じですよね」

私は得物を適当に振り回してみた。まだ重心が定まらず、フラフラして引つ張られてしまう。

「んー、他の斧使いに教えてもらったほうがいいかもな。斧で戦ってる奴は居たっけな？ 管理人の冬馬としまはやっぱ忙しいだろうし、となると……」

彼はひげを手でさすりながら考える。

「亜矢くんとかどうだろう？」

名前を聞いた瞬間、足元が崩れていく錯覚に襲われた。あの光景がフラッシュバックする。浅黒く日焼けした腕で押し倒され、目の前には先輩の顔。

「彼は色んなジョブに就いてたから色々知ってるんじゃない、……どうしたんだ！？」

持っていた斧が手を滑って床に突き刺さる。手の震えが止まらない。足が痙攣している。脳裏にあの顔が浮かぶ。目の前が真つ暗になつてあの顔だけが思い浮かぶ。流れる汗が止まらない。寒い、身体からだの震えが止まらない。

立っていられなくなつて床にへたり込んでしまう。悪寒がどんどん大きくなつて、身体を抱き込んだ。

「社ちゃん、社ちゃん！」

「あ、は、あああう」

齒がガタガタ鳴って上手く言葉が話せない。史ちゃんの手を取って起き上がろうとするけど、ぐったりと力が抜けてしまって動けない。八丈さんと桜田さんの肩を借りて、ようやく立ち上がることが出来たけど、足の感覚は全く無い。

「すみません、また後で！」

「ああうん、お大事にな」

私は3人に支えられながらカフェを後にした。また迷惑を掛けてしまって、申し訳ない気分だった。

50話 熊とちいさなメロディ

そして今日、私達4人は待ち合わせのカフェにやってきた。芳樹さんは昨日と同じ席でコーヒーを飲んでいる。

「昨日は取り乱してすみませんでした」

「いやいや、気にしてないから」

私は芳樹さんに向かって頭を下げた。親しき仲にも礼儀ありというし、キチンと謝るのが筋というものだろう。

——昨日カフェを出た後、私は教会まで肩を借りて歩いて、ベッドで横にしてもらった。八丈さんと桜田さんは自分達の個室に入っていた。後に残るのは私と史ちゃんと机と椅子と鏡、そして大きいシングルベッドが2つ。

その夜はずっと、史ちゃんは私を抱きしめてくれていた。史ちゃんの体温を肌で感じたのは久しぶりな気がした。そういえば、最後に2人で一緒に眠ったのはいつだったか。すぐそばで史ちゃんの暖かさや鼓動が感じられる、それだけでこんなに安らぐ気持ちになれるなんて。どうして今まで、この幸せを忘れていたのだろうか。

今日の朝はすごく目覚めが良かった。腕の中で眠っている史ちゃんを見るだけで、なんだか心が満ち足りた気分になっていた。今日の私はたぶんとても力強い。最近ずっとスランプだったけど、なんだか脱出したような気がする。

私達は芳樹さんと向かい合わせの席に座った。改めて、両手斧を受け取る。刃が少しだけ欠けているのは、昨日うつかり床に落としてしまったからだろうか。

軽く動かそうと振り上げたら、カフェの入り口のドアがバタンと開いた。バタンという音にちょっとびっくりしてしまって、また斧

を落としそうになってしまった。

扉を開けたのは芳樹さんとお揃いの、茶色いレザーアーマーを着込んだ背の低い女の子。金色の髪をはためかせるその子は、芳樹さんの方に向かっておもいきり飛び込んでいった。

「ただいまパパー！」

「お帰り、綾乃^{あやの}」

芳樹さんの膝にちょこんと座って頭を撫でられて、何だか一緒に居るこつちまでくすぐつたくなってくる。彼女の名前は師野村^{しのむら}綾^あ乃^の。背は大体120cmくらいで、金髪で青い瞳をしていてまるで外人のような。可愛らしい見た目からは想像もつかないが、実は芳樹さんの娘であり非常に違和感がある。

初めて会ったのは、私達がコツチの世界に3回目に来たとき。4人で街の中を散策していて、公園でブランコに乗っている芳樹さんと綾乃さんが目に留まった。実は、そのとき脳裏に浮かんだフレーズが『幼女誘拐』だったりするのは秘密。

なにせ外見が全く違うのだ。少し小太りで肌は赤黒く日焼けしている芳樹さんと、金髪幼女みたいな綾乃さんが親子だなんて一見でまず解らない。犯罪に見えてしまったのかもしれないだろう。

最初は幼児をあやす保育士のつもりで接していた。けどしばらくしてから、一緒に夕食の準備をしていたときに、芳樹さんから驚愕の事実を言い渡された。綾乃さんの歳は、私や史ちゃんと同じ15歳だという。

絶対ジョークだと思い、隣でお米を研いでいる彼女にそれとなく聞いてみた。ねえ、綾乃ちゃんって何歳なのかな？ と。そしたら笑顔でこう返事してくれた。

「綾乃は、15さいだよ！」

……そのあと芳樹さんに教えてもらったのだが、実は綾乃さんは生まれつき身体が不自由で、これまでずっと病院のベッドで過ごしていたのだという。手足も全く動かず、目も見えなくて、生命維持装置がないと生きていけないらしい。もちろん学校になんか行ったことはない。身体や心が成長していないのも道理だ。

芳樹さんは娘の医療費のため、24時間365日、絶え間なくお金を稼いでいたらしい。少し前にどれだけ医療費が掛かるのか聞いたのだが、目玉が飛び出そうになるほど高額だった。それこそ普通のサラリーマンでは到底まかなえないような額で、何か非合法的な仕事に手を染めないといけない位。

1年くらい前に、2人は病室でテレポーションを体験したそうだ。仕事の合間を縫って見舞いに来た芳樹さんは、綾乃さんのベッドの傍に立っている冬馬ふゆまさんと出会い、そこでアースフレンドの事を聞いたとのこと。綾乃さんの了承を得たと聞いた時は半信半疑だったそうだが、実際にワープした時は度肝を抜かれたらしい。

芳樹さんにとって1番嬉しかったのは、綾乃さんが動ける身体になったことだと言っていた。以来2人はこの世界にたくさん来て、今までの不幸な人生を全て吹き飛ばすかの如くエンジョイしている。

しかし同い年とは思えないなあ。じつと見てると綾乃さんは膝から降りて、私のほうに歩いてきた。

「社さん、こんにちは」

「こんにちは綾乃ちゃん」

「社さんはスランプなの？」

ウツと言葉に詰まってしまつ。たぶん芳樹さんが口を滑らせたん

だろうけど、やっぱり面と向かって言われると少しへこむな。まあいい、小さい子に罪は無い。

「いやその、社はスランプっていうか」

「ちがうの？ 琴目さん」

「最近ちよつとだけ調子が悪いっていうか、最近忙しかったっていうか、そんな感じ？」

「ふーん」

フォローしてくれてるんだな琴目さん。でも口がモゴモゴしてる、きつと言葉選びが大変なんだろうなあ。綾乃さんは私に向き直った。

「社さん斧のれんしゅうするんだよね」

「うん。頑張ろうかなって」

「だったら綾乃が教えてあげる！」

綾乃さんはエツヘンといった感じで胸をそらす。

「綾乃ちゃんは斧が上手なの？」

「うん！」

これは意外、猟師も斧が使えるんだっけ。でもこんな小さな子が斧なんか振り回せるんだろうか、今持つてる斧は、私の体重くらいあるし。そう思っていると横から芳樹さんが言葉を挟んだ。

「綾乃が使うのは片手斧だよ。でも20kgくらいあるけどな」

「片手斧ー！」

綾乃さんは腕をブンブン振り回してはしゃいでる。そんな動きを実際にしたら、重心を持っていかれて倒れそうな気がするけどな。

「ああそうだ、明日狩りに行くんだけどな」

芳樹さんはコーヒーの2杯目を注文しながら、私達に明日の予定を話した。

「遠出をしようと思ってるんだが、私らだけだと少し不安なんで、一緒に来てくれないか？」

「一緒に？ どーする由美子」

八丈さんは桜田さんに話を振った。

「……っん、いいんじゃないかしら」

「社達はどーよ」

「斧の試し斬りとかしたいし、私はOKだよ」

史ちゃんもウンと頷いた。なんだか桜田さんがソワソワしてる感じだったけど、どうしたんだろ？

その後、明日の待ち合わせ場所とかを決めて私達はカフェを後にした。最安値のコーヒーだけで1時間以上粘っていたせいか、店を出るときにウェイターから少し冷たい視線を向けられてた気がする。外に出て、私は後ろを歩いている桜田さんに声を掛けた。

「由美子さん、なんだか落ち着かない感じだったけど何かあった？」

「あら、そうだったかしら？ 多分気のせいだと思うわよ」

「そうかな。顔がちよっと赤いし、熱でもあるかな？」

「気のせいよ、さっ明日頑張らましよう」

うーん、桜田さん今もちよっと顔が赤いけど？ まあいいや、明日は今までの汚名を返上するために頑張らないと。

51話 私は、史ちゃんとうっとう一緒にいたい（前書き）

百合描写注意です。

51話 私は、史ちゃんとずっと一緒にいたい

徐々に脳が覚醒していくのを、寝惚け眼の私はうつすらと認識し始めた。

目蓋を開ける。動きたての体内時計を信じるなら、今の時刻はだいたいAM5:30といったところか。

……目覚まし時計のセットを解除しようとして、ここが自室でないことを思い出した。ここはアースフレンドの教会、私と史ちゃんが割り当てられた部屋だ。

そういえばこっちに来てからもう3日目。なんだか元の世界に戻るタイミングがつかめなかったから。まあこっちのベッドも寝心地は悪くないし、なにより史ちゃんと2人部屋だし。

うーんと寝転んだまま背伸びをしたら、つま先にフニユツと何かがぶつかった。布団の中でモゾモゾと動く気配を感じる。振り向くと、史ちゃんが私の服の裾を握って眠っていた。

私達が寝泊りしてるのは2人部屋なので、当然ベッドは2つある。だけど私と史ちゃんは、一般人に喋りにくいような行為してるから一緒のベッドで一夜を過ごすことが多い。ただ最近はやっとギクシャクしていて別々のベッドで寝ているんだけど。

「……んっ」

「ゴメン史ちゃん、起こしちゃったかな」

史ちゃんがゆっくりと顔を上げた。目元が少し赤く腫れてるのが分かった。汗で額に張り付いている前髪をほどいてあげた。

「……社ちゃん、ギユツとしていい？」

「うん」

私は史ちゃんの前中に手をやり、そつと抱き寄せた。史ちゃんは私の胸に顔を埋めてくる。ちよつとだけ肩が震えてて、その姿に心がチクツと音を立てる。

「私ね、社ちゃんが離れていっちゃう気がしたの」

「そんなこと、しない」

「最近なんだか、社ちゃんの事がわからなかった。遠くの存在みたいに感じてた」

……同じだ、私が史ちゃんに思ってたことそのまま。

どう話しかければいいのかわからなくて、最近はずつと目を合わせることに気まづくなっていた。何をどうしたら解決するのも分からず、もしかしたらずつとこのままのかなって恐怖してた。

「史ちゃん、ごめんね」

「……謝らないで」

「私は、史ちゃんとずつと一緒にいたい」

喉から感情がどんどん溢れてくる。

「離れたくない、大好きなの、史ちゃんが大好きなの！ 離れていっっちゃうと思うだけで苦しくなる！」

心の中でずつとモヤモヤしてたのを全部ぶちまけた。ここ何週間も、言いたくて言いたくて、伝えたくて伝えたくて、でも話せなくて。その言葉をついに口に出せた。

史ちゃんは私に、やさしく微笑み返してくれた。

「社ちゃんのことを大好き。だから、無理なんかしないで。社ちゃん
んは私が守るの」

「……ありがとう」

私は史ちゃんのほっぺにそつとキスをした。こつやつてキスするのも本当にいつ以来だつて、近頃の私はずつと塞ぎ込んでたからなあ。

久しぶりのキスは、心の中から愛おしさ以外の感情も呼び起こしてきた。ちよつとだけ懐かしいような、体の芯が熱くなって甘い気分になってくるあの気持ち。

私は顔を近付けて、いきなり史ちゃんの唇を奪った。

「ねえ史ちゃん」

「えつ、つうっん！　ンフッ」

すぐに史ちゃんは舌を絡めてきて、口の中でディープキスになった。舌でたつぷりと口の中を蹂躪していく。ネチャネチャと2人の唾液が合わさって、悩ましい蜜の味に変わっていった。ちよつと前まですれ違つてたことなんか吹き飛んでいくくらい、激しく汁を吸いあつた。

股間がしつとりと湿り気を帯びてくる。本来は男性を受け入れる器官のそこを、史ちゃんのそれと重ね合わせて表面を滑らせていく。少し動いただけで全身に電撃が走りまわって、世界がどんどんピンク色に染まっていってしまう。

「あひつ……んあつ……あああつ……アアンンッ」

史ちゃんの口から、喘ぎ声みたいな溜息が漏れ出してくる。私は更に追い討ちをかけるため、右手を史ちゃんの突起に、反対の手を弱点である足の付け根に持っていた。

「ちゅっ、ちゅ……んふっ、ぷちゅうつ、んんっ、……」
「じゅうつ、チュパ、はぁ、はぁ、どう？ 気持ちいい？」

1時間ほど布団の中で愛し合ってから、私達はバスルームへと移動した。汗を流したいのもう1つ、私はお風呂でHなことをするのが好きだから誘ったのだ。私も史ちゃんも、ポタポタと滴るくらいにショーツが粘液で濡れていた。

掛け湯をした後、ボディソープの液を出して自分の体に塗りたい。そして史ちゃんを抱きしめ、身体を揺らして擦り付けていく。この、ヌルヌルとした触感がたまらない。ときどきお互いの胸の突起がぶつかって、2人で一緒にあえぎ声を漏らしてしまう。

少しずつセツケンの泡が出来てきて、お互いに白いフワフワの服を装っているみたいになってくる。と、史ちゃんが上になって、私の乳房のところの泡を手で取り払った。

「史ちゃ、ツん！」
「んふふ、社ちゃんのおっぱい……」

史ちゃんが私の胸の突起を口に含んで、舌でコロコロと転がしてきたのだ。我慢できなくて喘ぎ声を出してしまう。反対側の突起も指で摘まれて揉みこまれてしまった。快感で、全身の力が抜けていく。

シッ、シヨアアア……

「社ちゃん、また出しちゃった？」

「うん……恥ずかしい」

お漏らししちゃったのは今日で2回目。なんだかエッチのときのおしっこが癖になってしまいう。今度のはズボンを履いたままじやないから良かったかな。

「じゃあ、お返ししちゃうかな」

「えっ、ひゃあっ！」

上下を入れ替わって、私が史ちゃんの上にのしかかる。史ちゃんの股間から黄色い液体を噴き出させるのに、それ程の時間は掛からなかった。クチュクチュと股間で音を立ててる泡からは、セッケン以外の匂いが漂ってきた。もっと恥ずかしいコトをするために、ボディーソープのふたを開け史ちゃんのエッチなところに塗り込んでいく。

もう今の私達は誰にも止められないし、止まろうとも思わなかった。

「社ちゃん、遅れちゃうよ！」

「すぐ行く！」

鎧の止め具を引っ掛けながら言った。いいことをしている内に約束の時間が近づいているのに気付いて、慌てて出発の用意を始めたのだ。エッチが気持ち良過ぎて時間に遅れそうとか、もろもろの意味で言い訳できそうに無い。

キッチンルームに行くと、既に八丈さんと桜田さんが座っていた。テーブルには4人分の朝食が並んでいる。

「2人とも寝坊とか珍しいね」

「ごめん、色々あって」

色恋沙汰とか色々、って誰が上手いことを言えといった。サンドイッチとコーンポタージュを頼張って、お皿やカップを食器洗い機に差し込んだ。いつもはゆっくり味わって食べるんだけど、今はちよつと時間がない。もう約束の時間が迫っている。私達は小走りでカフェのほうに向かっていった。

「すみません、遅れちゃいまして」

「いやいや、まだ時間にはなっていないな」

カフェのいつもの席に芳樹さん達は座っていた。芳樹さんはコーヒー、綾乃さんはプリン。スプーンの持ち方が子供っぽくて、ますます15歳説に疑問を持ってしまう。

会計を済ませてカフェを出て、南の城門へと向かう。さて目指すは、ここから約1時間のところにあるタタルカー砂漠だ。

52話 デザート・ウェイ

門番に軽く挨拶してからフィールドに来た私達6人。先頭を歩くのは斧を背負ったワタクシ高杉 社、不肖ながら1行のエースを勤めさせていただいている。最後尾を歩いているのは芳樹さんと綾乃さん。敵はバックアタックを仕掛けてくることもあるので、1番後ろにも強い人が必要なのだ。2人は今日もお揃いのレザースーツを着ている。

真ん中に居るのは史ちゃんと八丈さんと桜田さんで、みんなサポート系のジョブ。パーティ編成としては、わりかしバランスがいい方か。このメンバーだったら大概のモンスターには負けないだろう。

まあそうは言っても、ここは街道なのでモンスターは襲ってこないが。モンスター達には、街道上の人間を襲ってはいけないというルールがあるのだ。さっきからホルスタインみたいなのがこつちを監視し続けてるけど、誰かがうつかり石畳から足を踏み外すのを待ってるのだろう。

だいぶ前に実験で、ちょっとだけつま先を草原に出してみたら、嬉々とした表情でモンスター達がいつせいに押し寄せた。まるで安いコントみたいな光景だ。そういうルール自体に難癖つける気はないが、モンスターというのもややこしい商売だなと思った。

そんな感じでのんびり歩いて、砂漠の入り口辺りまでやってきた。もう街道はないので、ここからはモンスターと戦いをしないといけない。とりあえずここまで来てお腹が空いたので、少し早い昼食タイムにすることにした。

ビニールシートを敷いて輪になって座る。桜田さん達が用意してくれたのは今朝と同じサンドイッチの詰め合わせ、本当はみんなで一緒に作る約束をしていたんだけど。八丈さんは水筒を傾けてみん

なにコーヒーを配ってる。

「綾乃はジュースがいいー!」

「ジュースも持ってきてるよ」

用意がいいなあ八丈さん。私はミルクだけ、史ちゃんは砂糖3杯とミルクをたつぷりと入れていた。桜田さんはかなりの量の砂糖をドバドバと。あんなに入れると逆に苦くなるんじゃないかと思う。そういえば今日の桜田さんは顔が赤くないけど、風邪は治ったのかな?

私と史ちゃんは向かい合ってサンドイッチを食べていた。ふと見ると、史ちゃんの顔にキャベツの切れ端がくっついていた。

「史ちゃん、ほっぺたに付いてる」

私は頬のキャベツをつまんで、それを食べた。なんだか史ちゃんの顔が赤くなっていた。……あれ、これってよく考えると間接キスなんだろうか。

頭の中で史ちゃんの裸体を思い浮かべたが、すぐに振り払った。こういう妄想はTPOをわきまえないと。ええと素数素数。

「社さん?」

「え、ああ何かな綾乃ちゃん」

いきなり話し掛けてきたからびっくりしてしまった。オレンジジュースのコップを片手に、綾乃さんは私に質問をしてきた。興味津々な感じで瞳を見開いている。

「社さん、何かいいことあったの」

「えっ、そう見えるかな?」

「だって社さん、昨日よりすごく笑顔になってるよ」

うーん鋭いなあ。実は今朝、イイコトをしたんだよね。その具体的な内容を綾乃さんに話すのは教育上よくないので、私は少しばかりお茶を濁すことにした。

「ちょっと史ちゃんと色々あったんだけど、仲直りしたんだよ」

「ケンカしてたの？」

「ケンカなんかじゃないよ！」

普段外に居るときは無口な史ちゃんが、突然ちよつと大きな声で訂正した。ああ何だかややこしい展開になる予感がががが。

「ケンカじゃないの？」

「う、うん」

「じゃあなんで仲が悪かったの？」

「それは、その……」

史ちゃんは私に助け舟を求めるような視線を投げかけてきた。このままだとうっかり今朝のことを喋っちゃいそうだ。何とか話題を変えないと。

「ところで綾乃ちゃん、そのリボン可愛いね」

「これパパに買ってもらったの！ えへへー」

「芳樹さん、リボンはどこで売ってたんです？」

「これか？ アゲラダムン南の方にある店だぞ。宝石とかも売ってたかな」

「綾乃パパの膝の上に乗るー！」

「ハハハ、よしよし」

綾乃さん達は親子で楽しそうに会話を始めた。よし話題逸らしが成功した！……そういえばアンサイクロペディアでエクストリーム・話題逸らしって記事があったような無かったような、まあどうでもいいか。

もう1個サンドイッチを貰おうとして、残りが少ないことに気付いた。そういえば6人で食べるわりにはちよつと量が少なかったような。芳樹さんは身体が大きいから沢山食べるだろうし。

そう思っていると桜田さんがカバンをゴソゴソして、また別のお弁当箱を取り出した。

「はい、デザートはシュークリームよ」

「わーい！」

「こら綾乃、お行儀が悪いぞ」

蓋を開けると、中には12個のシュークリームが入っていた。これ今朝作ったのかな、どうやって作るのか見たかったなあ。1口食べてみる。中にクリームがたっぷり入ってて美味しい。クリームも甘すぎなくていい感じだ。

2人は料理の天才だな。私はお菓子のレパートリーが少ないからぜひ見習いたい。でもどうして料理が上手になったんだろ、あんなにお金持ちの家に住んでるんだから、お抱えのシェフが何でも作ってくれそうなのに。やっぱり自分達で作るほうが楽しいからかな。

「もっと食べたいー」

「しょうがないな。ホラ、俺のを1個あげるぞ」

「ありがとパパー！」

綾乃さんは喜びのあまり、芳樹さんに抱きついてほっぺにキスをしている。ほほえましい光景だ、相変わらず同い年だとは思えない。デザートを食べ終わって、私達は後片付けを始めた。朝に手伝え

なかった分ここでちゃんとしとかなないと。ビニールシートを畳んでカバンに入れ、んんつと背伸びをする。

「さて周りにモンスター居ないし、今の内に出発しようか」
「そうねえ」

私達はさっきの陣形になって砂漠へと進んだ。途端に暑苦しい風が吹いてくる、こういうとき鎧を着込んでるファイターって損だな。

「それで斧はね、ブンツって振り回すみたいに攻撃するの」
「へーそうなんだー」

野球のバットを振るみたいな動作だ。目的地へと進みながら、私は綾乃さんに斧のレクチャーをしている。この子は戦闘の話題になるとすごく目を輝かせるなあ。

しばらくそんな話をしていると、綾乃さんは私を見上げながらこう言った。

「綾乃も社さんみたいに大きくなりたいなあ」
「運動して、よく食べてよく寝れば背も伸びるよ」
「本当？」

保障は出来ないけどね、もう15歳で成長期も半ばだし。

「社さんみたいにおっぱい大きくなる？」
「胸はお風呂でマッサージするといいつてさ」

後ろを歩いていた八丈さんが会話に入ってきた。うーん胸のマッサージはしたことないんだけどな、寧ろ大きいと不便なこともあるし。

「でも琴目さんのおっぱいは小さいよね」
「何だと」

2人は鬼ごっこを始めた。鬼はもちろん八丈さんで、クワーツとか叫びながら綾乃さんを追いかけている。桜田さんは八丈さんのほうを向いて、手を口にやって笑いを噛み殺していた。

「ほら着いたぞ。目的地な、あの窪地らへんだな」

いつの間にか目的地に着いていた。鬼ごっこしていた2人が止まる。

「さっそく狩りを始めたいんだけど……」

「ああ、先を越されてるな」

狩猟場と思われる窪地には、既に巨大なモンスターが陣取っていた。

53話 刃先が聞こえた、そこにみんなが居た

多くの人は『砂漠』と聞くと、サボテンが生えている黄色い砂に覆われた大地を思い起こすだろう。

ただ単に砂漠といってもいくつ種類があり、例えば砂ばかりの『砂砂漠』^{すなさはく}や、石や砂利が多い『礫砂漠』^{れきさはく}や、ごつごつとした岩石が多い『岩石砂漠』^{がんせきさはく}など呼び名は様々だ。私達が今いるタタルカー砂漠は、砂砂漠と礫砂漠のちょうど中間といったところだろうか。

ちなみに砂漠は元々『沙漠』と書かれていたとのこと。詳しいことは忘れたが何でも戦後、アメリカの陰謀かなにかで書き方が変更されてしまったとか。そう考えると砂砂漠が砂へ2になってしまっているのも理解出来なくもない。

以上はうんちく好きの数学教師の受け売りである。つまり砂漠に関して、我々は意外と勘違いしていることが多いということだ。ただそれにしたって目の前にいるこの獣は、アースフレンドの世界であることを考慮しても、ちと非常識に過ぎるのではないかと思う。

このモンスターの体長は約3m。茶色い体毛に覆われていて、巨体のわりに目や耳はやや小さめ。2本の足で屹立しているから、まるで私達を見下ろして威嚇しているかのような。手足は太くて筋肉質、鋭い鉤爪はどんな硬いものでも引き裂いてしまいそう。

こいつの名前はサンドベア、その名の通り砂漠に生息する熊のモンスターだ。アースフレンドには変なモンスターが多く、その中には上半身が女性で下半身が蜘蛛の『アルケニレディ』や、全身に目玉を生やした蟻塚のような『オールンアイズ』など、創造主の感性を疑わざるを得ない輩もいる。

そんな連中と比べ、外見はまともなこのモンスターはやや良心的と言えるかもしれない。ただ普通は、砂漠に熊は住まないと思う。

普通は山に住んで、木の実や鮭を採って生活しているはずだ。サンドベアという名前の響きはそれなりに格好いいが、どうも創造主の遊び心が見え隠れするような気がしてならない。

「やり過ぎせないかな」

思わず本音が口に出た。戦いには随分慣れたものの、事なきを得られるならそれに越したことはない。

「サンドベア達は狩場に陣取って、俺達みたいなのが来るのを待ってんだよ。よくあることだな」

「陣取ってるんですか？」

「奴らはここに俺達みたいなのが来るのを知ってるんだな。だからいつもこうやって、獲物を待ち構えてんだ」

芳樹さんの言葉を信じるなら、いや疑うつもりなど全くないのだが、この熊のモンスターはかなり知能が高いのだろうと思われる。アースフレンドの世界の制約を理解し、それを逆手に取るほどの頭脳の持ち主。敵対するとなると中々やっかいな相手かもしれない。

「いつつもアイツが居るから、ここで砂漠の花が採取できないんだよねー。今日は1匹だけしか居ないけど、多い日とかは5匹も居るんだよ」

「綾乃の言ったとおりだ。私ら2人じゃ敵わないから、君らでサンドベアを倒してくれないかな」

綾乃さんと芳樹さんが口々に言う。それで私達が呼ばれたのか。そういう場面に出くわしたんなら、ここは本領を発揮しないと。私は背負っていた斧を抜き取った。他のみんなも戦闘体勢になっている。敵はたったの1匹、何とかならないことは無いと思う。

「八丈さん、サンドベアの弱点はなに？」

「LV43。物理攻撃しかしないモンスター、状態異常は効かない、弱点属性は炎、冷気属性は無効」

「私、炎は苦手……」

史ちゃんが弱弱しく答える。史ちゃんは冷気のフリーズアタック以外の魔法はほとんど使えない。ああ史ちゃんそんなに萎縮しないで。

それにしても砂漠に生息してるのに炎に弱いつてどういうことだ。この直射日光は平気なのだろうか、どう考えても弱点と無効が逆だと思っただけ。

後で八丈さんに聞いたんだけど、普段サンドベアは昼間は砂の中で眠っていて、太陽が沈んで寒くなってから活動しているらしい。モグラみたいに砂を掻き分けて地面に潜り込む熊というのはさぞシユールな光景だろう。

「搦め手が通用しない相手なのね、それって……」

「ああ。社次第なんだよな」

みんなは私をじつと見つめている。4人の中で、物理攻撃で戦えるのはファイターの私だけ、みんなはあまり援護に回ることが出来ない。それを理解した上で私に決断を委ねている。

退くか、戦うか。

「戦わないんだったらそれでいいよ。芳樹さんの説得はアタシがするさ」

「戦つよ」

ここで引き下がってはいけない、何故だかそんな気がする。きつとこのモンスターは私が越えなければいけない壁なんじゃないかと思う。根拠など無いただの勘。

「戦うつて決めたなら止めないけど。社にばっか負担掛けないようになしうって決めたのに、どうしてこうなっちまうかな……」

八丈さんがボソリと呟いた。今でこそみんな強くなってるけど、ちよつと前までは私1人だけで戦ってたんだっけ。あの頃は大変だったなあ、生傷が絶えなくてずっと薬草の世話になりっぱなしだった。

「……社ちゃん」

史ちゃんが私を心配げに見上げる。何も手助けが出来なくて自分の存在価値がわからない状況、私はここにきてからそれに1度も直面していない。私は史ちゃんに笑顔で答えた。

「心配しないで。私が強いので、史ちゃんも知ってるでしょ」
「……うん」

改めて目の前に立ち塞がるモンスターを見やる。巨大な身体に太い腕、恐らく相当な強さなのだろう。だが負ける気などさらさら無い。当然だ、私はこんなところで足踏みなどしてられないんだ。

「用意はいいですか、芳樹さん」

「勿論だ。綾乃は危ないから下がってなさい」

「ハイ」

芳樹さんも剣を構える。そんな私達に、サンドベアは猛然と襲い

掛かってきた。

サンドベアの爪の一撃を軽くかわした。八丈さんの言ったとおり、奴は巨体ゆえにそれほど動きが早くない。冷静に観察すれば攻撃を読むなど余裕だ。

「パパってばダサーい」

「ゼエ……ゼエ……」

芳樹さんはスタミナが切れてへたり込んでしまった。力はあるんだけど、いかんせん腹の出たあの人の体格では長期戦は難しいか。汗が立ちこめて湯気になってるのが見てわかる。あの人そんなに動き回ってたかな。

サンドベアの攻撃を掻い潜り、斧を横になぎ払う。先端の刃が当たり腹から少しだけ血飛沫が舞った。だがこれだけでは決定打にならない、もっと強烈な一撃を与えないと。

「（斧って元々は、戦いの武器じゃなかったんだよねー）」

綾乃さんの言葉が脳裏に浮かぶ。両手斧は木を切り倒すためのものであったりなど、元来はきこりの使う生活用品だった。木を切るのが斧の正しい使い方。この点、人間を倒すために開発された剣とは一線を画している。

剣と比べ、斧で戦うのはとても難しい。なぎ払いと振り下ろし位しか攻撃パターンが無い、モーションの隙が大きい、突きが使えない、重たいなどデメリットは多い。

日本史を見返しても、剣や槍や弓の達人は枚挙にいとまがないが、斧の達人というのはちょっと思い浮かばない。実際に、アースフレンドで斧を愛用する人はほとんどいない。

「（だけど斧は、当たれば凄いなだよー）」

斧の魅力は、まともに当たりさえすれば致命的なダメージを与えることが出来ること。おそらく巨大な熊のモンスターでも一撃で倒すことができよう。重量があり、作用点が手元から離れた位置にあるこの武器の威力は絶大だ。

無論当たったら、の話だが。前述の通り斧は木を切る、つまり静止物体を切り裂くことを目的として作られたものだ。このサンドベアのように動き回る標的を攻撃するのは至難の業、というか私の腕では多分無理だろう。

ならどうすればいいか。答えは簡単、サンドベアを静止物体にしてみればいい。その作戦もみんなで作った。後は決行するだけ。

成功させる。私達は負けやしない。

私は攻撃をしながらジリジリと後ろに後退している。サンドベアは自分が優勢だと思って攻撃の勢いが増しているようだが、その分アクションが大きくなって避けやすくなっている。どうやら第一印象とは裏腹に、奴はあまり頭がよくないらしい。

サンドベアの攻撃をかわし返す刃で攻撃、と見せかけて屈み込む。後ろから熱を持った質量の気配。

「史ちゃん、今！」

「・・・×××××、ファイアーアタック！」

史ちゃんの杖から小さな火の玉が飛び出した。苦手だって言っ

たとりの、弱弱いライターみたいな炎。だけど虚を突くには十分だ。

勝敗が決した瞬間だった。私は飛び上がって、サンドベアの身体に全力で斧を叩きつけた。

54話 私に、できることをすればいい

腹から逆袈裟に斬りつけられ、サンドベアの巨体が砂地にどさつと倒れ込んだ。息はしているようだけど、もう戦意喪失って様子だ。綾乃さんはぴよんぴよん飛び跳ねながら狩猟場のほうに駆けていく。今までさんざん苦勞させられてきたサンドベアを倒せて喜びもひとしおだろう。

「やったー倒したー！ 社さんって強い！」

「史ちゃんのお陰だつて。ありがと史ちゃん」

「うん！」

史ちゃんは私の胸におもいつきり抱きついてくる。おもわず倒れ込みそうになったけど、くるくるっと身体を回して受け止めた。いつもみたいに頭を撫でてあげると、子猫みたいにほっぺをすりすりして返してくる。

離れたところでスタンバイしていた八丈さんと桜田さんがこっちにやってきた。

「おつかれ社。アタシも活躍したかったなあ」

「八丈さんの知識で勝てたんだから。ありがとうね」

「サンキュー。ゲリラにも強いスキルが欲しいな」

ゲリラはもう使えなさっぷりが公式でネタ扱いされてる位だし、今後の強化はあんまり期待と思うけどなあ。ただそんな地雷ジヨブを使いこなして、今でも大活躍してる八丈さんは中々すごい。

うんうんと頷く八丈さんの隣で、桜田さんが私の体を上から下までじーっと見つめている。

「怪我とかはしてないみたいね。一応でもヒーリングは掛けておくわよ」

「ありがと桜田さん」

「史ちゃんを守ってあげなきゃ駄目よ？」

守ってあげなきゃ駄目よ、って言ったときの桜田さんの視線に、なぜか少しだけ緊張してしまった。なんだか色々と見透かされてる感じ。もちろんずーっと一緒に居るつもりだけど。史ちゃんの身体をぎゅっと抱きしめる。ああ何だかとっても幸せな気分だ。

桜田さんは魔方阵を展開してヒーリングの詠唱を始めた。私はフアイターだから魔法も少しだけ使えるんだけど、あいにく私には魔法の才能が無いみたいで失敗ばかりだ。まあ私は武器を振るのが得意だから、これからもそつちを延ばしていこうかなと思ってる。

「ゼエ、ゼエ、……ふうー」

だいぶ時間が経ってから、ようやく芳樹さんが身体を起こして立ち上がった。でもまだ息は荒くてゼエゼエいつてる。少しだけダイエットしたほうがいいんじゃないかなと思う、これから生活習慣病とかが心配だ。綾乃さんはとくに狩りを始めてるよ。

水筒のお茶をコップに何杯も飲んでる。足りないようだったから私の飲む分も分けてあげた。私の水筒も空にして、なんとか落ち着いてきたようだ。

「ぶはー生き返る。すまんなあ、社くんのお茶も飲んでしまっ」

「私は史ちゃんのお茶を貰いますんで」

芳樹さんはあぐらをかいて、背中をパンパンと払った。もう汗とかもだいぶ治まったみたいだ。

「しかし君はえらく強いなあ。サンドベアを倒すシーンは圧巻だったぞ」

「そんなことないですよ」

「いやいや凄かった。ただ強いつてだけじゃなくて、なんていうか詰め将棋みたいな戦い方をしとったな」

「詰め将棋ですか？」

将棋みたいってどういうことだろう。聞き返そうと思ったたら琴目さんが寄って来た。手に持っているマジカルキューブは、倒れてるサンドベアから取った戦利品なんだろう。

「なにになに何の話？」

「私達の戦い方が将棋みたいだつて」

「そりゃアタシと社は理系だからねえ」

言われてなるほどと気付く。私が勉強で1番得意なのは数学だ。作戦参謀の八丈さんとメインアツカーの私が理系だったら、戦術もおのずと理路整然としたものになるだろう。

八丈さんは理系科目が得意だったんだ、知らなかったなあ。そういえば史ちゃんも、数学とか理科のほうが得意だつて言ってた。桜田さんはどうなんだろ、今度聞いてみようかな。

「にしてもさあ社、もうすっかり本調子みたいだね」

「そうかな？」

「ちよつと前まで心ここに在らずみたいな戦い方だったよ」

心ここに在らず、か。それが1番しっくりくる表現だろうな。スランプに陥ったきっかけそのものは大江戸先輩だったけど、たぶん私は自分のスタンスを見失ってたんだと思う。みんながどんどん強くなってきて、そんな中で私はどうすればいいのだろうかと。

気付いたらその結論は出ていた。出来ることをやればいい、うじうじ悩むより精一杯の実力を出し切ればいい。

どうあがいたって私は高杉 社。他の誰にもなれやしないんだから、ありのままの自分で頑張っていけばいい。攻撃魔法が得意な史ちゃん、状態異常が得意な八丈さん、回復魔法が得意な桜田さん、そしてファイターの私。4人でこれからもやっていこうじゃないか。そう結論付けた。

「調子が戻ったならいいけど。それよかずっと気になってたんだけど」

八丈さんがボソリと呟く。ヒーリングが終わって、桜田さんも私達に向き直った。

「社と史ってさ、アタシらを八丈さんとかって呼んでるよね」
「あっ本当だ」

言われて気付いたけど、初めて会ったときと同じだ。今までなんとなく、呼び方を変える機会が無かったんだっけ。

「それじゃ、琴目ちゃんって呼んでいいかな」

「いやいやちゃん付けとか背中が痒くなるし。普通に琴目でいいよ」

「……琴目ちゃん？」

「史もちゃん付けしない！」

こんなにワーワー言う八丈さん、じゃなくて琴目さんも珍しいな。いやそんなことないか。

「由美子さんって呼んでいいですか？」

「ええ、いいわよ」

実は1回だけ由美子さんって呼んだことあったんだけど、この分だと覚えてないだろうなあ。

そんな話をしていて、ふいにクイクイツと誰かが鎧の袖を引つ張った。振り向くとそこには綾乃さんの姿が。あれ、狩りの途中じゃなかったの？

「もう狩り終わったよ。帰ろー」

「えっ、もう終わったの」

綾乃さんは両手に沢山の砂漠の花を抱えている。もつと時間が掛かると思ってたけど、ことのほか早く終わったなあ。砂が固まったような砂漠の花を道具袋に詰め込んで、彼女は座り込んでる父親に声を掛ける。

「ほーら、もう帰るよ」

「ちよつと、肩を貸してくれ」

「もうパパってばー」

忘れ物がないか確かめて、私達は砂漠を後にした。街道に戻ったとたんに風が涼しくなる。暑いのに慣れてたから、少しだけブルツとしてしまう。史ちゃんが寒そうにしていたから、2人で身体を寄せ合った。史ちゃんの肩にそつと腕を回す。

「砂漠出たのに2人はアツいねえ」

「ちよつと琴目！」

そういう琴目さんと由美子さんも肩を寄せ合ってるけど。冷やかしチックな言葉を受けつつ、私達はアゲラダムに戻ってきた。時計を見るとまだ午後2時すぎだ。

「今日はありがとくな。お陰で助かったよ」

「いえいえ。いつもお世話になってますし、この位ならいつでも頼んで下さい」

私達は深々と礼をした。これから芳樹さんは教会で防具作り、綾乃さんは近くの公園で遊ぶようだ。これから私達はどうしようか考えた。

そのとき。

「あつれー、砂漠の花なら僕が卸してあげるのに」

建物の影から声がした。

反射的に、身体がびくつと震える。

おそるおそる、目をやる。

「久しぶりー社ちゃん」

そこに、大江戸先輩がいた。

55話 彼が放つ恐怖の笑み

喉がカラカラに渴いている。

大江戸先輩に押し倒されたあの日。恐怖だなんて、そんな生易しいものじゃなかった。高杉社という私の存在を、全て奪い取られ、引き千切られ、木っ端微塵に分解されるような気分だった。

あれから数週間。起こった全てのことを、飲み込んでけりを付けたつもりだった。あの日のショックを受け入れて、くじけずに精一杯前を向いて頑張ろうと思っていた。

けれども、込み上げてくる。

胃袋の中のモノがせり上がってきて、全部吐き出してしまいそうな気分。寒い、寒さが止まらない、震えが止まらない、景色が、ぐらぐらする。重たい、潰される、心臓を握り潰される感触。地面にぽつかりと穴が開いて、吸い込まれていく感覚。顔を見ることができない。今にも襲われそう。

「社ちゃんん？」

彼が、私を呼びかけながら、1歩近づいてきた。びくつとして、後ろに下がろうとした、けど、身体が動かない。頭が重い、上手く呼吸ができない。空気が、身体に全く足りていない気分。

「今日は、社ちゃんに相談があるんだけどね」

「社ちゃん……？」

史ちゃんが言葉を放った。私の手をぎゅっと握ってくれる、その

手がなんだかとても頼もしい。だけど、次の瞬間。

「そうそう、実は僕と社ちゃん、付き合ってるんだよ」

その手が震えた。史ちゃんが握り締めてるその手から、焦りとか悲しみとかの思いが伝わってくる。

「僕達はメルアドも交換したしさー」

やめて

「ああそうだ、社ちゃんの頬にキスもしたよ」

やめて。

言わないで、それ以上言わないで。それ以上言わないで！

……ずっと史ちゃんに黙ってた。あの日、大江戸先輩にされたことを知ったら、史ちゃんはどれだけ傷付くだろうか。怖かった、史ちゃんにどんな目で見られるか想像したくなかった。私と史ちゃんです育んできたものが、書き換えられてしまいそうだった。

私の動揺をよそに、先輩はどんどん話を続ける。

「んでさ、社ちゃんと2人で話したいことがあるんだ。だからちょっと借りるね」

「え……」

何のことを言っているのかよく理解できないまま、先輩が私に近づき、手を出した。

「（私と、2人で、話したい？）」

意味を理解した瞬間、鳥肌が立つ感覚。信じられないくらい、体中が拒否する嫌悪感。今すぐ逃げ出せと、頭がサイレンを流し続ける。

だけど、身体が動かない。

蛇に睨まれた蛙。後ずさるところか、指先一本たりとも動かせない。私を上から下まで観察するその目に、今にも襲われそうな、言いようのない恐怖を覚える。

近付いてくる。鎌口をもたげた蛇のような、その手が私に近付いてくる。1歩ずつ私に、その姿が視界に広がって、私のすぐそばに。

バシッ！

その手が弾かれた。その音で私は幾分か正気に戻った。目をぐるりとやって、状況を確認する。

史ちゃんが私の前に立っていた。私を先輩から守るように。私の手は、史ちゃんがしっかりと握り締めてくれていた。史ちゃんの手は、小さいけどとても暖かった。

「ちょっと、君は関係ないよ」

史ちゃんは腰に差してた杖を抜いて、先端を前へと向けた。この状態からフリーズアタックを唱えるのは史ちゃんの得意技。

「社ちゃんには触れさせない」

「いやちょっと」

「近寄らないで！」

大江戸先輩に向かって、史ちゃんは毅然とした態度で言い放った。知り合ってかなり経つけど、こんなにも頼もしい史ちゃんを見たの

は初めてだ。

私より背が低くて控えめな性格の史ちゃんを守ってあげなくちゃ、ずっとそう思っていた。小さい頃から友達が居なくて、ずっと1人で過ごしていたと言っていた。私はそんな史ちゃんの最初の友達になって、それから恋人になった。

史ちゃんは4人で居るときでも、うつむいてあまり話に入っていない。今まで孤独に生きてきたから、どうやって輪に入っていけばいいかが解らないって、照れ笑いしながら打ち明けてくれた。

だけど今は違う。史ちゃんは大江戸先輩を、はっきりと拒絶している。

「社ちゃん嫌がつてるから、近寄らないで！」

「えー何さ。ん、君ら……」

私の前にもう2人、人影が現れる。

「おい大江戸。大概にしるよ」

「退いてもらえないかしら？」

琴目さんと由美子さんが、大江戸先輩の前に立ちはだかつてる。

2人とも自分の武器に手を添えて、いつでも攻撃できる体勢にある。辺りに不穏な空気が立ち込め始めた。武器を構えてるみんなを一瞥する先輩。べつだん緊張する様子もなく、彼は口元に笑みを浮かべる。

「何、やる気？」

彼の目つきが変わった。それだけで凄まじい威圧感。丸腰で、両手をダラリと下ろしたままのポーズ。だがその迫力は生半可ではな

い。圧倒的な実力者が醸し出せる、強者のオーラってのを感じる。
ゴクリと唾を飲んだ。勇者の中で、ナンバー1の実力者は大江戸
亜矢。この世界の人達はみんな口を揃えてそう言う。私達全員で束
になっても、彼には到底及ばないだろう。おそらくその事実を彼は
知っている。ピリピリした緊張感が更に高まっていく。張り詰めた
糸が、引き絞られていく。

・ ・ ・ ・ ・

「なーんてね」

その糸は、彼自身の手によって断ち切られた。空気が元に戻る。
みんなの口から、少しでも安堵の息が漏れた。

「冗談だよ冗談。ヤダヤダみんな怖いなあ、カルシウム足りてない
んじゃないの？ ちゃんと小魚食べないと」

彼はやれやれといった表情で首を振った。

「しょうがないから、また日を改めさせてもらうよ。それじゃね」

そう言っただけ彼は背中を向ける。これ以上は長居しないという様子
で。立ち去ろうとする、その後姿に、

「大江戸先輩！」

私は大声を出した。彼は私に振り向く。私は喉を振り絞って言葉を吐き出す。

「あ、貴方とは付き合えません！ 私は貴方の恋人にはなりません！」

言い終わった後も喉は変な痙攣を続けていた。彼は私をじーっと見つめた。そして、今日1番の不気味な笑みを浮かべた。

「そいつは残念。んじゃ今後、縁があつたらね。じゃあバイバイ社ちゃん」

そう言つて、彼は城門へと歩いていった。

56話 …… バカ。

大江戸先輩が城門から出て行き、完全に姿が見えなくなるまで緊張が解けなかった。体中がこわばって、上手く動ける自信がない。たっぷり1分ほど経過してから、琴目さんが口を開いた。

「あー緊張した」

「本当になんなのかしら」

「とりあえずん社がぶびっ無事で何よりだ。噛んじやった」

緊張のあまりか、琴目さんが言葉を噛みまくりだ。それほどだったと思う、彼の威圧感。私だつて舌がちゃんと回るかどうか解らないし、歩けるかどうかも不安だ。そんな中で史ちゃんは、勇気を振り絞って私を救ってくれたんだ。

「格好良かったよ、史」

「ありがとう」

「さすがに社さんを愛してるだけはあるわねー」

「へへ……」

照れてる史ちゃんも可愛い。私は、史ちゃんの手をそつと握り返した。確かな温かみ、史ちゃんの肩をそつと抱き寄せた。

「あつ……」

「史ちゃん、ありがとう」

「社ちゃん……」

「私、史ちゃんが手を握り締めてくれて、とっても幸せな気分になったの。史ちゃんがいて、私がいる。2人は繋がってるんだなって思えた。史ちゃんが好き、いままでもこれから、ずっと史ちゃん

のことを好きだっと思う。大好きだよ史ちゃん、私は」
「ハイハイそこまで」

琴目さんは手を叩きながら、話を中断するように口を挟んだ。

……ちよつと自分の世界に入り込みすぎてたかな。史ちゃんの顔が、火が出るくらいに真っ赤になってた。慌てて手を離そうとしたけど、別にいいかと思って繋いだままにした。

「お惚気はプライベートルームでしような」

「あつゴメン琴目ちゃん」

「だからちゃん付けすんなー！」

またもワーとなる琴目さん。と、後ろから声が掛けられた。

「あー君達」

「芳樹さん」

さっきの騒動でつい2人の存在を忘れてしまっていた。芳樹さんは立っていて、綾乃さんは彼の足にギュツとしがみついている。

「なにやら大変なことになったようだが、俺は君達を応援するよ」

「ありがとうございます。平気ですよあんな奴」

「綾乃あいつ嫌い！」

よく見たら綾乃さんは口をへの字にして、とても不満そうだ。あんなのを見せられたら誰だっていやな気分になるだろう。まして綾乃さんはとても子供っぽい。

「あいつ前に綾乃のことガキだって言ってたし！　なんか態度悪いし社さんのこといじめたし！」

「全く、そんなしかめっ面しない」

琴目さんがなだめる様に言い諭す。ふと琴目さんが、何やら悪だくみを思い付いた子供みたいな表情になる。綾乃さんに近付いて脇の下に手を持っていく。

「えっ！？ うひっ！ やめ、や……きゃははっ！……！」

「ん？ 綾乃つてくすぐられるの弱いのか？」

「にいっ…苦手っ！ だからあ、あっ！ あはっ…おねがい、止めっ……」

「ダメ、さつきはよくもおっぱい小さいって言うてくれたね」

琴目さん、あれを根に持ってたんだ。ひとしきりくすぐり倒した後、綾乃さんを解放した。足腰がフラフラで、芳樹さんに捕まっつてようやく立つてられるって状況だ。

「うー、琴目さんのいぢわる」

「もっかいしてあげよっか」

琴目さんがまた指を鉤爪みたいにした。それを見て綾乃さんが逃げ出して、また琴目さんが追いかける。今日2度目の光景だ、あんなことがあったのに元気いっぱいだな。いっそトムとジェリーの日本語吹き替えのアルバイトでもしてみてもどうだろうか。

綾乃さんが思い切りジャンプして、芳樹さんの方に飛び乗って肩車みたいになる。さすがにそこまでは琴目さんも追いかけていけないようだ。綾乃さんは勝ち誇ったような顔になる。

「へへーんだ。もう追ってこれないでしょ」

「おっとこんなところに孫の手が」

「きゃー！」

「こらこら、暴れるなつての」

はしゃぎ過ぎたみたいだ。芳樹さんは肩車したまま、綾乃さんに話しかける。

「俺は教会に戻るが、綾乃はどうする」

「パパと一緒にいるー」

「そうか。君達、今日は助かった。また何かあったら手伝ってくれな」

そう言つて、芳樹さんと綾乃さんは教会に戻っていった。残ったのは私達4人。

「さてと。アタシ達は買い物に行くけど、社達はどうすんの」

「私達も部屋に戻ろうかな」

「そっか。じゃあ行こっか由美子」

「ええ」

琴目さんと由美子さんも買い物に行った。残ったのは私と史ちゃん。

「じゃあ帰ろう」

「うん。ねえ史ちゃん、ちょっとそのベンチで話さない？」

私は公園にあるベンチを指差す。史ちゃんはうんと頷いたので手を繋いでそこまで行つた。2人で腰掛けると少しだけギイと音がした。

あの日のことを話した。大江戸先輩に付き合えと言われたこと、押し倒されたことや頬にキスをされたこと。史ちゃんに話していつて、心のつかえが少しずつ取れていくような気がした。

「アイツそんなひどいこと…… 社ちゃん、だから黙ってたんだね」
「史ちゃんに嫌われちゃうんじゃないかって、そう思ってた言い出せなかったの」
「……バカ」

史ちゃんは私に微笑みかける。それはとっても優しい笑顔だった。

「嫌いになんかなるわけない。社ちゃんがずっと好きなの。私がずつとそばにいるから、今度からはずつと頼ってね」

「史ちゃん……」

史ちゃんの優しさが、体中をゆっくりと駆け巡っていくような気がした。春先のベランダで干した布団にくるまっているような安らぎの感じ。わたしは史ちゃんを抱き寄せて、そつと唇を交わした。

「社ちゃん、今とっても社ちゃんにギュッてされたい気分なの……」
「部屋に戻ろっか、史ちゃん」

私達はもう1度キスをした。

57話 誓いのキス

自分達の部屋がある教会に戻ってきた。珍しいことに、兄さんが礼拝堂の掃除をしていた。

「社。もとの世界に帰るのかい？」

「ううん、もう1泊だけしていこうかなって」

「そうなんだ。大道寺さん、社のことをよろしくね」

それだけ言うと兄さんは掃除に戻っていった。モップがけをする兄を横切って私と史ちゃんとは自室へと目指す。2Fに上がって踊り場を右に、私達の部屋は104号室だ。取っ手を握る動作もわずらわしい。ドアを開け、滑り込むようにして身体を部屋の中に押し入れる。

ドアを閉めた。ここは私と史ちゃんだけの部屋。ほかの誰にも邪魔されない、私達が色々なものを慈しむ秘密の間。いかなる偏見も迫害も受けない、2人の常識だけが全ての世界。

私は玄関で靴も脱がないうちに史ちゃんを抱きよせ、着ていた口ブをインナーウェアごと一気に脱がした。バンザイをした史ちゃんは、それだけで上半身は一糸纏わぬ姿になる。

もう限界だった。史ちゃんの唇にむしゃぶりついた。舌を入れると、史ちゃんも絡ませてきた。

「クチュ、ちゅ・・・ふみちゃん、んふっ、ぷちゅうつ、んんっ、

……」

「やしろ、ちゃあん、んっ、フウ、クチュ……」

史ちゃんは私の背中に手を回して、鎧の金具を1つずつ外していく。パチッパチッと音を鳴らし、私の肌が徐々に露になっていくの

を感じる。全部の鎧を剥ぎ取られて、上半身はスポーツブラだけの姿になった。

史ちゃんは私の胸を触りながら見上げる。

「社ちゃん、舐めていい？」

「まっ、それアアアンツ！！」

返事をする間もなく、スポーツブラを捲り上げられて、あらわになった胸の先端を舌でチロチロと遊ばれる。右乳首に痺れるような快感が走る。上目遣いの視線を感じて、更に恥ずかしさが込み上げてくる。

「史ちゃ、んんっ、わたしのおっぱいが、好き？」

「大好き……だよっ！」

「んああー！！」

舌使いと歯で乳頭を吸い上げられ、おもわず喘ぎ声が出てしまう。胸にどんどん血液が流れていって、まるで母乳が出そうな錯覚を覚える。

初めてHをしたとき以来、私のおっぱいは史ちゃんの寵愛を受け続けている。えっちをするときはいつも私の胸から始まる。赤ちゃんのように胸を吸い続ける、後ろから揉みしだく、服の上から弄る、顔を埋める、指で弾く、唾液でべとべとにする。最近少しずつだが胸が大きくなってきた。今まで使い続けてきたブラがきつくなってきたような気がする。

胸を吸い続けていた史ちゃんが顔を上げた。私の胸は、史ちゃんの汁で濡れそぼっている。

「ハアハア、史ちゃん……」

「みぎがわだけじゃ、バランス悪いよね」

「んん、くはああっ!!」

私の左乳首を、史ちゃんはピンと人差し指で弾いたのだ。今まで何も刺激を与えられていなかったにも拘らず、そこは痛いくらいに充血して固くなっていた。

何度も指で弾かれ、その度に私のおっぱいがぷるんと跳ね上がる。口元から涎が垂れ落ちる。みつともないけれど、喘ぎ声が溢れてきて口を閉じることが出来ない。

史ちゃんは私の胸に集中してる。

……そろそろ私も反撃するのでしょうか？ 油断している史ちゃんの脇に手をやり、小さなくぼみを爪で軽く擦った。

「はうっ！」

「んう、史ちゃんって、ここ弱いんだよね」

責めるのが大好きな史ちゃん、だけどその身体はとっても敏感なのを私は知ってる。こうやって脇の下をくすぐるだけで、とっても可愛い声を出しちゃう。形勢が逆転して、今度は私が責め立てる番だ。史ちゃんを壁にもたれさせて、その上に覆い被さって動けないようにする。

史ちゃんの身体は、まるで幼児のよう。史ちゃんの胸には膨らみが全くない。肩からお腹まで、僅かな曲線すら見当たらないペタンコだ。その中心のピンクの縁は、肌との境目がわからない程に色付きが薄い。そこに自己主張する小さな突起が無かったら、乳頭だとわからないくらい。

「史ちゃんの身体、ちっちゃくて可愛いよね」

「んんあうっ……」

私は知っている。史ちゃんが自分の幼い体にかんりのコンプレックスを持っている。そして私の身体に甘えて抱きつくことで、自分の見劣りする身体を貶めている。私は知っている。史ちゃんは、己を冷笑することにこの上ない快感を覚えている。私と一緒にいることで、史ちゃんは自虐的な歓びを得ているのだ。ちよつとだけいじわるな私は、あえてそれを口に出してみよう。

「ふみちゃんは、大きい私のおっぱいが好き？」

「わたしの身体は、ちっちゃくて、貧弱だからひうつ！」

胸の先端を指でつつくと、切ない声で身体を押し付けてくる。平坦な胸を、手のひら全体で包み込むように撫で回していく。脂肪のない胸から、肋骨の隙間が感触として伝わってくる。

私は自分の胸を、史ちゃんの胸に押し当てた。私の乳房で史ちゃんの覆い隠すような感じ。私は両胸を手で支えて、先端を史ちゃんのそれに擦り合わせた。

「あつ、あああつ……」

「んん、はうつ……」

私の乳頭が、ほんの小さな欠片みたいな史ちゃんのそれと重なり合っている。私は自分で胸を持ち上げ、突起を小刻みに揺らした。私の勃起した大きめなそれと、史ちゃんの小さくて可憐なそれが擦り合わされることで刺激され、互いにビンビンに勃起あがる。

史ちゃんと交わるようになって気付いたことがある。私は史ちゃんの小さい身体を弄ることにたまらない喜びを覚える。史ちゃんの平らな胸、発毛の兆しが見えない下腹部を見るたびにトクンと心臓が跳ね上がる。

児童性愛なのかなと思ったこともある。だけど違う、私は史ちゃ

んに出会ってからこうなった。史ちゃんだったからこそ、こういう自分に目覚めたのだ。他の人では、決してこんな感情は生まれないと思う。史ちゃんしか身体が受け付けないのだ。

「やしろちゃんっ・・・」

腕の中の史ちゃんが、今朝の名残のあるベッドのほうを指差している。交じり合って共に果てたシーツには皺が入っていて、濡れる部分からは芳醇な香りが漂っている。史ちゃんをお姫様抱っこしてベッドに向かう。史ちゃんは私の首に手を回して肌をすりすりしている。

到着した。私はそつと史ちゃんをベッドに横たわらせた。その際に、ショーツのクロツチの隙間を人差し指でなぞってあげる。史ちゃんのそこは、もうすでにいやらしいくらい蜜が溢れ出ている。私の下着もグチュグチュ音を出してる。

2人で履いているショーツとかズボンを脱ぎ捨てた。そして深く深く、史ちゃんと熱いキスを交わした。

窓から降り注ぐ月明かりが、剥きだしの肌を晒す私達2人を照らしている。私達はちょうどお風呂から上がったところ。バスタオルで身体を拭いて部屋に戻ってきた。

もうすぐ晩御飯の用意をしてくちゃいけない。琴目さんと由美子さんはもうキッチンに向かっているだろう。私達も今朝のように遅刻しちゃいけない。奇しくも遅れそうな理由は一緒だ。

だけどその前に、史ちゃんに伝えたいことがある。

「ねえ史ちゃん」

「なあに社ちゃん」

史ちゃんは私に身体を預けてくる。私は背中に腕を回しながら口にする。

「私は、史ちゃんが好き。だから改めて言っね」

一呼吸置いて、言葉をのせていく。

「史ちゃんに、私の恋人になって欲しいの」

「社ちゃん……！」

史ちゃんが少し驚いた顔になった。そして、すぐにまた笑顔になる。

「私も社ちゃんが好きだから、ずっと一緒にいたい」

「史ちゃん……」

「健やかなるときも、病めるときも」

「ずっと一緒だからね」

私は史ちゃんの顎を軽く持ち上げた。

「じゃあ、誓いのキスだね」

「んっ……」

告白、誓いのキス。

こうして、私達は本当の恋人同士になった。

58話 彼女達の×××（前書き）

百合描写に注意して下さい

58話 彼女達の×××

喧騒に満ち溢れた露天市場。売っている商品は食料品から日常着、楽器や画材までじつにさまざまだ。裏通りに入ると、ちよつと怪しげな占い館や大人のショップなども構えている。

一瞥して、ここがオンラインゲームの世界だと気付く一般人は殆どいない。長い間冒険者をしていても錯覚しそうなほど。それほど活気と魅力に溢れた街並みで、観光パンフレットに掲載されていてもおかしくない風景だろう。パン屋の看板娘に表紙を飾ってもらいたいくらいだ。

だが実際には店のデザインも看板も、品揃えに至ってまで全てGMによって管理されているのだ。実はこの市場には酒屋が存在しない。年長者の芳樹を含め、アルコールを嗜む者がいないからだ。全てはこの世界で活躍する冒険者のために最優先し、設置されたものばかりである。

だが働いている従業員にはそんな裏側事情などお構い無しで、どの店も客引きに必死だ。魚屋の親父が値引きセールを始めると、向かいの肉屋の店主も負けじと値段の文字を書き換える。なにも客は冒険者だけではなくNPCの主婦なども買い物に来たりするのだ。彼等は単なるオブジェではなく、人格を持った紛れもない人間だ。アースフレンド世界がどのように作られたかはいざしらず、少なくとも彼らをNPCと表現するのはいささか差別的かもしれない。

そんな活気溢れた街で、やや目を引く人影が2つ。緑色のローブを着込んだ少女が、黒ずくめの少女を色々な店に引きずり回している。

「あら、このお肉安いわね。この薄切り肉300gほどもらえる

かしら？」

「おういいぜ、ちょっと待ってくれるか」

肉屋の店主はガラス細工の什器から肉の入ったトレーを取り出し、手早く包みに盛って計りに乗せる。一発必中、誤差はゼロの300gだ。

「45ゴールドだけど、お嬢ちゃん達は可愛いから40にまけとくぜ！」

「キヤー可愛いって言われたわよ琴目！」

「解った解った。はしやぎすぎだよ由美子」

「それじゃ次は八百屋さんに行くわよ」

少女達は肉屋を離れて別の店に行く。手を引いているのは桜田由美子で、やれやれといった感じで引つ張られているのは八丈琴目だ。2人は砂漠から帰ってきて、そのまま夕食の買い物へと駆け出したのだ。

由美子は買い物のときに店主や他の買い物客と話し込んだり、寄り道して別の店に入ったりするのが非常に好きである。一緒について歩く琴目にとっては、さぞ迷惑な性格だろう。

だいたいの買い物が進ませ、琴目と由美子は近くのベンチに腰掛けた。琴目はどさつと袋を置いて肩をぐるぐる回す。2人が持っていた袋の中には、当初の予定の3倍強の商品が詰め込まれている。

「はああ疲れたー」

「琴目、お疲れ様」

ベンチにもたれかかっている琴目にねぎらいの言葉をかける由美子。穏やかな外見とは裏腹に、彼女はわりと体力があるようだ。

「にしても大江戸さんって、あんなに嫌な性格だったのね」
「ん、ありゃドン引きだよな」

琴目と由美子は世間話を始めた。どうやら先刻の、亜矢と社の一悶着の話だろう。彼の言動は露骨なまでに社を追い詰めていった。元からさほど彼に良い感情を持っていなかった2人にとって、この事件は決定的なマイナス評価になった。

「あんな腐った野郎だとは思わなかったよ。今までアタシらに優しくしてたのはフェイクだったんだな」

「彼の本性を知ったら、女子のファンは幻滅するでしょうね。…」

「あつ、その」
「いいって、気にしてないよ」

琴目は少し前に、元の世界で致命的な傷を負ってしまった。具体的には失明と全身マヒ。あれから1度も元の世界に戻っていないくて、ずっとアースフレンドで過ごしたまま、きっとこれから永遠に。由美子はそれをつい失念して、学校のことを口にしてしまった。

琴目はパタパタと手を振り、話題をシフトしようとする。

「それよか、あん時の史は格好良かったね」

「ええ。社さんを後ろにかばって、普段と違ってびっくりしたわー」

「あの2人、どんな体位でしてると思う？」

「うーん、絞り芙蓉とかしてそうね。こう、社さんが史さんを後ろから抱きしめて」

話題が史に飛んで、更に2人の情事にまで発展した。どうやら社と史の関係は、琴目と由美子にはお見通しのようだ。

ちなみに今朝、なかなか社と史がキッチンにやってこない理由は情事の真っ最中だからと由美子は予想していた。実際にそのとおり

で、由美子がパンを切っているときに、社はズボンの中にお漏らしをしていた。

「さてと、それじゃ私達も帰りましょうか」

「そうだな」

彼女らは買い物袋を持ってベンチを後にする。歩きながら由美子がボソボソと琴目に何かを呟き始める。

「ねえ琴目。……帰ってから、する？」

「どうしたい？」

由美子は顔が赤くなる。大通りを抜けて、教会へと戻ってきた。中では社の兄、彰久が掃除をしていた。

「ただいまー」

「ああお帰り」

軽く挨拶を交わして2Fへと上がる。踊り場を右に、彼女らの部屋は103号室。扉を開け、中に入る。

なんとなくだが空気が変わった。由美子の目が少し怯えたようになる。これから起こることへの少しの不安と、強い期待が混ざったような表情。

「ひゅっ！」

扉を閉めるなり由美子が短い悲鳴を上げた。琴目がロープの上から尻をさっさと撫で回したのだ。

「由美子、壁に手についてじっとしてて。そう足を開いて」

「あ、うん……」

指示されるままにポーズを取る由美子。上半身を倒して腰を突き出している、その姿はまるで行為をねだる売春婦だ。全身をすっぽり覆うロープの奥から、めくるめくような色気が漂っている。凄艶すぎる魅力に立ちくらみを起こしてしまいかねない。

由美子が着ているのは金属系が織り込まれた、プリースト用の裾の長いロープ。戦いのために作られた実用性重視の質素な服だ。男女兼用の、はつきり言って色気の欠片もない地味なデザイン。

しかし由美子にかかれば、それは一変してエロティックなコスチュームと化す。服で隠しきれない豊満な身体のライン、頬が赤く染まっている端正な顔立ち。どれをとっても10代中頃の少女だとは思えないほどの色気だ。たとえ勝負下着を纏った遊女を10人連れてきても、今の彼女には遠く及ばないだろう。

学校においても、由美子の隠れファンは少なからずいた。丸太橋高校の女子生徒は男子と同じデザインの制服で、紺色の学ランとスラックスの着用が義務付けられている。殆どの女子がくすんでしまいう中で、由美子は数少ない例外となりえた。

分け隔てなく優しいふんわりした性格とは裏腹に、見た者を悩殺するグラマラスで官能的な肉体。

そんな彼女の身体と心は、全て琴目に捧げられていた。

「はあ、んっ、アハン、ハア……」

由美子の声が、徐々に喘ぎ声に近くなってきた。彼女は今、ロープ越しに胸を揉みほぐされている。琴目は繊細なタッチで、由美子の性感を暖めるようにくすぐっていく。2人が行為を始めるようになってから5年以上、由美子の快感のツボを知り尽くしているの

だろう。

琴目はローブの裾を掴みゆつくりと持ち上げていった。隠されていた美脚が少しずつ露になっていく。膝裏から引き締まった太もも、シミ一つ無い白くて綺麗な肌だ。

そこで止まらず更に引き上げていく。すると肌色とは違う、淡いグリーンの布地が顔を覗かせる。琴目は裾を腰の高さまで持ち上げ、落ちないようにくると縛り上げた。

とてつもなくいやらしい由美子。胸を揉まれ、むき出しの尻を突き出すその姿を誰が想像できよう。知るのはただ1人、琴目以外にはいない。

「ッン、んん、フウ、…んあ、あ、あっあっ……」

由美子の声がどんどん上擦ったものになっていく。下着の上から股間を刺激され始めたのだ。琴目の指が激しく動く。ジュパジュパと粘ついた水音を立てながら、高みへと昇らせていく。

そして、トドメとばかりに指を深く突き入れる。

「ひあっ、あ、あっあっあああああっ！ ……………~~~~っ！
！！」

由美子が大きく身体をのけ反らせて絶叫する。玄関に立ったまま、彼女はわずか数分で達してしまった。

ベッドの上で向かい合う琴目と由美子。2人とも衣服は全て脱ぎ

去り、みずみずしい思春期の肌を部屋の中で晒していた。

琴目の裸身もまた、息を呑むほどに美しかった。程よく引き締まったスレンダーな体格。小ぶりな胸や尻は、むしろ彼女の中性的な魅力を引き出していた。

彼女と由美子はお似合いのカップルだとひそかに噂されていた。母性的な由美子と凛々しい琴目が並ぶツーショットは確かに絵になるだろう。それは裸になっても印象は変わらない。

対面する由美子も、脱いだことにより迫力が更に増していた。彼女は服の下にまだ強烈な破壊兵器を隠し持っていた。現れたのは想像を遥かに上回る衝撃的な肉体。もしも傾城を企む淫魔がいるのであれば、まず彼女を参考にするべきだろう。

だが、彼女はただ脱いただけではない。

彼女は上下が逆である。頭をベッドに付け、両足は頭のすぐ隣にある。背を曲げて、秘めたる場所である2つの穴は琴目へと向けられている。

由美子は四十八手のうちの一つ『だるま返し』の体位になっていた。

「すごいよ、由美子のエッチな所が全部丸見えだ」

「やあ、恥ずかしい……」

恥ずかしそうに首を振る由美子。彼女は黒い布で目隠しをされていた。先ほど、雑貨屋で購入したものだ。手足も布で縛られてほとんど身動きが取れない。

2人が体位の知識を得たのはインターネットのとある交流掲示板だ。己の体験を告白するコーナーにあった説明。実際にやってみてその興奮が予想以上だったことに気付いた。

琴目は自分の人差し指に舌を這わせ、唾液で濡らしていく。ねろねろと舐めあげ、指全体が妖しい汁気に包まれる。

「じゃあ、指を入れるね」

「待つ、ひんっ！」

返事を待たず琴目は指を挿入した。その甘い刺激は、由美子が想像していた箇所とは違う所から訪れた。琴目の指は後ろの穴、肛門に突き入れられていた。

「んあっ、ひう、ひいん……そこはダメッ、つくあ、ああうー！」

「やっぱり、ココ感じるんだ」

琴目によつて、本来は排泄器官であるそこも快感に目覚めさせられていた。琴目の指は奥へと差し込まれ、内部で鉤状に曲げた。それをぐりぐりと、回転させながら腸の内壁を擦っていく。

掻き回されいじくられ、しばらくしてようやく人差し指が引き抜かれる。指には、入れたときには無かったものがこびりついていた。その指を、由美子の顔に持っていく。

「これが入れてた指だよ。どんな匂い？」

「やあ、そんな汚い……」

「汚くなんかないさ、由美子のものなんだから」

そう言つと琴目は指をぺろりと舐めた。音を立てて、由美子にも解るように。舐めた指を、ふたたび由美子の顔に持っていた。

「さあ、由美子も舐めてみて」

「うん……」

うなずいて、由美子も舌を伸ばした。自分の排泄物が付着した指を舐めている由美子の屈辱感は計り知れない。いや、琴目によってもたらされた恍惚感のほうに勝っているかもしれない。

「じゃあ、また飛ばしてあげるよ」

「えっ、っつあはっ！！」

既に準備していたのか、琴目は反対の指を肛門に入れた。またしても不浄の穴を襲う刺激、しかしその動きはさっきまでと比べ物にならないくらいに強烈だった。指の本数もどんどん増えていく。

「ひっ、きひっ！！！ ひあんっ！！ んあっああっあああああ
っっっ！！！！」

4本目の指が入った瞬間、由美子は喉を張り上げ、身体をビクンと震わせて汁を噴き出した。

由美子は、本日7度目のピークを迎えたのだった。

琴目と由美子は向かい合っていた。

さっきまでとは違い、由美子の姿勢はごくごく普通なもの。床に起立して、手は横にダランとぶら下げている。

裸なのは変わらないが、先ほどの体位と比べるとずいぶん大人しいものだ。だが由美子は、緊張で身体を震わせている。

「なにを書こうかな」

琴目は由美子の身体を、上から下までじっくりと鑑賞している。彼女の左手には黒いペンが握られている。さっきの買物で購入した新品だ。

おもむろに琴目が動いた。由美子の体がビクツと震える。琴目はペンのふたを開け、先端を近づける。

そして、ペン先が由美子の胸に触れた。

雪のように白く美しい肌が、黒いインクでべっとりと汚されている。琴目はかまわず、さらにペンを走らせる。やがて由美子の身体に、1つの単語がしたためられた。

「書けたよ。由美子も読んでみて」

「ハア、ハア、……いんっ、らん」

神話から浮き出たような美しく可憐な少女。由美子の右胸に書かれたのは『淫乱』の2文字だった。

たったそれだけで、彼女から発せられる色気が何倍にも膨れ上がる。しかしその色気は、ひたすらに下品で卑しい輝きを放っていた。

「さあ、どんどんいくよ」

由美子の身体にふたたびペンが向けられる。単語が綴られるたび、由美子は人間以下の存在へと堕ちていく。

……『変態』『雌豚』『色情狂』『売女』『スケベ』『公衆便所』『ビッチ』『慰み者』『アバズレ』『股開き』『腰振り』『デカパイ』。

白い肌に、琴目はまるで黒板に書き込むかのように醜い文字を埋めていく。

「よし完成！」

仕上げに、股間に向かって矢印を引き『1回10円』と記して琴目は顔を上げた。

「さあ出来上がり！ 鏡見て確かめて」

琴目は由美子を、姿見の前へと連れて行った。

まじまじと自分の身体を見つめる由美子。彼女の眼には、自身の汚された肉体がどう写っているのだろうか。全身に卑猥な化粧を施され、もはや彼女からは清楚の欠片も感じ取ることができない。だらしなく口を開いて涎をたらしている。おそらく途中で何度も気をやったのだろう、股間から粘液がじくじくと滲み出ている。

「さあ、もうすぐ夕飯の用意しないと。服を着てキッチンに行こう」

琴目は信じられないような発言をする。身体中に落書きを施されたまま、由美子に外出しようと言うのだ。たしかに服を着ていさえすれば見た目はごく自然なものに違いない。しかし文字通り一皮剥けば……！

実はこの状態で外出するのは今日が初めてではない。何を隠そう、昨日も昼から身体に落書きをされていた。あのとき社が感じていた違和感は、まさにこれだったのだ。

「さっ、行こう」

「え、ええ……」

2人は顔を洗い、普段着を身にまとってキッチンに向かう。由美子は平静を装っていたが、紅潮する頬を隠すことはできないでいた。

五十九話 ある筈のない永遠

太陽が沈んで数時間。現代の多くの人間にとって、まだまだ宵の口とも言える時刻。この辺りは街灯がきちんと整備されていてわりと明るい。塾帰りの子供は、よくこの道を通ったりしている。

男が犬を連れて散歩している。

見た目は175cmくらい。体つきはがっしりしていて、スポーツが得意そうな印象を持てる。耳にはイヤホンを付け、ときおり鼻歌でリズムを取っている。

連れている犬の種類はドーベルマン。飼い主の隣にピッタリとくっついており、とても躰が行き届いているようだ。黒い胴体なので夜目では解りづらいが、どうやらメスのようである。

この町で有名な屋敷をぐるりと1週した男は、ふと遠くに人影を見つけた。交差点2つほど向こう側にじっと立っている。街灯に照らされているとはいえ、上下とも黒い服を着ているのでシルエットはよく判別できない。

男はさして気にもしない感じで、自動販売機に500円玉を突っ込んだ。買ったのは瓶入りの栄養ドリンク2本。1本を一気飲みして、残った1本をジーパンのポケットに入れた。

休憩を終わらせ、男は自動販売機から離れる。犬も従順に彼の後についていく。

少し歩き、男は突然リードを離した。

気が逸れた瞬間にすっかりではない、男はわざと手を離したのだ。解き放たれた犬は、野生のような俊敏さで走って逃げていく。足音

を全く立てないで駆けているので、目を凝らさなければ存在自体に気付けないだろう。

ペットの行動に男は全く反応を示さない。飼い主失格ともとれる男は次の瞬間、さらに驚愕の行動をとる。

ギンッ！

鈍い音が暗闇に響いた。中型のナイフで、目の前の人間におもいきり斬りかかったのだ。Ｔシャツの中に隠し持っていた己の獲物を、瞬時に引き出しての行動だった。

近隣住民に通報されてもおかしくない暴挙。一見して善良な小市民のような彼は物騒な通り魔なのであろうか。幸いにも、被害者の人間は傷一つ付かずに避ける事ができたようだ。

再びナイフを構える男。その姿は堂に入っており、かなりの経験者であることが窺える。

対する被害者はびっくりとも動かない。目の前の出来事に足がすくんでいるのかというと、どうもそんな様子では無さそうに感じる。被害者は上下とも黒い服を着ていた。さっきまで交差点の向こうに立っていた被害者は、不幸にも男がジューズを買っている間に傍に来てしまったのだろう。

だが、果たして被害者は、本当に被害者なのだろうか？

疑わざるを得ない。なぜなら被害者もナイフを持っていて、そのナイフを構えているから。被害者もまた常人ではなかった。

ナイフで襲い掛かった男と、それをナイフで撃退した男が対峙する光景。ほんの数分前まで穏やかな夜を迎えていた街角が、とつぜん殺し合いの舞台と化す。

先に仕掛けたのは襲い掛かった男。一瞬前まで立ち止まっていた

とは思えないような爆発的な加速力でもって突撃していく。体育会系な見た目どおりの鋭い動きで、相手の心臓を狙う。

手応えが無かった。避けられたと判断し、カウンターにそなえて全神経を研ぎ澄ます。

男は、ただ1人立ち尽くしていた。

本当に独りになっていた。気配が全く存在しない。相手は攻撃を避け、一瞬のうちに忽然と消え去ったのだ。

「チツ」

男は小さく舌打ちした。奴と戦ったのはこれで2度目である。までも前回同様、相手にかすり傷1つ付けられずに逃げられてしまった。

と後ろから、犬が男女を引き連れて戻ってきた。どうやらこの犬は援軍呼びに行っていたようだ。犬は女の傍に立って周りを警戒している。足音を全く出さずに走ることといい、この犬もまた非凡な存在だということがわかる。

「正人、怪我はないかしら」

「すんません、姐さん」

女は心配げに安否を確認した。彼女の名前は水谷^{みずたに} 顕子^{あきこ}。裏の世界ではそこそこの名を知れている桜田組NO3の女性だ。もうすぐ50を迎えようとしている筈だが、そうは見えずとても若々しいと近所でも有名。暗闇でもわかる美貌を持っているが、今その表情は浮かない。

正人と呼ばれた男のフルネームは夢前^{ゆめさき} 正人^{まなひと}。顕子の片腕にして、一流クラスの格闘術を使いこなす彼。みすみす敵を逃がしてしまっ

た自分が許せないのか、うめくように謝罪の言葉を表す。

「俺の至らないばかりに、申し訳ありません」

「気に病むな、無事が何よりの成果だ」

先ほどまで黙っていた壮年の男が口を開く。穏やかな低音は、鶴の一声となつて皆の緊張をほぐしていく。

彼の名は檀原^{かしはら} 武雄^{たけお}。桜田組のNO2であり、実動隊の長を任されている人物である。長きに渡り組を支えてきた彼だが、今回の事件には頭を悩ませていた。

半年ほど前から、桜田組は謎の男から襲撃を受け続けていた。はじめは息の掛かった官僚や政治家など。目撃者などの情報から、犯人は2人であると推測されている。

桜田組は一丸となつて犯人特定を急いでいるが、いまだに尻尾を掴むことができない。ビルの屋上から飛び降りて平然と逃げおおせるなど、人間業ではない運動能力を持っているのだ。

最近組の人間まで狙われるようになってきた。恐らく敵のターゲットは桜田組の組長である桜田 龍一^{りゅういち}だろう。彼に被害が及ぶような事態は、何が何でも阻止しなければならない。

敵の襲撃だけでも厄介な問題。だが桜田組には、もう1つ懸念しなければならないことがある。

「姐さん、由美子さんの様子は？」

「ここ何日か、ずっと高熱で寝込んだままよ」

「状況はかなり悪くなってますね……」

少し前に琴目が倒れて病院に運ばれた。それが呼び水になったかのように、最近まで健康だった由美子も身体を壊してしまった。

屋敷を狙う者の襲撃と、組長の娘の重篤。どちらか1つだけでも

組を揺るがす非常事態だ。それが一度にやってきたのだ。彼らの気苦勞も半端でないだろう。

「乗り切ってみせよう」

武雄は空を仰いで呟く。彼の声からは疲勞の色は感じられない。

「そうね。私達がしつかりしないと」

颯子が答える。2人の言葉は簡潔ながら、矜持のこもった力強いものだった。

由美子が高熱でうなされていた。

ここ数日のあいだ、40度近い熱を出し続けている。ずっと意識は朦朧としていて、呼びかけにも上手く返事ができていない。

彼女は生まれつき病弱な身体だった。医者からは15歳まで生きられないと告げられていた。その宣言通り、ひ弱で病氣になりがちな幼少期だった。

6歳になる頃には走ることにすらままならなくなり、1日中を布団で過ごすことが殆どだった。当然小学校になど行けるわけもなく、桜田組の誰もが彼女の暗い未来を想像し、口に出さないでいた。

転機は10歳のとき。琴目が奉公人としてやってきたのだ。2人はとても気が合って、非常に仲良しになった。

琴目と一緒に居るようになって、由美子の体調はどんどん良くな

っていった。中学生になると2人で学校に通うようになった。また健康になるにつれ父親譲りのカリスマ性を発揮していった。桜田組にとって、琴目はまさしく救世主だった。

これで桜田組も安泰だろう。将来は琴目と共に、組を支えていくてくれるだろうと、皆思っていた。

由美子は、どうしようもない絶望感で押し潰されそうだった。

「（琴目とは、いつまで一緒にいれるかしら……）」

琴目は倒れて、もはやこちらの世界では生きていけない身体になってしまった。

彼女自身も、ともに動き回れない身体になってしまった。

2人が存在を確かめ合えるのは、ここではないアースフレンドの世界。自分の身体のことには琴目や、社と史には話していない。余計な心配とかを掛けたくないから。

「（離れたくない……）」

朦朧とする意識の中で思う。琴目と一緒に居続ける、それが彼女の切なる願い。琴目と共に在りたい。

しかし、この病弱な身体がそれを許さない。

はかない夢、叶わぬ思い。ある筈のない永遠を誓い合った琴目と由美子。

決して止まらぬカウントダウンはもう始まっている。0になる瞬間、それは彼女達の肉体が朽ち果てるとき。

六十話 アンタが、吐き気がするほど嫌な奴だって知ってる

亜矢は、史に向かって殴りかかった。

すんでのところで回避できた史。後ろの壁にぶつかって痛そうな顔をしたが、すぐに気を取り直して走り出す。一瞬前まで史の顔があつた空間を、亜矢のナイフが貫いた。

キツとにらみ返す史。亜矢はそんな彼女を、侮蔑と嘲笑と憐憫が混じって、そして凄まじいまでの憤怒の形相で睨み付けていた。

遡ること数十分、史は公園の中を歩いていた。

アースフレンドの世界から戻ってきた直後のこと。社との行為の興奮も覚めやらぬ内に、家族に買い物に行ってきたと云われた。頼まれたのは近所のスーパーで売ってるもの。史は紺色のタンガリーシャツを羽織って家を出る、言われた買い物を終え、エコバッグを揺らしながら公園の中を通っていた。

そして、声を掛けられた。

「キミ、大道寺さんでしょ」

「……………」

振り向いた、史は既に激怒していた。眉間に皺が寄り、手は拳を握っていた。

その姿を見た瞬間に虫唾が走る。史にとって、社を傷付け悲しませた大江戸亜矢は存在が憎悪の対象そのものだった。

そんな彼女の態度などどこ吹く風と言わんばかりに肩をすくめ、
亜矢は話を切り出していく。

「きみこの辺りに住んでるんだ。探したよー」
「何の用」

史の声が厳しくなっていく。世界が世界なら、フリーズアタック
を放っているかもしれない。

彼女は内気で控えめな性格だが、いざという時は非常に大胆になる。
まさに今がその状況だった。社を守りたいとき、そして社を傷
つけるものが目の前に居るとき。

そして彼女は同時に、社に対して強烈なまでの過度な依存心も持
ち合わせていた。社を神格化していたといっても過言ではない。史
にとって、社は己のアイデンティティそのものだった。

「話が早くて助かるよ」

「さっさと喋って消えて」

「怖いなあ」

亜矢はやれやれといった風で肩をすくめる。その動作はやけに大
仰で、見るものを挑発しているようだった。

「じゃあ言っね。キミさ、社ちゃんと付き合ってるよね」

「……それが？」

自分と社の関係を言い当てられて、史は少し胸騒ぎを覚える。心
の揺れ動きを悟られないよう、押し殺した声で問い返した。

「さっさと社ちゃんから手を引いてくれない？」

あまりの暴虐な発言に、史は二の句が継げなかった。亜矢は更に悪態を放ち続ける。

「僕にはある願いがあんだ。本願達成の為に、社ちゃんが僕サイドに居るととっても心強いんだよねー」

「……」

「だけど、キミみたいなのに邪魔されるなんてね。鬱陶しい限りだよ」

「……そう」

言葉が耳を掠めるたびに、史の神経は逆撫でされていく。彼女が放つ結論は、口に出す前から既に決まっていた。

「そんな妄言に耳は貸せない」

「キミ、自分が重たい女だって知ってる？」

史の眉がぴくりと上がった。彼女の反応を確認した亜矢は話を続ける。

「キミ、社ちゃんを独占したいんでしょ。僕みたいに近付いてくる人間は絶対に許せない。社ちゃんがいないと何にも出来ない。社ちゃんと一緒に居ることを当然と思ってる。そんな重たい奴が、人を幸せにできると本気で思ってる？」

「うるさい」

「図星だあ。自分が鬱陶しい最低人間だって解ったら、今すぐ僕の視界から消えてくれないかな。そして社ちゃんに、2度と近寄らないで欲しいね。それが僕にとっても、社ちゃんにとっても幸せなことさ」

「知っている、その程度」

おや、という表情で今度は亜矢が眉を上げる。

「知ってる。そういう愛しか知らない」

「なら話が早い。僕は」

「だけど！」

史は声を荒げる。

「私が社ちゃんとずっと一緒に居る。社ちゃんを幸せにする」

「キミには不可能だよ」

「アンタにだけは言われたくない」

史は拳を更に握り締める。

「人を傷付けることしかできないアンタに言われる筋合いなんかない。アンタが、吐き気がするほど嫌な奴だって知ってる」

「そこまで言われる筋合いはないなあ」

「それから、アンタの過去も少し知ってる」

ずっとニヤニヤ笑いをしていた亜矢の表情が、一瞬だが凍りつく。

「アンタの父親は雑誌記者をしていた」

「……っ」

亜矢の額から一筋の汗が流れる。ずっと優勢に立っていると思い込んでいた彼が、今日初めて見せる動揺だった。

「アンタの両親は亡くなった。小さい頃に交通事故で」
「黙れ！」

亜矢は突然声を荒げる。

そして、ナイフを取り出し、史を切り裂いてきた！

突然の豹変に、史は一瞬たじろいだ。すぐに気を取り直して避けようとしたが、そこにタイムラグが発生してしまった。

上手く避ける事ができずに塀に背中を打ち付けてしまふ。痛みが走ったが、飛び跳ねるようにして亜矢の追撃から逃げ切る。ナイフが史の顔が合ったところを突刺して、塀に完全にめり込んでいた。亜矢はナイフを抜き取って史を睨み付けた。その目は完全に据わっている。

「メツキが剥がれたね」

「黙れ雑魚。息の根止めるぞ」

冷たく言い放つ亜矢。ナイフを構える姿は堂に入っており、それは人を襲ったのが初めてではないことを物語っていた。そもそも中型のナイフを携帯している時点でまともな輩ではない。

史は軽い戦慄を覚えていた。こんなのがずっと、私達の近くに居たなんて、こんなのがアースフレンドに居るなんて！

「ねーパパー、ブランコで遊ぼー」

「ああいいぞ」

入り口から親子の会話が聞こえた。さっきまで亜矢と史しか居なかった公園に人がやってきた。大江戸亜矢は素早く反応する。すぐにナイフをカバンの中に仕舞い、何事も無かったかのような表情になった。

しかし、殺気はそのままだ。

「人が来てはしょうがない。僕は帰るよ、僕の言ったことをよく考

えててね」

「さっさと帰って」

大江戸亜矢はそう言い残し、公園を後にした。

史は自宅に走り出した。そしてすぐにアースフレンドに戻り、
3
人に起こったありのままを話した。

61話 世界はクリアを待っている

全体的に黒を基調としたデザインの小部屋。デスクの上にはパソコンや書類など、そして大量の武具が所狭しと置かれている。

2人の少女が椅子に座っている。散らかっている部屋を掃除しているのは冬馬^{ふゆま}。セミロングの黒髪を三つ編みにして、黒いゴムで留めている。一見して図書館が似合いそうなイメージを持てるが、口調は乱暴で少しとっつきにくいと周りから言われている。もう1人は、

「冬馬ちゃん」

「だーっ、くつつくな海神^{かいじん}！」

海神と呼ばれた少女は冬馬を後ろから抱っこして、さりげなく胸を揉んでいる。真っ白な肌、白い瞳に白い服。まるで『白』の概念を具現化したような少女。その特異な姿は、アースフレンドのGMで知らぬものはいない。

海神が有名な理由はもう1つある。それは彼女が極端なまでの同性愛者であるということだ。

彼女は相手が男性か女性かで態度を180°変える。男性相手には極めて冷酷に、そして女性にはこの上なく可愛らしく。見方によつては多重人格なのではないかと疑うくらいに変貌するのだ。

とくに男女のペアが相手だとそれが顕著になる。零花が、亮介と3人で話す様をコントにできないかと画策した位だ。

冬馬は、そんな海神を無視して準備を進める。

「冬馬ー、ほんとに私が行かなくて大丈夫ー？」

「大江戸をスカウトしたのは私なんだ。私が尻を拭かないでどうす

る」

冬馬は兜を被りながら返事をする。これらの武器は、大江戸亜矢を抹殺するために用意されたものだった。

1年前に亜矢をスカウトしたのは冬馬だった。アースフレンドでの初めての冒険者選抜、冬馬は1人暮らしをしていた大江戸 亜矢に目を付けた。彼は元からかなり運動神経がよく、またかなりの潜在能力を持っていた。彼と白狼道 翔也は、アースフレンドにおいて1番最初の冒険者だったのだ。

また彼には更なる特典がついていた。彼は非常に情報収集能力が高く、それを見込んで冒険者候補の身辺調査をさせる『情報屋』という仕事を依頼した。結果的にそれは大成功を収め、以後の冬馬たちの仕事が大幅にはかどることとなった。

しかし暗雲が立ち込める。アースフレンドで得た力を悪用し、亜矢が現実世界で事件を起こすようになったのだ。冬馬たちは必死に彼を説得し、止めさせようとした。しかし彼は止めなかった。

再三の注意を聞かず、看過できない事件を繰り返す大江戸亜矢に下された結論、それは彼を抹殺することだった。

「ねえ冬馬、本当に1人だけでいいの？」

「一応、手駒のモンスターを何体か連れて行く。人型の目立たん奴をな」

「冬馬はでもー、魔法を上手く使えないでしょー？」

「この世界の気質に慣れてないからな。まあコイツがあれば大丈夫だろう」

そう言って冬馬は、デスクの上にある片手斧を取り出す。それは質実剛健で洗練されていて、アースフレンドの店売りや装備職人が

作った斧とは一線画していた。

何回か素振りしたあと、斧を腰に装着する。

「ねえ冬馬、無事に帰ってきたらキスしてア・ゲ・ル」
「いらん」

冬馬はぶっきらぼうに言い返し、そのあとポリポリと頬を搔く。

「まあなんだ。その、無事に帰ってきたら、ねぎらいの言葉でも掛けてくれたら嬉しいけどな」

「冬馬？」

スカウトした相手を自らの手で命を奪う。それはどんな気分だろうか。海神には、その感情を理解できていた。

部屋を出て、亜矢を始末しに行く冬馬。

史は社達を呼んで相談をしていた。やがて園田姉弟、零花と亮介、師野村親子も混じったの大会議となる。

桜田組は、犯人の目星を徐々にだが付け始めていた。

翔也は必死で走り回っていた。亜矢はある行動を決意していた。

それぞれが思いを馳せる。アースフレンドの物語は、1つのクライマックスを迎えようとしている。

61話 世界はクリアを待っている（後書き）

後書き

ども、作者のファン・ヒューリックです。流石に四章になると雑談のネタも尽きてくるぬぁー。

本編は、色々と凄い展開になっております。琴目と由美子がマジ×××だったり、亜矢さんがマジ外道だったりとか、読者サイドの方で突っ込みたい点が山ほどあると思いますけど、そこはあえてカット（マテ

何かあつたら感想に書いてくださいあ。個別に対応しますんでご容赦下さい。

とりあえずここでは4章で登場した新キャラ4人を紹介しようと思います。（実は全員、2章の終わり頃にちよこつと出ています）

伊藤零花と倉田亮介。ボケとツツコミを考えるのは無茶苦茶楽しい。

イメージとしてはギャルゲーのヒロインと主人公みたいな感じ。

この2人はある意味、もつともラノベに近いキャラクターかもしれません。亮介、お前にや零花以外のフラグねーからな！

私自身、関西出身でお笑いとか大好きなんでこういうノリは最高ですね。たった2話で大阪編を終わらせたのは勿体無かった！またいつか書くぜ！

師野村芳樹と娘の綾乃。『綾乃』とキーボードで打つたら『亜矢の』になってテンション下がるのは私だけでいい筈。

この親子は中々ヘビィな過去を持っています。スピンオフとかで、

彼らのメインにしたストーリーを書いてみたい。その為に資料とかをきちんと集めないと。

にしても綾乃のイラストはどうしよう。流石に裸マントはアウトだよな、倫理的に。そして芳樹の裸マントは視覚的にアウトだな。

……いつそこコア（翔也）×亮介（裸マント）で絡ませるか（オイスみません、冗談です。石投げないで下さい。マジすみませんドラム缶投げないで下さいもうBL好きとか言いません。

なんか今回の後書きネタとか微妙だな（え

では5章の後書きでまたお会いできることを祈って。ちなみに本作品は、全6章で区切りをつける予定です。

箸休め キャラクター紹介？<1枚イラストあり！>（前書き）

キャラクター紹介 第三弾です

<>無機質な生活様に社のイラストを描いて頂きました！

著休め キャラクター紹介？<1枚イラストあり！>

<追記>

無機質な生活様に高杉 社（2枚目）のイラストを描いて頂きました。両手斧を装備してる社です。この場を借りてお礼を申し上げます！

>i32622<ruby><rb>1409<

伊藤</rb><rp>(</rp><rt>いとう</rt><rp>)</rp></ruby> 零花^{れいか} 15歳 回礼高校1年生

大阪生まれの大阪育ち。非常に頭が良く、模試などでも近畿でトップの成績を誇る。またスタイル抜群で可愛らしく、スポーツも万能。普段は自分を押さえ込んでいるが、亮介にだけは素の自分をさらけ出せる。お笑いがとても好きで、亮介にボケることが趣味。また、亮介とは恋人同士。アースフレンドではアーチャーのジョブに就いていて、亮介を援護している。

倉田^{くらた} 亮介^{りょうすけ} 15歳 回礼高校1年生

大阪生まれ。最近まで別の所に住んでいたが戻ってきた。ツッコミ體質。本人は自覚していないが、零花と付き合っている時点で超幸運な人生を送っている。近所の人やクラスメイトは、なんでこんな平々凡々な奴が零花に好かれていいのか疑問に思っている。アースフレンドではナイトのジョブに就いていて、零花の盾となっている。……なのだが実力はさほど高くなく、逆に零花に守られてることもしばしば。

師野村^{しのむら} 芳樹^{よしき} 44歳 労働者

師野村家の父親。妻は障害を持つ娘を産んだあと行方不明になっ

箸休め キャラクター紹介？<1枚イラストあり！>（後書き）

次回から、第5章が始まります

62話　せめて幸せな幻で

寢床に入り、

暗闇で目を閉じるとき、

人は何を思うだろうか。

明日を夢見て、叶えたかった願望を思い描く？

記憶の彼方へと消えた、在りし日の幸せを想起する？

それは陽炎。遠い過去に消え去った、もう決して見る事が叶わない光景

それは夢。目覚めと同時に失われる形のない安らぎ

それでも、貴方が望むなら

さあ、目を閉じて

——たとえ今この瞬間だけでも、貴方が救われるのなら。

キッチンで、お母さんがカレー鍋を煮込んでいる。少しだけ小皿にとって味見してみる。うーん、もうちょっとミルクを入れたらまろやかになるかな。

そばに座っていた息子が、お母さんへと歩いてくる。

「おかーさん！」

「あらあら、心愛^{こいあ}ってば甘えん坊さんね」

お母さんは、すり寄ってきた息子の頭を優しくなでる。くりくりとしたくせ毛は、たぶんお母さん譲りなんだろう。

「心愛^{こいあ}も、カレーを味見してみる？」

「あじみするー！」

お玉ですくったルーを小皿に乗せて、スプーンといっしょに紅葉に手渡す。口に入れて、心愛^{こいあ}は笑顔で美味しいっ！と返事をする。

「おかあさーん！」

もう1人ダイニングから、裸足でぺたぺたと駆けてくる足音がする。その子も、お母さんのところにやってくる。お母さんはあらあらとその子の頭もなでる。

「あらあら、お兄ちゃんも甘えん坊さんね」

「だって、お母さんが大好きだもん！」

お母さんとはとても嬉しそうに、2人の息子の顔をのぞきこみ、ぎゅーっと抱きしめる。

「お母さんは、あなたが生まれてきてくれて、本当に嬉しいわ」

「おかーさん大好き！」

お父さんと、お母さんと、もうすぐランドセルを背負う2人の息子。絵に描いたようなとっても幸せな家族。お母さんはその喜びを感じている。

ピンポンと、家のチャイムになる。

「ただいまー」

「おとうさんが帰ってきた！」

お母さんと子ども達は玄関のほうに歩いていく。みんなでいっしょにお父さんにおかえりなさいって言う。

「みんなの大好きな、チョコレートケーキを買ってきたぞー！」

「わーい！」

小さな兄弟は、お父さんの持っている袋をみて喜んでいる。2人とも、チョコレートが大好き。前に戸棚に入ってたのを、こっそりつまみ食いしてお母さんに怒られたことがある。

お母さんがカレーをお皿に入れて、テーブルの上に4人分並べる。そして、お父さんが買ってきたチョコレートケーキをテーブルの真ん中に乗せて、ローソクを6本立てて火をつける。

火をフーッって吹き消したあと、お父さんとお母さん、そして心愛　ここあ　が声を揃えて言う。

「ハッピーバースデー亜矢、おたんじょう日おめでとう！」

みんなにおめでとうと言われ、亜矢はありがとうと言って喜ぶ。今日は、この家の長男の、亜矢の誕生日である。晩ごはんを食べ終わる。

「よし！ 亜矢、心愛^{こころあ}、いっしょに風呂に入るぞー」

2人はトランプを片付けてお父さんの後についていく。みんなでハダカになって、湯船の中に入る。

「そういえば、父さんの友達の嵯糸^{さいと}さんの子だけど」
「あの女の子？」

お父さんは雑誌記者をしている。そして嵯糸さんはお父さんのしごと仲間で、よくいっしょに働いている。嵯糸さん家の女の子とは、2人はよく遊んでいる。そういえば、ここ何日は会っていないなど2人は思う。

「ちよつと風邪を引いたらしいって」
「風邪引いたのー」

心愛^{こころあ}と亜矢は、おたがいに見合つてふしぎそうな顔をする。あの子はとっても元気だから、病気になんかならないと思うんだけど。

「はやく元気になればいいねー」
「そうだなー」

みなで身体を洗って、ながし合いつこしてお風呂から上がる。お母さんはキッチンでお皿とかを洗っている。

「おかーさん、お風呂上がったよ！」

お母さんは洗い物を置いて、みんなのところにくる。

「ちゃんとタオルで拭かないとね」
「うん！」

お母さんに身体を拭いてもらう心愛と亜矢。ちゃんと拭いてから、パジャマを着る。お父さんはゴクゴクと牛乳を飲んでいる。飲んでから、ぷはーっという。

「そうだ！ たんじょう日のお祝いに、週末にゆうえんちに行こう」
「！」

お父さんは言う。心愛 ここあ と亜矢は、やったーと言って、ジャンプしながら喜んでいる。

「やくそくだよ、お父さん！」

「もちろん！ ゆびきりげんまんしよう」

「お母さんもゆびきりげんまんするわね」

ゆびきりげんまん嘔吐いたらはりせんぼんのーます、ゆびきった
！ みんなでゆびをギョツとしてやくそくをする。

「それじゃ、もう遅いから2人ともねなさい」
「はーい」

心愛と亜矢は、いっしょにへんじをする。

「貴方、やっぱり……に関わるのは……近所の目……」
「……月蝕……組はな、今回のが終わって……金が……」

バシッ。リビングのドアをしめたあと、お父さんとお母さんがな
んだかむずかしそうな話をしている。心愛と亜矢は、よくわからな

かったのでそのまま2かいに行く。

寝るへやに入る。2人でいっしょうけんめい布団をしいて、亜矢がでんきを消す。

「お兄ちゃん、ゆうえんち楽しみだね！」
「うん！」

2人は、ゆうえんちでどんな乗りものであそばわくわくしている。かんらんしゃにのつて高いところから見てみたいなあとか、ミュージカルを見たいなあとか、そういうはなしをする。

2人ともねむたくなってくる。心愛も、亜矢もウトウトとしはじめる。

「ねえお兄ちゃん」
「なあに、心愛」

心愛は、亜矢のほうに寄ってくる。

「おたんじょう日、おめでとう」

心愛に言われて、亜矢はにっこりと笑う。

「ありがとう、心愛」
「うん」

2人は、ゆうえんちとかを楽しみにしながら、ゆっくりと眠っていった。

62話　せめて幸せな幻で（後書き）

物語は佳境に入ってきました。
第5章も宜しくお願いします。

六十三話 それは走馬灯のように

亜矢は目覚めた。そこは亜矢がよく知っている場所ではなかった。白い部屋だなあと、起きたての頭で亜矢は思った。

最初に視界に入っただのは白い天井。所々が剥がれていて、灰色のセメントがむき出しになっている。目を横に向けるとパイプ椅子と机があった。そこには花瓶があつて、刺さっている花は少し枯れていた。

だんだんと亜矢は、ここが病院だと気付き始めた。TVや絵本で見たことがあつたが、そういったのより少し汚いなと亜矢は思った。

時計の短針が、盤面を何度もパトロールした。空はオレンジに染まり太陽が沈もうとしている。夕焼けに照らされる病室の中で、亜矢はベッドに寝かされているまま。

亜矢はまだ幼くて純真無垢な子供であつた。なぜ自分ここに居るのか、一体何が起こつたのか、家族はどうしたのか。それらの疑問を推察し始めるほど聡明な少年でなかった。

亜矢は流れる飛行機雲をボーッと見上げている。

「あつ、目覚めたんだね」

声がした。ぐると身体を回して振り向いてみると、ずっと壁とドアしかなかった風景に1人の看護師が描き加えられていた。

「ここはどこ？」

亜矢は飛び跳ねて質問を投げかける。

「ここは病院だよ」

看護師は、至極まっとうな返事をした。

「どうして僕は病院にいるの？」

「君が怪我をしたからさ」

またも当然の回答をする看護師。亜矢はからかわれているような気分になって、少しだけむっとする。

「僕のお父さんとお母さんと紅葉はどうしたの？ 病院にいるの？」
「うーん」

看護師はあごに手を置いて考えるフリをする。そして困ったような顔をして少年に告げた。

「君の家族は、ちょっと遠くに行ってしまったんだよ」

そう言っ看護師は部屋を後にする。残された亜矢は、また馬鹿にされたと思つてふくれっ面をしていた。

いつまで経つても自分の前に現れない両親と弟が、既にこの世の存在でないと気付き始める。少年が言葉裏の意味を理解したのは、親戚に引き取られてからしばらくしてからだった。

——家族全員で遊園地に行こうとしていた、ある日曜日の事件。

不幸としか言いようが無かった。酔っ払い運転の軽自動車が、亜矢たちの乗っていた車に追突してきたのだ。たまたま衝撃の隙間に潜り込んだ亜矢以外、その他3人は全員即死だった。

犯人は現行犯逮捕。後の裁判にて残された息子の苦悩を檢察が語

り、傍聴人がむせび泣いたらしいが亜矢には知るよしも無かった。

事件以来、亜矢はカウンセリングなどを度々受けた。親戚や近所の人間も、少年の境遇に同情して優しく接した。それらの甲斐あつてか、亜矢は普通の子供として成長していった。

月日が経過し、中学生になった亜矢からは事件の後遺症を微塵も感じられなかった。父親の影響もあつて新聞部に入り、先輩達と共に校内記事を作ったり公民館でボランティア活動などをして、忙しいながらも楽しい学生生活を満喫していた。

中学2年生のときだった。先輩に頼まれて古雑誌の整理をしていたとき、亜矢は偶然にも家族が事故に遭ったときの記事を発見した。久しぶりに両親や弟のことが頭に浮かんで涙目になりかけたが、鼻をすすって何とかこらえた。

事件のことを知って、ちゃんと向き合おう。亜矢はそう思って記事に目をやる。

『一家を襲った悲劇！ その影には官僚の影？』

「（なんだ、これ・・・？）」

タイトルを見た瞬間、亜矢は後ろから殴られたような衝撃を覚えた。・・・官僚の、影？

更に記事を読み込んでいく。内容は更に尖ったものだった。

『平和な一家を襲った凄惨な事件。被害に遭ったのは新聞記者の大江戸隆志（32）とその家族。加害者の男の宇佐 辰夫（31）は、彼女に振られたショックでヤケ酒して事故を起こす、裁判中に居眠りをするなど信じられない行動を連発。正に人間のクズと呼ぶに相応しい人物である。唯一生き残った長男（6）にはただただ同情するしかない。』——（略）—— ワイドショーなどでも彼の話題で持ちきりだが、実は事件の根底は非常に根深いものである。

筆者と被害者は、実は同じデスクで仕事をしていた仲間である。彼は官僚の汚職問題など、政治ニユースを扱わせれば日本一と呼ばれていた男だ。私は、彼が重要なネタを掴んだが、口封じで殺されてしまったと考えている。これは筆者の憶測ではない、確固たる事実だ。私は仕事仲間として、そして1番の親友として勇気を出しここにしたため。被害者の家族は事故ではなく、犯罪である！ そして犯人は紛れも無く××議員である！

そう言いきれぬ理由は勿論ある。1つは——（略）——

。これだけの証拠があるのだ、もう逃げ道は無いぞ××議員。セクハラ、献金と続いてついに殺人まで犯すのか、断固として許すまじ！ 筆者としては、ぜひとも××議員には自首を勧めたい。最後に読者にお願がある。もし私が消されることがあったなら、是非とも××議員を糾弾して欲しい。それが私の切なる願いである。』

亜矢は記事を読み終わり、しばし放心した。だがすぐに気を取り直し、今度は別の古新聞を引っ張り出してくる。そして事件の記事を見つけ出して内容を調べる。

言いつけられた用事など完全に忘却し、亜矢は近所の県立図書館に足を運ぶ。そして保管されていた雑誌やら新聞を片っ端から調べ

上げていく。夜に帰宅して、今度はインターネットで事件の内容を検索する。

『××議員、企業から賄賂？』

『知事へのセクハラで世間を騒がせている××議員、日本の恥である彼に更なる疑惑が浮上した。弊社の独自捜査によって、彼が賄賂を受け取っているらしいことが発覚したのだ。右ページに載っているのは、××議員と密会している企業の女性営業マンとの写真である。——（略）——余談だが、写真をよく見ると××議員の右手が女性の尻に触れているのがわかる。つくづく最低な政治家だなという感想で記事を締めくくろう』

『賄賂は年間3兆円！！ 嗤^{わら}う議員官僚』

『弊社の調査によつて、年間でやり取りされている献金の合計が3兆円に達することが発覚した。3兆円というと、現在の消費税の税収の約1/4に近い金額である。つまり献金を一切やめれば、消費税を1〜2%減らすことが可能なのだ。——（略）——

——現在国会では消費税UPありきの方向で議論が交わされている。その前にご自身達のキャバクラ通いを減らしてはいかがかなと、この場を借りて提言してみる』

『戦後60年 官僚と暴力団の癒着』 『勘違い新人議員「議員になったら高級料亭で食べ放題なんだし」』 『4世代前から続く××一族の献金録』 『頭がトーフで出来ているアホ内閣』 『ふんぞり返るスラスカ首相「金貰って何が悪い！」』 『Mrセクハラ××議員 今度は秘書に手を出した』 『。省事務次官 インサイダー認める』

も開き直り』『礼状破り捨て「公僕は官僚の言うこと聞いときゃいいんだよ！」』

朝日が昇る。100冊以上の古雑誌と、1000部以上の古新聞を読破した亜矢。徹夜したせいか目の下には巨大なクマが出来ていた。そして、瞳の奥では、得体の知れないものが渦巻いていた。

その日を境に、亜矢はスイッチが入って覚醒した。

亜矢は、それまでの亜矢ではなくなった。表面上は今までと変わらない心優しい少年、しかし人格は全く別のモノに変容していた。凄まじいまでに支配階級を恨み、そして連中を許せなくなった。

やがて後輩の白狼道 翔也と共にアースフレンドに呼ばれた。亜矢はそれを神が授けてくれた使命だと考えた。この力を持って目的を果たせ、そういう運命だと確信した。

全てが始まった。

——僕が断罪者となって、腐った支配階級を叩き潰してやる！

走馬灯のように流れていった過去から今。それは陽炎。それは見え透いた虚構。それは終わった人の物語。
それらは、亜矢に何をもたらしたというのだろうか。

「久しぶりだな、大江戸亜矢」

亜矢の目の前に、冬馬が立ち塞がった。

六十四話 お前はここで終わる！

質の悪い電灯で照らされたトンネルの中、亜矢と冬馬は対峙している。

いつから彼女がそこにいたのか亜矢には解らなかった。空気から染み出して、ついさっき目の前で人の形を成した。少なくとも彼にはそう感じられた。

邪魔にならない程度に三つ編みした黒髪。白くて華奢な腕で握っているのは、禍々しいほどに実用性重視の手斧。刃の形状もフォルムも柄も、全て殺戮に特化している血塗られた武器だ。身にまとう鎧は魔獣の皮を加工して作ったものか。真夏の蒸し暑いトンネルの中だというのに、重装備の彼女は汗1つ掻いていない。

まるで神話の挿絵のようである。冬馬が立ち塞がって睨みつけている、それだけで他を圧倒する存在感を放っていた。魔を打ち滅ぼす英雄、世界を闇に還す魔王。彼女の持つオーラはそれらに匹敵するものだった。

「僕に何か用かい？」

亜矢はリラックスした様子で問いかける。彼が身に付けているのは黒Gパンとチェックの黒半袖シャツ。背負っているナップサックは、底の部分にもファスナーが付いている特殊なものだ。

「ここで何をしている、亜矢」

「ちよつとした散歩だよ」

「この先に住む、ある国会議員を殺害しに行くのだろう」

トンネルの先の高台に住む議員は、政治に携わって早30年とい

う大ベテランである。また同時に数々のネタで新聞紙面を潤わせた人物で、セクハラ発言や酔っ払い暴行事件など色々問題視されてきた人物。さんざんマスコミで批判され続けているが、ずっと政治にしがみつき続け、選挙でも不正があるのではという位に当選を繰り返している。

亜矢は口笛を吹く。口元に浮かべる笑みが、演技かどうかは不明。

「私が何故来たのか、お前には見当が付いているだろう」

「さーで、解んないなあ」

「お前は罪を犯しすぎた」

冬馬は腕を組む。小手の間から覗く二の腕は、そこらの女子中学生とは比べ物にならない位キメが細かく美しい。整った目鼻立ちといい、美少女と言い切っても差し支えないほど。

しかし薄暗いトンネルの中で、その姿は震えるほどに恐ろしい魔人に見える。海神を純白の化身と評するならば、冬馬は返り血に染まった真紅に例えるのが相応しい。

「現・元国会議員16名、高級官僚12名を襲撃。うち4名が死亡した」

「僕の行為は正当さ」

「お前は間違いなく犯罪者だ。理由はどうあれな」

冬馬はバツサリと斬り捨てる。理由はどうあれ、という言葉に亜矢は少しだけ反応した。

「お前の犯罪は社会秩序を崩壊させ、アースフレンド・グローブの品位を落とした」

「ありやいや」

「我々運営の協議の結果、お前には残念な結果が下された」

冬馬は亜矢を指差す。

「亜矢、アースフレンドはお前を抹殺する！」

冬馬の人差し指をきよとした表情で見つめる亜矢。ポケットに手をつ突っ込んだまま、やれやれと肩をすくめる。

「一応言っておく、今すぐ投降すれば命だけは助かる可能性もある。どのみち厳罰処置は変わらんがな」

「ふーん」

亜矢は、睨み続ける冬馬の瞳をだるそくに眺める。

亜矢はおもむろに口を開く。

「ところでさ、冬馬って僕より強い？」

「実戦経験、能力共に私のほうが上回っている」

「ふーん」

一瞬だけ、2人の間に静寂が訪れる。もう寿命が近いのか、電灯は点いたり消えたりを繰り返して、チカチカという音だけがトンネル内で響き渡り続ける。雰囲気を感じた虫やねずみは、辺りから消え去っていた。

「ねえ冬馬」

「何だ」

「アースフレンドにとって、僕はどどういう物語なんだい？」

冬馬はいぶかしむような表情で亜矢を見やる。

「君達にとってはどうでもいい物語かもしれない。だけど僕は17年間、この身体とこの頭でもって生きてきたんだよ」

「だから何だという。そんな理由で許されると思っているのか」

「たとえ君達にとって下らない物語でも、僕にとって大江戸 亜矢は、僕の物語の主人公なんだ」

亜矢は自嘲するように言葉を吐き出す。

「僕はさ、まだ大江戸 亜矢の物語を終わらせるつもりは無いよ」
「残念な答えだ」

冬馬はフンと鼻を鳴らす。

「交渉、決裂か」

「初めから必要無かったのさ、そんなもの！」

亜矢はポケットから手を抜く。右手には彼の愛刀、逆手に構えて臨戦態勢に入る。

「仕方が無いな、出て来い」

冬馬が手を上げて合図をする。彼女の左右から黒い影が滲み出して形になる。

それは一見すると人間に近いシルエット。しかし暗闇で目を凝らすと、肌は鱗で顔はせり出しており手足は異様に長い。奴らは紛れもなく人外のモンスターである。

「リザードマンかい？」

「違うな、こいつらは竜神騎士団の近衛兵だ」

「聞いたことが無いな」

亜矢は油断せずにモンスター達を一瞥する。恐らく彼等はリザードマン族の亜種なのだろう。だが亜矢は彼らと戦った記憶が無かった。そもそも竜神騎士団と言う名称が、彼にとって初耳だった。

「知らんで当然だろう。彼らの拠点は、冒険者達の立ち入り禁止区域にあるのだから」

竜神騎士団のドラゴン達は、それぞれの武器を取り出した。短剣、片手剣、両手剣、槍、斧、棍棒、弓、ブーメラン、杖、暗器。それら全てに騎士団の証である十字のエンブレムが彫られていた。

「雑談は終わりだ。――行け！」

冬馬の号令で3匹のリザードマンが一斉に飛び出した。亜矢はモンスター達をナイフで迎え撃つ。

ガキンッ！

振り下ろされた剣をナイフで受け止めようとした亜矢。だが、その一撃は彼の予想を軽く上回っていた。予想以上の威力に亜矢は後方へと吹き飛ばされてしまうが、空中で体勢を戻し何とか両足で着地する。

その姿を見て、冬馬は厳しく言い放つ。

「竜神騎士団はアースフレンド世界でも最高位に属するモンスターだ。お前ごときが敵う相手ではない」

「……」

亜矢は言い返すことが出来なかった。少しでも気を抜けば、間違

いなくやられる。

「彼らはお前が戦ってきたモンスターより遥かに強い」

「……」

「しょせん、お前は箱庭の勇者なんだよ」

猛然と斧を叩きつけようとする竜神騎士を避け、亜矢はナイフで反撃した。しかし予想以上に頑丈な身体だったゆえ、ナイフは鱗を浅く裂いただけに留まった。

そして、後ろから弓を構える気配。

亜矢は反応が遅れた。放たれた矢は回避行動をとる前に、彼の脇腹に深々と突き刺さった。

六十五話 あの日から、僕は痛みを捨てた

その古びたトンネルを使ったルートは、数年前に作られた高速道路にシエアを奪われている。人々から忘れられつつあるその場所です。今、英雄譚の再来を予感させる聖戦が繰り広げられている。

県境にある山奥のトンネルの中、薄明かりに茫と浮かぶ人影がいくつもある。男と女、そして何体かの異形の化け物。幾らかは既に地に伏し、刺し貫かれた急所からどくと血を流し続けている。

女の名前は冬馬。まだ子供と言っても差し支えない体格で、大人に混じると見失ってしまいそうな幼い身体を持つ彼女。

しかしその風貌は驚くほどに完成されていた。身の毛のよだつほど殺意に満ち溢れた手斧に、装備者を絞め殺せまいか虎視眈々と狙っているおぞましい鎧兜。彼女の身にまとう全てから戦慄のオーラが漂っていた。

それら武具は、本来は決して謂れのある一品ではない。一流の鍛冶職人が手がけたものであれども、所詮は有機物と無機物を組み合わせただけの道具に過ぎない。全てのオーラは、彼女から発せられる気迫に付随しているものだった。

ただのレザーアーマーも勇者が着れば、後世に語り継がれる伝説の鎧となる。ただのスピアも魔王が持てば、神の子を殺す魔槍となる。語り継がれる物語は付喪神を生み出し、武具を武具以上の存在へと変貌させる。

だが冬馬は装備するだけで斧に、鎧兜に生命を吹き込んだ。手に持つだけで斧は血を求めて震え、着込むだけで鎧兜は怨嗟の呻きを放ち始める。

かつての冬馬がどのようなクロニクルを紡いだのだろうか。彼女は世界を救った救世主か、はたまた人類を滅亡させた破壊神だった

のか。全てを知るのは共に旅をした海神だけなのだろう。
それが、冬馬だった。

「もう諦める亜矢。立っているのもやっとならう」

「そんなことは無いさ」

男の名前は大江戸 亜矢。背が高く、服の上からでも解る筋肉質な身体。そして目鼻立ちの整った甘いマスクを持つ彼は、丸太橋高校の内外を問わず非常に有名な存在だ。新聞部の部長を務めており、生徒会の広報からゴシップ記事まで製作して読者を楽しませている。彼の人気はとても高く、友達是非常に多く女子からラブレターを貰う機会が多いし、教師からの信頼もとても厚い。

だがそれは、彼の表の面に過ぎない。実際の亜矢は、ひどく猟奇的で荒廃した精神の持ち主である。独善などと生易しいものではない、妄執と怨念で凝り固まった使命感の名の下に、大量の官僚・議員を屠ってきた。

いまだ選挙権も持たぬ若き年齢でありながら、彼は同年代の誰よりも老成していた。内面はもとより時折見せる陰のある表情は、まるで老人のそれに近い。

それは亜矢が人間であることの証明だった。巨大モンスターをたやすく倒し、ビルの屋上から飛び降りても平然としている頑丈な肉体の持ち主。それでも彼は超人ではなく人間である。

「しぶときことは、決して美德ではないぞ」

「……だから何だい」

亜矢は棍棒の一撃を避けながら返事する。大きく背を反らし、竜神騎士の膝を蹴って後ろに飛び跳ねた。軽やかに着地するも、地面にはまたも血が数滴ほど垂れ落ちた。

最初に矢で貫かれた脇腹からは今なおどくと血が流れ落ちている。そこだけではない、戦闘中にあちこちに付けられた傷からも、少しずつだが血が垂れている。人間は血液の1/3が失われると生命の危険があるといわれている。彼のデッドラインは決して遠くはない。

槍をなぎ払う攻撃を亜矢は見切って回避する、だが肉体の反応が遅れて刃の先端が服の上をかすった。シャツのボタンが取れて、覗く皮膚には赤い線が走っていた。

続くブーメランの飛跡を掌で弾き飛ばす。投げられた短剣を、首を曲げて避ける。更に上体を捻ると頬があつた空間を黒塗りの暗器が通り過ぎていった。

冬馬が連れてきた竜神騎士の数は8体。うちまだ立ち上がって戦っているのは3体だ。残りの5体は亜矢の手によって倒された。やはり亜矢はただものでなく強かった。数の上での劣勢を覆して互角の勝負を繰り広げている。だがそれも時間の問題だ。

「そろそろ決着だな」

「僕の勝ちが見えてきたね」

「減らず口を」

冬馬は手のひらに意識を集中させる。竜神騎士達は気配を察知してコンビネーションを組み、亜矢は動きを警戒する。

「……はあっ!!」

彼女の腕から閃光が放たれた。質量を持った熱い塊が避けた亜矢のそばを通り過ぎトンネルに激突する。それは音も無く霧散したが、威力を知る亜矢は今の危険だと解っている。左腕に残る裂傷が何

よりの証拠だ。

その隙を狙って竜神騎士達が襲い掛かってくる。見事な連携攻撃を、亜矢はナイフ1本でなんとか退ける。が、刃が身体に触れてまた傷が1つ増えた。

「（……ちえっ）」

亜矢は心の中で悪態をつく。相手にしなければならぬのは竜神騎士達だけではなく冬馬もだ。斧を振るいはしないが援護射撃で攻めてくる。寧ろこちらのほうが厄介で、先にしとめなければならぬのは彼女のほうだろう。

「（一か八かやってみるか）」

亜矢は竜神騎士に反撃すると見せかけて、サイドステップで大きく横に跳ねた。そのまま側転の要領で身体を回転させ、勢いで冬馬に斬りかかる。

ドスッ！

「がっ!？」

「決まったな、亜矢」

亜矢の攻撃は届かなかった。走り出した彼の身体を短剣が貫いたのだ。ダメージを受けたのは脇腹。最初にやられたところに短剣が命中し、そのまま身体を貫通してトンネルの壁に突き刺さった。なんとか倒れ込まずに耐えたが、致命傷足りえる一撃を亜矢は食らったのは事実だ。

「——はっ!!!」

とどめを刺すために冬馬は閃光を放つ。今度はニードルのように先が尖った光弾。亜矢は倒れ込むようにして一撃を避ける。冬馬は連続してニードルショットを放つ。亜矢は地面をゴロゴロと転がってそれらから逃げ切った。

「チツ、しぶといな」

「はぁ、ハア・・・」

亜矢は息も絶え絶えに立ち上がった。体は泥だらけになって、自分の血やらモンスターの返り血やらで赤黒く汚れている。

その目はまだ戦いを見つめていた。彼は満身創痕となっても気力を振り絞って戦い続ける。そんな彼に、冬馬は無表情で語りかける。

「いい加減楽になれ。もう全てを終わらせろ」

亜矢は立ち尽したまま動かない。

「なぜ立ち上がり続ける」

「……僕は」

不意に亜矢は口を開いた。瞳はギラギラと輝き続けている。

「……僕は、痛みを知らない」

「なんだと？」

「……断罪を誓ったあの日から、僕は痛みを捨てた」

残った竜神騎士達が、それぞれ自分の武器を構える。

そのうちの1体がブーメランを振りかぶって勢いよく投げつけた。強烈な勢いで回転し、亜矢の後頭部に直撃する。投げた竜神騎士は

己の勝利を確信して、拳でとどめを刺さんと突撃する。
そいつに大江戸亜矢はジロリと目を向けた。額から血がこぼれ落ちる。

「来るかい魔物」

次の瞬間、冬馬は目を瞠った。亜矢のナイフが竜神騎士の急所を貫いたのだ。

彼女は勝利を確信していた。あの竜神騎士の一撃で決着がつくと彼の脇腹に拳がめり込んでいくのが冬馬には見えた。それなのに、実際そうだったのに亜矢はのけぞらなかった。全く意に介さずに、ナイフを突刺して竜神騎士を倒した。

残る2体も亜矢に突撃する。槍と短剣を振りかざして襲い掛かる。

今度こそ冬馬に驚愕が走った。

竜神騎士2体を、亜矢は瞬殺してのけたのだ。短剣は届かなかった、槍も届かなかった。

冬馬が連れてきた最強のモンスター8体は、亜矢によって全員倒された。それは彼女にとって予想外の出来事だった。だがその程度で臆する肝は持ち合わせていない。彼女は腰に差した斧を引き抜く。

「お前は強いな。箱庭の勇者って発言は訂正してやるよ」

冬馬はそう呟き、斧を強く握り締める。

「さあ来い亜矢。——私が本気で殺してやる」

六十六話 まだ僕は、信念を貫き続けるく1枚イラストあり！>（前書き）

無機質な生活様に亜矢のイラストを描いていただきました！

六十六話 まだ僕は、信念を貫き続ける<1枚イラストあり!>

> i 3 2 6 2 1 — 1 4 0 9 <

風通しの悪いトンネル内部に酸鼻な血臭が立ち込める。異形のモンスター達がそこかしこに倒れており、さながら地獄絵図の相貌を成している。

そんな物騒な場所に立つ1組の男女は、傍目には場違いに見えるかもしれない。どちらも年端もいかない少年少女、しかし今の状況を作り出したのは間違いなくこの2人なのだ。

冬馬は足を前後に開き、右手を亜矢に向けて大きく突き出す。斧は左手に持って下段に構え、亜矢を強く睨みつける。長年の実戦経験で培ってきた、冬馬独特の奇妙な構えだ。ゆらゆらと揺れるその身体に、少しでも一生懸命つばさを感じてしまっただけではない。

それは素晴らしく完成された立ち姿だった。一分の隙も存在せず、あらゆる戦況に対応できるだろう構え。武術をたしなむ者達が、いつか自分もその域に達したいと、憧れと嫉妬の視線を一身に浴びる構え。

冬馬の呼吸はとても穏やかでリラックスしている。あまたの敵を倒してきた実績が彼女をそうさせるのだろうか。だが実績は実績である、全てはこれから始まる死闘の布石にしかすぎない。

連れてきたモンスターを倒された冬馬は、ついに本腰を入れて亜矢と対峙する。

一方の亜矢はもう立っているのもやっという状態だ。全身に打撲と切り傷を負っており、致命傷たる一撃を2度も受けた脇腹からは鮮血が今も流れ続けている。

常人ならば失血死していてもおかしくない深手。それでもなお亜

矢は立ち上がり冬馬と対峙する。筋金入りの執念、驚嘆に値する意志の強さ。彼の肉体を衝き動かしているのは心臓の鼓動か、それとも返り血に染まる死霊の呻き声か。

「——はっ！」

最初に動いたのは亜矢。右へ左へ、足をバネのように振り回して冬馬に接近する。その電光石火の動きからはダメージや疲労の色を微塵も感じさせない。加速度の乗ったナイフが冬馬の喉元に肉薄する。

ジン！

辺りに鈍い金属音が響き渡る。冬馬が斧で受け止めたのだ。

亜矢は半歩下ってから突進する。押し切れれば勝てるかもしれないと踏んだのだろう、間髪いれずに連撃を繰り出していく。

まずは1発、心臓への攻撃は斧の刃ではじかれる。次に狙った腹部は手刀で流される。返す刃で真横に切り裂こうとしたが、ナイフの先端がわずかに届かない。更に次の手は行動に移そうと思えなかった。

亜矢はいったん後方に飛んで距離を置く。冬馬の真の強さを肌で感じたからだ。

亜矢の攻撃を、冬馬はダンスを舞うように避けていった。斧を左右の手で次々と持ち替えていって、まるで曲芸のようにナイフの一撃をさばいていく。その優美な拳動は、相手を自分のペースへと引っ張り込んで離さない。

これぞ実力の高さと言うべきだろう。決して肉体的なスペックで圧倒しているわけではない。道を極めたものだけが辿りつける、純粹な格の違いを冬馬は見せつけていた。

「スウ」

小さな呼吸音を鳴らし、冬馬は反撃を開始する。軽やかに、ステップを踏むようにして亜矢へと向かっていく。

とても不思議な動きをした。冬馬は決して俊足で迫ってきている訳でもないのに、何故か残像で身体がぼやけて見えるのだ。そんな幻想的な相手を前にして、亜矢は僅かながら判断が狂った。

ほんの一瞬、亜矢は迎撃のタイミングが遅れた。ジグザグ方向に振り下ろされる斧の軌跡を寸前で受け止める。ナイフにのしかかる力、一見でたらめなベクトルを描きながらも、的確に手首に集中して痛めつけていく。

亜矢が判断するよりも早く、冬馬は後ろへと飛び下がった。膝を全く動かさず、斧を振る動作のみで態勢を整える。

誰の目にも明らかに、冬馬は圧倒的な強さを誇示している。力、スピード、判断力、戦術テクニックその他諸々。全ての点において彼女は亜矢を上回っている。

彼女がいかなる経緯でアースフレンド世界の管理人という、ユニーク極まりない職業を任されたのだろうかは不明。しかし現時点現段階において、その采配の正しさは揺らいでいない。

「お前は、なぜ殺戮を続ける」

冬馬は亜矢に、今日でもう何度目だろうかの質問をぶつける。

「なぜ復讐にこだわる。他の生き方はなかったのか？」

「復讐じゃない、これは信念だ」

走り出そうとする亜矢を、冬馬は閃光弾でけん制する。左手から

は沢山の熱い塊を、そして右手で斧を振るいカマイタチの様にしてぶつけていく。

亜矢はそれらを全て避ける。身体をそらし、あるときはナイフを振って霧散させる。さすがに彼の動きにも疲労の色が見え始める。閃光弾が一区切りついて、亜矢が再び攻撃に回ろうとする。そのとき、

「今だ！」

冬馬が鋭く叫んだ。その瞬間、亜矢の身体に向かって1本の投槍が放たれる。そしてそれは吸い込まれるように亜矢の左胸に深々と突き刺さった。

それは彼女が呼んだ9匹目の竜神騎士による仕業だった。亜矢にばれないよう、細心の注意を払って設置したリビンゲトラップ。それはものの見事に的中した。

だが、それは成功したとは言い難かった。彼女の予想に反して、なおも亜矢は立ち上がって冬馬達を睨み続けている。彼にとっては、敵が2人に増えた程度の認識しかないだろう。

何度も立ち上がって刃を向ける亜矢に、冬馬はわずかながら戦慄を覚えた。

「（こいつ、不死身なのか・・・）」

手など抜いていない。彼女は亜矢を抹殺するために最大限の用意をした。しかし彼はまだ生き残っている。

冬馬の脳裏にアンデッドの姿がよぎる。魂が抜けた蠢く腐肉。ありとあらゆる生命科学を無視するこのモンスターは、たとえ骨の欠片だけになろうとも襲いかかってくる。そういえば彼にもその特徴がある。彼を動かすのは怨嗟の執念、決して死なない身体――

浄化魔法を詠唱しようとして、冬馬は我に返る。所詮コイツはた

だの人間、英雄でも魔王でもない平凡な存在だ。

冬馬は気持ちを切り替えて走り出す。竜神騎士は後方に下がらせた。奇襲が通用しなかった時点でもう用はない。

続けざまに閃光弾を放ち続ける。何発かは亜矢の身体に当たって爆発するが、それでも彼は止まらない。ナイフを振りかざして襲いかかってくる。冬馬はその一撃を左手に持った斧で受け止める。そして右手を彼の身体に当て、続けざまに閃光弾を放つ。

豪快な爆発音と共に、ぐしゃりぐしゃりと肉や骨の碎け散る音が混じる。もはや彼の胴体はグズグズのスポンジ状になっているはず。それでも亜矢は止まらない。彼は戦いを続ける。

「ここで終わるわけにはいかないんだ……」

亜矢は驚くほどはつきりとした口調で言い放つ。

「まだ僕は、信念を貫き続ける！」

「貫いた先に何がある！ 恨み続けて、殺し続けて……！」

冬馬は叫んだ。彼女の額にはうつすらと汗が浮かんでいる。

「ああそうさ！ 僕が死ぬまで殺しつくす！」

「人の心を忘れたのか！」

「そんなもの、とうの昔に捨て去った！」

——ふつと顔が重なった。聖騎士の鎧をまとう金髪の男。

『俺は悪が許せない。けど、悪って何なんだ？』

『悲しい目をしないでくれ、トウマ、カイジン』

『・・・』

冬馬は一瞬気がそれた。その隙を狙って亜矢が突撃する。

キン！

冬馬は啞然とした。

斧を、切り裂かれてしまった。ナイフのなぎ払いで真つ二つに。

「な……に……！」

亜矢は冬馬に向かってナイフを振りかぶる。

そして、そのナイフが振り下ろされた。

信じられない位にあっけない幕切れだと、冬馬は薄れゆく意識の中で思った。最後に浮かんだのは海神の笑顔。

「（悪い、約束守れなかった。すま……ん、海、神……）」

67話 いやなモノが口の中全体に広がっている感じ

よろめいて、どさつと倒れた彼女に必死に寄り添う。左胸には深々と突き刺さったナイフ。

「史ちゃん！ 史ちゃん！！」

「……社、ちゃ……」

彼女の瞳から一筋の涙が流れて、——彼女は動かなくなつた。伸ばした腕が、力無くダラリと垂れ下がった。

「う……そだ……」

私は茫然と、そう呟いた。

*

のどかな昼下がり。太陽光がステンドグラスを通って、七色になって室内を照らしている。外の子供たちのにぎやかな声は、もう下校時間だからだろうか。そう言えば、綾乃さんがもうすぐ小学校に通えるってはいでたつけ。

私は教会の中で本を読んでいる。長椅子の上に、アースフレンド

の図書館で借りた本を10冊ほど置いて。

琴目さんと由美子さんは、となりの椅子で肩を寄せ合ってすやすやと眠っている。2人とも疲れてるのかな、もしかしたらベッドの上でたくさん運動を押したからなのかも。……ってどういう発想だ。

つい1時間ほど前のことを思い出す。私は史ちゃんとHなことをしていた。史ちゃんの小さな裸を思い出して、またちよつとだけ身体が疼く。

部屋の中にはさつきまでの名残がいっぱいある。2人で交わって、床にしたたるくらいに濡れたベッドのシーツ。大きく容量を減らしたボディーソープやローションとか。脱ぎ捨てられた部屋着やショーツに浮かんでいる黄色い染みだとか。私自身の身体にも、史ちゃんに舐められて立ち上がったままの乳頭という、とっても恥ずかしい物的証拠がある。

あの日、私は史ちゃんに告白をした。私の恋人になって欲しいって、健やかなる時も病める時もずっと一緒だからって。もちろん史ちゃんのこととは前から好きだった。けれどこうやって、ちゃんとした形で好きだと言ったのは初めてだった。

史ちゃんが愛おしくてたまらない。ギューッと抱きしめると幸せが満ち溢れてくる。史ちゃんを大切にしたい、大事にしたいという思いがどんどん強くなっている。

そしてそんな思いと一緒に湧き出るのは激しい劣情。史ちゃんの起伏の少ない身体を思い出す度にいやらしい感情が浮かんできてくる。

全身の敏感なところをまさぐって、可愛い声で鳴かせたい。ベッドに引きずり込んで乱れさせたい。24時間365日ずっと肌を重ね合わせていたいとさえ思う。……これって少し変なんじゃないだろうか。

史ちゃんとの行為が終わった後、心の中にぽっかりと虚脱感が生まれる。史ちゃんが近くにいないことを意識すると体が震えてしまう。史ちゃんの姿を、声を笑顔を匂いを私の身体が欲して止まない。すっかりしなくちゃいけないと思う。こんな感情は愛じゃない、これじゃまるで飢えた獣だ。

気持ちを抑えるために、私は史ちゃんとのHの後にはいつも沢山の本を読んでいる。ジャンルは雑多、小説や経済書、はては英語で書かれた聖書まで。そうすることによって私は理性を取り戻せる。私が1番恐れていることは、私自身が欲望の塊になって、史ちゃんにそれを向けてしまうことだ。史ちゃんを傷付けるようなことは絶対にあってはならない、絶対に。

それはとても大事なこと。私と史ちゃんが、これからもずっと恋人同士でいるために。

読んでいた歴史小説を椅子の上に置く。4冊目の本に手を伸ばそうとしたら、祭壇のほうで赤色の光が迸っているのに気付いた。私はこの光柱の雰囲気を知っている。これは史ちゃんがやって来た証拠だ。

史ちゃんは祭壇から降りて、私のほうに駆け寄ってくる。そして私の胸に思いきり飛び込んできた。

「どうしたの、史ちゃん」

「……」

初めは史ちゃんが私に甘えてきたのかなと思った。ベッドの上でHなことの続きをしようって誘っているのだと。ただ何だか様子が違う、もっと真剣な表情で私を見上げている。

私は身体から滲み出る浅ましい性欲を抑え込んで、史ちゃんの次

の言葉を待った。

「あら史さん、忘れ物でもしたのかしら？」

「だから、そーいうのは部屋で……ん？」

由美子さんと琴目さんも、何やら気配を感じて目が覚めたようだ。
2人とも寝ぼけ眼をこすりながら史ちゃんのほうを見ている。

「みんなに、聞いてほしいことがあるの」

そう言って、史ちゃんはさっき元の世界で何があつたのかを話した。
始めた。

これが殺意なのか。こんな感情、生まれて初めてだ。私の中に、
こんな感情があるなんて知らなかった。

史ちゃんは起こったことをありのまま話してくれた。買い物の中で大江戸先輩に出会ったこと、そしてナイフで刺されかけたこと、体中から怒りが湧いてくる。もうあの人のことは絶対に許せない。私だけじゃなく、よりにもよって史ちゃんを傷付けるなんて！

……だけれども、同時になにか古い記憶も浮かんできた。彼の名前が頭の片隅に引っ掛かっている。……おおえど、あや？

「マジで何とかしないとな」

琴目さんが憎々しげにそう言った。いやなモノが口の中全体に広がっている感じ、私もそんな気分だ。

「どうするべきだろう」

「GMに直訴しよう」

由美子さんのその言葉が鶴の一声になった。

「ドレッドノートさんとかどうかしら？ 彼ならいつでも森にいるでしょう」

私達は教会から出て、ドレッドノートさんがいる新緑の森に向かうとした。その時、

「ケーキが食べたーいモンブランみたいなのー」

「だから金が無いんだって。あつ」

園田 一矢さんと姉の良子さんが2Fから降りてきた。一矢さんは私達に向かって話しかけてくる。

「こんにちは。いきなりで悪いんだけど、安くてボリュームのあるケーキ屋って知らない？」

「すみません、今から街の外に行くんですよ」

「街の外？」

良子さんはひょこつと首を伸ばす。いかにも興味津津といった様子だ。

「ドレッドノートさんの家に行って、大江戸先輩の話をするんです」
「亜矢だって？」

良子さんは急に真面目な顔になった。もしかして、大江戸先輩に

ついて何か知っているんだろうか。

私はそのことを聞こうとしたが、ボタンとドアが開く音で中断してしまう。

「いきなり病院の話されても困るがな」

「どう解釈したら今のが病院に聞こえるんだよ零花！」

「それはええとして、亮介が解らないって言ってた『橋姫』ってのは、上半身は鳥なんだけど下半身がトナカイ……」

零花さんと亮介くん。いつものように漫才をしながら教会の中に入ってきた。私達を発見して、2人はこっちに寄ってくる。

「あれ、みんな何してんの？」

零花さんがいつもの表情で聞いてくる。大江戸先輩について話していると言ったら、零花さんと亮介くんは興味があるからと長椅子に座った。

すると今度は、装備とかを作る工房から誰かが出てくる。この2人も見知った顔だ。

「千客万来ね」

由美子さんはみんなの姿を眺めながらそう言う。

「君ら、そろって何を相談してるんだ？」

「亜矢について、話し合ってるんですよ」

「なら混ざらせてくれないか。俺も話したいことがあるんだ」

私達は椅子を動かして大きな輪を作った。かくして総勢10人による、大江戸先輩についての大会議がスタートしたのだった。

68話 凝縮されていく

会議の前に状況説明をしておかないと。まず祭壇のほうに座っている私と史ちゃん、そして琴目さんと由美子さん。史ちゃんは来たばかりだし、私達も中でリラックスしていたから4人とも私服だ。階段側に座っているのは園田 良子さんと一矢くんの姉弟。2人は冒険に行こうとしていた装備そのまま、戦闘用の丈夫な服を着ている。もつとも服は服なので、身を守るといふより動きやすさ逃げやすさ重視なのだけれど。

ちなみに姉の良子さんはOLの20歳。冒険者の中で数少ない成人だけど、大人っぽさは微塵も感じなくて、むしろ高校1年生の一矢くんのほうが兄に見えてくる。

作業所の扉近くに座っているのは師野村 芳樹さんと綾乃さんの父娘である。芳樹さんはさっきまで防具作りをしていたみたいで作業服と頭に手ぬぐいを巻いている。綾乃さんは今日もアゲラダム小学校の制服で、そういえば最近ずっとその格好だ、通うのが楽しみなんだろう。

そして玄関側の伊藤 零花さんと倉田 亮介くんコンビ。いつものとおり亮介くんはナイトで、零花さんはアーチャーの格好、なのだけれど彼の鎧はとってもボロボロ。たしか新品を買ったって言うたけど、今日もミスをしてしまったんだろなあ。

いつものメンバーよりも遥かに多い10人体制。兄さんが帰ってくる前に、輪の形に移動させた長椅子を片付けなくちゃ。

「さてと、それじゃ何が起こったかをまとめるわね」

音頭をとるのは由美子さん。こういう大事な場をピシッと締められる能力っていうのはちょっと羨ましいと思う。

何か困ったとき、話を切り出してくれるのは琴目さんから由美子さんの2人だ。快刀乱麻なアイデアを琴目さんが出してくれて、由美子さんがそれを支えている感じ。私と史ちゃんはどちらかというと聞き役に徹している時のほうが多い。

由美子さんが事件のあらましを喋り終わって、少しだけ沈黙が流れる。みんな一様に重苦しい表情をしていた。無理もない、なにせ議題が大江戸先輩についてなのだから。

そして、1番最初に口火を切ったのは芳樹さんだった。

「……あいつの名字は大江戸だったな」

「ええ、そうですよ」

芳樹さんは深く考え込むように腕組みをする。

「ずいぶん昔に新聞で、あいつの一家の事件があったと思うんだ。どんな事件かは忘れちゃったんだが……」

「それならアタシが知ってる。アイツン家、11年くらい前に交通事故に遭ったんだ」

言葉をつないだのは良子さんだった。ポツキを先っぽをかじりながら話していく。

「間違いないよ。当時の週刊誌に亜矢の名前があったから」

「そんな事件があったなんて知らなかったわ」

「初めて会ったときから気になってたんだ。触れないほうがいいかと思ってただけど、こんな事件が起こったら話は別でしょ」

11年前というと、大江戸先輩はまだ小学校にも行ってない歳だろう。そんな幼いころに、あの人は両親を、家族を失ったというの

か。

「そんなことが……」

「えっ社、亜矢に同情しとるの？」

向かいに座っている零花さんは、私のほうを見て、少し驚いたような表情をする。

「社かて被害者なんやろ。そんな顔する必要あらへん」

「いや、でも……」

「そりや亜矢の境遇は悲惨やと思うし、性格歪むのもしょうがない。せやけど世の中には、やってエエこととやったらアカンことがあるやろ」

「そう、かな」

「そうや。不幸な人生を送ったことは決して免罪符にならへん。孤児院を出た子供らが全員犯罪を起こすか？ そんな馬鹿なデータは存在せん。そうやる社」

「うん、そうだよな」

確かに零花さんの言うとおりだ。同情したってしょうがない、それで彼が許されることは決してない。でも改めて思う。私は大江戸先輩のことを何も知らなかったのだと。

それから零花さんと亮介くんは、大阪に大江戸先輩達が来たことについて話してくれた。

「亜矢は俺達に、計画に加担しろって言ってきたんだ」

「あの2人、電車とか乗り継いでやって来たんだよ」

零花さん達が住んでいるのは大阪の南のほう。私達が住んでる町から電車で3時間くらい掛かるだろう。

そこまで行く行動力も凄いけど、いったい彼は2人の細かい住所だとかをどうやって調べたんだろうか。……なんて考えるだけ無駄か、大江戸先輩なら不可能じゃなさそうだ。

そして2人が住んでる町までやって来た大江戸先輩はこう言った。

『世界に革命を起こさないかい？』

世界の革命だなんて、大江戸先輩が好きそうなフレーズだ。はっきり断定してるように見せかけて、言葉はとっても抽象的。零花さんは当然こういう返事をした。

「革命て何？ はしよらんと説明してーな」

「アースフレンドで得た力を、現代の日本で役立たせたくは無いかい？」

それを聞いて、零花さんは嫌な予感がした。最近世間を震わせている連続殺人事件。

「もしかしてアンタ、あの事件を」

「勘がいいね、さすが全国模試1位の秀才だ。僕達はね、悪徳な官僚や、政治家をどんどん始末していきたいと考えてるんだ」

そこまで聞いて亮介さんは、亜矢の考えを理解して問い詰めだした。

「おい待て、つーことは何か、あの事件はお前らが起こしたって言うのか？」

「そうだよ。じゃあ手伝ってくれるかい」

「ふざけんな！！ テメー自分が何やってるのかわかってんのか！？」

亮介さんはバンと机を叩いた。頭に血が上っている彼を、大江戸先輩は冷ややかな目で見つめている。

「YESと答えないと……どうなっても知らないよ」

亮介さんは反論しようとして、グツと言葉を飲み込んだ。具体的に何をどうしようとしているのかは解らない。だからこそ余計に怖い。

大江戸先輩は2人に協力を願っているのではない、脅迫して屈服させようとしているのだ。人質は零花さんと亮介くんの周り全て。本当に大江戸先輩はどうかしている。

「時間をくれへんか？」

零花さんは呻くようにそう言った。大江戸先輩は肩をすくめて言う。

「しょうがないなあ。また会いにくるよ」

更に彼は、帰る間際にこう言ったそうだ。私が少し前に見たことがあるであろう、あの不気味な笑みを浮かべながら。

「『決断は早いほうがいいよ。さもないと、ね』って言ったんよ。いやーあん時は肝が冷えたね」

以上が2人に降りかかった出来事だそうだ。零花さんはナハハと笑う。だけでもう、笑い話どころじゃ済まないのは周知だ。

「それって、先輩があ的事件を起こしたってことなの……？」

「最初はハツタリや思ってたけどな。つーかよう考えたら、アイツそん位やれるしな」

「そんな……」

……………。

いくらなんでも、大江戸先輩がそんな。

けれど、零花さん達が嘘をついてる訳がないし、ニュースで言ってたような密室トリックも彼の身体能力なら可能はず。

隣に座っている史ちゃんの肩が震えていた。私はそっと抱き寄せ、守るように両手で包み込む。

史ちゃんはナイフで刺されそうだったと言っていた。とっても心細かっただろう、とっても怖かっただろう。史ちゃんにはこれ以上、辛い思いをさせたくないかない。

もう史ちゃんを危険な目に遭わせたくない。私が史ちゃんを守り抜いてみせる。私ははっきりとそう誓った。

——だって、史ちゃんは私の1番大切な女の子だから。

会議はだいたい30分くらいで終わった。椅子を元の場所に片付けながら、みんなでこれから話を話す。

「ところで、ドレッドノートの家に行くんだろ」

「うん。だけど大勢で押し掛けてもなあ」

総勢10人が、あの家の小さなリビングに入りきるだろうか。相

談の結果、何人かは教会に残ることになった。

「俺は工房に戻るから、帰ってきたら呼んでくれな」

「綾乃はパパと一緒にいる！」

「ほんならウチらも待つとこか。社―、この本借りるで」

「スゲー難しそうな本だな。読む気が起らん」

芳樹さんと綾乃さん、零花さんと亮介くんが残って、

「一矢、行く前にマンゴープリンが食べたい」

「姉さん食べたばかりだろ？」

「だから言ってるのに。自分で作ったほうが安いって」

「ヤダしんどい」

「相変わらずねえ」

私達4人と、良子さんと一矢くんを合わせた合計6人でドレッドノートさんの家へと向かった。

69話 私には、こんなに沢山の友達が居るんだ

公園の時計をふと見ると、現在時刻はPM1:57。向こうでどれだけ話し合いをするかは未定だけど、日が帰る前に帰宅するのは困難かなと思った。

私達6人はついさっき、アゲラダムの東側の城門をくぐり抜けたところ。ドレッドノートさんの家はここから5kmほど歩いた、新緑の森の入口にポツンとある。

大江戸先輩は殺人を犯した。大江戸先輩は、まごうことなき重大犯罪者である。自分から喋ったんだ、詭弁でないと見て間違いないだろう。

これから先、私達に手を出してくる可能性は無視できない。現に史ちゃんには彼にナイフで刺されかけたのだ。園田さん達も、零花さんや亮介くんも、芳樹さんや綾乃さんだって狙われるかもしれない。下手をすればGMのドレッドノートさん、それに冬馬さんや海神さんも。

どうしてこんな展開になってしまったのだろう。大江戸先輩はどうしてそうしないといけなかったのだろう。他にもっと平和的な解決方法がなかったのだろうかと思う。もし私と大江戸先輩が会ったのが数年ほど早ければ、少し違った今があったのかもしれない。

海図なき船出のような計画を前にして、私達5人は一様に真剣な表情をしていた。これからドレッドノートさんに大江戸先輩のことを厳しく問い詰めて、GMとして彼に相応の制裁を与えて頂こう、大会議の結論はそうなった。

関わる人間の誰もが、嫌な気分になるのは仕方がない。こんな辛気臭いことなんかしたくない、けれども行動しないといけないのだ。状況を憂えている場合ではないのだ。

そんな重苦しい雰囲気の中、ややテンションの違う人がいるんだけど。

「う、ペッペッペッ！」

「姉さんどうしたの」

「道端の野イチゴ食べたらずかった」

なんとも気の抜ける姉弟の会話に、私は思わず最後尾に目を向けた。琴目さんや由美子さん、それに史ちゃんも立ち止まって2人を見ている。今の私の表情も、みんなみたいに困ったような呆れたような感じなんだろう。良子さん節は健在だな。

「良子さー、野草なんだから不味いに決まってるじゃん」

琴目さんは諭すように言っている間も、良子さんは喉の下あたりを叩いてペッペッとしている。場を和ませるためのジョークなのかも、出会った頃の私ならそう考えたかもしれない。

どこだったかは忘れたが、2人はマンションで一緒に暮らしているらしい。お金を稼いで一家の大黒柱やってるんだよー、とは良子さんの弁。今回のエピソードでまた1つ疑惑が増えた。私の知り合いには疑惑持ちが多いなあ。良子さんしかり、15歳なのに見た目は小学校低学年の綾乃さんしかり、なぜか彼氏の亮介くんしかり。

重苦しい雰囲気の中にやや軽いノリが混ざった状態で、私達は新緑の森へと入っていった。そういえば、最初に訪れたのはこの森だったな。そうそうこんな蒸し暑い気候だったよ。

「（色々なことがあったな）」

今では当たり前になつてゐるモンスターとの戦い。感性をくすぐられる自然豊かなダンジョン探索とか。×××とか。

でも何より大切なのは人との出会いだと思う。史ちゃんや、琴目さんや由美子さんや、それに出会った冒険者達やGMの人達とか。みんなとはこの世界に召喚されなかったら出会ふことは無かつただろう。

この世界に来てからそれほど時間は経つてないけど、作つてきた思い出はどれも掛け替えのないものばかりだ。この経験は一生大切にしたいと思う。今までのも、これからのも。

そういえば近くに海があるんだっけ。だいぶ前に4人で行つたきりだったけど、今度はたくさん人を誘つてもつと楽しく遊びたい。元の世界の海はお盆を過ぎてゐるだろうからもうクラゲがいっぱいだろうけど、アースフレンドではそんなの関係なしだ。もつともつと、沢山の思い出を作つていきたい。

がさつ！

不意に草むらをかき分ける音が辺りに響いた。ちょうど前方の岩の向こう、気配からモンスターだというのは分かる。そして数は確実に1匹以上だ。

「グオオオオオツツツ！！！」

勢いよく飛び出してきたのは、背丈が2mくらいの巨漢のモンスターが3匹。名前はピンクオーク、私にとってなにかと因縁深い種族だ。

棍棒を持つて高々と吼えるピンクオーク達を私は冷静に見返した。アースフレンドに来たばかりとは違う、私は確実に成長しているんだ。

「LV18。物理攻撃オンリー、弱点は冷氣、ほとんどの状態異常が有効。って解説は要らないか」

「ありがとう琴目さん」

私は背負った斧を引き抜いて両手に構える。左手で柄を持ち、反対の手で刃の付いてない側を支える。練習を続ける内に見つけた1番しっくりくるポーズだ。50kgもある両手斧を振り回すにはこれがベストだと思っている。

他の3人の様子をチラリと見る。みんな準備OKなようだ、良子さんと一矢くんも避難したようだし始めようか。

私はピンクオーク達に向かって突撃していった。先先の先、あらゆるペースを手中に収めた方が戦いに勝てるのだ。

2匹のピンクオークが棍棒を振り下ろしてくる。私はそれを斧の刃の部分、もう1本は手で握り止めた。確かに彼らは力持ちだし動きも素早い、だけど私だって昔のままじゃない。そしてみんなも。

「ほら、行くよ社！」

琴目さんの合図を聞いて、私は斧を軸にして大きく横にはねた。後ろの方をチラッと見ると、琴目さんが大リーグのピッチャーみたいに緑色のボールを大きく振りかぶっていた。

パンツ！

耳を突き刺すような高音と共にボールが爆ぜ、ペンキのような液体が地面いっぱい広がる。琴目さんが新たに得意技に加えた『粘着玉』は、相手の足に絡みついて転倒させるというもの。ピンクオーク達は突然の出来事に右往左往して足をバタつかせている。

そして私の両隣から迸る魔力の気配。

「・・・×××××、フリーズアタック！」

「っ、××× サンダーアロー！」

フリーズアタックは史ちゃんが、そして稲妻の矢みたいなのを飛ばしたのは由美子さんである。魔法の軌跡を見届けた後、斧を真一文字に持ち替える。

「いけ社！」

「任せて！ ハアツツツ！！！」

ピンクオーク達を横になぎ払うと同時に、辺りの地面を強烈にえぐり取っていく。『アースグランジャ』は斧の範囲攻撃技だ。

全てが終わった後には、足元に横たわるピンクオーク達。安心して、手加減はしておいたから。

ピンクオーク3匹を瞬殺、まさに教科書に載せたいくらい綺麗な勝ち方だった。初めてではやっそこさつとここで辛勝していた相手だったのに、本当に私達は強くなったんだなあと実感する。

きつとみんなが居てくれたからこんなに強くなれたんだ。私1人だけだったら、とつくの昔にくじけていたと思う。みんなと一緒に戦って、一緒にご飯を食べたり下校をしたりする。それがこんなにも嬉しいことだと知ったんだ。

私には、こんなに沢山の友達が居るんだ。私には怖いものなんか何もない。

再び歩き出してから、程なくしてドレッドノートさんの家に辿りついた。

「んじゃ、中に入ろうか」

「そうだね」

「美味しいケーキ出してもらお」

私達は小屋のドアに近づく。すると中で、誰かが話し合っている声が聞こえてきた。少し耳をそばだててみる。

「すまん、愚痴を聞いてもらって」

「構わんよ。早く治るといいな」

「（ドレッドノートさんと、海神さん？）」

ドレッドノートさんと、もう1人の甘い弾んだような声は、たぶん海神さんだ。GMが2人も居るんだったら話が早い。私はドアにノックをしようとして、

「にしても亜矢の野郎、絶対に許さない」

その動作がピタリと硬直した。今、たしかに亜矢と言ってた。

「冬馬に大怪我させるなんて」

え、冬馬さんが大怪我？ ……！！

「彼の居場所は分かっているのかい」

「ロストしたよ。目下捜索中だ」

「まあ私に出来ることなら何でも言ってくれ。コーヒーもう一杯」
ボタン！

私は無言で勢いよく扉を開け、中に入っていた。

70話 いい、ケセラセラなんて信じちゃダメだからね

私は勢いよく扉を開けた。

乱暴にしたせいか取っ手が少し歪んだが、そんなことは気にしてられない。私に続いて史ちゃんがおそろおそろ入ってくる、他の4人も。みんな何か言っていたような気がしたが、私の耳と脳はそれらを処理していなかった。

全ての挙動が、なにか遠い出来事のように感じる。目に見えてる光景がクレープの生地のように引き延ばされている。ドレッドノートさんは動揺して、骨をカクカクと鳴らして椅子から立ち上がった。海神さんは悠然とコーヒーを飲み続けている。

「今の話、聞かせてもらいました」

「久しぶりー向日葵の冒険者達。それから2人は a l a m o d e だっけ、何の用だ一矢」

私は肩をいからせて部屋の中に入っていった。机に向かってドンと手を叩き、2人のGMを見つめる。そして前置きとか一切を省略して問いかけた。

「大江戸先輩が、冬馬さんに傷害事件を起こしたんですね」

「うーん、そうなんだけどね」

私は海神さんの肩を持って必死に乞う。彼女の白く細い身体をユサユサと揺らした。コーヒーがこぼれるかもって一瞬思ったが、すぐにそんなのは視界から外れた。焦燥とか不安とか恐怖みたいなものが、心から噴き出してきてそれどころじゃなかった。

冷静じゃなくなってる自分がここにいる。色んな情報が頭の中で飛び交って、周りを見渡せないくらいパニックになっている。己のメンタルはあまり強い方じゃないって気付いてたけど、今回ののは強烈だった。

最近の私には、大江戸先輩がらみで色々とあり過ぎた。押し倒されて頬にキスをされたし、アースフレンドでも連れて行かれそうになって、史ちゃんはナイフで刺されそうになった。

全部ちゃんと整理をつけてない、私の中でトラウマみたいになっている出来事。そして更に冬馬さんの事件が上乘せされた。限界だった。まるでダムが決壊を始めるかのように、理性で抑え込んでいた心の奥底がどんどん膨張していく。

「詳しく教えて下さい！」

「ちよつと、落ち着いて。ね？」

「大江戸先輩は今どこに居るんです、教えて下さい！」

「あのね社ちゃ」

「大江戸先輩は犯罪を犯したんですよね？　なら皆さんはこれから大江戸先輩を取り締まるんですよね！　皆さんは大江戸先輩の事件を予測してなかったんですか！　史ちゃんはひどい目に遭いました。私だって被害者です。大江戸先輩がどれだけ人を殺したんですか？　どうして大江戸先輩は大量殺人なんかしたんですか！　一体、どうして」

矢継ぎ早に質問をぶつけていった。海神さんは苦笑いを浮かべ、戸惑った表情をしている。

目の前がぼやける感じ。どうしてか目が潤んできている。

「どうして、本当……」

「社ちゃん、あの、少し落ち着いて」

史ちゃんが、慰めてくれるように私の袖を持つ。その声には、はつと我に返った気がした。

目の前を見る。海神さんが何かを詠唱していた。いつの間にか、そばにドレッドノートさんが寄っている。

唐突に、空間が光で溢れだした。

「××××××××……、×××」

「海神っ、さんっ、……！」

たぶんあれをするのだろうと解かる。今まで何度も見たことのあ
る光景。私は腕を伸ばして阻止しようとするが届かない、魔力の持
つプレッシャーに弾き飛ばされそうになるのを、踏ん張るので精い
っぱいだ。

手で眼を覆う。やがて、目も開けられないくらいに光柱の瞬きが
強くなってくる。

「———！」

私は何かを叫んでいた気がする。たぶん待ってとか行かないでと
か、でも2人は聞き入れてくれなかった。

「大江戸 亜矢の問題は我々で解決する。嬢ちゃん達が気に病む必
要はない」

「ごめん」

海神さんの謝罪の言葉が一瞬間こえて、2人はこの場から消え去
った。

テレポーションで逃げてしまったのだろう、だけど現状に全
く付いていけない。

この小屋から、2人分の質量が消滅した。その結論を前にして、私はただ啞然とするしかなかった。

「説明放棄か、とんだ記者会見ね。あの大御所タレントを思い出すわー」

良子さんだけが、いつもみたいに無責任な口調だった。

「海神さんとドレッドノートさん、もう小屋には見当たらないわ」

「そりゃ何処かにワープしたんだろうしさ」

「そうなんだ……」

「社、大丈夫？ もうしばらく休んでな」

2人の声が遠く響いている。まだ、私の認識能力が戻ってきてない感じ。

私はテーブルに突っ伏してうなだれている。返事をするのも億劫なくらい体がだるい。もう何もしたくない気分。

大方の予想通り、海神さんとドレッドノートさんは小屋から消え去っていた。まあ私の詰問から逃れたかったんだから、出来るだけ離れたところにレポートするのは当たり前だろう。頭では理解してる、だけど2人の態度には納得がいかない。

私の知っている大江戸先輩は、賢くていつも自信たっぷりな人だった。初めの頃の印象こそ微妙だったが、アースフレンドと一緒に色々するにつれ好感を持つようになった。今までの一連の事件には確かに心が痛んだ。だけどまだ、私は大江戸先輩のことをぼんやり信じてる。

「ほーら」

のろのろと顔を上げる。良子さんが隣の椅子に座っていた。

「社がナニ悩んでるかはいたい解かるよ」

「良子さん」

「社、もしかして亜矢に惚れてない？」

「なっ、！」

突然なんてこと言い出すんだ、そんな思いを瞳に乗せて私は良子さんをじーっと見る。

「ごめん怒らないで、ね？」

「怒ってません」

嘘、私とっても怒ってる。あえて口に出す必要もないから訂正しないけど。良子さんは慌てた様子で話題をそらした。

「ゴメンゴメン。それよりも社はどうすんの？」

「私がですか？」

「だから怖い目しない。GMが役立たずな以上、これからどうすんのって話よ」

「それは、その……」

今後どうするかについて、はっきり言って何の展望もない。私が言葉に詰まっけると良子さんはやれやれと何かを差し出した。

「いい、ケセラセラなんて信じちゃダメだからね。社がどうするかで全てが決まってくるんだから。とりあえずケーキでも食べて元氣

出して」

「ありがとう」

良子さんが、私のテーブルの前にモンブランを置いてくれた。ありがたく食べようと思って一応聞いてみる。

「ちなみにこれは、何処にあつたんです？」

「ああこれ、食料保管室にあつたの持ってきたの」

よくよく辺りを見渡せば、史ちゃんはお皿を取り出したり由美子さんはお湯を沸騰させている。今からお茶会を始めるのかな。

「これ、ドロボーじゃないですか？」

「冒険者」カスタマーの意見を聞かなかった慰謝料」

良子さんはケーキ食べただけでしょ、と言いたかったけど黙っておいた。私もちょうど小腹が空いていたし。ドレッドノートさんごめんなさい、あとでちゃんとお返しします。

「はあ、結局骨折り損か。ドレッドノートだけに」

「そうでもないわ。消えちゃったってことは、消えなきゃいけない事情があるって証明だもの」

みんな話をしたけど、私は加わらず無言で食べ続けてた。上に乗ってるフルーツの味は全然わからなかった。

71話 みんなの今の幸せが、どうかずっと続きますように（前書き）

無機質な生活様に社&史のイラストを描いていただきました！

一章の終わり『箸休め（職業紹介？）』に載せています。是非見て
ください！

71話 みんなの今の幸せが、どうかずっと続きますように

街道をおしゃべりしながら楽しそうに歩いている4人の少女達。といっても私達のことなのだが。

「おー戻ってきた戻ってきた。やっぱり街の中は落ち着くわ」

「大江戸先輩のことが、解からずじまいだったのは残念かな」

「いいじゃない、お土産があるんだから喜ぶわよ」

つい2時間ほど前にドレッドノートさんの家を出発して、いまちようどアゲラダムに戻ってきたところ。両手で抱えてる袋の中には、当然のように盗、もとい拝借してきたケーキとかお菓子がぎっしり入ってる。ドレッドノートさんは不幸だなあと、加害者の立場ながら述べてみる。せめて訴えるのは主犯の良子さんにしてほしいのが本音。

ちなみに良子さんと一矢くんはもういない。家を出た直後にクエストを受けたいからと言って消えてしまった。「森の奥の遺跡のやつ。行くよ一矢」。「ちよっと待って姉さん。じゃあまたね」とか何とか。しっかりお菓子セットを詰めていったのは流石というべきか。

「ただいまー。って誰も居ないわね」

「まったく団結力ないなあ」

教会の扉を開けた私達4人。そういえば芳樹さんは工房で待ってるんだっけ。動かしたせいか椅子の位置がガタガタなってるなあ、後でちゃんと直しとこう。そうしないと兄さんの仕事が増えてしまう。

祭壇の右側、劇場で表すところの舞台袖に工房への扉がある。そ

れを開けると、中から金属がいつぱいある雰囲気伝わってくる。
へえ、中はこうなってるんだ。そう思いながら見回してたら、す
ぐに芳樹さんと綾乃さんの姿を見つけた。

「ただいまー」

「おお君達か。お疲れ様だな」

芳樹さんが装備作りの手を止めて私達の方を向いた。服装は出る
前と同じ作業服ルック。ただし溶接をしていたためか、顔面をプ
ルトのヘルメットで覆っている。よく見れば綾乃さんもお揃いのを
被っているみたいだ。

「初めて入ったんですけど、この部屋は何というか」

「この部屋くさいでしょー」

「素人には、刺激が強すぎるな？ とにかく腰掛けなさい」

私達はそこらに置いてある段ボールに座った。入ったときから感
じてるけど、工房内の環境はとつてもヘヴィ。こんなところでいつ
も装備を作ってくれていたんだ。

まずムアツと部屋全体に漂う金属の臭いが、鼻の穴とかを一気に
くすぐった。殴られて口の中に広がる血の味に例えるのが1番解か
りやすい。花も恥じらう乙女が用いる比喻表現としては些か不適切
かもしれないがそこは無視。

それから温度と湿度について。まるで梅雨、てるてる坊主まっさ
かさま、不快指数はメーターを振り切つて有頂天だ。タンクトップ
が肌にジドーと張り付いて気持ち悪い。今すぐ着替えたいのを必死
に我慢する。

みんなを見渡すとだいたい同じような感想っぽい。琴目さんは手
で服の中をパタパタしてるし、由美子さんは平気な顔してるけど額

からどどん汗が噴き出ている。史ちゃんに至っては今にも倒れそうだ。

今まで意識したことなかったけど、芳樹さん達はこんなトコロで作業してるのか。労働環境サイアク、読んだことはないけど下手すると蟹工船に近い劣悪仕事場じゃないかと思う。

「防具を作って下さってありがとうございます」

「コラコラ改まるな。それよりGMはどうだったんだ」

GMに抗議する内容が1つ増えたなと感じながら本題に入る。

お土産のケーキを食べながら、琴目さんがドレッドノートさんの家で起こったことを話してくれた。海神さんがいたこと、冬馬さんが大江戸先輩によって大怪我をしたこと。芳樹さんは腕を組み、神妙な顔つきで溜め息をついた。

「あいつらは信用できると思ってたんだがな。そうか、冬馬くんが……」

実はGMに相談してはどうかと提案してくれたのは芳樹さん。もし負い目を感じてしまってるのなら、そんなことで悩まなくていいと慰めるべきなのだろうか、私にはわからない。

しばらくして、芳樹さんは綾乃さんに声を掛けた。

「綾乃、ちょっとその辺で遊んできなさい」

「えっ？」

1人で退屈そうにしていた綾乃さんが顔を上げて返事をした。

「今からみんなで難しい話をするから。10分ぐらいしたら帰っておいで、一緒に公園で遊ぼう」

「はい」

綾乃さんがドアから出ていった。靴がパタパタと床を叩く音、それが徐々に遠くなっていく。ギイというのは教会の玄関扉を開く音だ、そこから先の音は響いてこなかった。

「少しだけ、別の話をしてもいいか？」

綾乃さんがいなくなったのを確認して芳樹さんはこちらを向いた。太り気味のはずの彼の顔はどこかやつれ気味に見えた。気のせい、頬が痩けているように感じる。

「綾乃の身体の話は、前に話したと思うんだ」

私達は小さくうなずいた。彼女は生まれつき重度の障害で、現実の彼女はずっと寝たきりの意識不明。こっちの世界に来るまで自我も意識も存在しなかった。これは綾乃さん本人から聞いたことだった。

「綾乃は生まれてからずっとあの身体だ。元の世界では生命維持装置がないと生きていけないし、それに目も耳も聞こえない」

「・・・・・・」

「ここがたとえ本物でなくても、せめてこの世界では幸せに暮らして欲しいんだ。綾乃とは仲良くしてやってくれ」

芳樹さんは穏やかに微笑む。表情は娘を思う優しい父親のそれだった。

そうか、私達にとってはただのオンラインゲーム世界。でも2人にとってはここが人生の全てなんだ。

「俺も、いつまで一緒にいてやれるかわからんしなあ」

「芳樹さんは、何処かに行くんですか？」

恐る恐る聞いた。今更ながらこの人はどんな仕事をしてるのか私には知らない。とっても危険な仕事、ここよりもっと辛い職場？ もしかして明日をも知れぬ人生を繰り広げているのだろうか。

そんな私の思いを察したのか、芳樹さんは笑ってごまかそうとする。

「別にそんなつもりはないよ。ただ何というか、俺の身体は少しガタがきていてな。まあこの世界に来るようになってから少し体調は良くなっただがな。ここに来てから体重が13kgも増えてしまったしな」

芳樹さんは張り出たお腹をポンと叩いて笑う。

同時にパタパタという音も聞こえてくる。それはだんだん近くなってきた。

「パパー、話終わったー？」

「ああ終わったよ」

綾乃さんが戻ってきて、芳樹さんの胸に飛び込んだ。私はそんな2人にのんびりと声をかける。心はとても穏やかだったなあと、言いながら感じた。

「ねえ綾乃ちゃん、約束しよっか」

「なに？」

「前に料理を教えてほしいって言ってたでしょ。こんど一緒にハンバーグを作ろう」

「ワイやったー！ ゆびきりげんまんしよう、ほらパパもー」

みんなや芳樹さんに、いいよねって目で合図をした。どうやらOKみたいだ。

「俺も普段はカップラーメンばかりだからな。レパートリーが増えるのは嬉しいよ」

「ハンバーグっ、ハンバーグっ！」

「アタシらも何か作らない？ どーする由美子」

「そうねえ、じゃあデザートでも作りましょうか。琴目は何がいいと思う？」

「私、サトイモの美味しい料理を知ってるよ」

「ふ、史ちゃん、サトイモはまた今度ね？」

とっても楽しい。みんなとの今の幸せが、どうかずっと続きますように。私はゆびきりをしながらそう心の中で願った。

72話 琴目と由美子の物語（前書き）

百合描写に注意です

72話 琴目と由美子の物語

あなたにとってHとは何ですか？

人妻は、愛し合うことだと言った。Hって気持ちよくなれるじゃない、一緒にそういう気分になれるのは最高だと思うの。パートナ―を誘うためなら身体を磨いたりグッズを買うことなんか惜しまない。あの人のことをずっと考えてあげる私って、最高の奥さんだと思わない？

風俗嬢は、独占欲を満たすためだと言った。私が上に乗って、徹底的に絞り出してあげるの。楽しいと思わない、どんな屈強な奴でも私の手に掛かればまるで仔猪みたいに可愛らしく鳴いてくれるのよ。ちよつと締め付けてやれば、だれも逆らえないんだから。

同じ質問を琴目と由美子にすれば、きつとこう返事をするだろう。交わることで、生きているのを実感できるから。生命の躍動を、間近で感じられるからと。

ベッドの上で絡み合い、愛を確かめ合っている2人の少女達。

「本当に、由美子はいやらしい身体してる」
「いけないで……はあ、んっ！」

由美子は琴目によって、服の上から胸を弄ばれている。何とも判別つかない液体で濡れ、ワンピースやシーツはまるで失禁したかの

ようなシミが浮かび上がっている。

作業場から出て解散した2人は、真つ先に自室へと向かつていった。誘ったのは由美子のほう、湧いてくる劣情をついに我慢できず、琴目に慰めてほしいとねだったのだ。

生まれつきか後天的か、由美子には強烈な淫奔の気がある。絶頂寸前の昂　たかぶ　った肉欲が24時間うずまき続けている特異な体質の持ち主。それでいて自分の手では決して満足に果てられない。突如ピンク色の妄想に襲われ、僅かの内にショーツをしどけなく濡らしてしまうなど日常茶飯事。1日に何度も、何度も訪れる発作下着が渴く間もなく溢れだす恥知らずな蜜の感触は、いつまでたっても慣れることはない。

女殺しの媚薬で満たされたガス室に手足を縛られ、休むことなく晒され続けるような感覚。プツクリ立ち上がる部分に、高濃度のそれが深く浸透し続けていくような感覚。普通の少女なら間違いなく発狂してしまうほどの快樂地獄を、由美子は必死に耐えしのんできた。彼女がそれこそ必死になってひた隠しにしてきた秘密だ。

そんな彼女が琴目と出会えたのは、最高の幸運だっただろう。まるで神様が示し合わせた最高の伴侶に、奇跡のように2人は邂逅したのだ。

琴目もまた普通の少女ではありえなかった。元から精神にやや異常が見られていた。情緒不安定で且つ驚異的な集中力を持ち、更には歪んだ征服欲や恐るべき加虐性を内に秘めた少女。それら感情は余すところなく性的欲求に昇華され、由美子の肢体へと注がれていた。

もし2人が出会っていなければ？　由美子は淫らであると同時に、生まれつきとても病弱。2つの背反する特性が身体を蝕みつづけ、長く生きることが出来なかっただろう。一方の琴目も、早々に社会

から爪弾きつまはじされていたかもしれない。

今でこそある程度の社交性を身に付けた彼女達。しかしベッドの上での本質は何ら変わらない。琴目は理性をかなぐり捨てて襲い掛かり、由美子は貪欲なまでに全てを受け止める。同性愛だったことも、深く依存し合える理由の1つなのかもしれない。

チロツ

「はぁあんっ！」

由美子が盛大に嬌声を上げた。琴目が耳の裏を舌先で弄んだのだ。たったそれだけの刺激で由美子は達してしまう。

元の世界では病弱だったため、あまり身体に負荷がかかる行為には至れなかった。月に数回の交わりだけを心の支えにせずと抑え込んでいた。今ガマンすれば、琴目にまた慰めてもらえる。あと数日の辛抱だから蜜を滴らせないで。

そんな悩みもアースフレンドに召喚されて解消された。モンスターとの戦いに耐えられる位のしつかりした身体を由美子は手に入れた。

束縛から逃れた彼女の性衝動は、この世界に来るたびにどんどん旺盛になっていった。もう我慢などする必要はないのだ。なにも気兼ねすることなく毎日交わっていい。それは琴目にとっても吉報だった。由美子を、これからもっと可愛い声で喘がせてあげて、更に恥ずかしい姿にして、何度も絶頂に導いてあげるんだ。

「大好きだよ由美子」

「琴目、もっとお……」

「もっと何をしてほしい？」

「私を、もっと苛めてえ……」

せつなく色つばい声で由美子は懇願する。始まって数十分、いまだ軽い愛撫を受け続けているだけ。もっともっと強い刺激を欲している。琴目も勿論それを承知している。

「なら今日は、特別なコトをしよう」

「とく……べつ……？」

既に焦点の合わない瞳で琴目のほうを見る。手元に買い物用のバッグを引き寄せている。片手で器用にチャックを開き、中に手をつ込む。

取り出したのは円筒型の容器。買った店のラベルが貼つてある以外は特徴がない白の無地だ。くるくると回して蓋を取ると、中には乳白色のクリームが入っていた。

「それを、使うの……？」

「止めとこうか」

「やめないで！ それを私の、……私のHなところにたくさん塗って！」

叫ぶように言い放つ由美子。琴目はクリームを人差し指に掬い取った。

由美子はワンピースの裾を喉のところまで持ち上げた。その下に身に付けているのは上下お揃いのモスグリーンの下着。ホックが外れて持ち上がっているブラと、張り付いて透けてポタポタと汁が零れ落ちているショーツ。

琴目はクリームの付いた指を、ゆっくりと、焦らすように近づけていく。向かう先は由美子の左胸の先端。あと数cmというところで、由美子の顔をじつと見つめた。

「本当にいいの？」

「お願い、焦らさないで……」

「塗った瞬間に、由美子は飛ぶよ」

「早くっ、早くしてえ……！」

由美子に急かされるままに指を突き動かす琴目。残り1cm、そこからじりじりとコンマ数秒を愉しむように近づけていく。

そして先端が触れた瞬間、

「あああつつつ、あああああああつつつつ……！！！！」

由美子の絶叫とともれる嬌声が、部屋全体にこだました。口の中の唾液も全部吹き飛ばす勢い。脳天を突き破るような快感が瞬間的に一気に身体中を走り抜けた。

「それじゃ次は右の胸」

「ふああっ、待っひいあああああああああつつううつつ！！！！！！」

獣のような叫びを繰り返す由美子。無理もない、塗られているクリームはそこの媚薬とは訳が違うのだ。

それはアゲラダム商店街の裏通り。ちょっとしたスラムの奥深くにある、妖しい大人のショップに売られている催淫クリーム。2人のために調合されたその効能たるや、まさに凄惨そのもの。商店街で働く同年代の少女が被検体になったのだが、軽く塗った瞬間に失神してしまい、意識を失っている間にも指は休みなく刺激を送っていたとのこと。慌てて店主の女性が中和剤で処置をしたものの、その少女はまるまる1週間、指で慰めるのを止められずベッドから出られなかった。

その事実を知りながら、琴目は指を右胸の先端へと向ける。クリームはもちろん新たに掬い取ってある。

この1分足らずの間に、何十回、いや百回以上達したのだろうか。噴き出し続ける汁の量は、もう普通の女性とは比べ物にならない。シーツはとうの昔に水分を吸収することを止め、豪雨の後のように巨大な水溜りを形成している。

「アヒイイ!! あうっ!! うぐっ!! くあっ!! ハアン!!
! 止めないでえ、もっと、激しくっ きゃうううううううううう
うううううう!!!!」

「次は由美子が1番好きのところ」

「ハアハア……。！？っはあああああんっつつつつ！！」

そこは由美子の肛門だった。

人差し指を中ぐるりと回転させて、内部に満遍なくクリームを塗りつけていく。更にまたクリームを掬い取り、何度も抜き差しして奥深くまで浸透させていく。

「いいいいつつっ！！　そこはダメっ、きた……ないつつっ！！！」

「綺麗だよ、さっきトイレで出したの見てたしさ。由美子の中にあんな黒くて太いモノが入ってたなんてびっくりだ」

「ああっん、いわ、ないで、恥ずかっきゃうっうっうんんんん！！」

行為を始める前に、由美子はトイレで琴目に見られながら用を足していた。便座の上に四つ足で立ち、尻たぶを広げながらという恥辱のポーズで。しかも琴目は、由美子の肛門から排泄物が出てくる一部始終を鼻の先で観察していた。

「じゃあ次は、由美子の1番恥ずかしいところに塗っていくよ」

「あ、ひいつ……」

「聞ってる？　今からそんなじゃ大変だよ。まだまだ始まったばかりなんだから」

そう言つと、琴目はバツグを逆さにして次々にベッドの上に並べていく。一般的な大人のオモチャから、さながら拷問器具のようなものまで多種多様。それを見て、由美子はうつとりと微笑む。

「さあ由美子。天国の、その先にまで連れて行ってあげるよ」

「ええ、おねがい……」

2人の少女は、最高の時を迎えようとしていた。

——時刻は深夜、草木も眠る丑三つ時。

場所は教会。照明の落とされた室内にひっそりと佇む3人の男女。ステンドグラス越しの月光ごときでは、人間達の表情を浮かばせることは出来ない。

「夜更けに呼び出しちゃってすみません、彰久さんも明日は早いのでしょう？」

「気にしないでいいよ。これも仕事だからね」

彰久とは、社の兄である。

そして向かい合っているのは琴目と由美子。つい先ほど前まで身体を交えていたが、少なくとも2人にその名残はない。

「話というのは、例のことかい？」

「ああ、そうだよ」

そう言つと琴目は自らの左胸、心臓を親指で差した。

「命の相談さ」

「……」

彰久は答えない。琴目は気にせず続ける。

「前に言ってたよね。向こうのアタシ達の身体が死ぬと、アースフレンドのアタシ達も一緒に死ぬって」

「ああそうだ。間違いない」

「アタシ達2人ともさ、向こうの身体が死ぬんだよ。医者から聞いたんだ。アタシも由美子も治療の手立てがなくて、明日まで持たないんだって」

「それも確認済みだよ」

彰久は淡々と頷いていく。

2人とも現代医療ではどうしようもない症状だということを。

アースフレンドの彼女達の身体も、もう間もなく消滅するであろうことも。

彰久は全て把握していた。

「社さんや史さんに、お別れの挨拶が出来ないのは悲しいわ」

「まあ特別に、残したい遺言も無いし別にいいか」

全てを悟ったかのような表情で、2人は穏やかに笑う。琴目と由美子の身体は、うつすらと透けてみえた。

「待ってくれ」

「「?」」

彰久という人物は言う。

「……君達に、伝えたいことがあるんだ」

73話　どうか、この幸せがずっと先まで続いていますように

芳樹さんはスチールアーマーを作っている最中だったらしい。これ以上邪魔をするのもどうかと思ったので、私達は作業場から出ることにした。

「失礼しますね。それじゃ綾乃ちゃん、またね」

「うん。バイバイ！」

パタンとドアを閉める。先輩関連はなんだかんだで進展ナシ。大きく見積もっても、せいぜい半歩前進といったところか。

悩んだところでしょうがないし、ここは気持ちを切り替えないと。私は史ちゃんの肩をそっと抱き寄せた。大好きな史ちゃん、私が絶対に守ってあげるから安心して。

「もう夕食にする？」

「そうだね」

GMがあんな態度だったし、別のクエストを受けるのもなんか癪だ。作業場の芳樹さん綾乃さんを誘ったけど、突貫で深夜まで制作を続けるらしい。後で差し入れとか持つていこうかな。

さて何にしようかな、今日のメニュー当番は私なんだ。昨日はミートローフだったから、サラダメインのあっさりした感じで行こう。教会の玄関を開けて、外気の寒さに思わずブルっとした。気がつけばもう日が落ちてるじゃないか。それほどお腹が空いていないのはケーキを食べたからだろう。

史ちゃんが岩塩を鍋に入れようとしたとかいう紆余曲折もあったけれど、今宵の晩ごはんは無事に完成。ガスコンロ的な魔法機械を

止め、野菜スープを深皿に移していく。後はひじきと豆を煮込んだのと冷奴。そして日本人ならもちろん白米。私は白米至上主義。少なくとも夕食は米を食べないと気が済まないタチなのだ。

ちなみに差し入れに持っていたのは、おにぎり野菜スープとひじきだけ。豆腐は足が速いからなあ。というか豆『腐』なのに更に腐るって変な日本語だと思う。

晩御飯を食べおわり、私達は解散した。なにやら由美子さんが、廊下を歩きながら琴目さんにひっそり耳打ちをしていた。何を話していたんだろう？

「んじゃお休み。明日の朝食当番はアタシだっけ」

「そうだよー」

「おにぎりともそ汁でいいよね」

「うん。それじゃまた明日」

琴目さん由美子さんとは向かいの部屋に入っていく。あれ、何か忘れているような気が。

「私達も休もつか」

「うん」

ガチャ

「……あ」

「……ああ、そうだった」

私と史ちゃんの部屋はとても散らかっている。それもその筈、お昼のたくさん愛し合ってそのままにしたからだ。

とうぜん普通の散らかり方なんかしてない。床に落ちてるアレは、Hな汁が乾いてパサパサになってるショーツとズボン。布団にも黄

色いおつきな2人分のシミ。このまえ買った妖しいクリームも机の上に置きっぱなしだ。

どうしようかなと思っていると、史ちゃんがズボンの裾を引っばってきた。いつもみたいに、ちよつと潤んだ瞳で私を見つめている。

「ねえ、・・・ハダカになる？」

そう言うと、史ちゃんはコクリと頷いてくれた。

2人で服を脱がせ合いっこする。鎧の留め具を外してもらったあと、史ちゃんがバンザイをしてローブをすっぽりと脱がせてあげる。下着姿、私はショーツとブラで、史ちゃんはショーツとスリップを着ている。このまえデパートに行つて一緒に選んだ下着だ。

史ちゃんと抱き合いながらベッドの中に入る。

「社ちゃん、ギョツとして……」

史ちゃんがすり寄ってくる。腕の中から、史ちゃんの温かさが伝わってきて、とっても愛おしい気持ちになつてくる。

今ここに私達がいるキセキ。もし神様が居るのなら、私は史ちゃんに出会えたことにお礼を言いたい。出会えたキセキ。仲良しになつたキセキ。恋人同士になつたキセキ。こうして2人でギョツとできるキセキ。

史ちゃんのおでこにキスをした。ちよつと驚いた顔をしたけど、すぐにニコツとして史ちゃんのほうからほっぺにキス。今度は私が首筋にキス。史ちゃんが口にキス。

沢山たくさんキス。いっぱいキス。史ちゃんの中に舌を入れて、史ちゃんの舌先とチロチロと絡み合う。表側のザラザラしたところと、裏側の筋のところもくすぐるように、歯ぐきやほったの内側もまんべんなく。史ちゃんの唾液と、私の唾液が混ざっていつてお

互いの唇から溢れ出す。

10分くらい経過。史ちゃんの顔はトロンとして気持ちよさそう。私は猫にするように、史ちゃんのあごの下をくすぐってあげる。

「わふう……」

「史ちゃん、可愛い」

また唇にキス。もっとキス。こんなにたくさんキスしたのは初めて。もつともつとキスをしたい。もつともつとたくさん史ちゃんとキスをしたい。

史ちゃんの下着もすると脱がせてあげる。平らな胸の小さな先端に、店で買ったクリームを塗りこんであげる。下のほうも塗り塗り。史ちゃんはとっても可愛い声で甘えてくる。固くなっている乳頭を指でしごく、ぴゅつと母乳が飛び出してきた。

クリームを史ちゃんとで塗り合いっこした。とっても凄い効き目で、飛んでいっちゃいそうなくらい気持ち良くなる。はしたない蜜が、蛇口を閉め忘れたみたいにどんどん溢れてきて止まらない。

史ちゃんは私に身体を搾り寄せてくる。

頭を撫でてあげる。史ちゃんはとても喜んでくれた。

「これから、ずっと一緒にいようね。史ちゃん」

「うん」

そして唇にまたキス。史ちゃんと一緒にいられるのはとっても幸せ。

どうか、この幸せがずっと先まで続いていますように、私はそう思った。

ぱっちり目が覚めた。

時計を見る。もう真夜中を過ぎている。こんな時間にどうして目覚めてしまったのだろうか。

ふと隣を見ると、史ちゃんがやすやすと寝息を立てて眠っていた。汗で額に張り付いている前髪をそつと払う。

私は史ちゃんを起こさないように、静かに身支度を始めた。その辺に落ちている下着とか部屋着とかを身にまとう。カーテンも閉まっ
ていて本当に真つ暗闇だったから、暗視に慣れている私でも探すのに少し苦労した。

「（よし）」

史ちゃんにシーツを掛けてあげて外に出る。みんなの安眠妨害にならないように、そろりそろりと忍び足で廊下や階段を歩く。

教会の祭壇のところに到着した。兄さんが暗闇の中で立っていた。

「こんな夜更けにどうしたんだい？」

……。

「……なんとなく」

「そうか」

そうとしか答えようがない。こんな夜中になんで起きたんだろう。それだけならまだしも、私は史ちゃんに黙って元の世界に戻ろうとしている。

胸の中がざわざわする、と表現するのが正しいのだろうか。漠然とし過ぎていて上手く言葉で表現できない。私は話題を逸らすことにした。

「兄さんは、どうしてこんな時間に」

「兄さん、か……」

兄さんは少し遠くを見るような表情をした。

「……兄さん？」

「何でもないよ。それより用事があるんだろう」

「う、うん。それじゃまた」

私はワープ石で元の世界に戻った。いつもの自分の部屋。現在時刻PM7:31。

胸のざわざわは、はっきりとした危機感に変わっていた。

押し入れの中に身体を突っ込んで探す。あった、中学の修学旅行で買った木刀だ。埃とかをティッシュで拭きとり、それを持って1Fに降りる。

木刀を入れる丁度いい長さの袋を探したが、見当たらなかった。でそのまま外に出た。ロープで自転車に剥き出しの木刀を固定する。まだ人通りが多いだろうけど、そんなことは気にしてられなかった。そして私は自転車のスタンドを蹴り、全力で走り出した。ついこの間行った、あの場所を目指して。

七十四話 僕はもう、昔の自分に戻れないんだ（前書き）

<報告>栞↓ココアに変更

七十四話 僕はもう、昔の自分に戻れないんだ

男は恐怖と怒りが臨界点に達し、パニック状態に陥った。機関銃を構え、敵に目掛けて無茶苦茶に発砲する。

「んのクソ野郎おおおおああああ！！！！」

端正な顔立ちからはおよそ想像も付かない罵声を、銃弾の雨と共にぶちまける。薬莢が地面に落ちて弾ける音も、露出した皮膚に飛ぶ火花すらも眼中に入らない。彼の全神経が、憎むべき侵入者へと注がれていた。

既に十数名がやられている。戦闘が始まって半刻、現在どれだけ生き残っているのか不明。辺りにはナイフで殺された桜田組の仲間が、血まみれで無残に倒れている。足元には、ずっと尊敬していた先輩とパートナー同然だったドーベルマン。大切だった何もかもを理不尽に奪い取られた。

誇られる人格など持ち合わせていない。高校では同級生相手に暴力事件を起こして中退、世間や両親から人間失格のレッテルを貼られた男は、縁あって桜田組に転がり込んだ。

喧嘩ではない、本式の格闘術を叩きこまれた。銃の扱いも教わった。それだけでなく挨拶の仕方や敬語などの社会人としてのマナーも教わった。世間から疎まれる仕事だというのは百も承知、それでも男にとっては、誇り高い仕事だった。

誇り高い職場だった、誇り高い同僚だった。守りたい、絶対に失いたくない存在だった。

万感の思いを、そして人生の集大成を込めた銃撃は、ただの1つも侵入者の身体を掠めることはなかった。

そもそも対峙すること自体が不幸だった。侵入者は銃弾の気配を察知して、空高く飛んだ。跳んだ、ではなく飛んだ。一瞬で高度10m近くに達し、更に重力加速度を無視する勢いで男の背後に着地したのだった。

「――あ」

あまりにもか細い断末魔を残し、男は地に伏せた。

ナイフで男を突き殺した侵入者はしばし手を休める。今はただの肉塊となった男、みてくれは20代半ばといったところ。侵入者は男を見下ろす。黙祷でもしているのだろうか。

すぐに顔を上げる。無意味な行為に時間を割かない主義なのだろう。加害者は紛れもなく侵入者その人。たとえ神や仏に祈るうとも赦されるわけがない。無論殺した相手にもだ。

恨みたければ恨むがいい、憎めばいい。天罰を落としたければさつさと落とせ。侵入者の心境を表す、これ以上の言葉はないだろう。

「……」

今夜は新月、月明かりは存在しない。広大な庭を照らすのは遙か遠くの街灯だ。侵入者は無言で辺りを見回す。周りに立ち上がっている者はもはやいない。

ここは桜田組の本拠地。日本やアジア周辺の裏社会で頂点に君臨する組織であり、また由美子と琴目が住んでいる家でもある。勘の鋭い社は少し前に泊まりに来たとき、何かしらのキナ臭い気配を察していた。実際この屋敷には、常に数十名の組員が常駐している。

そして今宵、やって来た侵入者に向け組員達は迎撃を行った。結果は前述のとおりである。1カ月ほど前から常駐する組員の数を倍にしていたが、それは全く意味を成さなかった。

「所詮、その他大勢のモブキャラ共か」

侵入者はここにきて、初めて皮肉な笑みを見せる。侵入者の名前は、語るまでもなく大江戸 亜矢。黒のGパンに、やや季節外れな長袖のトレーニングウェアを着ている。

彼はつい先ほど冬馬と死闘を繰り広げていた。何とか辛勝した彼はすぐに自宅で別の服に着替え、簡単な応急処置をしてからこの屋敷に特攻をしかけた。そして今に至る。

なのだが彼の行動にはやや疑問が残る。なぜ冬馬にとどめを刺さなかったのだろうか。確かにあの場には健常な竜神騎士がまだ1匹残っていたが、皆殺しにしておかないと後々厄介なことになるのは火を見るよりも明らか。当初の目的であつた大物議員の暗殺もほったらかしだ。

そもそもここ1カ月の亜矢の暗殺活動は全く理にかなっていない。襲撃相手の名字を佐藤で統一して見せたりなど奇妙なことわりを見せたり、わざと監視カメラに映ったりビルから飛び降りたりなど目立つ行動が非常に増えた。何か意味があつての行動なのか、それとも単なる気まぐれか。

しかし今宵の彼が桜田組を制圧しているのは事実。亜矢は屋敷のほうをじつと見つめる。目指すは桜田組のトップ、桜田 龍一か。檀原 武雄や水谷 顕子のような幹部連中にはまだ遭遇していないが、見つけ次第処分するだろう。

亜矢はゆっくりと屋敷のほうへ歩を進め、

いきなり斬りつけられた。

「くっ」

ある程度余裕を持ってかわした亜矢だが、少し苦しそうな呻き声をあげた。ただそれ以外は平然とした様子だが。

「探しました、先輩」

「それは嬉しいね」

亜矢は余裕の表情を崩さずに返事をする。内心ではどう思っているのだろうか。すぐ近くにいた筈なのに全く気配に気付かなかった。冬馬ならともかく、彼はこんなにも身近な存在なのにどうして気付かなかったのだろうか。

斬りつけた男は、だいたい亜矢と同じ背格好。ただし持つ得物が全く違う。刃渡り50cm以上のナタ、それも園芸用ではない、職人が使うような本格的なものだ。

男は落ち着いた様子で亜矢に語り掛ける。1つずつ、文字の意味を確かめるように。

「先輩、もう終わりにしましょう」

「藪から棒だね。僕たちの戦いはまだ始まったばかりなのに」

亜矢はおどけた口調で言う。いつもなら呆れた様子で言い返す男は、真剣な表情を全く崩さない。

「俺はもう、先輩が苦しむ姿を見たくないッス」

「やだなーココア。僕はいつでも元気ハツラツだよ」

ココアと呼ばれた青年、白狼道 翔也は首を横に振った。

「俺はココアじゃないッス。俺の名前は翔也です」

「そうかい、今度からそう呼ぶよ」

「俺はずっと、先輩の犯罪を手伝ってきました」

翔也は同じ学校で、同じ部活に通う仲間、そして共犯者でもある。彼は亜矢のしていることが許されざることと知りつつ、1年ほど前からずっと手助けをしていた。

亜矢と一緒にターゲットの邸宅に忍び込んで死体の処理をするなど、追及されると言い訳のしようがないことも沢山した。ただし亜矢は、翔也の手を血で染めさせることは決してなかった。

「ですけどもう見過ごせないです。お願いします、警察に自首しましょう。俺はこれ以上、先輩が堕ちるのを見たくないッス」

「言いたいことは以上かい？」

「先輩！」

翔也は悲痛な叫び声をあげた。

「もう十分じゃないですか。先輩の復讐はもう済んでます！」

「復讐じゃない、世界に革命を起こすんだ」

「もう先輩の心はボロボロです。人を傷つけた分、先輩自身にも返ってくるんスよ。だから」

翔也はナタを振り上げ戦闘態勢に入る。亜矢のほうに向けているのは刃がついていない方。峰打ちで亜矢を昏倒させる気だろう。

「どうしてもというなら、力づくで先輩を止めてみせます。覚悟して下さいッス」

「無理だよ」

翔也は突進し、ナタを叩きつけようとする。亜矢の眼には全てがゆっくり動いていた。

「もう僕は、戻れないんだよ」

一瞬だけ亜矢は、慈悲深い聖母のような表情を浮かべた。
ナタを片手で受け止め、右手を突き出す。体内に金属が、深々と
突き刺さっていく音が響いた。

「赦してくれなんて言わない。僕も翔也のことが好きだから気持ち
は解かるんだ」

「先……輩……」

「だけど僕はもう、昔の自分に戻れないんだ。————本当に、ご
めんね」

七十四話 僕はもう、昔の自分に戻れないんだ（後書き）

次話で第5章は終了します

七十五話 終わりの始まり

亜矢はナイフをそつと引き抜いた。傷口が広がらないように慎重に。とても加害者とは思えないほどの穏やかな様子で、もたれかかる翔也の身体を優しく支える。

「せん……ばい……」

「翔也、今までありがとうな。お前のことは絶対に忘れない」

亜矢は丁寧に翔也を地面に横たわらせた。膝枕をして、翔也の頭を乗せる。そして顔を覗き込み、口元に耳を近づける。

「――、――」

浅いながらも、僅かに呼吸がある。

「……よかった」

亜矢は安堵しているのだろうか？ 少なくとも外見からは彼の心情は把握できない。そつと頭を地面に下ろす。

「さてと、これから屋敷に入って大ボスを倒したいところなんだけど……」

亜矢は何かを察したかのようにその場でくるりと向き直る。

「またもやイレギュラーが登場しそうな雰囲気だね」

亜矢が振り向いたその先は、桜田組の正門である。次の瞬間、

ボタン！

高さ3mもある巨大な金属の扉が派手な音を立てて破られた。
そしてその先にいるのは、なにやら安っぽい木刀を背負った少女。
近くには自転車も置かれている。

「（こんな邂逅は、正直予想してなかったけど）」

亜矢は小さくそう呟いた。目の前の人物、——高杉 社に
届かない小さな声で。

七十五話 終わりの始まり（後書き）

後書き

はい、作者のファン・ヒューリックです。そういえばこの挨拶も5度目なのか？

ついに桜田家にて、亜矢と社が対峙しました。圧倒的な実力を持つ亜矢に社は単身どう立ち向かっていくのか。史は、琴目は、由美子に待つ未来とは！ 果たしてこの物語の結末はいかに！

——それは、決して皆が幸せを迎え入れられる結末ではないかもしれません。

——それは、読者様によっては悲劇のバッドエンドと受け止められるかもしれません。

——それは、決して望まれた結末ではないかもしれません。

——ですが、私が込めたかった思いを全て注ぎこんだEDにするつもりです。

今回は最終章。どうか最後まで、向日葵の冒険者達を宜しく願います。

まあそれはいいとして早速裏話でも始めます（マテ

この小説を改めて読み返したんですが、何やら男子共のヘタレっぷりが半端ないことに気付いてしまいました。

なんというか亜矢と芳樹以外、殆ど男子の個性がなくて、全員等

しくキャラが薄いのですよ。男子全員がヘタレ。どうしてこうなった……（武雄はサブなので除外）

そもそも原因は女子にあります。何故か女子の皆さんが男よりも漢らしいのです。何故だ、何故うちの小説には守ってあげなくなるヒロインがおらんのだ（笑）

んで結果、相対的に男子は片隅に追いやられてしまったわけです。当初はこんな予定ではなかったのに。予定ではもっと男同士の絡みをゲフンゲフン。

ただ1つだけ執筆当時から考えていたことは達成できました。それは身近な人物を大ボスにすることです。亜矢が初登場したのは第2章、この時点で彼が大ボスになるうとは誰も予想してなかったと思います。

私は人間の最大の敵は同じ人間であると思ってます。作られた魔王だとか大怪獣なんぞより、最も恐ろしいのは人間だと。

……今の発言にピンと来た方は第2章の後書きを読んでください。そう、当初の大ボスは史だったのです。

もう面倒だから後書きは終わり（オイ 最終章を楽しみにしててください！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2955m/>

向日葵の冒険者達

2011年11月4日13時39分発行